



330  
493



始



32.9.19



德川  
文藝類聚

第

九

大正

4. 1. 25

購求

330-498  
3

徳川文藝類聚第九

俗曲上

例言

俗曲の語は、世俗の慣用によれば、謠曲琴曲等に對して、汎く淨瑠璃の各派、上方唄、江戸長唄の類より端唄流行唄に至るまでの總稱なるが如し、よりにこゝにも同じく此の語を廣義に解し、淨瑠璃と唄とに涉りて、名什佳篇を輯むるを以て方針とせり。而して此の文藝類聚中別に淨瑠璃の部あれば、所謂淨瑠璃の丸本は一切これに譲りて、此の俗曲の部には専ら唄淨瑠璃と稱せらるゝ一中、河東、常磐津、富本、清元、新内、菌八等の詞章のみを採録することゝせり。又唄に關しては、上方唄又は俚謠にして既に前期の刊行書中に載せられたるもの多ければ、これにはそれに漏れたるものを補ふを旨意として、江戸長唄、江戸端唄の類を編入せり。かくて元祿寶永の頃、都太

例言



夫一中が京都に創めたる一中節の正本、一中の門より出でたる宮古路豊後掾の語り物、豊後の流を汲める常磐津、富本、清元、新内、菌八の諸流すなはち上方系に屬するもの、詞章を纂めて上巻とし、江戸系に屬する淨瑠璃と唄とを以て下巻とせり。

此の書に掲ぐる所のものは多く謠ひ物なり、節によりて美化せられたるを聽くべく、舞踊の伴ひて、文と節と振との三者を綜合して味ふべきものなり、單に讀み物として論ずべきにあらず。從來此等の詞章を目して、端物なり、筋の通らぬ物なり、當り文句の集團なり、卑俗極る狹斜趣味の物なりと貶する者なきにあらず。まことに脚色支離滅裂の弊はあり、糊塗補綴徒らに名句を連ねたるの失はあり、輕浮纖巧にあざれば蕪雜醜陋に陥りたるの缺點はあり。されど此等は謠ひ物の通弊にして、謠曲琴曲にも此の憾なきにあらず。またひとり我が國の謠ひ物の上にも限りたることにもあらず。

るなり。加ふるに評者の言は、動もすれば、清元、常磐津、新内、江戸長唄類の、比較的近代の狂言作者の筆に成りし章句をのみ通讀し、一中、半太夫、河東等の語り物に優麗と含蓄とを味はずして、説くの嫌なきにあらず。常磐津、江戸長唄の如きにありても、元文寛保より明和安永の頃までの作には、單に讀み物としても玩賞すべきもの尠からざるなり。此の書の收むる所も、とより句々皆錦繡にあざざれども、これによりて徳川幕府時代中世以降の人情風俗の推移を知るべく、演藝と歌謠との變遷を観るべく、また當來の樂章製作の資にも供すべきなり。

上巻載する所八部、其の半は新に編纂したるものにして、書名も其の流儀に多少の因縁を求めて新に名づけたるがあり。櫻草集といひ柏葉集といふの類これなり。校訂の方針は、なるべく原文の面影を存するを旨として、假名遣、當字、句切點の類一に皆舊によれり。た

だ餘りに讀み下し難く、誤解し易しと認めたる假名書の箇處のみは、特に之を漢字に改めて其の振假名に原本の書き方を存じたり。また底本はなるべく其の當時の初版本を選びて、墨譜すなはち所謂胡麻點を除くの外は、すべて皆節附を掲げたり。蓋し閲讀の際、これによりて文趣を解し得ること尠からざればなり。八部はすなはち左の如し。

一、舊刻都羽二重拍子扇二卷 五代目都一中が斯流再興以前の語り物五十段を集めたるものなり。刊行の年次、出版元共に明かならず。版式は寄せ物合綴の體にあらずして、特に版をおこしたるもの、如く、元文寛保頃の印行とおぼし。

辰巳の四季 子の日の松 三幅對 千卜北國土産の類、固より斯流獨特の語り物に富めども、近松門左衛門の作に成れる淨瑠璃の一段一節を抜きたるもの尠からず、道行景事な

ど、文に花を飾りたるもの多し。言葉の巧を好む所、一中がもと僧侶たりしといふに多少の因縁ありといふべきか。今流布せる都羽二重拍子扇とは全く別本なり。

一、宮古路月下の梅二卷 宮古路豊後掾一派の語り物三十七段を集めたる書、二枚三枚より成れる稽古本を合綴したる寄せ本式の體をなせり。これも刊行年月詳かならざれども、恐らくは元文中、豊後節禁止前後の出版ならん。三十七段のうち、過半は世話淨瑠璃の道行に屬す。同じく近松の作より借り用ひたるが多し。

傾城小夜の中山 若楓口舌帶 狩場櫻通翼 淀染三雁金 駒鳥戀關札

など、初代常磐津文字太夫が未だ宮古路文字太夫と稱へたる頃の文字太夫の語物をも含めり。江戸本濱町伊賀屋勘右衛門の版行に係る。

一、宮古路窓の梅二巻 月下の梅に稍おくれて、新大阪町の三川屋源七によりて出版せられたる書なり。同じく豊後掾及び其の門下の語り物二十八段を載せたり。其のうち比翼の初旅道行外八篇は月下の梅と重複したれば、此等は其の外題のみを掲げて本文は省略せり。此の他、

奈良八景 大和歌五穀色紙(はちたゝき道行) 天智天皇美人揃

の如きは、版式、節附、墨譜等まで全く舊刻都羽二重拍子扇と同じ。偶以て一中節と豊後節との相承親近を語るものといふべきなり。

一、常磐種一卷 常磐津節の家元において、斯流の語物を集めたる書の總稱に此の名を用ふ。(嘉永年中須賀太夫常磐種の外題のみを載せ、此の名を附して出版したることあり)今此の名を襲ぎ

て、新に編纂したる常磐津正本集に常磐種と名づけたるなり。常磐津の語物は、累計せば七八百段に上るべく、上享保元文より下慶應明治にかけて、凡百五六十段を抽けば、これを以て斯流の語り物を代表せしむるを得るに似たり。然れども紙數限りあるを以て、關扉、辰駕、宗清、葱賣の類よりはじめて、最も注意すべきもの六十段を選びて、年代順に排列せり。六十段選擇の標準左の如し。

(一) 初代文字太夫より四代目豊後大掾に至るまでの各太夫の代表的語り物を採ること。

(二) 寶曆明和時代、文化文政時代といふが如き各時代を代表する狂言作者、たとへば壕越菜陽、金井三笑、櫻田治助の如き人の作を漏さざること。

(三) 溯りては常磐津の母樂とも稱すべき一中又は義太夫の語り物、下りては同門又は分派の語り物と、上下に系統的連絡

を有する作は、なるべく網羅すること。

(四) 段物は概ね長篇にして、殆ど義太夫節の語り物其儘なるが多ければ、一切載せざること。

かくて其の結果は初代又は二代文字太夫時代の語物は比較的多数を占め、近代の作は、少きに失するが如きに到りたれど、初代二代當時の作は、唄浄瑠璃史上極めて重要な位置を占むるにも拘らず、正本の傳はれるもの極めて稀に、近代の作は其の流布汎ければ、かゝる選擇をなすも失當にあらざるべきを信ず。

一、櫻草集一卷 富本節の正本集なり。富本の紋の櫻草を採りて新に名づけたるなり。富本一流四五百段の語り物中より六十段を抽きたるものにして、選擇の標準はほぼ常磐種と同じ。而して六十段のうち四十段は二代目富本豊前太夫一代即ち明和より文政にかけての語り物に屬す。これ全く富本節の全盛期にして斯

流の名曲十に八九は此の年間に現はれたるを以てなり。

一、柏葉集六卷 清元節正本集にして、柏葉集の名は清元の定紋三つ柏に因みたるなり。天保年中刊行の清元稽古本と題せる五卷の豆本を本とし、これに漏れたる斯流の名曲を拾ひて第六卷とし、併せて五十六段を載せたり。豆本は今行はるゝ明治八年複製の普通稽古本と照合するに、まゝ異なる所あれど、此の方舊態を止めて参考に資すべき點多ければ、更に改竄を加へず。今専ら行はるゝ子守、玉屋、神田祭、明烏、清心の類は概ね天保以後の作にして、拾遺の第六卷中にあり。目次の外題の下に新に俗稱と年代とを加へたるは、先の常磐種櫻草集と共に讀者の便を計りたるなり。

一、新内節正本集一卷 新内節の語り物は二百段にも上るべしといふ。多く男女間の癡情を叙して、千篇一律の體をなせり。現時行はるゝものゝ數また甚だ尠し。今、明烏、蘭蝶、尾上伊太八等斯流の



代表曲を主として凡そ二十曲を輯めたるものこれなり。詞章は鶴賀若狭掾の自作に係るもの多しと傳ふれど明かならず。年代も亦全く知り難きもの多ければ、これのみは年代順に排列せず。一、増補宮藺集都大全一卷 宮古路豊後掾の門人宮古路藺八一流の正本なり。世には之を藺八節と稱すれども、斯流にありては古より宮藺節と呼べり。宮藺節の正本としては宮鸚鵡石安永二年刊最も名高く、これに先立ちて世に出でたるものには宮藺花扇子(明和六年刊)ありて、各二十幾篇の語り物を收めたれど、これよりも更に古く、更に稀本にして、輯録の多きは此の都大全なり。寶曆十三年の刊行にして四十四段の語り物を載せたり。義太夫の語り物其儘なるが多けれども、舊態を存して敢て増減を試みず。

大正四年一月

高野斑山識

### 徳川文藝類聚第九

俗曲上

#### 目次

舊刻都羽二重拍子扇	一頁
宮古路月下の梅	四四
新版宮古路窓の梅	八三
常磐種	一一五
櫻草集	二八五
柏葉集	四〇七
新内節正本集	四八五
増補宮藺集都大全	五五六

徳川文藝類聚第九

俗曲上

舊刻都羽二重拍子扇

五十番目録

上卷

- 一 都辰巳四季の景
- 一 八千代の玉垣 なをしの前道行
- 一 七枚起請 お七道行
- 一 出世の鉢木 最明寺道行
- 一 山崎興次兵衛 あづま道行
- 一 けいせい三度笠 相合かご道行
- 一 酒呑童子 頼光四天王道行
- 一 大經師柱曆 おさき 道行
- 一 丹波與作ゆめちのこま
- 一 おなつ 清十郎かさ物狂ひ道行
- 一 子の日の松 しのゝめ道行

舊刻都羽二重拍子扇上卷

下卷

- 一 有馬みやげ湯女紋づくし
- 一 同大君花てる姫道行
- 一 姫山姥 頼光道行
- 一 手枕曾我 鎌倉八景
- 一 秘密のこま ときはぎ道行
- 一 和泉式部枕づくし道行
- 一 用明天皇 船足の道行
- 一 富貴曾我 すけ時宮めぐり
- 一 同 さつき御前道行
- 一 自然居士 二位の前道行
- 一 けいせいしのぶ草
- 一 あぼし色あんどろ
- 一 鉢たゝき小町少將道行
- 一 蓬萊 松づくし
- 一 平安城 わかばの前道行
- 一 色ばたけはらみわかな
- 一 神樂高砂 しのぶ姫道行
- 一 腕久狂亂の道行
- 一 三幅對 まさかた道行

- 一 助六後日心中道行
- 一 同 進上物揃へ
- 一 笠屋三勝下の巻
- 一 同半七三勝心中道行
- 一 勇士の三つ物 姫君道行
- 一 同 奈良八景櫻づくし
- 一 天智天皇美人揃へ
- 一 助六心中道行
- 一 姫が瀧 四季山めぐり
- 一 同 水の上風流
- 一 しき津の浦町づくし
- 一 祇園のうれん茶屋名寄せ
- 一 石垣風流茶屋の名寄せ
- 一 五段曾我 うきな川
- 一 同 兄弟かたみおくり
- 一 同 元服しゆすびん
- 一 しゆしやか 心中島づくし
- 一 チト北國みやげ
- 一 好色遊山八景
- 一 八百屋お七道行

舊刻都羽二重拍子扇上卷

○都の辰巳四季景 一中 正本

鶯春がすみたなびきにけり久堅の。月の桂のはなや  
 さく。げに花かづら。色めく花の都より。地辰巳に  
 あたる宇治の里。ハル地山のすがたもにこやかに。笑  
 ひあふたる相生の。スヘアシ松風の音ざんざの。地こ  
 るにのり來ると竹やハル地琴のしらべのいつ迄も  
 かはらぬ色のしるしとて空にしられぬ。下ギン雪やこ  
 んこあられやこんこ。てらのく櫻が。ハズミナツチ  
 んりちらく春風に。地さそはれてくるふりきをば。  
 ハル地雪と見まがふさくら花。ハル地よしのをうつし色  
 色の花がさ。目がさすげ笠の。コハリ地ひもをむすぶ  
 の神詣。氏子はわこか。いや。はし姫の。地宮参り  
 とて女のわらは。おちやめのとのかしづきて。ハル地  
 笛や太鼓に風ぐるま。をぐるまかけて川船に。のせ  
 てござらば神崎へ。ハル地。踊アッ扱もくわごりよは  
 たれ人の子なれば定家葛かはなれがたやのふ。ハル地  
 所々お参りやつてとう下回めされとがをばいぢや

が茶つみやま。地七種の園とつたへにし。ハル地森岩  
 井あさ日山。やま吹の瀬にかげうつすツナギアッその  
 水かみしななたち。いろどるすがたうつくしく。  
 花たちはなの小島がさき。みねのさわらび稚が本。  
 宇治山里川の四季の景。あじろの森や。汲鮎の。サイ  
 モンあひ合せせるけぶり草。吸付煙草くもを吹き輪に  
 ふきふくやす風。たむあふぎのしばしやは。  
 夏にもなればしづの女が。あか前垂に置手拭で。さ  
 らすさらしの品もよく。拍子とりくつれ小うた。  
 二上りそなた思へばさらしのうすよ。とかくつかれて  
 ヨホ、やれ君様を。つややはたちのいと愛らしく。帯  
 のむすびよしなものよ。やんれくしなものよ。われ  
 は野にすむきやすよヨホ、ンくサテ。く。扱々きやす  
 此ところ。おもしろや。地カ、リかはらぬ御代は萬々せ  
 所作こと。武運長久民繁昌千代に。八千代のあきつ洲や。  
 四海波風しづかにて治る。國こそ久しけれ。

○なをしのまへ道行

江戸アッまだ夜をこめて。ありあけの。月やは物を思  
 はする。かこちがほなる。われくが。涙のつら  
 とけしなき。思ひのかずは六つ七つ。色地八つ八こゑ

のとりも鳴き。ほのくしらむ山の端に。たな引く  
 雲のはれく。はれていつしか淡雪の。ゆきまを  
 分けてしら菊の。花は散りても。また戀にあたら姿  
 のかげやせて。ほそたに川の身をつくし。身をのが  
 れてもいはま水。落ちて行くこそ物うけれ。しのび  
 出るや鳥羽玉の。夜道のあないとぼく。知らぬ  
 カンケル地山々さを越へ行きさとも定らぬ。ハル地  
 だらか。く。ときのふけふ。けふか今宵かあすか川。  
 淵瀬とかはる。身の行衛。地つらさせつなき情なさ。  
 また此末はいかならんと。返らぬ昔忍ぶ草今ぞ。憂  
 きこと。引取まさりぐさ。ねは戀ぐさのふかみ草。と  
 んとまる寐のときよ。とこよぐさ。地言の葉ぐさの  
 いろみ草袖にかざらん折々は。涙をたにも花と見る  
 花にはあらでヤア。これなふ秋のもみちの錦まで。地誠や  
 翠帳紅闇に。起き伏し給ふ御身にて。ハル地長地つらさ  
 をしのがせ給ふ事御いとをし思はれて。久經夫婦  
 かほ見合せ。涙ながらに行く先は。人目をつむむ道  
 のほど。今しばしとてさと人も。通はぬ野邊をたよ  
 たよと。小原久經御手をひき。力をつけて。なふあれ  
 あれくはや里ちかきしるしとて。地向ふのやぶの

のきのつま。ハル地立休らへばはじとみに賤が妹背の  
つれ小うた聲ほそくとしほらしく。二上り一年まち  
やれ二年めにや。うけて樂さしよとをなんん。そなた  
は濱のお奉行様。しほ風にもまれて。色の黒さはと  
をなんん。地カ、リ何となり行く我身ぞと。心細くもつ  
く杖の。たどり。なげかせ給ひしを。いろくなだ  
めゆきなむ。こゝは所も嵯峨御室ならびの。岡に  
ぞつき給ふ。

○お七道行

一中 正本

本調子「大和言葉の一の筆。命々と言ひ(かき異本)  
サイモン拾の鹿の夏毛よ其名さへ。八百やのお七ふむ露の。  
こぼれて落る力草。はかなや我はいましめの。かゝ  
る浮身のひたり繩。右も左もむくつけに。あゆめあ  
ゆめと。口々に。科の説經アッよしあし。ゆふ時雨。  
地みる人袖をしぼる人。見返る人も皆人もよそ目に  
あまる。なみだ川。地渡り兼ねたる丙午。富士のけ  
ふりと。諸共にきゆる命ぞ。はかなけれ。地いとほ  
しや母人の形見の念珠くりかへす。守は父の給りし  
一部一巻後の世を。助け給へや妙法の花のうてなの  
香の國へ。救ひとらせ給はれと心に念じ目を開き。

ゆなみだ。心の駒もせわしげに。行く足なみの數つ  
きて。こゝぞ名にふる鈴の森最期。場にくそ着きに  
けり。

○出世の鉢木 最明寺道行

諸行方さだめぬ道なれば。く。來し方もいづくな  
らまし。詞、是は一所不住の沙門にて候。われ此程は  
信濃の國に候ひしが。あまりに雪深くなり候程に。  
まづ此度は鎌倉に上り。座禪にこもり。春になりて  
修行に出でばやと思ひ候。中意、雪は花より。花をし  
き。木曾のみ坂の谷風は。吹け其袖に。さむからで。  
地名もねたましき風ごしの。上地峯の吹雪ぞ身にはし  
む。身はすみぞめの。墨衣。うき世の。民におほる  
かな。おほるどもる、竹の笠。似合はぬ身にもひき  
しめて。しやんと召したる御有様。ありがたしとも  
頼みある。地幾重越しても信濃路は。人里遠きはな  
れ坂。ヨハル地千曲の川に渡し呼ぶ。上地聲も嵐にうづ  
もれて。笠で招けば笠の端に。地霞たばしる。つら  
らからく。輕井澤。地今日山姫の衣くばり。もの  
たちよしといろく。の。地錦たつなる。板鼻の宿の。  
麓は。坂本や。諏訪の水。うみどうと打てはしやな

詞諸見物の貴賤に向ひ必ず悪事あそはすな。色詞此  
淺間敷身の上を手本となして戀といふ一字を習ひ給  
ふなよ。取分けて娘のお子を持せ給ふ親様達は。よ  
いかげんに氣を通し。色詞耳をつぶし目をふさぎ。聞  
かぬが佛見ぬが花。下地私も元は戀ゆるに。上地悲し  
いしにを致します。長地いとしい人の儂がねても起き  
ても忘られず。それがこふじて胸の火の。つひ燃え  
出て。淺ましやうらめしや。是も二人の親達の。不  
粹な故にわしが氣の。まゝならぬから出來心。われ  
と我身は柴舟の。ヒロヒアジ。が。る、煙となり果  
るを。可愛と覺し一べんの。題目頼み侍ふと。ワレヒ  
アジ泪をえりに包引三下リ「縁はいな物あぢな物。  
互に變るな變らじと小指を切て血をしほり。起請を  
書て。取交はし。ノル地枕の數も。あたと成又もや家  
を焼くならば。夫の吉三に。らくくと。逢ふて語  
らん嬉しやと。あどなき智慧もつくくと。よしな  
き事を出して直に町々引渡す。只頼むによ題目の。  
妙の一字や南無妙法蓮華經々々々々々々々々。唱へ唱  
へて法の道寂光淨土の玉の臺の數々に地むかい給  
へや南無妙。法蓮華經々々々々。哀れ果敢なき。つ

とはこづま。しやなとはこづまをしやんとたつたち  
どり。せめて問へかし。よいそれさつき。地さつと  
立つたる鴛鴦鷓鴣おのがとり。色品を。地わけて  
見せたる雪の空。殘んの月はうかめ共兎はなむ厚  
氷。驛路の馬ぞ浪走る佐野の。渡りに着給ふ。

○壽の門松山崎與次兵衛

都半 仲

二上り「あづま請出せ山さき與次兵衛。請出せく山  
さき與次兵衛。いつか思ひの下紐とけて。むかし思  
へば憂や辛や。忍ぶむかしも憂や辛や。詞情なや誰  
あらふ山崎與次兵衛様とては。人に後れの亂れ髪。  
あづまが顔も見忘れて。うつなやと制すれば。太  
夫「そなたは藤屋のあづまか。オ、歌うれしやな。あ  
れあれを見や蟲さへも。つがひ離れぬ揚羽の蝶。我  
我とても二人づれ。粹な同士の仲々に。春にもそだ  
つ花誘ふ。菜種は蝶の花知らず。地蝶は菜種のおぢ  
知らず。地知らず知られぬ仲ならば。浮かれまい物  
ざりとては。狂ふまいものあぢきなや。親の御恩を  
振捨て。そなたの世話になりふりも昔には似ぬ男  
山。今では人も秋篠や。外山の松は事問はん我身の  
末の放れ駒。己れと狂ふ秋の葉の亂れ心か。ア、

狂ふまい。待つ身になるな親と子の。便りをしのぐ山崎の。妻もさこそは亂れ髪。ゆふた詞が力ぞや。又四郎アシわしが馴染は三重の帯。長い夜すがら引しめて預る物は半分の。主は忘れて居さんすか。ハル地過ぎし月見は井筒屋で。底意くまなき夜と共に。飲み明かしたる面白さ。今の愛き身にくらぶれば。いとッお前がいとしいと。襟につみし忍びなき。太夫詞「おれもそなたを夢にだに。歌念佛忘れぬからに親妻の。いさめはどつとなぎさ山。松の位に昇りつめ。冠はきねど大じんと。ワキ「花車がとろく口舌の門。太夫やり手が叩く禿がねぶり。二人皆夢の世の境涯と。破ればぐわちもなかりけり。かくは知れ共柳の絲のおどろをみだす引取山おろし。ウレ身にしみじみといさめの言葉忘れまいぞや忘れじと。互に手に手を取交はし。涙ぐもるや露の玉。夕陽。雲に程もなく。暮るくるくくくと。月は行ども果てしなき思ひは目前親の罰。當つて碎くる男氣の。己が姿を我送る。走れば走るあれ。あれ。くくく。あれとまればとまる。亂れ心もふた思ひ命つれなき流の身流渡りの世の中に。暫し留まる賤が家の軒を。

尋てなやみけり。

○三度笠相合籠道行 都 半 仲

「翠帳紅閨に。枕ならべし閨の内なれし襖の夜すがらも。二上り 四つ門の跡夢もなし。さるにても我夫の。秋より先に必ずとあだし情の世を頼み。本調子地人を頼みの綱切れて。ハル地夜半の中戸も引かへて。地人目の闇にせかれゆく。中地昨日のまゝの鬢付や。門説髪髪のわけ目のほつれたを。わけてしんじよと櫛を取。ハル地手さへ涙にこゝろ付。冷へたる足を太股に。相合ごたつ相ごしの。籠の息杖いきて又。サイモソ續く命が不思議ぞと二人が泪こぼれ口。明ぬ間は。しばしとて。籠のすだれをあげてさへ。膝くみかはす籠の内。せばきとめの有し夜の。仰に似たは似たれ共。炭の埋火いつしかに。あしたの霜と置かへて。中地夜半の嵐に呼ばれては。ことをる野邊の禿松。過し其夜が思はれていとど涙のたねならぬ。何くど何くどと思ふぞや。是ぞ一蓮託生と。慰みつ又慰みに。ハル地比翼煙管のうすげふり。朝出のしづや火を貰ふ。野守が見る目恥かした。色地籠立させてひまをや。あたへの露の命さへ。をしからの身は。引取「惜

からず。猶も惜まぬ。かちはだし。惜むは名残りばかりぞや。二上り「終にきなれぬ綿帽子。太夫「わしが顔よりこなさんの。ワキ「肌は是をと風ふせぐ。太夫「ひらり帽子の。ワキ「紫や。二人「色で逢しははや昔。太夫「今日はしん身の女夫あひ。ワキ「頼まば願ひかのへさる。二人「ウタ「庚申堂よと伏拜み。跡ふり返れば勝曼と。又取かはし泣く涙。袖の氷と。閉ぢ合へり。本調子爰は知る人多ければ。ウ地こちへくと袖おほひ。里の裏道あせ道をすじりもちりて藤井寺。あれ。あれを見や。どこの田舎も戀の世や。餘所の睦言ねたましく。上地それ覺へてかいつの事。かの初雪の朝込に。ねまきながらに送られし。ウ地大門口のうす雪も今降る雪もかはらねど替り果てたる。身の行衛。地裾にやつる、小笠原。霜に枯野の薄原。ぼう。ぼうさらくさつとなつたは。我を追手の尋るよと。ウ地おほひ重なりかけかくし。ウレホン妻戀鳥の羽音におち。る身となるは。いかなる罪の報ひぞと。くどき歎きて。行姿。泣くか笑ふかとんだ林の群鴉。せめて一夜の心なく。とがむる聲の高間山あのかづらきの神ならで。ひるの通じつ、ましく。身を忍ぶ道

戀の道。我からせばき浮世の道。竹の内袖ぬれて。岩や越とて石道や。野越へ山越へ里越へて行は。戀路のならひかや。

○酒吞童子 頼光道行 都 半 仲

一セイ「諺「秋風の音にたぐるて西川や。雲も行くなり。大江山。そもくは是は源の頼光とは我事なり。此度丹波の國大江山の鬼神の事。思ふ存のあればとて。兜にかはる兜巾をき。鎧にあらぬ篠懸や。兵具を入れし笈を負ひ。さもぎやうたいの姿なれども。その主従は頼光保昌。貞光季武綱金時。まだ夜のうちに有明の月の都を立ち出でて。く。地月に別れて月に又。ハル地ゆふべは宿をかり原の。腰につけたる法螺の貝。地鐘よりさきに聲たて。いづくの雲も驚かず。百八煩惱の雲つきて。朝日や峯にかけ出の。行者と人は尊くも。さながら。悪魔降伏の御門。出ぞたのもしき。王城鎮護のやま山も。歸るさいつと待顔に木すへ。冷泉アッ木すへを染めなして。地あき大比叡高尾山。ハル地花あたごとうらみしも。我とがの尾や嵐山いははた立て山姫の。手織の錦たれに着よ我にきよ瀧。となせ山たきつ木の葉のみなざれば。

瀬に住むあゆも埋れて。ハル地もみぢすな取り桂川。  
 麓の野邊は霧こめて。色地よどはよぶかき朝霧に。玉  
 のみづがき明らけくそれとしらふの。はとの峯。我  
 源の氏の神。ハル地流の末の弓矢取。色地我魂に神心  
 うつりませとて伏拜み。ハル地三寶諸天納受と。色地  
 鳥もとのふる佛法僧。松の尾山をよそに見て。心の  
 駒に杳掛の宿をいさみて。引取「過ぎ行けば。ウ地おの  
 が身ながら頼もしく。色地たけき妻や金剛杖に。長地  
 切てつけとてかたぎ原おひも習はぬ老の坂。色地越  
 へて生野の道遠き。ウ地耳にも觸れず目にも見ず。色  
 地とがれる山は刀して。削りなせるに異ならず。ナド  
 ルフン岩切通す淵の音。鑿もて穿らし如くにて道なき  
 道の名にも似ず。大江山の麓なるかの姫。室にぞ着  
 き給ふ。

○大きやうじ柱曆おさん道行

「つゝるに行く。道とはかねて。地開しかど。今日の我  
 身の最期日は。地我のみ消ゆる心地して。長地あまた  
 の人の命ごひ。それを杖とも柱とも。ハル地柱曆の中  
 段に。ハル地婿どりよしと書きたるは。あだのはじめ  
 かやれ曆。地紙のつぎ目もはら／＼と泣いて。出し

夜の。憂き身にも。大坂祭文いつか此世に金神と。ハル  
 フン思ひまはせば胸せがれ八十八夜及びなき。ウ地年  
 は十九と廿五の名残の霜と見あぐれば空に知られぬ  
 露なみだ。十方ぐれに道見えすなく／＼ひかれゆく  
 涙よその見るめもあはれなり。人目のすみてあらは  
 れて。地不義とは何のかのへさる。知らでおふ夜の  
 其むくひ世の口のはにうたはれて。地丸のをごけに  
 うみためし。地まをのひねりぞ身の上は。色長地見え  
 ず水なはしはり繩世にそしられん情なや。つく／＼  
 物を案するに。二上リ 二人われは劔の金性の刃にか  
 かる約束か。ウキ「われは土性墓の土。シテ「何とて墓の  
 埋まられず。ウキ「終に。シテ木性の。二人「木のそらに屍を  
 さらし名をさらし。シテ「音頭小歌にうたはれて。ウキ  
 「つよき憂き目にあは田口。二人讀「けあげの水に名を  
 流す。おさん茂兵衛が後の世を助け給へや南無阿彌  
 陀。なまみだ佛南無阿彌陀佛なむあみだ。シテ「彌陀  
 の六字を帆に上げて。ウキ「友に弘誓の舟のりよし。紅  
 蓮の井戸ほり焦熱の。地獄のかまぬりよしなやと急  
 がぬ旅路いつのまに死出のたをさの。引取田かりよ  
 し野守が見るめ恥かしや。地あれ不義者とあやぶ日。

イロ地終に命をほろぶ日。ウ地思へば天一天上の五す  
 い八せん。ま日もなし。只何事も夢の世と。色地我身の  
 さとり開く日ひづしのあゆみ隙もなくはや最期場も  
 近づけば。見物群衆とり／＼に。二人が噂よしあし  
 を。筆につくして末の世に。語りつゝけて聞及ぶ。

○興おさん作夢路の駒

都 半 仲

歌「興作丹波の馬追なれど。今は野すゑのはなれ駒じ  
 や。しやんとさせ興作よさく。興作「ウ地よさくと  
 呼ばれつる。いなおほせ鳥もねをいれて。ハル地野邊  
 の荊かや軒端の萩。馬のまぐさにかひのこす。長地草  
 も我身も此あかつきは共に枯野のくつわ蟲。ハル地人  
 を乗せたか乗せられて。かざりの旅の坂の下なふ。  
 夜ぶかに急ぐのりかけも。泊りは知れて四日市。地  
 我は泊りもな、七日。中有の旅のうまひつじ。歩め  
 しい／＼ア、しぶとい口をひけどしやくれど行きか  
 ぬる。地畜類ながらしやうあれば。最期を惜む綱す  
 くみ。歌わしは十二で人よびそめて。ことし廿一九  
 九年とめし旅人幾萬人ぞ。關一宿は多けれど。男女  
 にくたりか。友のよしみも時の花。無常の風に散  
 り果て。馬より外にとふ人も泣てくれるかやさし

やと。鞍にひれふしはら／＼と。袖には涙梢には。  
 カ、ウ地木の實こぼる、むく本や。契りそめしはさを  
 とし。ハル地拔參宮の道づれに。色地戀の重荷の馬  
 追ふて。足もかる／＼心もひろきとよく野とこそ樂  
 みし。あかれぬ中を秋の霜。今宵きりぞと氣もへり  
 て窪田に浮名うづむかや。大坂音頭阿漕のあまのあこ  
 ぎにもかたみと。なれや石塔のしるしの石を思ひ出  
 す。きよめし肌引かへて。及にけがし死する身はふ  
 た見の浦を思ひ出す。いがき越えしも戀のつみ。末  
 社々々の宮めぐり。地獄めぐりを思ひ出す。返らぬ  
 昔思ふまい。本調子泣くな／＼となく鳥。人の末期を  
 知らずとは。音に聞きしが今ぞ知る。朝熊がだけ淺  
 ましや。かの齋宮の忌詞。いまはしやとて道もせに。  
 晒す姿を道者にも。嫌ひ憎まれ人々の。よもや回香  
 も情なや。過去も未來も現世で知ると。男見るめは  
 泣くめもと。はや明方の。お八つの太鼓の聲は高田  
 の寺。泊り／＼は多けれども。十萬億土馬次なしの。  
 西は百味のはたごやに。観音勢至手を取て。蓮の臺  
 にとまらんせ。夫婦の外はあひ宿も。南無阿彌陀佛  
 みだ佛と。このあみだの影たのむ。その誓願の言

葉のえん。千貫松にぞ着きにける。

○おなつかさ物ぐるひ道行

上歌夜さ戀と。いふ字を金紗で。ぬはせ。裾に清十郎と寐たところ裾に。清十郎と寐たところ。色地観すれば夢の世や。寐てあたゝめしふところ子。いつの間にかは浮れいで。三界をたゞ家として袖がさ雨のやどりにも心とゞめぬかり枕。上地流れにあらぬ川竹の。笹の小笹のびんざゝら。花の手おほひ。お手をひかれた。是も熊野の修行かや。色調あね様のこれのふ。勸進柄杓の。笑顔よしとてやなぎがまねく。柳のかみを何故に。浮世うらみてあまが崎。尼が崎とは海ぢかく。なせにそなたはしほが無い。節はあはれに身は伊達に歌はねぶつの歌比丘尼。二上リウツむかひ通るは清十郎じやないかいの。笠がよく似た菅の小笠が。さりとはいふたふいふ。中地笠をしるべの物ぐるひ。地物にくるふも我ばかりかは。鐘に待宵鳥にはわかれ。戀する人のよなくを。氣ちがひとてな笑ひ給ひそ。謠傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ思ひの火を胸にたき。白居易は孔子を先立て、枕にのこる薬を恨む。カン地それは子故の別れの涙。

親より子より我身より。いとし殿御のいとしばや。それよりびんぎおとづれの。聲も聞かねば顔も見ず。我は秋鹿つまを戀ふ。かいろとなくと知らせたや。ワキ詞なふくあれなる。御僧我殿御かへしてたべいづくへ連て行事ぞ。大夫いや御僧とは空目かや我もこがるゝ丸太船。うき世を渡る一ふしを。うたへやうたへやうたかたの。小歌小舟作りてお夏をのせて。花の清十郎に櫓を押させふ。マヒツ観音薩埵の誓には。枯れたる木にも花がさ。笠にさいたはなぎの葉。腰にさいたもなぎの葉。大夫一えた。ワキ一えた。二人三日に三枚七日に七枚。起請誓紙の牛王のうらなく。灰に焼きつゝ互にのんだる。ウ地水ももらさぬなかく。ひきも合せぬ神心。熊野の神のお留主かや。足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神も神共覺えぬ神ならば尋るつまに逢せて見や。それ。それ。それ。それ逢せずあはれぬは皆。偽りの御神とそしつても祈つても。神の力も叶はぬかと。笠もかもじもかなぐり捨てくるひ。なげくぞあはれなり。

○しのゝめ道行

上フシ枕もとらず。帯とかず。夢も結ばぬ春の夜を。

地なたてがましやふたり寐と。長地にくや鳥の告げ渡り宵の島田をそのまゝに。置手のごひの旅姿。杖よわらずよ音の笠打つれ。ヤマトアツ立て行く道の。地清水流るゝいけ田川。あだと實との水すじは。地二つにわれてかたせ川。なみより浪にうつる瀬の清水とる手にかげ見れば寐ぬにほつるゝ黒髪のをしどけないやら。わけもなや。地化粧せぬ身はわれながら。見るもうるさく思へ共。さすが女のひな形や染めてゑがいて隈取りて着せばやきみが。ためにとて晒す細布さら／＼とされ女波が寄せて来て。岸の小草にア、／＼。ぬれかゝり。地よるひるわかぬ契りぞや。われはまる寐に夢もなく。うしや出じまに行く船の。地名のみばかりとこがれ来て聲面白く拍子とり。舟うた沖も静かにから櫓の音がいざや出て見よさまじや。さまじや御座らぬ磯打つ浪よ。あたゝしんきやしんきのどくや月に廿日は沖に住むつまを持つたも。名ばかりと。地心ひとつにあきらめて。行ばうらみもあかねさす。松の葉ごしにかけこぼす初鶯の鳴く音あどなやしほらしと。地見るにつけ聞くにつけ。いづれ思ひのあくた川。深き願ひをかけまくも。

神の恵は男山。守らせ給へと伏拜み。月のおぼろのたそがれに。かつらの里に着き給ふ。色となさけの世なりけり。うき世なりける戀路やとなづむは。此みちばかりなり。

○有馬土産ゆな紋づくし

中音そもく有馬の温泉は。人王三十五代欽明天皇の御宇にはじまり。そののち行基のかいきとかや。山は名にあふおちば山。又四郎アツいなのをさゝ原。いでそよと。つゞみが瀧のながれまで。げにいさぎよき風情かな。地さて又出湯の其しるし。一二あらそふ家々の。きやしやも情もありま山。大湯女。小湯女品さだめ。ウ地かのものろこしの驪山宮。貴妃がよそおふ大宮人も。是にはいかでまさるべき。地下扱それ／＼の通り名に。思ひ／＼の文どころ。上地先一の湯の奥の坊。今をはるべとさくや此。色も。心もむかふ梅。地夏とうつりて夕ばえの。御しよのおまきはだき牡丹。いせ屋のたけは松の丸。五七の桐は大もんの。たつはわか／＼わかさ屋の。地市は同じくむかふ梅。ハル上地春は軒端の梅が枝に。にはひをこめしあまがさき。一字ロロヒゆ。りはなさけも同

じ紋。地秋は來にけり菊の枝。上大坊のおくりなり。岩根にかゝる三つ葛は。是も名にあふすみの坊。地すんとしたるもねぎ屋の杉。上地きくの折えたませの花よそほひ少しかたぶきし。其有明の月かげも。たぐひはあらじ。中の坊。かくは見山のおそ櫻。いやつねならぬながめなり。中地二の湯の中に繁昌の。めぐみ異なる大黒屋。竹は五三の桐のとう。其玉くらのやすみじよや。下地きしのしたねの姫こ松。げに若竹のすぐなるは。地戀の露おくかちの葉も。たなばた姫のかざしとて。地ハル菊の重ねのいけの坊。松のちとせや。契るらん。地さはべに匂ふ川骨の。しげれる宿は下大坊。兵衛の宮はむかひぎり。祭文かやがのきばのいもせ草。きいは小松のだき合せ。ほんにねたいぞすしきの。のきに水舟かぶろ菊。戀ちのやみの辻といふ。思ひも同じ菊の枝。川のやのみつが紋。上地いざ立寄てそうめんや松にかゝれる藤なみは。葛の錦の丸の内。地戀のよる瀬の川崎屋。やゝさへ渡る夕月に。おちてねたいぞ桐のとう。色も情もこんたんも。此山すみにとめしはせいわうほうの仙境や。かのぼく王も駒とめてこゝに。みゆ

きや。うつすらん。  
○大君花てる姫道行  
初冠の透額。かすがの里にぬぎ置きて。下地みかさが下のばらけがみゆひかはしたるひとこと。地ちぎりは朽ちを戀にたつ。うき名かきけすみよしの。神のみくじの一二三。住吉四社の御まへの姫小松。ちよのねのびに引そめて。さあすみの江の。岸によるなみよるさへや。地ひるは人目に木がくれし。かしたは木の森くらきより。今をはじめの旅衣も。たちのこまのかた手綱はなれゆく身ぞあはれなる。よしや故郷をはなるとも。かへんなんいざ歸るには。如かじと告ぐる一こゑを。地いかにいつまできくなとや耳なし山のはとゞきす。地涙の水とち置きて。物思ふ袖に水無月の。とけぬ氷室とくらべ見ん。氷室の社伏拜み。とろろきの橋とろろかす。なれも何ゆる世の中を。忍び車のうしととふ。立田の山のはつ錦ふりあげ見れば笠の端べににてる日の雲も色そめて。ひむくほすてふ天の香具山あれぞかし。地手にすゑて見んたかとり山。扱又南は三つの山賤のをだまき。くりかへし／＼かへれやかへせあはれかし。

地昔にかへるよはならば。蚊帳のつり手に思ひをしめて枕比翼にならべて二つ。地逢瀬うれしく帯とき。の。地川を渡りて行水の。澄むや濁るやしな／＼に。うつりかはるも習ひにて。世は皆戀の一ながれ。歌くめの山べの仙人だにも袖のぬれぎぬ洗ひし女。雪のはばえのかの白妙を。すそのひま／＼ほの見そめつゝ雲の通ひ路通力うせて。こがれうきふし竹の杖ささあ住吉さまの。はまの松がね洗はれし。地人めづゝみのながるの里。うき名流すな河内路に。地ハル命の小舟しばしとてつなぎとめんいこま山。地麓に過ぐる夕立の。地雲の絶間にとぶ鳥はひらく／＼ひら野もはや過ぎぬ。向ふはなには蘆の葉のながれとまりし淡路島。地果ては蒼海漫々として。地ツヨクあをきが原の波間よりあらはれ出し神松の。岸の姫松程もなくさあ住吉に着き給ふ。地四社の宮居のかたそぎの。かたじけなしと言の葉も。心をたねの手向ぐさ。うき事しばし忘草。いざ忘貝拾はんとキホヒ三重濱邊に出させ上給ひける。

もついは根に歸る都の春をたのみても。うき世の淵瀬つねならぬ流れの。ゆくゑ。汲みて知れ。詞源の頼光ははん官夫婦がなさけにて御命のがれしと。またもやよそにもりの下風。木の葉のしづく落人の身と成給ふ。カン詞戰場出陣の折ならで召しも習はぬ武者草鞋。それにはあらぬ葉香に。エイカンフン御足をいたましめ。草の。露ちる。かげにだに。今は。うき身を。地置かたも鳴子にさはぐむら鳥の。ちりちり別れおち給ふ。御有様ぞあはれなる。美濃のお山はそなたとも。いざ。しらぎくや。大和アッまぐさかる。地まきの重に道とへば。色長地花によそへてしらん／＼と子供さへ。カン地あなづるかづら葛蔓。はひひろごりて行く先を。せきとめよと。關が原。日だかの。そまも。打くもり。さつと袂に一しぐれ。地しばしやどかる笠ぬひの。里をはるかに見渡せば。ハル地野分のみだす萩すゝき。野守の鏡うづもれし。うき世のくもり。吹拂へ伊吹の里に。軒端ふく。地とまはあらみてさびしきも。コハル地繪にうつしては美しき。賤が葉屋に立つ煙。消えてはむすびなびきては。上地風のまに／＼立迷ふ。ア、人界のよしあし

○ 廻山姥 頼光道行

語あだなりと。名にこそたてれ櫻花。く。散りて



に。さそはれなびく。人心かくやとばかり。観ずれば。カシ地五慾七情さま／＼の。罪をうる間の里近き。友にもうとくしたしきも。不破の中山。山深く。地木の間にもるゝ入相の。鐘こう／＼と物す／＼。上地谷のかけはしとたえして。峯につま戀ふ。引取三重肥の聲。地子を悲みて。地ましら鳴く夜半の鶴鳥よるの鶴。涙をそふる種ならし。上地暮行く空は風絶えて。コハル地四方の山々もくねんと。座禪の相をあらはせば。谷の川音しん／＼と。地寐物語はみのあふみ。國の境よ。世の中の。地しやう。じや必衰のさかひかと。ハル地我身に問へばわが答へ。地いなにはあらぬ稲葉山。跡に見なしていつかまた。世にもあをのが原ならば。今を昔の。世がたりと。思ひつづけて。行末は。地垂井赤坂青墓も。それぞとばかり夕まぐれ。コハル地松の風のとう／＼と。さらさら。さつとふきおろし雲の。ゆき来もよそよりは。はや暮過て物凄く。名をだに知らぬ。山中に茫然として。三重立給ふ。

○鎌倉八景

立かへるまだ夜をこめて有明の。月のかげもる板び

さし。空もひとつと眺めこし。あはれ昔の春ならで。過こし代々や世につれて。地やつす姿のちご櫻。どう三郎御供にていでさせ給ふ御すがた。甲斐々々敷もいたはし。地思ふに添はで思はぬに。上地添はうき世の濁江に。上地住む甲斐もなき水の月。せめて一と夜は玉だれの。地紐も結びしをのまに。かく立出る我つまの心のうちこそうらめしや。地うらみながらも立出て。ふりあげ見れば。ほの／＼と。霧にへだゝる安房上總。出入舟のかす／＼は。地遠浦の歸帆これならん。みぎはの鳥もとり／＼の。上地つがひ／＼が羽を休め。上地よせ集りてふはと立。群れ居て遊ぶ鳴鶴平沙の落鴈面白や。地あれに見えしは有難や。地千代や八千代の鶴が岡。曇らぬ御代の神かぐら。ウツ嵐木枯さつと吹け。かさにやかさに木の葉がはら／＼と。地江天の暮雪目のあたり。遙かに高き御山は。いつも鹿の子の富士山。麓に田子の入海や。地沖にたゞよふ海士小舟。とまもる雫もろ共に。涙で明かす舟の内。下地是や誠に瀟湘の夜の雨とも云べし。雨のはれ間は網を曳くひくになびかぬつれなさよ。歌君を思へばかく忍べども甲斐ぞ

なき。つれなき松に降る時雨。情にへだてはなきものを忘れまじつきせまじ。思ひはつん／＼つりの絲。釣た所が漁村の夕照是ならん。ウツげにもものどけき海の面。一首はかうぞ詠じける。東路や野鳥の。磯の春風に我ひもいひしいもが顔のみと詠捨てつゝ行く程に。山市の晴風面白や日はや西に入相の極樂寺の鐘の聲。是ぞ煙寺の晚鐘と。聞しにまさる八景と。由井がみぎはに寄する波。どう／＼と。うと打てはさつとひく。宇津の山邊にあらね共。夢にもあはぬ我つまに。めぐり逢はせて給はれと。神に願をかけまくも。夜を重ね目を添へて。山また山や賤がいほ。軒もるやどに着き給ふ。

○秘密のごま ときはぎの道行

地つひにゆく。道とはかねて聞しかど。きのふけふとも今宵とも思ひよりなき。死出のたび。地ちまたは六つに分るれど。よきもあしきも臨終のまよひさとのり其ひとつ。二人つれだつみつ瀬川。邪妬のきしのいやたかく。れんぼの淵の深き瀬に。名をながせ竹田川。地物思ふ身は我のみか。長地世にあきの山さよふけていか成人かのがれ住。しばのいほりの後

夜念佛。かすかにひやく鐘の音。風のまに／＼さそひくる佛の御名もさながらに。我をむかへの雲うづむ。あなたは母の故郷かや。こなたに父のぼだい所を。今ぞうき世の見おさめと。いと／＼かなしさますほのす／＼き。友なしぎつねさよかはす。無常の野邊のうすげふり。今迄よそに見すてしに。今宵二人が身の上と。手を取かはしつ／＼と。見ればやつれし顔とかほ。我は廿五我は又ことし十九の。やくはらひ。地神はうけすやいたづらにおふな盛や殿さかりつぼめる花をこよひしも。はかなや露と消えん事思へば夢。長地よしやなげかじ何事も。下地うたゝ寐ざめの後の世を。導き給へとくりすつる。袂の数珠の数とりも。かぎりある身ぞあはれなる。地人一とさかり花一時。風をまつ間の夕あらし忍びあふ夜のきぬ／＼に。つかれをまたぬかげろふの命くらぶる我袖は。なみだの月の西の山。おくるゝ雲の絶間より。とわたるかりはさはなくてねざめがらすの立さはぎつがもなくねは何を。あらそふ。聲ならん。地あれ御覽せよあれを聞け。野中に立てる高ぞとは。ほえ出のいぬのきようときは。たが身の上ぞ我々も。

一字ヒロヒ此。あかつきはあのごとく。犬のあぎとに消えぬべき霜の屍は。おしからでおしや此子を百千代とみがきそだてし。玉のはだ。地犬や鳥にあたへんと思はざりしぞ思はずと。どうと伏してはなき沈み。立ち歩みして伏轉び。いさめらるゝもいさむるも同じなげきのうきなみだ。かぎりの道もはかどらで戀づかにこそつかれけれ。

○枕づくし

下音かりそめまぐら川島の。水そこふかき戀心あだし枕やみじか夜の。夢にゆめ見る邯鄲の。枕アツかり枕。うつゝ枕やひぢ枕。いとし殿御の。ひざ枕。地いく夜かさねし袖枕。二つ枕のそひぶしに。ハル地はだどくゝとの相生枕。通ふ情のふみ枕。わけの手枕いそまぐら。八重の汐路のなみ枕けふ九重の。たび枕。地ほんにまことや百敷に。ケル地かくれあらざる身なれ共。歌のほまれに身をすてしいなふ人もあら磯の。まさごつたひの小松原わけて行く身ぞ。今さらに。地申もおろか大君の。ハル地御おぼえ目出度も。皆是和歌のとくならずや。カン地とくゆるに又その人に。かいまみしつるも和歌の浦。玉津神慮の御

めぐみ忝しや神心むすぶえにしの朽ちせずば。またのおほせをたのしみて。たづね行く身のあはれさを。たれとりあげてうば玉の。地くらき夜道は心うきに。ましてならぬかちちのたび。ハル地そのさきとても。白はぎの裾は露やら涙やら。地時しも秋の夕まぐれ。千々の思ひのふかみ草。ハル地ねよげに見ゆる我心。カン地あだの情と思ひしに思ひの外に色床や。千代をひとよと契りきな。かた身に袖を。しぼるてふほすま。しばしとくだかけの。地ないて其夜をあかし漏。もくすまじりの磯づたひ。ハル地かいどり小づまわけしろく。情こぼれてほんじやりと。笑顔にたまる花のなみ。地とんと打よせ引よせてなかせてみたい友千鳥。下音ウタばつと立てはしやなとは小づまを。しやなと小づまを。しやんとたつた千鳥せめてとへかし。よいそれさつさ。さつとたつたる其風情いかにえならぬ。けしき哉。地ゆんでを遙かに眺むれば。かづきのあまのぬれ衣。ぬぎかゆるまのしはまい。色と情のかね事は此世の外の思出は。浦々迄も變りなし。浪と水との。心かは。心も同じ色里の。コハリ地戀の重荷の出舟やつなぎとゝむる室の津

を。地跡に見なしてよしあしを思はず語らず今ははいそぐ心の其甲斐もある松原にぞつき給ふ。

○用明天皇 舟路の道行

地しるべもあらず夢にだに。ろく地を踏ませ給はねば。賤が藁沓めし給ひ。みけしの御ころも今ははや。あさのころもに召かへられ。とを山ぼこのよすがとて。御手に。ふれさせ給ひつゝ。地竹の園生の末葉まで。戀にはぬるゝ玉の袖。ほす日もいつとしらなみの。うしほもひける大もつの浦にぞつかせ給ひける。地折ふしわたり舟のあり。びんせん。こふて召し給ふ。詞やがて舟人ともづなをといて半町ばかり漕出す。其時天皇いかに舟をさ。みづから今はじめて筑紫へ下るものなるが。見え渡りたる名所ども。くはしく御物語候へとあれば。舟人承りさすがは都人と打見えて。やさしくも問はせ給ふものかな。いでく教へ申べし。まづくあれを御覽せよ。宮御出の濱ぞかし。ゆんでの方は住吉の。地うらばの松に年を経て。久しくなりぬさかさばの。さきをみかげの森すぐる。地兵庫の浦に須磨の浦。とまやも知らぬ夕ぐれに。くらきやみちはありとても。明石の

里を見渡せば。かすみぞたてる高砂の。松はあらしの音ばかり。あれに見えしは淡路島。霧にまじはるをしかもめ。いそべの方に遊ぶていは。面白うはおはせずや。詞天皇げにもめづらかに心もはれて候ぞや。まつたこなたに見えたる小舟は。故郷の方にて聞及びし。あまの小舟の釣舟か。地浪にゆられてただようち。かすのうろくす釣つた所がア。いさましやと仰せらるれば又舟人は。いかに旅人御覽せよ。向ふに少し雲かゝり。見ゆるは四國讃岐ぢや。雲井にまがふあは山を。かけてこぐふねとまりのいそべ。引づなのうらいよの海土佐の大崎なごし山。皆此さきにて候ぞや。詞時に天皇今ゆく豊後の國迄は。今いくばくの道ならん。舟人承りされば候未だ七八十里も御座候はん去ながら。今にても追手だに吹きぬれば。一つ時が内に豊後の津に走り付候と。申す詞の下よりも。それく順風しきりに吹きぬれば。舟人大きにいさみをなし。扱こそ追手の來つて候。御悦びませと。いふしははよし風はよし。帆を上げてもたすれば舟は三つ羽の征矢よりも。なほはやばしりさつゝさつ。行ば程なく筑紫地や。豊後

の園に入給ふ。十善ていろの戀幕の間。何とてらさ  
ん日のもと。深きこひちのかみなるはと感せぬ。  
者こそなかりけり。

○福貴曾我 介時宮めぐり

のぼりけり。地フシ心の杉のすなをなる十五郎介時  
は。二見の浦のはらいして。内外の宮の相の山。瀧  
のひゃきは。相の山フシ夜ごと。おつれど名もたゝ  
ぬ。えいそれよしの。ふしどは竹ばしら。藁ふきわた  
す軒のつま。さつさふれくやつこもふれ。はりひ  
ぢじや。でん中ぢや。さゝらさらくすりごろも。  
地ちはやかけおび引むすぶ。かぐらをのこにやをと  
め。袖ふりはえてゆきあひの。ちぎのかたそぎし  
んくくと。神さびわたる夏木立。千々の日かすに引  
そまき。はた一とせの宮うつし。丸木柱にかやの  
屋根。五日十日のときを知る。雨の宮風の宮。五穀  
ぶにようのしるしとて。くもらぬ空は。久堅の。地  
月よみ日よみ西の宮。鹽のひるこの御やしる。天の  
岩戸の神樂うた。絲竹呂律の合せ物。舞のは袖もく  
れなるのひかりやはらぐ玉津島。地はもりの神のそ  
めてほす。秋にしきの色々に。すそやこづまを引

そろへ。たけにくらべてたつた姫。ありどほしとも  
見えわかぬ杜の。木の間に。ちらくくくと。祭文が  
カリほたるとびかふす風を。たむ扇のかなめ石  
かしま。かんどり諏訪三島。祭文賀茂にしもかみ二  
たばしら。ふとしき立てよろづ代の。松の尾平野北  
野の神。そでの匂ひも梅の宮きたの藤なみさかえん  
と。松にも花をかすが山。地月こそ出づれば弓はりの。  
やはた住吉岩清水。むすぶ手水にはやたまの。うし  
のつのもじみそもじの。言葉のかすは八雲立ついづ  
もにそさの大社。こゝにうつして神ぞのや。御りや  
う八社のおんかみ。山王廿一の宮。雲ふき下ろす  
しらひげは。おひのかけそふあとたれて。萬代不易  
の神ち山。八十末社四十末社の。總じて日本國中に。  
あらゆる神のみあらかを。こゝにうつして宮めぐり  
目出度下向なされける。

○富貴曾我 さつき御前道行

地色フシきりのふすまの。下地あけやすき。水無月頃の  
朝日かげ。山は萌黄のかやつりて。すそふきかへす  
白浪の濱の松。風はそよくと。そよげや寛裳。下地  
ういの旅の。衣めづらしなれこまひ。長地さつき御

前はさきにたちかちちをひろふ取なりも。道行人の  
目にたちて。笠のふくさのはづれより。つや／＼ひ  
かる黒髪。地はまだ藤枝はる／＼と。雲かうかく  
のあと見れば。物とはなしにあぢきなく。おちかた  
人にゆきちがふ袖のえにしも過し庭の。契り朽ちせ  
ぬ柳かげ。地しばしとてこそ立とまり。つれまぢか  
ねてうなひ子が。いへちにかへる道くさに。下地むぎ  
わらぶえをかみしだき。させいほうせいちやう／＼  
と。竹のねぶちをふりあげて。ヒョウフシそばへのぼ  
りてふもとを見れば。うしはかはひや野をなつかし  
み。澤にさがればいばらやかづら。つゝじねぎまに  
くやりにくい道を。くやりにくくやつて。松の木か  
げになア名の立つにさ。さほな車のひまもなく。地  
賤がうみその麻衣。あさでうき世もいまさらに。思  
ひまはせば面白や。男もたねばあふ戀も。わかるゝ  
戀もなつ草の。地枕一つにまるねして。いつがいつ  
迄あるとても。夢おどろかす人もなし。いつそをむ  
いてすみ衣。さとの道のに。引取三重入うみの。田子  
の浦浪どう／＼と。よせてはかへりかへりては又ど  
う／＼とうつせがい。ますほの色のはまならで。下

地すその、櫻甲斐あつて。雲のは袖もそら色に。木  
木のみどりの夏木立。地げぶりくらべん淺間山。あ  
れごらんせよあさましや。うへて戀しき人は見えた  
りうれしやとて。のばれば雲に消え／＼と。地消え  
てかたちもなよ竹の。をきながむかし物語。いひつ  
づくればながき日も。西吹く風にかう／＼と。くれ  
六つひやく鐘の音に。ごうしにたれとかさねきてお  
きつの。しゆくにぞつき給ふ。

○自然居士 二位の前道行

上我つまならぬつまごひに。迷ふうき身のはかなさ  
は。きやらのたきさしかひぞなき。げに名のみまきく  
戀の山。地わけこしは山しげ山をまだふみも見ぬ二  
位の前。御母諸共むこ君の。ありとさだめぬのりの  
道。御墓まわりのおもかげを。帯しなほして旅すが  
た。笠かたむけてしのお世の。月をいたくゆふべ  
より。地星のかすよむあしたまで。歩み迷はせ給へ  
ども。道はかどらぬ野路の末。人めはさぞと思へど  
も。殿もたぬ身は氣さんじと。心ひとつにあきらめ  
て。とかくうき世は伊勢の濱萩。なれもなにはの蘆  
なれど。地所によりて物の名も。かはる物よな我も

また。都おうなと呼ばれしに。かく國々をさまよへば。ア、風俗も物ごしも。おのづからなるるな女と。人や笑はん人や見ん。わきてはづかしいづみ川。地なみをたゝみてしきばりに。かたびらかせのほしあひも。昨日よ今日と指折れば。木々の中ばのあきざれて。あらしふきこすはつしほに。地桑名のふなちとわたれば。かひの雫の落ち合ひて。地女波男波の岩枕。まこもしきねの中津川。ふかきいもせはうらやまし。地下の心はぬれながらうはは舟のさしあひに。おのこ子とては見たばかり。なさけがましきひとことを。いはじいはまのこけごも。きぬたにかけてうつくしや。地ねざめのさとの有明は。月見るまどにかげこぼす。きゆるこはねのさめごと。とぎれ／＼に聞ゆるは。たが手枕ぞねたましや。つひにまろねの夢もなく。あけくれとのみ姉君の。おもひ人よとたづぬるにア、果てしなやさりとは。いつもどらんす事じややら。御ゆきがたはしらくもの。地空をしるしと信濃路や。木曾の御坂の小笹原。わけ行く袖にうく露はいづれ。涙の種ぞかし。ほすましばしと夕日影。紅葉まばゆくてりそひし。もと

やまがねにぞつき給ふ。  
 ○けいせいしのお草  
 地扱もうき世のうきつとめ。それをくがいとよみかえて。つらさうちにもたのしみと。思ひそめたる戀衣。うらみしのぶの草のたね。巻紙にかく文のつて。返しとる手も心せき。地くせつの床のよしあしも。かなしきにつきうれしきに。ついてゐなれぬ客なれば。いつか廓を。出で小舟。すいた男はほだしなり。たとへば餘所につとめても。見えたとしらす一とこに。禿までさへしりがろし。かくてくるわの我がらに。あふてその事此事も。思ひせかれてよどまれ。下地ござんしたなどくどからぬ。言葉に諸事ぞこもるらん。されば揚屋のかり枕。いふませはしくよびたて。明のごげんもまゝならぬ。宿の隙日のうき思ひ。げに。つく／＼と世の中を。戀と無常のたけくらべ。地みじかきあしのふしのまも。あはぬ思ひに涙ぐむ。目かどに立つか朋輩や。又はやりてのたまのをの。たえなばたえにながらへば。しのぶる事のいつまでと。短氣の起る事もあり。サイモンまはり紋日の月々や。おせはかさなる氣の毒や。かや

うの事のつもりては。やせたと人めはづかしのもりてくもらぬ。閨の月。地情の月は西の空。東枕にかたぶきて。夢の名残となりけり。

○あほし色あんど 一 中ぶし

すゝみは花の。都かや。地なはて石がげぼんと町に。見おろす川の水茶屋は。にくやまけじと。着飾りて。家名あらはす行燈に。うかれ心やどれ姿。ともよせきだよきせるづゝ。もちつれ出る。ヤマトアツやまとはし。地酒宴みだるゝ賀茂川に。一文字屋に二文字屋。地十文字屋とかけめぐり。しやうぎの端に腰をかけ。茶碗取手に顔見れば。音に聞えしあほし屋の。姿はさてもうつくしく。としわかさやかにわ松や。かさねかたびら桔梗屋に。ちらしはさつと住吉屋。もんにつけたが輪ちがひや。山田屋佐野屋松島屋。葛屋松葉屋さら／＼と。かほりゆかしき戀風を。頼みます屋とア、／＼ぬれかゝり。地よそにうき名はたちばな屋。身のひしやともなりはて。尾張屋美濃屋に行くとも。せめて一ト夜は大坂屋。伊勢屋丹波屋山科屋引サツマアシはえい／＼いとむすめをとりやぞならば。心はりまやなうれしかろ

うれしかろ。しんで此身はなうれしかろかなやかなへてくださんせ。玉や丸やに三つ星や。なさけはずんどよしのやの。さゝやのよいにふしみやで。はつお座敷は出るもはづかしゆるさんせ。ひらに今宵は祇園町。八軒やさかかうだいじ。三ねん坂や五條坂。宮川新地こつぱりとやすませたまへやきだうふ。よらんせ／＼はいらんせかごやりませうと呼ぶ聲も。あくび交りの夜明けがた。つとめなりけるうき世ぞと。さぐるはきんちやくばかりなり。

○大和歌五こく色紙 小町少將道行

江戸アツ戀せずば玉のさかづき。そことなく。物のあはれはよもしらじ。中地いたはしや少將殿。色地小町御前を負ひ参らせ。いづくとさしてしら玉か。何ぞと人の間はんには。露と。江戸本アツ答へて消えなまし。地あはれ二人が中々に。いつ下紐を打とけて。とくさ色なる狩衣に。むらさきにはふ藤袴。しほるる裾をかい取て。かひ／＼しげに見ゆれども。むばらからたちそぎ竹や。道の小石に足いたみ。すそのむらさき引かへて。ひのはかまかと疑はる。諷いとど朧夜に。ふるむらさめか。おつるは涙かと。袖打

はらひ打はらひ。冷泉たどりくると迷はるゝ。戀ちの習ひぞあはれなる。マキ詞「姫君涙と諸共にげに數ならぬ我ゆるゑにかく迄御身を困しむる勿體なやとの給へば。シテ少將顔をふり上げて君ゆるゑならば此命。何か惜しまんをし鳥の羽がひならべんあふせには。此とし月の胸のやみ。一字ヒロヒ。よ。ひはれ行く天の川。わたりくらべてたなばたの。としに一ト夜の。思ひをしらば今のふたりが行末を。守るちかひの神垣や。あれは御堂の光ぞと。尋ねめぐればさもあらぬ狐火の跡になりつゝ先に消えちらり。ちらりとちらめくは。我を追手に來るか。かくれたよらんかやしにも。長地身をおのゝきてかくれがさかくれがともあらし吹く。心も足も冷えわたり。しんきもつかれはてければしんくゝと物すこく。なきたま送るあだし野の。松の木蔭に立寄りてしばらくつかれをばらさるゝ。

○松づくし

まづ今年の歳徳は。北野に當らせ給ふゆる。千代のふる道あをとめて。地又あらたまる若松や。君にひかれてよろづよと。雪打はらひ。奉る。そもく。此

御神は。西海の雲のなみいはくす舟にさほさして。今の北野におし渡りまだみやしろのなき内は。御身を置くに所なく。一夜に。金手千本の松うるて。落葉かたしき。かり枕ふた神。ちざらせ給ひにし。御うれしみを世につたへ。女松男松をうるませて。色と情をいのるにぞ神のめぐみのめをとまつ。地初子の松の若葉より。さしそふ枝のかげうつる。日の出の松の二はしら。やよ君が代の初めとかや。地アッいもせのおかの小松原。月ゆりこばすあさせなみ磯馴松に宿かりて。すまの浦松風さぶみ。霜いたゞきし老松は。つゑのかしたき姿にぞ。君のよはひや。くらぶらん。地ふきなびきたるむら松の。きしによるてふ姫松は。霞のころもかい取て。たてる姿のしほらしや。歌フシ松の下葉でおち合ひそめて。だいてね、して一つ松へ。くくね、して。だいて。だいてね、して一つ松。地ふたばよりしてたいけに。松も花さく神津國。ぬさとの音のさつゝと。ふきみだれたる夕あらし。かざす袂のすゞしきは。いきの松原まさるとも。地とをつ空なるから松も我大君にひかれては。ときはの松の色はなほ。まさきのかづら

枝ながし。かぎりなきよのためしには。兼てぞ植し神垣の。松を子の日に奉ると。いと静やかにぞかたらるゝ。

舊刻都羽二重拍子扇下卷

○平安城 天皇后道行 若葉の前道行

みかさの山の。地うすげふり雲にくらべてうは玉の。夜半の出御ぞ。いたはしき。御幸のつねに引かへて。千もとのまへはさきにたつ。わかばも今はかひくしく。ハル地よろひはきれど忘れては。かいどりしたりしなをやり。我はづかしき。身の行衛。思ひやるさへはかなけれ。昔玄宗皇帝は。諺驪山の御遊今日つきて。馬嵬が原にさすらへの。草のたもとをしきかはす。楊貴妃ざくらいろこぼす。戀路のみだれ。是はまた。同じ。枝葉にたちならぶ。此手がしはのねちけ人。なになかくに。すみにごる。地心は玉にきづ川の。すゑにうき名や流すらん。上地げにあだなみのあだなるは。しづみし世にも井手の里。玉水は名のみにてあはれかたしき。ひとり寐の。地夢なき枕露ふかき。をぐら堤にゐるさぎの。上地よるは何してうかくと。ひる眠るさへねたましき。下地向ふにたてる。男山。江戸本アッ正八幡の。宮居ぞと。

舊刻都羽二重拍子扇上卷終

地伏拜みつゝ見渡せば。こばたの里に馬はあれど。殿御思へばわらんちのひもをばじつとしめよせて。伏見ときけど宿からで。いそぐところは定めねど。やう／＼ゆけば今ははや。おたぎのこほりうた村のとある。木蔭に着き給ふ。

○はらみわかな

戀ぐさの。たねまきそめし。色ばたけ。はらみわかなと名にたちし。君がしかけに。思はずも。地ふきあげられてはうづきの。ねびきの。松に。ふる雪の江戸アッたまるおなかのかたまりは。ノリ地たががひ。げんのまぶのたね客のすきまに「しのびあひ。地ちよつとかり寐をしは部屋。上地契りこふじてさまざまの。心づかひの手くだ事。つもり／＼ていとしさの。しるしをのこす置土産。それと知らずうつそりと。かづきのあまの見るめさへ。地是はゆるせといふだすき。かゝるちゑなき大じんも。金の光りでする様と。そゝりあげ屋の。ついせふに乗つてくるわの。ほとゝぎす。地これ女郎のそら泣にさとらぬ人の心こそ。見えすく／＼。ほんに見えすくもじのかや。ふたりならぶる枕にも。地我ね姿ははぢよか

し。さながらふじをむさしの。はらにのせたる有様を。つゝむとすれどすいはうの。コハル地あつまる里のめにかけて。かみするをながうなづけば。くわしやがめまじに氣を付て。一座の女郎。ひざをつき袖を引舟かぶるまで。たがたのまねど。口々に。地ゆふてやりてがおそろしき。耳をとらへてさゝやきの。はしも。つばねも。コハル地北むきも出入まつしやかごの者。料理人さへまぶさまのあがり。せんじやとどよみなす。くるわのさたこそをかしけれ。

○かぐら高砂

上「なされける。うき身のごうを我とわれ。地うらみくすやの軒を出で。父のかたきをねらひゆく。地ちゑもやあつみたくみの介。願をかけていせ神樂。打つれ」立て江戸アッ出給ふ。地まづ市どのは母と姫。さも有さうに出立せ。長地歌をうたふ太鼓の役とゞめをさすは笛の役。合の手つきぬうらみはかづまの介。人目をふかくしのぶの姫。地さきにすゝみて歩まる。風俗ならしだしなら。あなかそたちといひながら。地都にまさる江戸鹿子。地抱へ帯したこしつきは。歌上わが子ながらもしほらしや。地誰も戀には妻

をこふ。長地しかまのち地有明の。月毛の駒よ我こふる。雲ををけれど。すさみぬる。かのぬれ人の浦づたひ。明石や。須磨のいよこの誠に。鹽やきころんころも今来て見れば朝霧に。地島がくれつつ行舟を見るにつけても我々が。出こし跡のしのばれて。いつか返らん悲しやと。なげ。く心を白玉か。露かとはん人もがな。地ハル袖さしわけてこたへんと。猶も思ひをすまのあま。鹽やくけぶり。くすくすと。地消えもや果てぬむねのうち。たれかあはれと夕日さす。わたのかさ松きて見れば。なほこそぬるれ袖しぐれ兵庫にはやく入舟の。島かげよりも櫂の音が。からりころり／＼と押してきぬればつき島のあれに高きは久方の。あまの海づら雲のなみ。月のふな入みなど山。ふもとの野邊の草枕。さめてや出る。夢の村。敵をたづねいくたのもり。袖にすゝふる乙女塚。雲井に見ゆる布引の。瀧のしらいと打はえて。歌「五尺いさこのてのこひ五尺てぬぐひ。地あまつ乙女やさらすらん。こなたの沖を見渡せば。あみの手をひくみぬめの浦。つなでにすがりあま人の。聲をそろへてえいさらさ。えいさらさ／＼／＼さつ

と引しほに。うつるや月のみかげ山。地まだ旅なれぬ我々が。つかれにいたむあしやの里。すぐればあとは西の宮。東にならぶみさきのおき。引やうしほのさしかる。つもの松原ちよとこえて。なにはも近くなるをのしゆく。富士ならね共我々も。来てこそは見れかぶと山人目をふかく忍びのを。しつかとめて人々はほりね大もり打過て。入江にこそはつきのくれ。ねらふかたきを打取て雲にあげんなにはづに。一しゆくしてこそ冬ごもり。

○わん久道行

二より歌たどりゆく。今は心もみだれ候。末の松山思ひのたねよ。いつの頃よりあひなれそめて。通ふ心を。かは。ひと思へ。さりとは／＼。しのほかのハテどうもせい。これ／＼／＼うけたとな。あのや腕久はこれさ。これさ。つゞみのかはかのほんえ。しんぞ此身はこれさ／＼うちこんだ。とかく戀ぢのぬれごろも。地ナチスほさぬなみだの露しほり。くちなば袖よ今の身は。せいしがのべの思ひぐさ。むぐらのやどにたゞひとり。とこはなれゆくあかつきの。地そのきぬ／＼の面影を。とへど答へずしよんぼりと。

昨日は今日の昔にて。法師々々は木のはしと。思ふはやほかわけしらぬ。心の花のかほりをば。しらせたいぞや。詞ア、はちく。色詞此十徳もすぎしころ。ゆかり法師が一ふしに。地ちるも器量も身代もみなあはゆきと消えうせて。かはせしことのかはるとも。はなれまいぞのきみ琥珀。我はちりかや身につもる。心のあくたむねにみち。それがこうじた物狂ひ。歌が、とともぬれたる引。やんやあ。身なれども一と村雨をいとほじと。地立ちよる軒のこすの戸に。きむくひむくのそらだきの。もれて見えしは白人か。いろでまろめしよるのつま。太夫ハチ 堀江の文のたよりさへ。ワキはしがなければ渡られぬ。太夫こひのねがひもあみだばし。ワキうきなが。太夫ほりも。二人わざくれと。ぬれて通ふかいたちばり。ワキとをつそらなるさつまばり。太夫こひしゆかしきわがつまの。ワキゆくえを。太夫とへど。二人あはざばり。ざこばあち川ふくしまを。地迷ひゆけどもまつ山に。似たる人なきうき世ぞと。泣いつ笑ふつ狂亂の。身のはてなにとあさましやと。芝をしとねにふしけるは。ナキアシめもあてられぬ風情なり。

○傾城繪姿三幅對 政方道行  
とても此身は。地火宅を出よとすむれど。名利の心つよければ。聞ておどろく人もなし引。ハチダ、キアシ老少不定の世のならひ。死する命のそのきは。ひ戀しきつまも従はず。地いとしき我子も伴はず。ひとり出てひとり行く。ふなをか山の夕煙。たえぬ涙ぞあはれなる。地それより物のかなしきは。かねに事かくせつき前。旅でひたるい夕まぐれ。地木賃泊りのわびしさは。松の木枕もめん夜着。ひざよりしもはかんざらし。地足をつめば首筋へ。つきぬくやうなさよ。ヒヤッさよあらし。地ナチスつばさ色なるすみぞめに。上地ころもばかりは染むれども。下地僧と俗とをかけもちに。世をすてかぬる某は。詞美濃の國にたれあらふ。右京の大夫まさかたと。人に知られし身なれども。色詞國はかたきに奪はるゝその上家老民部の丞。または二世と契りてし。宮木野の露ちりくゝに。行衛定めぬ一人旅。せんかたなさのはちたゞき。ひさご一つを友として。人め忍ぶのかくれ笠。かくれ美濃路を。立出ていつか。昔にあふみなる。地今津の宿に來て見れば。旅のならひか

此身にも。上地一夜かり寐の根なし草。やめさせぬ世や袖引て。歌かどに立つたは。忍びのつまかへ。野風身のどく引こちへはいらしやんせへ。エ、しのびのつまかへ。よその睦言ほのかにも。地きくにいもせの床ゆかし。上地あだ名もよしやかしは原。けふさめが井にすだちする。鳥本のしゆく。海道上リアッすりばり峠の。ほそ道。たどり行身ぞ。物うけれ。地西を遙かに見下ろせば。上地なみ風もなき水うみに。出舟入舟あそび舟。静かなる代の。ためしかや。地そなたは平野いぶきの里。比叡の山風身にしてみて。コハル地みぞれあは雪はつれ雪。かさに。ちらくおちくれば。しばししのが木がくれに立より休みおはしける。

○助六上巻二度心中道行

歌念佛ア去程に。世の中の。人間のめいの有さま観するに。花開いてしめす。まさにしんのちしきたり。昨日の榮華。今日の夢。花ほとゝぎす月雪の。いろにまよひ。香にめでてなさけの。ナクリ中音色のはじめには。地アッ白きをもと、白無垢の。ねまきの袖やくれなるの。涙かゝりてつかみぞめ。うるさや帯の

とけしなき。世は成り次第死に行く身の。きさんじは。地誰はづかしと思はねど。川端づたひおのづから。上地うつればかけを水かゝみ。くもるやほしの。行道も月も雨夜の。ちしご時。地五々八々と指折りて。コハル地つまぐる數珠のたもと川。上地水さかづきはえひもせず。下地京の吉田の神帳に。中地かほだしもせぬ死神を。地やば天神か。うつじんか。下心のわるい神さまとうらみかこちしとがめかや。今また今の。身の恥を。地さらしなはての見こしより。松のくらんとそやされし。中地ときはの松もうなる松。うきふし松もかれ松の。コハル地やにかうなればわか松や。のちはたきいと。くだかれてもゆる煙のあさましや。地そもマアわしはぬしさんの。妻といはれたはつものが。上地七十五日生きもせで。カン地しぬるやうなるよめ入りは。一字ヒロヒす。ぐ。せいかなる因果ぞと。えりにつゝみしたきつせは。はだも淵にや沈むらん。三下り上 祭文アッ 太夫なくく申やう。縁はいなものわし故に。親御のお氣にそむかせて。紙子ひとへにしました。わしもこんなに。あひそめて外の。男は目につかず。地よい身になるを嫌ふ

たも。かうなるはしの約束か。ア、うらむまじよしや世に。上地いづれなげきはありすか山。ヨハル地ふもとの原のあだがすみ。ウツアアかゝる輪廻の。ふたりづれ取や手にちから草。地わけてつゝみのすて舟を。みだのぐせいとのりのきし。迎へとらせ。給へやとやがて舟にぞ。三重のりにける。

○進上物ぞろへ

千代のみどりの臺の物。鶴と龜とは相生の。妹背替らぬ。とも白髪尉と姥とは。高砂や。松の位の花崎や。三五郎風のかたよりも。先づ取あへず。送らるる。たが袖ふれて春の月。寐屋のさゝめのさかづきを。今一つとしほとおさへの臺。色香まじへし作り花。梅の位と。名にしあふなには道しば。おくらる。殊にめでたい一かけの。地はだ合せたるめすとをす。ヨハル地お中に孫を壽きて。八左がくわしやおとづれに。一筆そゆるふみ箱や。中地二見の浦の貝づくし。引舟中間。ふたりより上まきさまへとさして来る。地しほの中にも名取川。おすにおされぬうき舟の。君がなじみのとゞけて。杉折むすぶ水引や。ヨハル地色の初音の祝儀文。上地月はひとつの中

間とて。ヨハル下地心やすふてかき高に。こたくさんなるしゝみ貝。中地ひよくの鳥の鳴二つ。イロ地ちよつと見よ野がしんぞうの。むかしはいかふ助さんの。おせわに成つて。くがひする水上巻か。禿とかや。玉ちよ高津吉松より心をそへて言づけて。中地たのみやりての若ざかり情所の。あかがいや。うまさかたこじやとふた色を。地杉が方よりくれは鳥。あやめもしらぬまゝたきの。玉もいゝだこふたくゝり小ぎみのわるい。ふらゝくと。さもふつゝかなるふくと。うを。北むきからと夕日さす。出口の茶屋は太鼓樽。おろせば龍に白魚や。おこせに似たる上郎まで。花をかざりし。おくりもの二世の始と。三重祝ひける。

○あかねや半七 中地下巻

さきから来るも。中地あとからも人はいつもの人なれど。思ひある身はきよろゝと。上地我から我をうたがはれ。見もどる人も見かへるも是ぞ此世の。大和アシなごりかや。下地した寺町をまつすに。上地ほりづめぬけてよこぎれに。道頓堀の水筋やみづみづ若いする中間。上地名代の茶屋の。せんじ茶の水のうへにも。ねいり花。中地いろといふ字はもろこ

しも。爰もかはらぬ日本ばし。ヨハル地たが中橋や中中に。上地渡りかねたる我々ははかなきはかの鐘の音を。つくづく聞て。半七は。詞シテコレのふ三かつアノ千日寺の鐘の聲。きこえぬ時はほん様が夜食が過てのみくたびれ。わけはないはと幾度か。わる口いふて笑ひしに。その鐘の音が今はまた。ウレヒシ死出の旅路の道しるべ。詞シテ地獄々々にあらず汝が罪汝をせむ。つくりし罪とが知らねども。天の道あきらけき。しをきにかゝりしつみんども。ウキ詞見付て三かつぎよつとして。アレのふこはやと取つければ。シテ詞半七はつと首打ながめ。はて扱おろかやコレ三かつ。今死ぬる身がはかなくもさき立つ人がこはいとや。あれもうき世のかりの身の。色詞かりの姿といひながら。我手に死ぬるか人手にかゝるか。きうせんにかゝり死する身は。あの身も。ウキ此身も二人同じ事引。シテ今生のえいもうは夢のうちのゆめ。是に對して。二人あに。さんきの心なからんや引。

○半七三かつ心中道行

二上り上終にゆく道とはかねて聞しかど。昨日今日とも。今宵とも。思はざりつる死出の旅。下地にや

歡樂きはまりて。哀情多き世の中や。地人ひとさかり花ひとひらき。命をろんずれば。江のほとりにつながざる船。身を觀ずれば。きしのひたひの根なし草。本調子あはれしきみの水をへて。もらひ涙にうくばかり。ときはの松と。契りしに。地あだな金ゆる身をかきいれの。音頭アシ金の代りに女房になれとせがみ立られ返事もならず。いとし男も二人が中も。親にもれつゝ不首尾と成て。金のさいかくなりにつければ。思はざりしに身の恥辱。しよせんうき身はずて草の露と消えなば思ひはせじと。夫婦互に念珠をくりて。南無あみだ。南無あみだ。上音頭ねぶつを道の敷取に。ゆけば程なく千日寺の。鐘の響に夜は何時ぞ。はやしんじやうの。ゑかかうの鐘の。有がたや。地いざや最期をいそごといふて。ひやの東のさいたらばたけ。露か。しぐれか身をしる雨か。音頭アシかさや三かつふくさをだして。つまとゝをしかとくゝる。シテ男涙をはらりとながし。阿波太夫アシ扱はそなたを殺して置いて。にげも走りもせうかと思ふて。つまをくゝつておきやると見えた。おれが心はさうではないにと。ウレヒアシうらみかこちて



なげくにぞ。ワキ地下三かつ涙にくれながら。上地なんのさうした心でしませうぞいの。下地たとへ此世はえ添はずとも。未來は。いふに及ばずこんどのく。上地色オンドづつとこんどのさきの世迄も女夫となつて。はなれぬやうにと思ふ心でくつて置いた。早う殺して跡からござれと手を合すれば。シテオ、よいういやつた念佛申しや。ワキ南無阿彌陀佛。シテ南無阿彌陀佛とさし通すれば。ワキあつとばかりのたゞ一聲に。シテちしほは。ワキながれて。シテ小袖の。ワキもやう。二人花の姿も忽ち變り。顔も心もいとほそん。と。物すごければ。顔をかくして南無阿彌陀佛。すぐに我身もふえかき切つて。過し亥の年霜月七日。霜と消え行く夜あけのからず。かはひ。かはひ。かはひ。となく聲に。よひのくせつもみなあだし野の。夢のうき世やまばろしのむかし。語りぞはかなけれ。

○勇士の三つ物 ひめ君 道行

「こほりも今朝は。とけそめて。下地四方のけしきもみどり立。山の端しらむうす雲は。地はつ艶もろ共若宮を。抱き参らせあるじなき。宿のふすまにだ

きすてし。はつねのかほりかをとめて。カハヤイロナガシたれ聞とてかのこしおく。其うつりがの。忘れぬ。地にはひこぼするふりそでの。ふたつ姿やだてもやう。さて忍べとやいなり山。こえてあれゆくこまのあし霞の手づな引とめて。ふしみの里にゆめのこす。春の色とてやさしくも。のきの。ひらくる梅の花。地其下紐を打とけて君とぬる夜の長枕たもとのかげや有明の。月の夜ごとに行なやむ。竹の細道小笹原すゑ葉にこぼすつゆしづく落ちてはら／＼ほろ／＼うつ。やけの、きす。あはれげにつまこふ鹿のなく音にぞ。いとゞ思ひはますほのすゝき。みだれて招くなでしこの。地花あいらしきゆびさして。教へ給へばうす雲は。詞イロ若宮をおろし参らせ御手を引いていと子。あの、もの、と道ぐさにつまばやつまん春の野によめなまじりしつく／＼し。地ゆきかきわくるさとわらは。こしの花わに取付て。戀し床しき我つまへ文ことづけん二つ三つよつれもつれしあをやぎの。地糸もて結ぶ玉みづや。ひかりやはらぐ影見えて。すぎのふき目もまばらなる神垣さびてしん／＼と。きねがつみに八乙女の。ふるて

ふ鈴の音もよき。又聲もよきかみうたに。地カ、ワ君は千代ませ／＼とくりごといはふながいけの水もにこらぬ木津川や月の三かさのかみかけて。ちぎりし人のかくれがや。ゆかりたづねてふみまよふ春日の里にぞ着き給ふ。

○ゆうし櫻づくしなら土産名所記

身の行衛。春日の神のすゑに立。諸サッ宮さびわたる拜殿にきねがゑぼしをかたぶけて。神まもる間のかしよくとて。うちわざいくぞしほらしや。地げに名所やすてられぬふるき都のならのさと人の心も花ぐもり。詞八郎冠者爲朝はかさぎを落てそれよりも。みかさの庄司を頼みつ。都をうつし奉りしばらく南都に忍ばる。地頃は彌生の花見月。宮をいざなひ参らせて。鎌田兵衛諸共に笠ふか／＼と忍び出。花のさかりを見かさ山さして來にけり春日野やときめく木々の花がのこ。八重櫻よりさきそめて花みる袖にかほりくるにはひ櫻のゆかしきも花の。はだえのすきとほる。一重櫻のうす櫻。いとしき君が通ひ路をたれに語らんうば櫻。大宮人のゑぼしこ櫻なりよて見よてしやんときそめしかりぎぬのあさぎ櫻に

かば櫻そらにしらぬ鹽がまの。煙うづまく火櫻や。色もにほひもおのづから。つやびんなりとちこ櫻。霞にうづむ山櫻。楊貴妃櫻名を殘す花は十八初櫻。今せんせいの花姿うつし姫子の手にふれて。めぐれやめぐれきり。きり／＼めぐれや廻れ手まり櫻やいと櫻むすぶ契りの色ふかくちもとの櫻咲き亂れ。地遠山鳥のしだり尾の。なが／＼しき今日の日もながめにあかぬ景色ぞと奈良八幡の寶前にしばらく。やすらひ給ひける。詞かの彌宮の御姿をつく／＼見えて。扱よい風な若衆の。廣い奈良でつひに見ず。せめて詞にあづからんと。うちわ二三本手に持ち。仔細らしげにおそばに立より。オ、おの／＼は此奈良の里はじめと見えたり。名所百跡も多ければ。ゆる／＼見物なさるべし。扱又聞も及ばれん。是は當所の名物正じんの。ならうちわ召れてお國のつとなどには。ずんどう重寶な土産物。模様はお望次第にて。したてよし野の花づくし。無地に青地のぬり團扇。白地に墨繪かいたるは。此里の八景なり。これ御覽せよ猿澤の。池に月かげ残るにぞ。三笠の雪や春日野の鹿あいらしくさほ川に。ほたるとぶ火の

有様をかきし。歌ガ、模様はしほらしや。地南園堂のふちにほすみうすぐもり。さつ／＼とさつとくま取筆勢は雲の夜の雨ぬれてしほれてひたさされて。すそも袂もしどけなくしどろもどろにとろきの橋ゆく人は煩惱の。ねぶりをさますのりの庭。東大寺の鐘の聲。はや入相とつげ渡る。コイセメツン扱其外は蟲づくし草づくし。こもん霜降りはんじ物。かみ開扇。しふ開扇。うちわめせ／＼めされよと。宮にしつぼりぬれにけり。

○美人ぞろへ

先一番にとよはらの。地百枝がむすめ二位の君。驪山の春のほひ水。はだへのつやのあたゝかに。コムリ地夜半のはつどこ引しめてねてもらひたきおもかげや。目もと位だかき。まゆぐもり。ッ地笑ふが如く見えにけり。地次にかけては良峯の。千古が妹。春かせといふ女。地いかなる繪具な筆に。うつせばうつす顔ばせは。下地今咲出し初櫻。にのおはぐろのうば玉も。人の心を。やみになせとやまよへとや。ア、しづめとや。地たれが氣まゝにかきなせし。筆のすさみもねたましと。しばらくながめ給ひけり。

地さて又次は中納言。地鬮尾が娘あかしの君。近江の兵衛がうの花。山吹。はらからの美女。紀の康宗がおとの姫。八重といへるはいとけなき振分髪のみだれても。心ちらさでひとすじにいつこの殿が下紐をむすぶの神のかみ心かねて。聞たしとはまほし。地第七番にかけたるは。地近江の長者が養子しきぶのまへ。雨をおびたる常夏の。風にめざますわらひ顔。みどりのふきびん嬋娟として。八字の細眉ゑんてんたり。げに三千の戀ぐさも。色香うしなふためしにて。唐の虞氏君。王昭君。貴妃李夫人のうつすとも。此上はよもあらじと。つや／＼見とれ給ひければ。君をはじめ奉り。伺候の女官上達女。まづ世の美人これなりとのめき。さゝめき給ひけり。

○助六道行

せひなけれ佛もとは。凡夫にて。中地かのやしゆだら女のいもせの中。ぬるよのさまもりんきのしなも。いまの衆生にかはらめや。かれを見是をきく時は。戀とばたいを引わけて。冷泉ア道はふたすじ。なきものを。いかなればわれ／＼は。たま／＼人と生れ出。ためしすくなき川竹の。ながれにしづむ身

の罪業。つゝはわれゆへふた親の。氣にそむきにしゆへにこそ。たれにかまけも。おとるべき。地智慧も器量も身代も。みなあは雪ときへうせて。かはせし事のかはるをば。わからぬやうに先の世で。長地さきであふやらあはぬやら。どうやらこうやら知らねども。いとしかはいのあまりには。かなはぬ時の神だゝきそもあわしが氏神は。中地どうしたぐちな神さまぞ。京のよし田の神帳に。いつた神やらいらぬのか。わけもなさけもわかまへず。やば天神かうつじんか。正五九月や月々に。サイモンアッうぶすな

どの縁日と。みき奉りとしごと。神事といへばたいせつに。ざいしよにゐやんす母さまも。いはひきよめてねんごろに。わしもくるわのうちながら。心ばかりの手向をば。地どううけさんした事じややら。げしんのわるい神さまや。中地かくなるやうの御まもり。さりととはつらやどうよくや。とても此世は此とほり。せめて未來をちがひなく。夫婦一緒にごくらくへ。それもかなはぬものならば。ヒロヒたと。へならくのそこまでも。ふたり手にてをとりにみて。地はなれぬやうにとかけまくも。かたじけな

しやひのもとに。うまれ出にししるしには。地いかなるごしやうさんじうも。一念みだの御せいぐわん。なにながくらんたゝたのめなにはのこのよしあしを。つまぐる數珠のかすとりに。とり／＼さぞやうはさせん。あれごらんせよ。ゆくさきに。はやよこぐものたちわたり。あけがたちかしたまほこの。はやむる足はよ／＼と。つゝみづたひのしのぶぐさ。あけばうき身のすみ所。さらしなはてにつきにけり。

○姫が瀧四季の山めぐり

地花をさそひてのぐる山。上地まして我名を夕月の。うき世をわたる一ふしも。カンケル地きやうげんきぎよの道すぐに。さんぶつじやうのゐんぞかし。名残を惜み見返る山。春の梢に色々の。花さく山にと山めぐり。土地となりはあをし夏山の。かしはちるてふ卯の花や山ほとゝぎす山あいの。けしきの花にかほつくる笠をかたづけ。やまめぐり。地秋はさやけき月かげの。地いたらぬ山はなけれども。わけて名だかき山かげの。フル地月見るかたへと。山めぐり扱またふゆはとを山の。地みぞれもてくる雲のあし。

土地かしこきかりはみなみむき。カン地北をうしろに山のこす。山また。下地山やみねしろく。雪をさそふて山めぐりめぐりて山姫の。地みやまくち木のわけしらぬ。くろみし戀はばいたんの。おきなぞねむる一むすび夢はやそじのはなさきて。地かしらに霜はつもれども。老をやしなふたき川のくすりの水のきよければ。いざ立よりて水くまんころ。すしきながめぞと。しばしやすらひ居たりしが。下地落ちるたきのたへなるに。心をすましつくくんと。ながめにあかぬそのけしきよしあし引の山めぐり。下木のかげの下ながれ。是みな他生の縁ぞかし。

○姫が瀧水の上風流

地しづがたのしむいとなみの。上地よるべいつこと白なみに。立そふなみもあらなみのをなみは網を打なみや。地いそこぐ舟のめなみこそ。ともにこがるなみあらば。つれてうき名の。立なみも。いとひはせじといふなみの。いもせかはらぬたのしみと皆々ながめおはします。地然れば舟のせんのを。君にすむと書つたへ。ノル地又一ようとは。地フシさぶねの。地色のみなとやとまりぶね。上地戀のつな手の

きてかゝる。引手あまたにしげければ引取かぶる出て見よさまじや。さまじやござらぬいそぐふねよ。あたしんきやしんき氣のどくや。月に廿日は沖に住む。うきをくらぶるあま小舟。地やども定めぬ漁夫がわざ。いとむ手なはあみ取つて。此うみづらにはつとはなせば。おもしろのありさまや。三下り歌えい／＼／＼すきの道とてのみぬけ男。二世も三世もひざもとさらぬ五合樽さげかななべなしの。ひやざけどつこいく。ひやざけどつこいく。地カ、是なふすぎましよあんまりじやと。上地いふにいはいれぬ中よい夫婦。酒をたのしみよねんなく。苦しきねのかち枕。地水もらさじと人めには。ふかきいもせと見えにける。

○風流町蓋 白むく

白無垢に。一重帯した夜の雪。いつそのく氣か。開たいなとむればかくす。其内に。下寺町になくからす。竹林寺のかねの聲。油はあれど。とうしんなし。何の葉じややら秋風の。アミトフッ雨戸々々におとすなり。地心ぼそくも立出て。見ればうき世の涙川。いろのしがらみせによどむ。地げにやはかなき身の

一つ。二つ枕のおきふしに。びんかきなでこよい殿と。地死んだあと迄いふならば。せめて嬉しきまほのすゝき。みだれて物を思へとや。よしや地獄へンナヤンヤ。おつる共又は佛になるとも。タキヤンかならずちぎり米や町。くされあふたる中なれば。うづまば同じあづち町。三途の川の。せぶみをも手を取かはしわたや町。しでのしのちの島や町。今我むねのき尺島。地心本手にあらざれば八丈島へながさんと。親兄弟もりきん島。地もと金きんのなきゆゑに。我よこ島をあらためて。茶宇島入てわぶれ共。まだふのわるいこくらめと。キオヒヤシ猶もかんにん。せんたい島。身にひだ島の有ゆゑに。長地さりととは二くすし三くすしあぐわざらしよ島ざらし後には親にはかま島。地きせかねまいとねり島に。しいら。しらけて朝がすみ。なにはのうはさよみ賣を。聞たび事に二親の。にらみ付てか見たい迄。あほうらしやなどん。くさい。あたどんな事し出して。かもんの名をやはづかしと。柳がもとにぞこがくれし。

○祇園のうれん茶屋名よせ

諸西に高きは愛宕山。かはらぬもじをやはらかに。

ひがしにたふときおたぎでら。ヤマトアジ地本ぞんは千手觀音六はらみつ寺せいすいじ。こくありやうせんそうりん寺長らく寺につく鐘もひききにきんりおんごくよりめいぶつめいじんときを得ていま此山にフシ地示現あり。世の悪念をいまして。あんやう寺とはむつのかど。たまる山といふとかやに。下地ヤマトにこめゆたうふひしほみそ。二つびきなるかまもちは。女神男神のふたはしら。これ此山の守護神たるうほうどうじのほこのなり。ふもとは祇園ござ天わう。町もすなはち陰陽を。わかるがゆゑに南がは。北がははきにひがしかとかしは山がた兩けい。一しよのうらゆきなり。なにのせにやはしらねども。つひひきぬいて三十分。てうどあつたと打笑ひ行かんとせしが立とまり。ウツヒのふく／＼それなるあを侍に物とをふ。扱も八しまのかせぎに弟のさいゑもんこそ。兄のあとをかはれたとも申。又もらはれたるとも申はいかに。太夫さればこそ大事のことを御尋ねあれ。われ其せつは萬太夫どの、かほみせのけいこにおはれかけめぐり。くはしき事はぞんせす候。八しまはかりのつてあれば。うみぼう殿へ御たづね

候へてうやまゐつて候。扱もさいゑもんどの、御事は天の下にかくれなし。此仁もとよりひやうげもの。まりやうなるまる頭巾。もみうらつけてくびにき。ゑちご屋ぞめの今様形。二十五さしたるたばねわたや。はづちがへしとおいなし。しげだうの弓にせき。づるかけて走りいで。あつばれよき客見ばや一すじ。ほれてのけんが。ためゐつゝ。二人ひの丸さいたるあふぎやひらきうちかざしやあまいくゝえやつとしま。やれこりやきをといれろをとれどつこいそつこいまはれくゝなんが。おつなははいおよつもそつとしよつきりせ。えいしてさやれさてなそりやきのとをつたもん所そがのゆかりと。かくれないもつこやさしきおどりぶり。地いまはふつきとさかい屋の。よろづいせ屋ときくからは。餘の事はすにたいたのめ。神の惠の三つ扇。わが一方にかなはねばこれで松坂やをこえたえ。地ねいもといへばがてんして。くづれるづゝやたれかれも思ひくゝの引取上つばやいりおかた米やは。がうして。いね心よきよねのふう。しどちのたま屋き、やう屋より。それよりふんじのたまサイモンカ、りよろづはいづみの如くはびこりて

御國に人の賞翫す。松によればあしらいの。よしや吉野の花見には。おさへ其あいてもとのあいつげざ打こしおちか。あいせひにつぎめはりづめにて。上地おばかさ、やを參らせん。花橋やかをふすべ。あらす、しやと。立寄れば。いしの井筒屋どつさりたまづ落付いた遊興は文字扇はかなめて六七長けん五條の三位。角田角介こんたんすれば。いで入る物までしなくらべ。利巧くらべ智恵くらべ。氣の通つた事すいた事。ならぬ事きれいな事。ばけた事まだるふない事見事な儀。てのまはる事かなふたぎ。おかしい事うれしい事うまいものもちおとりもち。まことにはぶつのおうげんし地蔵ばさつも氣をとほし。或は親子兄弟でも。マキ叔父でも。太夫主でも手代でも見た顔見せまいせいぐわんはめやみのちぞうとたち給ふ。

○石垣茶屋名よせ  
大和アツとにかくにじやうのこはいをば。あけんがためのかぎ屋をぞ。第一にしておかれける。もと此川はみたらしや。かものおじやうのながれゆる。さてこそ下より讀むとかや。地やうじん守るかぎのをの。

長地しんくの絲のふさながく。とつてわくれれば丸屋ともすこしのぶれば山がたや。とこしむる帯屋とも。諸人賞翫やはたやの。めぐみひらけし若松屋。風ふけば松にことひくはま屋より。帆かけて出るしまを舟。一もんじ屋に小ぐら屋を。めがけてはしるくまの屋の。うらのけいきも枡屋ぞと。なみとかちともやなぎ屋が。せとすぎるまに二もんじ屋。地やがて桔梗屋うれしくて。都のよねもなじみには。ほれてつれゆくかはら屋通ひ。戀の道にも。朝ゑびすやのつりくつりざほにせん。竹中屋。帳やは物の覺えつけ。うそなしにかくつとめふみ。にくうないから此君に。つひあひざはや。思はずも。地日野江あそびにしはのびて。老も若いも信仰の。やをよろづ屋の神々も。伊勢屋に鎮座なし給ふ。伊勢はもとより太夫しよく。地ねぎのやうなるあたまつき。色道とかやいふ商賣にいつからはにるつかけの。ゐしやには膽をつぶさせて。じゆ者はにこゝらひぐさ。地ほながゆづりは松屋にかけて。諸願成就と祝詞のこゑ。きくやいなやの利生にぞ。はやあふみ屋の七不思議。世つぎやまめでそだてあげ。おひかはいらしき。とぶこゑ

や。たゞ何事もむつ言を。うちあかしやに大坂屋。やまとや情のはじめにて。さゝ山越ゆれば丹波屋の。高い山からちよとんだやも。戀の色ぶみかいさくひつさく。御中なをしにのむ酒の。よひのしまだやくらはしや。諸事は丸やで酔ひもせず京屋と。めでたうおさめける。

○五段曾我 虎うき名川  
地扱もうき世のうき名川。色のしがらみかけてけり。ハル地ながれもやらでせによどむ。下地人の心のなみよせて。ふかき思ひと成にけり。詞かくて十郎祐成はいつしか虎にわけふかく。誓ひ置きにし言の葉の末はほだしと世のそしり。親のいさめもわざくれに日を重ね夜をこむる。其通ひ路のあらはれて。くるわにばつとさたのある。地カ、りまぶの男と名に立る。よしやさがなしよしやたゞ。あふにかへすやありなんと。けふもかしこへうかれくる。詞祐成つくゝ思ひけるは。誠に某大事の身を持たながら。日毎に通ふ情の道これ迷ふまい物でなし。しかしながら人心。武夫さへもへんじやすし。ましてつとめの身にしあれば又我ならぬ外心。女はよろづあさはかにて。思ひ立

ぬる事どものさはりとならんもいざ知らず。特更に  
 此頃は工藤左衛門通ふよし。つれば備前の大藤内。か  
 たんもつていぶかし。何とぞ様子をうかやはん  
 と。いつも立よる戀宿丸屋が。内そと入にける。地虎  
 は此程打つ。地いやな男に。つながられて。面白  
 からぬうき日かず。よるひるわかぬ身のつとめ。あ  
 さごみよりの付入に。下地我身ながらまゝならぬ。  
 コハリ地二階小座敷。こゝをよ。ウツ地日うつりよしと  
 身じまひて。日に。櫛のさし替る。地模様は千々に  
 わかてども。せひに替らぬ物とは。いほりもつか  
 うかげひなた。ふたつ鏡にかけうつす。月雪花は。何  
 ならん。見度いは人の面影と。地鏡取おき手づから  
 や。硯引よせ筆そめて。ウツ地のべのちぶみあたま  
 から。一つとしたる其下は。けふの。つとめのつけと  
 どけ。地扱其次にはわし事と。只打つけに。かいたるは  
 つとめの外のしるしなり。地かゝる折ふし街道をく  
 つ音しげく打て通る。虎しばらく筆とめて。おれはた  
 ぞやと問ひければ。引ふねのさごもはきぬの香。と  
 めて居たりしが。色カン詞さん候先陣は横山黨。後陣  
 は名越の殿様といへば。虎かさねて。色詞あはれさて

あの殿達の馬鞍鏡腹巻を。妾にほんとはづめかし。な  
 らぬ事かとはむるれば。ア、こゝな太夫さま。扱  
 も似合はぬ願ひ事。何の爲にと尋れば。皆ぬし様に  
 參らせて思ふ事をとくどからぬ。ウレヒアアとは涙  
 にくれければ。詞さごもはわけしらすまぶの男は  
 あれ程に。可愛ものかとつぶやけば。たしなみやほ  
 んに文盲な。つとめはつとめ戀は戀。いかうわけある  
 物ぞいの。ちつと教へてやりたいまで。カン詞それは  
 その。いとさは寐ても起きてもやめがたし。思  
 ひ切らうと思ふ程。なほしましめる物思ひ。よな  
 ごとのかよひちもあふてもどせしわかれには。其う  
 つり香をそのまゝに抱いてね、して居る心。カン色詞  
 あはでないせし其時は外へも寄つてましますか。又  
 こと戀をかせぐかと。すこしはねたむ心もあり。道  
 のほど内の首尾。いかつと思ふ心やら。高いうへか  
 らうしろとび。おつるやうなる夢を見て。扱も其夜の  
 ねぐるしさ。カン色詞とやあらんかくや渡らせ給ふぞ  
 と枕のかはく隙もなし世には男も無いやうに。つと  
 むる客をさし置て。ひんな男のかはゆひは。是も因  
 果の内ならん。地そのほかよろず氣くばりの。せつな

い事を思へばはや。戀のないのもしならんと。又く  
 ひしめすいのち毛の。すゑはかしくとかきとむ。

○鏡會我 形見おくり

地さる程に。詞祐成仰せけるやうは虎少將女なれば。  
 深くかくしていざや時宗ふるさとのかきを。又は  
 かたみの品々をも鬼王團三に渡すべし。げに尤と兄  
 弟は料紙硯取よせて。ともし火かすかにかき立て。  
 硯のうみにするすみの。涙ぞおちてこきうすき。筆  
 の立てどぞあはれなる。詞十郎はともすれば。虎がな  
 さけをかへしがき。五郎がふでのすさみには箱根の  
 別當の御事。扱其外はいづれも同じ文章なり。カン色詞  
 とりわき五郎が悦びは母の不興を許され申し。父母  
 孝養の弓矢の道。カン詞隴門原上の土に。屍は埋むと  
 も。名をば埋まじ南無阿彌陀佛。五つ三つの時より  
 も。十八年の春秋を。地思ひは二人でとめたり。ハ  
 地建久四年五月やみ。天は暗しと申せども。思ひぞは  
 る。今宵のそら。コハリ地祐成判。時宗判とかきと  
 め。ウレヒア筆をすて。ぞなき居たり。地なほしかた  
 みぞあはれなる。ハ地肌の守りは母御前。弓と鞆は  
 會我殿へ。鞆とゆがけは二の宮どの。色詞鞍と鏡はわ

どのばらおんない主のかた見ぞと。思ひ出さん折々  
 は。念佛申し回香せよ。ヤレわざと文にはかゝぬぞ  
 や。地びんの髪は虎少將。ハ地夜半のさめめのみ  
 しめし。とめ木のかほりうすくとも。煙は末になびき  
 あふ。二世のかた見とみせてたべ。緞子三本紅絹五  
 疋。綿の代まで相をへて。コハリ地和田殿より給はり  
 しを。下地やりてにやりて我々が客のじやまして憎ま  
 れし。仇を思にてほうじんの。念佛せよとのかたみ  
 なり。ごばん人形ゆび人形。二人の禿がほしがりし思  
 ひ出せし折々は。此人形の袖しぼる。露のそこにや  
 兄弟の。下地なきがらのおはすらん。あの藤澤に鳴く  
 かりも。ヤヨアはれを。しるならば。地めいどへ通  
 ふ一、言を。ハ地傳へてくれの鉦打ならし。コハリ地念  
 佛回向を頼むぞや。下地巻繪の香匣繼三味線。ウツ地引  
 舟こがれ行するのかた見となづけ。投頭巾。ハ地は  
 ながみぶくろ煙草入。をろせ出口のたれ。ハ地は  
 地煙草は涙にしめるとも。おもひのけふりにむせぶ  
 まで。かたみに見よとばかりにて。ウレヒしばしなげ  
 きておはしける。

○五段會我 元服緇子變

調少將はかみそりの。地たつきも知らぬ御方に。江戸  
アジ今日ぞ定まることぶきを。合ノ手思ひまはせばナ  
いまさらに。かみわけてさかやきを。鎌倉風の今様  
に。びんうすからすあつからず。烏帽子したよく。は  
からはん。地妾にまかせ給へやと。翡翠の縹子鬢蟬  
折の。優に威のあるびなんせきかたゞ色めく元服  
なり。

○鳥づくし

身をすれば人のとがとは思はねど。うらみ顔にも立  
出る。げに思ひきや我やどは。地日ごとにちたび出入  
も。是やかぎりとなごりの身。思ひさだむる我心。こ  
こそ十そう寶町を南へはこぶ玉ぼこも一足づゝも我  
命。地きゆるあはれを鳥丸。四條ときけばかなしく  
て。今いく時とかぞふれば。江戸アジはや春の日も竹屋  
町。道はかどらぬ。二日酔もふさめがると岩神の。ち  
かひは同じかん大臣。かゝるしまつにあふ事も。地元  
金巾のしまつせぬ。ひだりまへなる心から。心本手  
にあらざれば。今我むねもき尺島。地八丈島へながさ  
んと。親兄弟もりんき島。げにことほりや心と。我  
よこ島をあらためて。茶宇島入てわぶれども。又ふ

のわるい小倉めと。猶も。かんにんせんだい島。地身  
にひだ島の有るゆゑに。長地さりと二くづし三くづ  
し。いんぐわざらしに島ざらし。後には親にはかま  
島。きせかねまいとねり島を。しやら汗かきひつたり  
と。油小路かうじてぞ。しゆしやかあざむく。丹波  
口。出口ひの口人の口。あすのうはさにせばせひ  
と。せひにおよんでしする身を。人には見せじ。水  
薬師。地しばしはかくせかくれざと。いづくの程とと  
とうじの塔。南無奇妙。頂禮かうしてあま寺の。へん  
じやう男子の色衣。ねがへど心のまよひにて。じひの  
まもりも不動堂あるがうきよの。ならひなり。地も  
かうなつたすぐせから。なんの千本あらしと共に。き  
えにし後は二親の。にらみつめてか。見たいまで。あ  
ほらしやな。どんくさや。地あたどんな事しいだし  
て。かもの名をや、づかしく柳が。もとへこがく  
れし。

○越路の湊女郎名よせう 千卜北國みやげ

マンザイ年わかにごまんざいとときみたちさかへましま  
す。愛敬ありけるあら町屋。まづはつあさのうすゆ  
きや。のきの日かげにうす色の渡海なみかせしづか

にて。たんごあかしの入船は。越のみなどの大きし  
へ。むらせをわけてはせ川や。ながれのなのみたか  
はしと。たれかおもひとこいづゝに。アヒ山かはち  
がよひの。まめおとこやくもなたつとな神うたは。  
サイモンいづもやへがきつまごめに。おほくらがりで  
たれじややわしにもつるゝふち川にかゝるながは  
し丸木ばしふみは。かへさじあづきゆみつよい心の  
きやくたちも。ついだきとめていなさぬき。ひとはな  
さけよふねはかちとかくあふぎは。かなめなり。地春  
はやまやまはつはなや。はなづま花だとやへぎりに。  
うづむみちのく道もせにふみまよひたるこひ草の。  
ねよげにおもひそめ川や。めもとのしほにほだされ  
て。どふぞなかせが。ならぬせかことばのあやめき  
きたいと。思ふもいふも淺ぎぬや。これぞわこくの。  
ならひかや。地いくえのまゝらかはしまに。大はしさ  
かたみちしばの。はぎのうはかせ身にしみて。ふた。  
りが中のちよじまも。のちはくせつの花さきて。み  
だれ／＼しいと櫻。地うけし心も大すみやかに。わり  
てや見せん若竹の。すぐなる枝にふつさりとふりつ  
もりたる引トリ三重。しら雪は引。二千里のほか故人の

心。なづむ三五の月ありあけに。みなれざほかは出  
てゆく舟の。なごりおしほとながめやる。舟ッや  
んやらおめでたいよのわかみどりえたもさかゆるの  
んえいこのはも。大夫しげりあひたる淺みどりあさ世  
花をか金山の。二人とやまにくも、はれにけりえいの  
かせにちらすくらぎやながと金さきわか崎の。と  
もるはなみにくる／＼とナザンにしをはるかになが  
めこしハヤンそれ／＼／＼マヒメこしちのみな  
とはつしまに引。やくやしほがまのほの／＼と。下コ  
ハリけぶりするがふじよりもなほたかさごとしら玉  
や。ゆたかなるよのみちざとによはひをのべてめで  
たきを。きみに。さゝげてきぬ／＼え。かさぬると  
このきぬがへも。いく萬がうのかめかへといはひお  
さめて千秋樂はん／＼せいとぞしゆくしける。

○好色遊山八景 菅野宇太夫作

我いほは都の辰巳みづかの。京へは遠きつん。ぼ  
谷。開ぬが花の盛にも。地とふ人ぞなき草のいほ。下地  
月宮殿とたのしめり。地ありし昔はやらうづか。白  
の目貫にくるはつば。茶やのせつばに。いきかたを  
みがくやふろのあらひざめ。地一二おとらぬ生れつ

き。備前小太刀と名にしあふ。なじみの松のすぐや  
 きば。無常のあらしさそひ行。我身はさやに残るさ  
 び。心ほそみの。亂れ髪。地をりこぼしたるひん僧は。  
 色慾酒魚の四つのあか。すゝぎあらひてやきなほし。  
 墨の衣に。角づきん。かけたるけさは五條坂。ねが  
 ふ浄土はりやうせん。したゆく水のしたよりて。  
 ナギッ情のしづくむすびあげ。なかははさがる古す  
 だれ。申々文セアシとよぶ聲きけば。心やか々のたう  
 せい女つくりまゆすみかうしんのまへ。顔にはくふ  
 ん皆白菊の。おきまどはせる下川原。かのこまだら  
 に見えたるは。江天のぼせつまのあたり。はるかに  
 高き御山を。打見あげはの長樂寺。ふもとに花のま  
 くす原。地のぼれば石のきざ橋も。角のとれたる丸山  
 や。れん正彌貞小重阿彌ざしきは花の日つとひてみ  
 すじの絲のしめやかにふる春雨の迎ひかご歸りあし  
 だやから笠を。さし合咄色ばなし。三太長太が手々  
 に持。てうちんの火はちら／＼と森の木の間宮さ  
 びて。地ぎをん三社や少將の。よるの雨にも風の夜  
 も。雪にも通ふやぶの下。かの竹林の七賢が。酒をた  
 のしむさかなには。下地うまさかたこのつぼ入も。こ

つぼり町のたうふぐし数は。いくはちぼんなうの。か  
 ねのむせいはぎをん町。四季折々のつくり花。地ひげ  
 がさいくに色ふくむ。札うる娘もうせんを。つゞき  
 のさじき一二けん。三四のせいらんおもしろや。地こ  
 れ／＼愛な小ざしきに。やんしゆのさはぎかみづり  
 て。すうきうろまとおるゆびに。酒をすゝむる建仁  
 寺。地後の茶わんにいきついで。べん／＼だらに  
 のかねごと。おれとそなたはさきの世の。下地ふか  
 いえんじのはんじやうと相ノ山アツ聞てナ。かりねの  
 床いそぐ。玉だれのひもゝむすぶの。神かけてつな  
 でなはてのいくひろと。地たぐりよせたるもとゆひ  
 の。きんかざんかはしらねども。縞のさいふのそこ  
 打たゝき。またの御げんといひかはす。下地新門前の  
 辻かごに。のりて伏見の下り船。遠浦のきはんもか  
 くやらん。地西には天が紅さして。石がき町に入日さ  
 す。はるやがみせのあゆもろこ。なま物さがるあつ  
 さこそ漁村の夕照うたてやな。エ、どんくさいどん  
 ぐりの。橋を南に宮川や。野白の二色とり／＼に。  
 よひの一座は時きれて。後がつまるかつまらぬかを。  
 これ洞庭の秋の月音羽のみねにいでの町。下にも客

を松原の川原。おもてはひろ／＼と。あれ／＼平沙  
 のらく遊び。北のひくみに一／＼つがひ。南の芝に二／＼つ  
 がひ。また五つがひ七つがひ。たしかさうかと思へ  
 ども。さうではないやら此僧はしらぬが。ほとけと  
 かたりける。

○八百屋お七みちゆき

ウタガハリ「ねよとのかねもつきすぎで。ほしもきたよ  
 りばら／＼と。とりもしぐれのかさのほを。つひか  
 たむけてかいつまげ。一あしづ／＼もとく／＼とえり  
 のしづくかなみだやら。ゆくみち「見えぬしでのた  
 びあさくさばしをわたるにも。わたりかねたるよの  
 中や。地よにわが身ほどたれがさて。かなしきものは  
 またあらじ。地はかなきものは姫ごせの長地ッ二世  
 までとのみたのむにはつれそふとのよりほかはな  
 し。それさへうすきえににして。思ふにわかれ思は  
 ずも。ひとりしのびて死ぬる身は。さぞのちのよの  
 さびしさと。たれをかこちてあせ／＼と。さすてにお  
 つるやさしぐしの。ふたつならべてだきあはせ。か  
 さぬるてふのうめの紋これもいらぬとこまくらを。  
 とつてすてたらそおもとゆひいらすにひきむ

すびうるさやおびのしやらほどけ。ア、なりしたい  
 しに、ゆく身はきさんじと。しよていかまはずつく  
 ろはず。しどけふりそでかざして見れば。夜があけし  
 らむよこ雲に。おくれしかりの二つ三つないてとび  
 ゆくつばささへ。いもせかはらぬしるしとて。夫婦  
 はなれぬやさしさよ。地よそのちぎりをうらやみて  
 いとっはかなさますげのかさ。しのびたどりてゆく  
 ほどに。下地こゝぞ名にきく不忍の池。それは世にあ  
 る人の事われは人めをしのぶが聞くさばにむすぶつ  
 ゆよりも。あだし此身ははつがはら。あらそふいぬ  
 のこゑきけばわれもほどなく同じ身とさしうつむい  
 て目をふさぎひとつ／＼とくる数珠の。たまのかす  
 ちるあせみちをこゝろぼそくもふむあしのさきもち  
 かづくしに所辻堂のかたかげにしばしとてこそ三重  
 やすらひける。

舊刻都羽二重拍子扇下巻終

宮古路月下の梅

宮古路豊後直傳

目次

上卷

祝言 魚づくし  
 忍び山頃日草 舟や儀介道行  
花やおふゆ道行  
 妹背の中酌 お菊幸介みち行  
旅のきせわた  
 比翼の初旅 新兵衛道行  
小女郎道行  
 雙紋刀の銘月 半七みち行  
お花みち行  
 相生萬歳寶藏 友すみ物ぐるひ  
 同祝儀龍神揃  
 小町大かみ 少將みち行  
おちよ浮名のもふせん  
半兵衛  
 るほう長じや  
 ふたご隅田川 狂女道行  
 傾城小夜のなかやま  
 高野萬年草 くめ之助道行  
おむめ道行  
 千代若みどり わん久道行  
 若かいで口舌の帯  
 吾妻噂夜走鶴 八百やお七道行

下卷

心中天網島 なごりの橋づくし  
 あし苺 難波女まひ  
 河内がよひ なり平唄念佛  
 夏女夫蓉紅滿小袖 おちよ道行  
半兵衛  
 そね崎ついで善 おはつ道行  
徳兵衛  
 半九郎ぶし 戀路の濡わらじ  
 ひめち笠 おなつさいこの段  
清十郎  
 傾城出口の柳 道行  
 辛崎心中 半兵衛道行  
小いな  
 しのだづま くすのは道行  
 曾我駒の泪 鬼王かたみをくり  
團三郎  
 契情吉原筏 興吉道行  
高き  
 難波津色羽二重 たるや道行  
おせん  
 酒吞童子 頼光山いり  
 陸月連理の戀 伊八道行  
おさん  
 かりばざくらかよひつばさ  
 淀ぞめ三ツかりがね  
 十七年忌 傳兵衛道行  
おしん  
 まんざいゑほうみやげ

宮古路月下の梅上卷

○祝言魚づくし

それ我國は神の御末。ふきあはせすのみことその後。玉より姫は龍神の御娘たり。海をゆづりの蛭子の神はおはせぬか。一天のみかどの御ふねをみつぎ申されよと。たつからかによははりける。天地まことをかんにてやあまたのうろくすうかみ出。うろこをならべひれをふり。御ふねをしゆごし奉る。金岡あふぎをさつとひらき。中舞セメヲ、おもしろしく引。先めでたいを先立て時をるふなの御祝ひは毎年のかれいにて。君がるせいは手ながだこ。まろく見ゆるはほん様。合ノ手く。ちとたしなまだこ入道殿。うんをひらくや櫻だい。花もはもこちゑそとくとふぐとのどくもなく。よはひをのべてゑびのこし。みつわぐむ迄萬代の。トメアシ龜の甲なる松竹のかはらぬ御代に住吉の。先々神をいさめんと。打つれ立て祝ひのかぐらを。さゝげたまひける。

○船屋儀助 忍山頃日種 道行みだれ扇  
花屋お冬

駒鳥こひのせきふだ  
 祝言 新たかたち  
 千秋萬歳叶



一セイ心はものにくるはねどつま故まよふ取なりの。すがたもしどけなつたけて地あきといふ字は聞くもうし。地ほんに物うしとぼくくと。ふたつの文字。かたいちにヒロ石。原。はしるからくるま。めぐりあひたさなつかしき。せめてかたみに戀人の。すげがさきればかさぎの。つつくりと立つかげぼうし。夕日のゑだにゆらめきをひて。おふゆ。おふゆとよぶやうに。思ひなしては。たちとまり。かざす扇と長枕夢の間にすてられし。君はすてゝも中々に。詞なふなふあれなる渡し守我殿御を舟へのせ。カン詞いづく三がい雪の國とらふすのべへも一所ぞゑ。まして火の中。水のそこいか程つらいうきめをも。つれてせたいをすまあかし。わびしき月もふうふして。詠明すが樂ぞやらぬくとなきければ。詞思ひがけなくふな人は。こりやきついなんだいの。のせもせぬ男をのせたとは明日もさめた狂氣のてい。さもあれいやしからぬ女中の。ア、戀故とおいとしい。シテ尋ぬる其思はくのお名は何と申し候ぞや。ヤ何名を聞いて心覺の筋あらば。おしへ給はることのはも。頼みをかけてうれしさにつゝむあしへのすてふねの。涙

のしほにさそはれて。あかすも雨のにこり水。本調子「ふねや義助とくふかい思ひにほのじをかけて。合ノ手戀風うけてくいつそよひやみ走ろぞゑ。合ノ手花やおふゆとく梅のしらはのかけがねかけて。合ノ手ねやの戸しめてくにつとあけほのひらくぞゑ。地わらひあふ夜のむろごたつ。かはすまくらとさかづきの。合ノ手かたむくかげにとろくと。ねいりしひまに。其人は。さきへぬけがらゆくゑなく。わしにはよめりくもとのこす一筆の。かはる心のかなしさに。はらくなみだ玉づさの。うへにおちつく其さを。したひてかくもくるひさき。はなお露しく足もとのだくくおりのむねのやみ。いつかゑがほのふたかはめしやんとたちたるおとこやま。又ふたりなきおもひ人。あひたい見たい戀しいとみだれ亂るゝ柳がみ。やつれていとやうつくしきこがれなげきし其かたちはん女もかみやなげつべし。

○道行旅の着せ綿  
二上りかのおおきくはさかやのむすめ。かははしらぎくべにぎく付て。よい子のく。よい此むすめ。よめりざかりのはな見月。地うづきくとたけすぎで。

はやさみだれのしつぼりと。子がいのぬれのはだあひて。二ツどもへとだきしめて。あとさいてねるはつたびの。よるのちぎりは岩ばしや。はきちがへじとわらんずをしめてしんじよとどつきて。地人日しのぶの。ほうかぶり風にとられしすげがさの。しどけなりふり人めより。三下りおやの目にあまるなさけと恩愛の。ふかきめぐみに内を出。毒蛇の口や薄氷をふみ月ごろのあさあらし。あれ見しやんせくつがひはなれぬいもせ鳥ぬれてかはらぬ。もろはがひたもとほすまぞなかりける。地幸助さきにたゝすみてゆめに三里のかちさへひろひ付けざる玉ぼこも。なにはに付けてかれあしのためで御ぶじと母ご様我をたのみのつなでより。たゞわくせきとむすぼれしおむねの内が思はれて。よしない戀のかけはしを。いせのはまおぎねほれても。はなれまいぞやかはるまい。うそつくまいとすへかけて。なくのやしろのゆふだすきかけてぞたのむ。かみ心。ながきちぎりといのりてし。ふたりが中をしらさぎの。むら立そらをながめ捨て。我はこせきを出て行鳥はこせきへかへる雲。あとでふたりのおやたちの我をあんじて今こ

ろは。ないてばかりと顔見合せ。玉もる數珠の絲ぬけておつる涙と成りけらし。詞男涙をはらりとながし引今かふ立のく身の上をば。さぞやつらいとおぼされんいつそのことにわしひとり。死でしまへばよかつたにと。一人かこてばよりそひて。カン詞あれまだあんなむりばかり。たとへ火の中水のそこらふすのべをこすとも。はなれまいぞといひかはし。なんのこゝろに如才があろ。むごい事をとすがりより。わつとばかりになくなみだのべのちぐさもかれぬべし。夕陽うつすなつこだち。しげみもふかきうぶすな。かみのみやゐをふしおがみ。たのみをかけてゆくさきは。な所さへもしら山のふもとに。こそはつきにけれ。

○道行ひよくのはつ旅  
三下り「花の瀬松しよ扱よサ日ほんのきやらよ。いくよさとめてもとめあかぬへあかぬ故郷をふりすて。たゞ一ツかいの笠さへもなみだにぬるゝ袖おほひ。ふたりつれるがうれしさに。くるわをぬけし身すがらや。ついそのまゝのすがたにて。ハル地思ひもふけぬにはか旅。地何のあてとも浪のうへ。こしち

の空を跡になし。下地すあしにせきたしみつきて。三  
 くに小女郎が道中の。行きの人のあだ口にようぬけ  
 申すよね様。ウ地とほむることばにむねいたみ。見合  
 すかほも青ざめて。あをばにうつる水の色。小女郎涙  
 に聲うづみ三くに出村ではのきし。男じまんのき  
 りやうさへ。櫛のはいれぬびん付や。かみも涙もばら  
 ばらと。わけはないはとすがりより。かたほにゑめば  
 かたほには心までくる憂涙。女心をいさめんと。詞ア  
 アかへらぬ事をくどくど。いとしやかほにやせが  
 みゆる。すいな客ほど手おちして。物言ひかねしそち  
 なれど。世にないおれに氣をつくし姿計りか心迄。  
 よつほどぐちになりやつたのふ。あれくくくく  
 あれを見や。戸わたる舟も人の身も。しづも潮あれば  
 浮むせの。有るが浮世の習ぞや。それ覺へてか月見  
 の夜。にくいけしきとたのしみて。ふたり手じやく  
 のかんなべの。つるがのはまを跡になし。今はそれと  
 は引かはり。しらぬ人にも。心置く。露の玉やの新  
 兵衛がなれるはてかといだき付き一日なりとつれそ  
 ふが。おりや嬉しいと取付て。はなれぬ中は石よりも  
 かた々の浦の舟よばい。こゑさはがしく吹おくる風

にすゝきのそよぐ迄尋くるわの追手かと。はしる小  
 舟を小手招き世を忍ぶ身の笠さへもきぬ川。こへて。  
 見上れば都のふじと名に高き比叡のお山をふしおが  
 み。我身のしがの浦の波立や浮名も行末は。いかな  
 るうきめ大津の濱。女郎をつれて走井の水も哀をし  
 るぞとて人の情に身をかくし暫しは京にかり枕。  
 ○半七お花道行 雙紋刀の銘月  
 二上リ「いく夜くくの。うきつとめ。七枚ぎしやうせ  
 サイモン」日のもと神さまをだました罪かだま  
 された。人のうらみかねたみぐさ地ついに我身もひろ  
 き世を。もに住む蟲の我からと。せばき命のたゞ二  
 つかくしかねたる山かづら。長地こはささむさの朝ほ  
 らけ見付られじと軒のつま。くもり有る身のくもの  
 あし。道はかどらぬ女づれ。上長地名をかもがはにな  
 がしたる水のながれと身のながれ。ふるさと遠く京  
 ばしも。あとになり行く水のあは。のりおくれたる  
 まどづゝみ。ワキよどのかは水ゆく末はシテ「いかな  
 るつみにワキ」大阪のシテ「道がどこやらワキ」なん里や  
 らシテ「身はつ鷹よ二人」はつ霜にねみだれ姿しのば  
 しと。つひひつしごくかへ帯。しやんとむすんで

引しめて 大阪大黒舞「あゆむとすれど行きなれぬこれ  
 も何故男山シテ」つくりしつみは山崎のふもとはあれ  
 よあはれげにワキ「年もわか木の色ざかりけふは姿を  
 町ふうに二人」やつすとすれどかくれなき帯のひらが  
 た近くなるワキ「松ばら過ぎてかは風に見ればあれあ  
 れのり合の。シテ「船にあうとがさゝやきて思ひなき  
 身の高わらひ二人」よそのつまごとうらやまし。地「こ  
 なたを見やと指さして。かりの契りのとをつそらあ  
 の鳥さへもめうとくは有る物を。せめて一夜はう  
 そなしに。ほんのめうとくいつの世に。いはれついは  
 んなさけなやと。抱きしめたるそぎ袖も涙にひたす  
 ばかりなり。シテ詞「半七なみだ諸共にコレお花。わ  
 れは大阪へ下りてもあすをも知らぬうき命。そなた  
 は是よりかごにのり京へ再び立歸り。親かたを頼み  
 ともかくも身のおさまりを思ふてたもいとしいそな  
 たを我故に難儀をうけるが悲しいと打しほれつゝい  
 ひければ地「お花は顔をふりあげて。うらめしの御  
 事や何とてお前に引わかれた時生きて居らりよう  
 か。扱はお前はあすか川さもしき人の心やと。うら  
 みながらに立あがり是迄なりと川岸へ行んとするを

シテ「ひきとめア、扱もたなきな。心やな。かういふ  
 もいとしさの。あまりての事さりとては。そなたよ  
 り先さきへと。走り出でんとする所ワキすそにもつ  
 るゝつたかづらシテ「よれつワキ」もつれつ二人「しがみ  
 付」ふたり涙のつゆしづく。すがほにこぼればらく  
 と落ちて行く身ぞあはれなる。シテ「半七しばし涙を  
 押へさ程に思ひつめし上は何しに見てんやうはな  
 しワキ」命あるだけシテ「身の有るだけ二人」高は  
 しぬると死出のやまシテ「つるぎの山もワキ」三途の川  
 もシテ「今行くやうにワキ」手に手とりて二人「こさう  
 登らうノウ嬉しやと笑ふも涙ながらの里。びんの。  
 合ノ手おくれに夕あらしさらくくさつと吹き來  
 れば。さだの天神かうくと。もりぐち過ぎてなには  
 江の。よしあし何と身の上の意見をしやかに京はし  
 のこなたの森にぞつきにける。  
 ○亂咲尾花の蝶 友すみ物狂ひ  
 蝶々に送られて行く。秋風のためばうくとむろを  
 出。行方もいざやしら浪の。よるべ定めぬうたかた  
 の。あはれなるかな友すみは心のおがせかきみだれ。  
 狂ひさまよひ泣き笑ひ。われは人めの下のせき。あら

れぬ姿見る人も。見らるゝ人もとも狂ひ。なんの事  
 じや〜。なんの事じやへ桓武天皇九代の後胤平の  
 これもちしかも金もちわれらが持つは辨當もち大じ  
 んのお通りじやさきのけ〜よいやさア、あやまり  
 ました〜おやち様モウ御かんにんなされて下され  
 ませ。若げゆるにした事でござります。御勘當御ゆる  
 しなされて下されませ。くわん左衛門おわび申して  
 たもいふ。ハ、アハ、〜それ〜如來さまが  
 頭巾きて立つて御座りますすりこぎ百本箸百膳どう  
 で女房にやもちやさんすまい〜らぬものじやと思へ  
 共わしも國へはいなれぬうき身ハア、淺ましの身の  
 上やな。何とぞかたきのうつゝなや正體もなく氣も  
 みだれす〜きのほに出て葉末の露と消え給ふ親に不  
 孝の罪とがを。ゆるしてやいのと泣き叫び。ヤア是は  
 雲川大膳同源藏是にあはふと思つてきたはやい。コ  
 リヤなんとする〜我は〜。我は〜よふ我じや  
 なあ。と、様の御首を返せ。きかぬ〜堪忍せぬ。な  
 んほでも堪忍せぬはらだちやうらめしや。にくやつ  
 らしや口惜やと。思ひあまりて亂れ髪ゆひがひなき  
 ぞいたはしき。もれてくるわのきやらの香に友すみ

暫らくたゝすみて。おろ〜涙おしのごひ。戀しの。  
 むかしやなしのばしのいにしへや。われ世に在しそ  
 の時はたま〜ふれるきぬだにもヲ、〜かほらぬ  
 袖はなかりしに今流浪の身となりて。袂もくちてひ  
 ぢまざる。かたをむすんですそにさげ。くちなばくち  
 よ玉の。緒のえんはきるまい今一度。あはせてくれ  
 のかねのこゑ。紋日々々とかぞへ〜て日がらやく  
 そく外の客等に格氣せまいとそこにかねうち。かね  
 をうたいの。くわつし〜うつたびの。かねはあか  
 つき。七つ起きして別れを送る。けせんこまめかぶ  
 ろがふり袖おしやかたみのふくさ落したハアあたら  
 物を。中ちつくりちやきん程べに染にく〜して。は  
 し〜から梅から松からし〜をぬはしたわすれが  
 たみの太夫おとした。花も紅葉もちらばれ〜い  
 としかはひとしめて寐し。あらなつかしのくれなる  
 や。おとした太夫と添ふならばいなもすみよかるら  
 めや。

○風流龍神捕

みにそびへし樓門あり。きたにがゝたるせいざん。み  
 んなみにれいすい。たん〜として。白がねのいさ  
 ごあざやかなり。シテ誰ひがしに三十餘丈にしろが  
 ねの山をつかせては黄金のにちりんのいだされた  
 り。〜に三十餘丈に〜がねの山をつかせては。  
 しろがねの月輪のいだされたり。二人地、ろうげつせ  
 うかくのなかにゑいじ。ハル地はるかのおくの高門に  
 は青海波といふ。三ツのがくをうたれたり。二上りひだ  
 りに火焔の輪燈有り。みぎにしうんの廻廊七寶七重  
 のたまの垣青貝の莖をまき宮殿樓閣立つ。〜にじ  
 のかけはし琥珀のらんかん中央のほうでんに〜大  
 シテ、ちう王ぐうといふがくをうち〜瑪瑙のきざは  
 しシテ、ふりのとばり二人、いろどるとびらをひらきシ  
 テ、しやこの瓔珞〜しんじゆの華鬘二人、たまのす  
 だれをまき上げた。紫磨黄金の大ゆかに〜すい  
 しやうのしやうじをつらねシテ、〜がねのいさ〜二人  
 「あざやかなり園にはたまのこすへをつらね。不老の  
 櫻へんぼんとふちとやなぎをこきませてにしきをた  
 たむ木々の色〜せんたん〜ら〜きやらま  
 なか二人、さそらまなばんすもんだらりつ香の名木た

てあかしシテ、み〜ね〜の二人、まつかせくんぶん  
 と樂のあやなすときは木の千代を八千代とさきみだ  
 れ孔雀鳳凰迦陵頻松と竹とにまひあそび。比翼鸚鵡  
 金鷄鳥るりのからも〜こはくのむめさんごのぶどう  
 らんまん朝日にてりて、むらさきの夕日にちりて  
 ひかりさす。こてふもあやのつばさをあげ甘露のつ  
 ゆにねむるていたいまいのとらふの猫ていしやうに  
 つめをとぐよそほひ。げいをつくしひをつくし。筆  
 にもことばにも。つらねん様はなかりける。ときに  
 音楽宮中にひやくは龍神シテ、さんくわいかスハ八大  
 龍王よ難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、阿那婆達多  
 龍王、百千けんぞくひきつれ〜、「くうでんのせきに  
 ざしまれ人これへと上座にうやまひちん物。名物。  
 しゆ〜のけつつかうことおはれば。龍女が立まふは  
 らんの袖。白たへなれやわたの原のはらふはしらた  
 またつはみどりのそらいろもうつるうなばらやおき  
 ゆくばかり月のみふねのさほのかはづらにうかみい  
 づれば〜「八大龍王々々〜ハリ、八つのかぶり  
 をかたむけこれ迄なりやこれ迄とて。松藏親子とも  
 わかに。一禮あれば龍女はなをもなごりのたもと。涙

ながらにひきはへてさらば。さらばのこゑもしらしらみなどこにあるかとすればたちまちゆめはさめ行ふしぎさよ。

○深草少將みち行

地さればにや少將は。も、夜かよへといふ月のかきにふるゆきつもるゆき。こひのおもにとうちかたげ。なみだのつら、とけやらぬ下ユキのこゝろをうき世がは。地わたりかねたるすながはや。長地こぼたのさとに馬はあれどきみをおもへばかちはだし。ゆきてはかへりかへりては。ゆきにふられてゆくもたれゆゑぞや。いやふられてといふこゝろきみのわるいといひなをし。おなじ事ならつものゆきしはのはしがきも、夜までと通ひしに九十九夜にもなりたりけり。地うれしのこよひや持合アッまだはてしなのあすのよや。あけまつとりのなかぞらはツナギアッまだきにないてやまかづらあめの月かきの月のきにもる月しぐれする地をひきかへしからかさをこれもくするまのわれからとくるくく。ハシクくるくくくるくく。くくるとふりかたげエ、たつかひもなきかみやしろ。地みたらし川にせしみそぎ神はうけ

すやおもふらんア、しやうたいなやわけもなや。身はいたつきのありながらも、夜のかすをたがへじと。ゆきまよふ身は川千鳥ないてたつこそあはれなり。おりふしはげしき比叡おろし。かさをとられじはなさじものと。かさとしぐれともみあひてナドッおのとはいはじきみゆへと。ひとりごちしてゆくほどに。小町御前のすみ給ふくるまのものとぞ、着給ふ。

○おこよ浮名野毛氈

常盤津文字太夫直傳

二上り一とすじに。思ひをふ夜はふへの露。合ぬれてかわいてかわいてぬれていとしまこふさをしかのこゑをちからにたどりゆくギヤウネアッ「ちざりもながきゆめふかみ。明けぬさきにと内を出。カハッそらねをはかる。とりのねも小ギンナクワが かよいちのせきもりは。よいくごににいねもせず。さがしき親のきをになひ。あきのふ物の八百萬。合とくいなかまもせりなづなよめなといふてむつまじき。なかはさけじともつれやい。むすべるとをときよせて。はやハツ七ツ半兵衛は。おちよをつれてみちいそぎしにゆく身ぞあはれなる。ちしをにそみし毛氈のせめて。ふたりがはちすばの合うてなとかたにうちかけ

て。これもおもへば恩深き御主のかたみめいとまで。御供申す心ぞとはだ身はなさぬひとこしも。よしある人のふうのまゝ。さしてゆくゑはしらつゆと。きへしあとにて世の人の。ヒロロウ。は。さ。に。の。り。の。おしへをば。くちにとなへてめになみだ玉きるじゆすのかすくゝの煩惱菩提と。きく時は。あの上ばかりをたのしみに行んとすれど。あきりにむせぶなげきにせきあへず。此間 菊之丞 アレくみさんせあの二階こゝはまあどこぞいな。七三郎さればのふヲ、かうづしんちじやはいこの浄瑠璃ア、いかさま見れば大さわざくつたくなしのはらつみなるはく。さわぎをるは。あの面白さをみるにつけ合ごぞのはつあき七夕にともをあつめて井筒屋の合一ざあそびをおもひだす合それのもりのむらがらす。かはひくゝのこゑ聞ばちゝは、の事思ひ出しなみだにみちも見へわかす。いまはむかしになるさわのきしをはなるるねなしぐさ。ふたりがいのち水のあは。もろくもきゆるかなしやと。なみだにくれてなげきしが。いとしやそなたもうきくらう。こよひ死のふとおもやるもみなわが身ゆへ戀ぢゆへ。うれしいぞやと計り

にて。落つる涙はばらくとそでとたもとのふちとふちふかきおふせの睦言をあだになさじとすがりつき。じつと。しめたるいわた帯地、わたしがおなかもゆび折ればはや。五ツ月のやゝもあり此世の縁はうすもみち。かわいや合くふびんやしでの山さいのかはらのみどり子が一重つんでは父のため二重つんでは母とよぶそれも。みちづれ親子づれ。すぐにぐせいのきしのふねともにむらの。どてみちを。あこがれいづるほたる火の秋のひかりのよはくくと。ふけゆく月も合かたむきてにしに「かげさへ風の聲。此間 七三郎 アレ聞きやつたかあのこゑは親父様。ありがたやおいの身のふたりがあとをなきたひ。たづね給ふはをいとしや。とても此身は義理といひ。死なねばならぬうきいのちそなたはこれよりたちかへり浄瑠璃、せめて二人の親達へ恩を報じてたもらぬか。たのむと計りいひさして顔をたもとにすりよする。おちよは。なみだしやくりあげ合をればまことか眞實かふたり死のうとかくごしてこゝまで。きたもうそかいな地あいそめし日をわすれてかもとがをくにてあさまいり「いつわりのなき神無月しぐれをし

のぐのきづたひ。わたしがかさのあましくお前の  
そでへ合かゝりしが。長地ぬれのはじめの縁のはし  
互に思ひ思はれつ。ふかいちぎりをなさげなや。さ  
がなき人にへだてられ。親のお爲と世の義理に。夫婦  
が中も違江合しはしわかれていたときも。かたとき  
わするゝこともなく。なつかしうてあいとふて。かん  
ざしぬいて。た。み。さん丁どあへばきもいさみ。  
あはねばむりに腹も立ち。立つたり居たりひとりご  
と。これほどこがれていた。合わたしが心が合お前に  
といたそのしるし。かたい思ひのかたまりはこれ  
此顔によふ似た子を。うんでながめてわしひとりそ  
もやそもゝ居らりやうか。いきてこの世のおもひ  
よりお前と共に死ぬかくご。むごたらしうもふりす  
て。お前ひとりが死なふとはどれ。どのくちで此  
くちでかよふ言はんしたでかさんした。そりや。あん  
まりじやどふよくなとたゝいつないつ聲をあげ。う  
らみ涙は。そで。くもりそらに知らぬぬあめのうみし  
ほの。みちくる如くなり。地オ、今の上ふに言ふたの  
は。あとにも心ひかざるゝそなたもいとしいあまり  
ぞやそふ思ひきりやる心根をなんの見捨てゝ行くべ

きと。互に手にてをとりかはしあゆむもうつゝ。た  
どるも夢さめてうき世の「ひまをあけしのゝめつぐ  
るあさあらしはらゝ。合なみだよこざるくもふき  
まどわるゝ戀と義理きつてもきれぬ無常のきづなむ  
すんで。のりにすくいとるくわんじん所にぞつきに  
ける。

○惠方長者

善けふをはるべの道のべやゝ。心のまゝにあゆま  
んハイハイ詞罷出たるものは初春の笑男と申すも  
のにて候。親有妻有兄弟有子供もあまたかねも有。お  
江戸はひろきわが宿の先當年の年徳は巳午にあたら  
せ給ふゆへあきの方への御神へ参らばやとぞんじ  
候。ッタヒたれをかもしる人にせん高砂の松と竹との  
中も地カ、リよく一夜あけてはわかゝと。初あき人  
のこゑさへて福神雙六たから舟一枚繪草紙とし八  
卦。長地わか水あめののにごりなくすむやはこのこつく  
手まり。あふぎゝも末ひろくあめのきんちやくふ  
くふくと春ふくろとて皆人の心いわ井によりいと  
引てよろこぶくわしこんぶ。せつたからかさならぞ  
うりくしやかうがいたゝうがみ油元結京やうじ。是

は大阪のこらいくわう。からくるいとのしほらしく  
こぶないよこのぶりしやりとすねつ。あまへてわら  
んべの。し出し手車花ぐるま。やんまるとんぼうてふて  
ふの葉の葉にとまれ。柳やがふしめいぶつと。初お  
はぐろの口ふれてさゝやがべにのいろもよく天もゑ  
いたりいかのぼり。五色の糸のつゝみ物大小すり物  
たばこ入箱入ちやわんふか草の中にめでたき福壽そ  
う。春の物とてかどゝを鳥追うたのおもしろやや  
んらめでたややんらたのしや合せんぢよまん女の鳥  
追が参りて合福のかみをいわるこめしらげもよねや  
ろ。よねやろがせうには福と徳とを参りて宿からう  
と申すやどかり候はゞ殿もさかへ候を我身もさかへ  
候をさかへ久しき君が代に。富貴をいのるもろ人の。  
こんていりうぶの大黒舞。うちでのあふぎ拍子よく  
四海の波もしづかにて國もうごかぬしるしとて。け  
ふ初見世の吉原や君のさかりの江戸町に二上りひく  
は二丁目のよいのくせつはすみ町やたぐいあらざる  
新町的一座にぎわふ京町や情に名をやあげやまちは  
や大じんの御入と。たいこまつしやはけんむすびし  
しを始めてかぐらをそうしみきをすゝめて取々にゑ

ほう参りの。みやげの大判小判色もよき。花のはつ  
春初小袖初元ゆいもおいたるも若きも心一すちに福  
徳壽命長久とちかいをたてゝ此神へおしなべあゆみ  
をはこびけり。

○ふた子すみだ川

誦はるもくる。そらもかすみのたまのいと。みだれて  
なをやながすらん。調ナフみち行人に物とはふ。梅若  
といふ十二三なをさな子にもしいはなされぬかヤ  
ア何あひも見もせぬとや。地ちゝのむつばめなつた  
けて。母戀しとはしたはずや引。ア、なげくまじ思  
ふまじ。思ふもよわる玉かづら風に。ちりゝさゝ  
のはに。地しできりかけて神よゝ。あはせてたべと  
くるひ出。九重かすむふる里をあとに見すてゝ。大井  
川。地子ゆゑのなみにうきしづむ。おやのりんゑのあ  
しよはぐるま。ひく手にもつれてふぢ枝や。あとに  
心を。おかべのしゆくにはしりつくゝ。手まりこ  
に。ゆ井かればらや田子のうみ。そこはかとなく見渡  
せば。はこねのふたのふじの山ヒロヒた。づ。ぬる我子  
にあふいとなはいつはりのかけごかと。天にあこ  
がれ地にふして。なげゝば見聞。涙の玉わげさに露を



○高野山女人だう心中道行

二上り歌「女きらやるかうやのく山へ合ノ手なせにめ  
松は合ノ手はゆるぞや合ノ手あきのたおさの。合ノ手な  
みだのあめよ合ノ手ともになみだ合ノ手のかこしみづ。  
地<sup>ナラス</sup>まだささらぎの。やへがすみかくれしのぶによ  
けれども顔がみにくのおぼろ夜や。地ふたつよい事  
あらしふく花のさかりはこよゐかざりと見わたせば  
「つまの野なかのひとつ井ど名は」のちのよのかたみ  
かや「つゐをとされてちござくらわれはお前のまゆ  
がみの「ながきらいせもわれが此なをさぬひたいこ  
のまゝに地「みたり見せたり六道のシテ」つじのちま  
たは多けれどツキはぐれまいぞとゆふづきははやい  
りはてふけわたりこのしたつゆのたまがはを地  
「はつくどくちとくむならば」身にきすつけず死にた  
やと「こぼすなみだはおのづからたがいのくちにい  
りつたふ末期の水となりけらし。「やいばをいそぐわ  
がいのちすゑ短夜の春のしもうらやましやなあした  
まで「きへのこるかとしろたへのさとの「よなべも  
ときすぎてほすやかみ屋の「しゆくはづれ」おぼろに  
見へてはなのあに「みひらきもせぬこゝろからむみ

やうのはしのあぶなさを「あの蛇柳とひとくちにこ  
ころをのまれたどく」と「身はぬけがらの玉の緒は  
きへてたつまのはらくく」落つる涙は百八の鐘  
のひゃきにほのくとしのめちかき山かづら「は  
いまつわれつ手をひかれ「五障の雲にうづもる、女  
人堂にぞつきにけり。

○用明天皇 舟路の道行

地しるべもあらず夢にだに。ろく地をふませ給はね  
ば。しづがわらぐつ召し給ひみけしの御衣も今はは  
や。麻のころもにめしかへられ。とを山ぼこのよす  
がとて御手にふれさせ給ひつゝ。地竹のそのふのす  
るばまで。戀にはぬるゝ玉の袖。ほす日もいつとしら  
なみの。うしほもひける大もつうらにぞ着かせ給  
ひける。折ふしわたり舟のあり。びんせん。こふ  
てめし給ふ。調やがて舟人ともづなといて半町ばか  
りこぎ出す。其時天皇いかにふなをさみづから今はじ  
めて筑紫へ下る者なるが。見へわたりたる名所ども。  
くわしく御物語候へとあれば。舟人承りさすがは郡  
人と打見へて。やさしくも問はせ給ふ物かな。いでい  
でおしへ申せし。まづくあれを御覽せよ。宮御出の

濱ぞがしゆんでのかたは住吉の。地うらはの松に年  
を経て。久しくなりぬさかきばの。さきをみかげの  
もりすぐる。地兵庫の浦にすまのうらと山も。しらぬ  
夕ぐれにくらきやみぢはありとても。あかしの里を  
見渡せば。かすみぞたてる高さごの。松は嵐の音ば  
かり。あれに見へしはあはち島。きりにまじわる鴛鴦  
鳴いそべのかたにあそぶていはおもしろふはおはせ  
ずや。調天皇げにもめづらかに心もはれて候ぞや。ま  
つたこなたに見えたる小舟は故郷のかたにて聞及び  
しあまのをぶねの釣ぶねが。波にゆられてたゞよふ  
うちにかすのうろくす釣つた所かア、いさましやと  
仰らるれば又舟人は如何に旅人御覽せよ。むかふに  
すこし雲かゝり。みゆるは四國さぬきちや。雲井に  
まがふあは山を。かけてこぐ舟とまりのいそべ引づ  
なのうら伊豫の海土佐の大崎なごし山。みな此さき  
にて候ぞや。調時に天皇今行く豊後の國迄は今いく  
ばくの道ならん舟人承り。されば候いまだ七八十里も  
こざ候はんさりながら今にてもおいてだに吹きぬれ  
ば一時がうちに豊後の津に走りつき候と。申す言葉  
のしたよりもそれくじゆんぶうしきりに吹きぬれ

ば。舟人大きにいさみをなし。扱こそおいての來つ  
て候御悦びましませといふしほはよし風はよし。帆  
を引あげてもたすれば舟はみつはの征矢よりも猶は  
やはしりさつゝさつゆけばほどなくつくしぢや。  
豊後の國に入給ふ。十善ていろのれんぼのやみ。何  
と照らさん日のもの。ふかき戀ちのかみ成はと  
かんせぬ者こそなかりけれ。

○千代のわかみどり 松山道行

二上り「たどりゆく。今は心もみだれ候。末の松山思ひ  
のたねよ。いつのころよりあいなれそめてかよふ心  
をかわひと思へさりとほくしるもしらぬもまよひ  
ぬる。色のしよわけの。あちはひはくい覺えたる椀  
久もきやうのたのみのつなきて。心も亂れかせ絲  
のわけていはれぬ。むねの内。松山ならでしる人も泣  
てもりして行さきの物や思ふと人や東寺のばんせう  
の。地かねてかくとはしりながら。思ひがけなきしで  
の旅。ちまたは六つにわかるれど。だき抱へたるふ  
ところの。子は四つづかのよるの雨。泪の雨とも共  
に今宵かざりとしにはちを。地しんさらしな秋の  
月。風に花ちるもみちちるわれも散り行川水に。地う

つす姿のはづかしや。うきな高せにのぼりぶね。二上  
りやのじのや。やのじの丸に。やのじ帆がみゆるナチス  
地引つなたぐる長なわてくるりくるくくくくくと  
させいほうせいとうくと。のぼれば下る車ばし。ま  
はるもん日を。ひとりして。つとめた時はみじくにて  
戀も遊びもわかかりし西はひよくの鳥羽なはて。お  
りる雁をながめやり。詞ア、井筒屋太郎右衛門と  
もいはるゝあげ屋がいたりませぬく大盡の菓子に  
らくがんとは。てもふるいやつでは有ぞもそつとし  
やうはない事の氷もちなとやつてこそおもしろけ  
れ。思ひ出せばそれはくくく。雪をもち花。柳にや  
りしも過しはる。わか水あげの女郎まで。けふからこ  
としのかず耕のまめ板一步花の露。うつてまはりし  
鬼はそと福はうち。福は内へと引いきつよきゆみは  
じめ。是わけもない何言はんすあれく子供が笑ふ  
ぞへア、心の子供やな。何ぬしがうつないがお  
かしいとや心あらん人々は。おいとしやとなど。詞を  
かけてくだんせぬ。今は寝れて袖ぬらす。泪のしぐれ  
染かねた。松山じやが見忘れてかわしや松山じやと  
すがり付なみだまばゆき夕づくひ竹田の里のしの竹

を杖につくく身の上を思ひ出しては又狂亂の心付  
てこそ替りけしからず。詞のふ物たべのうヤアなん  
にもないエ、さかいすちもおれがゐた時分とはきつ  
いさびやうじヤア、うき世じやなアはつちくア、  
むかしじやな。はつちくこりやくく五百め入  
てあげやでならふなげぶしをたつた一文でうたふて  
さかす扱も命は有物か残らずつかひはたしに。一文  
さへくれかぬる。もん一家に見限られ思ひかさな  
りふりつもの。雪はいなかのぼせつぞとア、なげく  
まい雪じやあわじやうつじや皆々夢じや。是皆人  
間世界の有様。さすれば風はれゆくしが山のむかし  
のさかり引かへて。今はうきよにあきはつる此身を  
すて、ながき世の未來はひとつうてなぞと胸を定め  
てほんしんのやみをてらすやともしびのかけをもと  
めてやうくとふしみに行かれたどりける。

○若楓口舌野帯

「うき時のねすがたみればおきの石。かわくもなみの  
くせ付て戀のそめぎぬひとしほにやしをはべにのう  
らわかき。しほのみちひもちしご時もみぢにうすき  
おぼろかけうき名たつたの川水に。たかをがすがた

ながれの身うつ、なのきみが有様やマキいとせめて  
戀しき時は鳥羽玉の夜の衣をかへしてぞきるシテ、仲  
秋はふつと目をさましハア、今の歌はまさしく太夫  
が聲もし夢ではないかとあたりを見まはしヤア太夫  
かヤレく久しやく變ることなかりしかとその  
まゝそばへ立寄りしがヤア、がつてんの行かぬ此帯  
には封印付けてくるわへ預けおきたるにその帯の封印  
がとけたゆへエ、ことわりいひに來りしな其帯の封  
印はたがといたぞ「アイ此帯はとくとかれぬなぞ  
のおび。ねたふりするも下心水のうはきをしんじつ  
に泣てみせばのふうぞくもかたい言葉をとくなみ  
だ。ひざにとくくこけしみづ。しばしなじんて中  
たゆる。こゝがつとめのうその山のぼればおろすか  
みおろし。きせうのはちもはづかしの。もりのこがら  
す血になけば。だんのつゝじのだんく。しれる  
いつわりそれぞとはしらすにうらみくすのはや「ア  
アイヤくなんぼそのやうにいやつてもあまたの客  
の事なれば其内にはとつくりと帯ひもといてねたも  
あろうがや「せいもんたて、聞しても。よちやまこ  
とにさんすまいしよてにおまへとねた時に未來かけ

ての約束は。ちごくのそこへとゆびとゆびむすんだ  
帯を川ほどにながしてしもふてよい物か。わたしが  
心の下紐は岩より合石よりかたいとは。日の本の神  
さんがみぬいていさんすそのうへに。まもり本尊の  
觀世音大悲大慈のおまへより。ほかになんのわけも  
ないそんなら心もはれくくと。はれやくたいもない  
神のかみこそしらめ人のくち戸がたてられぬねやの  
内。すしいわたしがむねの火のきへぬがふじのゆ  
きと成り。つもるはなしはふみ月の。ほしとほしと  
のあまの川。「くせつのあめがせとなりて。あふせを  
こゆるとしのせは。よるとひるとのせきの戸を。とり  
にせかれておきふしの顔が見たさきたものを。合  
あれ。しのゝめのよこ雲にはなのあらしや。さそふ  
らん。「しやうたいなのとりなりと。「えもんなをし  
て手をとりにうらやまぶきのふきかへすこづ合  
まにそへてはなのゑだ。くしもさすがに合おじかな  
く。相の山野邊よりやまにかゑろとの。こゑもさらば  
のつりあい。つい入相があげのかね。おなじかね  
のねつくくくとこの世のいのちふたつき。身にい  
つはりはないものをほんのをとことおもひきや。か



た身にそでをとりはかほしおもふねやもる月かげの水にうつればちらり合ちらりと。手にもとられず夢かとぞ。春のくもまもいな妻にシテ見えずラキかくれつシテはいきのラキよるの事とふほととぎすシテ聞くやすがたはそれそこにラキあなたシテこなたのラキこすへよりこぼすは花の卵の花の。かきね合くりにたちがくれうつとみしやおもかげの。しばしまくらにみだれがみ。

○やをやお七みち行

本調子 歌またるゝとまつ身になるなむしのころ。われほどつらいものはなしあとにのこりてゆく水の。地こひにしやうはさしあひと。しらであふよのかすつもり。へだゝるなかのかなしさは。こひちのやみのくらがりにわがふり袖のひはがのこ地よしなき事をしひだして。親のなげきは。いかばかりはひまとはるゝつたかづら地なはめくはくれなるのなみだぞ落ちてつかみぞめ。こがれあこがれひかれゆく。ぐんじゆの貴賤こかしこ見つけくに見る人も長地袖をしぼるややなぎはら野のつくくし。こひにへだてはなきものを。わらははわらびせひもなしなめ

○名残の橋づくし

宮古路豊後掾

すみさなり心から人のくちのはつるたでに。地かゝるうき身はゆめなれや。竹の子ゆへにまよふ親。みやうがもしらす思知らすいかにわかめといへばとて。きまゝにこゝろもちなして。こゝろのそのあくしやうは神も佛もしらまゆみ。地みつばよつばのころよりも。あきのこのみをまつやうに。よめがはぎをも見たいとははぎもあらはにみだのさう。みだれしかみも。みだれこゝろもいとねど。われはつまこふのべのきじ思ひをくらぶふところのうちよりも。ふりそでにたまるなみだぞあはれなり。地ま一度あはせてくだされといくらの願をかけたやら浅草の観音へ。かちやはだしのだい参りみづなをあびてかんとんに。つらゝのつるぎ身をおす。これぞつるぎのやまたごやいまのむまは火のくるま。くちとるまごはかしやくのむちををつ立。廻りてあつき日に。やきつけらるゝ身のはてはすゞの森にぞつきにけり。

さだまりし。地しやかの教も有ことか見たし浮世の因果經。あすは世上の言の葉に。紙屋治兵衛が心中と。あた名ちり行さくら木に。地ねほりはほりをるざうしの板する紙の其中に。有共しらの死がみにさそはれ行もしやうばいに。うすきみの紙から紙は。長地今ぞしやうじのつぎめよりはなれなくとくわんねんし。とすれば心。引かされて。あゆみなやむぞ道理なり。平家カ、リころしも小はる十五夜の月にも見えぬ身の上は。地今をく霜はあすきゆる。ウレ地はかなきたとへそれよりも。先へきへ行ねやの内。いとしかはひとしめてねしそなたもころし我も死ぬラキ。十九とシテ。廿八年の二人けふのこよひを限りにてふたり命のすて所。地ちいとばとの末迄も。長地まめでそはんとちぎりしに丸三年もなまひで此さいなんに大江橋シテあれみやなには小橋から舟入橋のはまづたひ。是迄くればくる程はめいどの道が近付となげけば。ラキ女もすがり寄り。もふ此道がめいどかで見かはず顔も二人みへぬ程おつる涙に堀川の橋も水にやひたすらん。中地北へあゆめば我宿を。一日に見るも見返らす子供が行衛女房の哀を胸にをし包。

宮古路月下の梅上卷終

南へわたるはし柱。かすも限らぬ家々をいかに名付て八軒や。誰と伏見の下りぶねつかぬ内にと道いそぐ。此世を捨て行身には。聞も恐ろし天満橋。シテ淀とやまとのふた川をラキ。一つ流の大川や二人水と魚とは連れて行我も小春と二人づれ一又の三瀬川地手向の水に請たやな此世でこそはそはすとも末來は言に及ずシテ。こんどの合ラキ。二人づつとこんどの先の世迄もふうふぞや。地あれ寺々のかねの聲かふくとしていつ迄か迎もなからんはてぬ身を最期りませてなむあみじまの大長寺すくひとらせたび給へと。藪のそともをすりぬけて。戀にせかれし身のはては爰ぞふうふのさいごばと樋の上にこそ着にけり。

宮古路月下の梅下巻

○難波野女舞

ウタヒ名にしおふなにはのうらのはまかせにもまれ  
 てそだつあしの葉をいで／＼かりてかりてまいらせ  
 ん引ウタガヤリげにやうたにもなにはづにさくやこの  
 はなふゆごもり。ハル地いまをはるべとにほひしもあ  
 しのはぐさのつゆのたま心をみかくたねならばひと  
 に見せばやつの圃の長地ガリながらわたりのはるの  
 けしきふねこざわたるあま小舟中地カ、ルかたはのあ  
 しにさをさして。なみにゆるるゝふせいとは。大宮人  
 も詠じけん菊には霜のおきなぐさ。カ、リ地からよも  
 ぎとはたがいし。あきのすゝきのほにいでてをば  
 なといふもことはりや。ひとはともいへわがために。  
 この。みなそこは父のさと。ゆきゝの人のあしの葉  
 にかゝりたまふはいとしやとおもはずはしに立より  
 しが。牛太夫カ、リおもしろの水のながれやふでにか  
 くともつきすまじホウカツツひがしには。やはた山崎  
 ながらづつみをまはらばまはれ。水ぐるまの輪の如

く。かは水はあしにもまるゝふくらすゞめが。ばつ  
 とたつみのさとよりもふねにつれだついでそちどりは  
 んま千鳥のとも呼ぶこゑは。ちりやちり／＼ちりち  
 りやちり／＼とちりとぶところを合さいてとつたは  
 あれ／＼合これ／＼合このさとのたみのゝしまにに  
 くからでにくむは橋のわたしぞや。みつのはまべに  
 立つけぶり。つりするあまのいざり火か。お手。うち  
 ちがふたまくらにこゝろも。よしやあし引のやまぢ  
 はとをくうみちかくあれすみよしのうらぞかし。地  
 つのくにのなにはのはるは夢なれや。あしの枯葉に  
 かせふせぐにほひをこせよ梅の花がさぬふてふとり  
 のつばさには。かさゝぎもありあけの。つきのおがさ  
 にそでさすはあまつをとめのきぬがさやウタヒそれ  
 はをとめ「これはまた。三下りなにはめの／＼かづく  
 そでがさひぢがさのあめのあしべもみだるゝ片男波  
 あなたへざらりこなたへざらりざらり／＼さら／＼  
 さら／＼とかせのあげたるふるすだれつれ／＼もな  
 きこゝろおもしろや。萩の上風水にさかだちさはさ  
 は合さは／＼さはとさはのあしなびくくさ木もおの  
 づからきみの威勢におそはれてみなかさゝぎのはね

あはせなにはのしづがひとふしも「かさねかさぬる  
 御代の春ことぶきいはふまひのそであらおめでたや  
 めでたやとうたひかなでてまひおさむ。

○なり平うた念佛道行

はぎの露。地おちうどの身となり平は。エイカンアツ  
 みの衣になげづきん。地見る目忍べは日ぐらしや。人  
 をすゝめの歌ねぶつ修行の僧に身をやつし。ふせう  
 をかたに打かけて。地しんくのふきのかねてより。し  
 らぬひやうしはうつゝなや。地もつたいなくも天皇  
 を。施物のはこのかた／＼に。三種のじんぎをかく  
 し入。はんにや五郎もほうかぶりにな。ひし棒のおれ  
 それも。地御めんをうけてへだてなく。まぎれ出るこ  
 そいたはしき地都に残す初冠八郎兵衛アツ見ればこの  
 まの月びたひひそかに。ゐでの玉水の。数は一イニッ  
 みかのはらわきてながるゝいづみかは。衣かせ山か  
 りそのの。たびと思へど君ませば。地人の忍ぶのしづ  
 のおの。あせに草かる人かげに。なり平かねの拍子  
 とり。歌念佛さる。間。つし王丸あんじゆ姫もろ共丹後  
 の國ゆらのみなと山椒太夫にかひとられ。地山と濱  
 へぞ出らるゝ。詞あねはおのへを見やりつゝ。北山あ

らしのはげしくてさぞ寒からふかはいやと。我身よ  
 りなを弟の。身の上思ふはらからの心の。うちこそ。  
 あはれなる引。詞今はあたりにもなし。はこの内さ  
 ぞやお氣のつまらんと。ふたをひらけば天皇は。ふ  
 きつたへたる神風やみもすそ。がはのにござる世に住  
 むかひもなき身なれども。よしや世の中おさまらば。  
 地今の情はわすれじと。いともしこきみことより。  
 なり平草にひれふして。詞河内の國たかやす左衛門  
 が娘いこま姫。某に和歌のしなんをうけ。ふみにて  
 かたらふ契りも有り。頼むにそりやく候まじ。かしこ  
 に忍ばせ奉らん。かゝらざりせばいかにして。君が。  
 見るべき名所や。叡慮をくるしめ給ふなど。いひも  
 果ぬにむら鳥の。むら／＼ばつと羽をのす其音を。人  
 かとあはて天皇を。箱にあたふた引きしめて。歌念佛  
 詞いかにつし王。そなたおち行物ならば。追手かゝら  
 んは治定なり。然らばちかき寺を頼め。出家は五戒  
 をたもつ故其身はてゝも出さぬぞ。サア／＼いそげ  
 こつちもいそげ仲則と。むかし語を身の上に。はこそ  
 かたげてとつばかはと。おき立つ野路の。「袖の露。草  
 のもじずり忍ぶ身は。人めおそろし鬼とり山。くら

がり峠打過て。こゝは御燈の明らかに名も高やすの  
神がきにしばらく。つかれをはらさるゝ。

○くれないの満小袖 宮古路正本

ゆめうつうつほを出てふたりづれ。地かたにかけ  
たる毛氈をひしきものよとしやくり上ぐなみだぞ落  
ちてほうづきの玉をつらぬくちのなみだ。地なごり  
もなつのうす衣。長地うぐひすのすにそだてられ子で  
子にならぬほとゝぎす。ハル地まことめいどのとりな  
らば地獄の有さまかたれきこ。きく共いかでかはら  
めやこよひ。かぎりのうきいのちかくごきはめし足  
もとも。かげほのぐらきうすぐもり。卯月五日のよ  
ひ月も。此世をさるといひかはし一所とちぎるくさ  
むすび。地つむらのとてをあたし野とちしごくるく  
るくる數珠の。煩惱菩提と聞くときは。なを後の世  
のたのしみと。いだきしめつゝ行道の。地すがたをか  
くすあまもよふ。ほたるかすかに見上ればげらくの  
ほしのかげぼしのなきはふたりがたまのをよむすび  
とめなとつまの手をとりあれくくはぐんのほし  
のけんさきに。かゝるうき身はあかつきを一足づゝ  
にすばるぼしあすわれくが身の上を群衆の。人の

見つぼしや。くようのほしをねがふぞや。あらあさ  
ましの身のはてやさぞ後の世のくるしみを思ひまは  
せば此世から。三途の川のたつるばのかしやくに  
あへどしでの山。つるぎの山も是。此やうに。此如く。  
手をひかふぞやひかれふと。手に手を取りてなく涙。  
こすゑにしらぬ松の露おちてせうろとなりやせん。  
こゝぞ一ねん十ぐわんじねびくわんをんのちからに  
て。たとへ心はみだるともりけんそくせのおんちか  
ひ。こゝろやすくごくらくへいたりいたらんこな  
たへと。たがひにいさめすゝむ身のくわんじん所に  
ぞつきにけり。

○徳兵衛おはつ心中道行

半太夫アシこゝるなかは。すみとすゞりとふたおもひふ  
でのいのち毛こよひかぎり。われは此世をすてられ  
し。地此身のなごり世もなごり。死に、行く身をたと  
ふれば。あだしがはらの道のしも。一あしづゝにき  
えて行く。ゆめのゆめこそあはれなり。長地あれかぞ  
ふればあかつきの七つるときが六つなりて。残る一  
つが今生の。かねのひゃきの聞おさめ。じやくめつ  
いらくとひやくなり。かねばかりかはくさも木も。そ

らもなごりと見あぐればくも生玉アシこゝるなき水の  
おと。ほととはさるてかげうつる。ほしのいもせの  
あまのがは。梅田のはしをかさゝぎの。はしとちぎ  
りていつ迄も我とそなたはめをとほし。かならずそ  
ふとすがりより。二人が中なるなみだ川のみかさ  
もまさるべし。地むかひの二階は何屋ともおほつか  
なさけさい中にて。まだぬぬ火かげうたふ聲どうし  
た事のゑんじややら忘るゝひまもないわいな。それ  
にふりすてゆかふとは。やりやしませぬぞ手につか  
て。ころしておいてゆかんせな。はなちはやらじと  
なきければ。歌もおほきにあのをたを。うたふはたぞ  
や聞くは我。すぎにし人も我々も。一つ思ひとすが  
りつき聲もおします泣きあたり。いつはさもあれ此  
夜半は。せめてしばしはながからで。心もなつの夜の  
ならひ。命おはゆるとりのこゑあけなばうしや天神  
の。もりで死なんと手を引て梅田づゝみの「さよがら  
す義太夫アシあすは我身もゑじきぞや。地まことに今  
年はこなさんも廿五さいのやくの年。わしも十九の  
やくどしとて。思ひあふたるやくだたり。縁のふか  
さのしるしかや。かみやほとけにかけおきし。現世の

願を今こゝで未来へ回向し。後の世もなをしも一つ  
はちすぞや。つまぐるじゆすの百人になみだの玉の  
敷そひて。つきせぬあはれつきるみち。こゝろもそら  
もかけくらく。かせしんくたるそねぎきのもりに  
ぞ。たどりつきにける。

○おかん戀路の濡草鞋 宮古路豊後掾直傳

「人の心は。花ぞめの。まよひやすきは色の道。忍び。  
忍びにむすびにし。地戀といふ字は言の葉を。いとで  
つないでした。心したゆく水のしつぽりと思ひあふ  
たるめうとづれ。そでから袖に手を入れてじつとしめ  
たる此はだを金にせかれてよの人の。手いけの花と  
ながめしをぬすみ出るは我ながらぬ。れてつつかむ  
あわた口。あはれ思ひのなき身ならふたりかうして  
行道のさぞおもしろふ有べきに。いつをけふとて一  
日も心のびし事もなく。たのしみもなきうさちぎ  
りかくもむすぶの神様の。中地カ、いはいおせわも  
今更に。りよぐわいながらもうらめしや。あれく  
さきへ行しゆは半九郎アシよめごまじりにいそくと  
心はるめくいせ参り。めにたつふうや京染の。ゆか  
たの模様。柳にまりけあげの水にすそをぬらしたわ

れくは涙に袖をぬらしゆく。すへのとまりもしらすげの笠さへ持たぬたびやつれ。きのふめみえに出し時。ゆふたまなる髪つきや。つとのをくれのばらくふるはあられか雪のそら。あたゝかならでひへ渡るうばがふところなつかしく。故郷の方をながめやり。まことにわたしも。こなさんも。サイモンあとは親のかれのこる老木の松をふりすて、思ひをかけるかなしやと。なみだにくもる日の岡のとうげをこへてこれこそは。地あめのみかどの御べうのと。はるかにおがむかみがきやくさかるとのわらんべが。手なれてつかふかまひげの。やつこぢや屋とて名にしあふ。合ッちやたて女子のあかまへだれに花の出花とそで引てくむやひさくのゑがほになづみ行き來の人のきりになき馬を通しのかごのもの色にあふては玉しるもぬけまいりやらひきやくやら。西國巡禮むねに木札のたゆるまも。たゆるまもなき旅人と。ともにたちよりこしうちかけ。しばしはいきをつぎさせる。たばこはうさをわすれぐさ詞ア、忘られぬはわれ故にそなたの親に。なんざかけかうつれ立て出てからが。添ひとおさふやら死のをやら。し

れぬ此身のわきまへなくはるくつれくだりなほもうきめにあふのしゆびどうであらうもしらゆきのつもらぬさきにかごかりて。これから在所へ返さうと。思ふてゐるがどうしやる。ウレヒいとしほれ泣くこそを此雪に。つれて下るがかなしいとしほれ泣くこそふびんなれ。調おかん涙にくれながらエ、きよくもない事いふて下さんす。たつたひとりのとつ様になんぎの上に歎きかけ。ぬけて出たるちうくのおもき不孝のつみとがに。かへておまへにそひたふて雪やあらしをしのぎ來た。私を爰からかへさふとはあまりにむごいお心とすがり付てぞ泣にけり。ハテかういふもいとさがあまりの雪のふかいから。わるふ思ふてたもんなと。互にぬらす雨そでの。涙に。とこもうきぬべし。茶みせを出て行ききの旅は道づれ。世は情しらぬ人にも。あはれみのかさをかるたや二三四のみやがはら十せんじ。末はいつ迄里の名をとへばふたりをおいわけと聞に付てもおそろしく足をはやめてはしり井の水はすめども我々はすむかたしれぬ行きさきも物うき旅にあふ坂の上り下りの目を忍ぶせきの明神。ふしおがみやがてよいよに大津ぞ

と聞て二人がいきくと。いさむ心は花に水。打出のはまの夕ぐれに舟待。してぞ休みけれ。

○笠物狂さいごの段

ウレヒ地はやさきばらひのけいごの者山賊夜盗のその如く。きびしくかため引出す。いきての思ひ死するつみもと一すぢのいましめの。なほめにあひて清十郎ひかれ「出るぞむざんなる。調やらひの内に土壇をかまへ高手をゆるしはがひじめ北むきにひつすゆるは目もあてられぬふせいなり。お夏はなみだに目もあかれず聲もたゝねどのびあがり。なふこゝにゐる是こゝに。顔をむけて下されとよははる聲も往來の。群衆のなげき念佛にまぎれて。聞へぬあはれやなふびんやな清十郎。顔もかたちもやせおとろへ最期極まる心にも。後生ぼだいの思はれずお夏がなげきふるさとの。親兄弟はいかゞぞとおなつに知らせ今一と目。せめておもかげばかりなりと姫路のかたを見まはして。目と目をふつと見合せておなつはわつとなき出す。清十郎は聲立てず臆より出るうき涙。かたなはよりまづ先に思ひに命もたへぬべし。調清十郎なみだをおさへ。何れも有がたき御回向千金萬

金より一べんのゑかうにまさる寶なしとぞ承はる。最期の悦び何事か是にしかんさりながら。心にかゝる此高札。主人の金七十兩盗むとは身に取て覺なし。相手勘十郎を切殺さんと思ひしにあやまつて人たがへ。のがるゝも業悦びならず殺さるゝも業なげきにあらす。それがし生年二十五さい。十一さいの春より奉公して主人のはごくみ情にて。あき人の道一通り。藝能文學のもとすゑ人なみになりたるも皆これお主の御高恩。あけくれ主のおしへにまかせ親に孝行主に忠たゞ正直を守つて是。一言もいつはりをいふまじと。毎朝天道氏神をいのりしかども。わかきものゝかなしさはたゞ今非業に死なんとと思ひもよらす。佛とも。法とも一べんの。念佛申せし事もなく今のくやしさ。せんかたなし。調高き山のいたゞきに一杯の水をもとむるが如しとは此身の上知られたり。此ぐんじゆの中にこそ清十郎が一命にかはらんとなげく人も有べきがかならずくひが事なり。ながらへて追善し菩提をとぶらふせんこんこそ。命をたすけ不老不死のくすりをあたふるよりもうれしきぞや今人々のゑかうを受。佛の御國にいたらん

と。思へば。思へば此世のきづなふつゝりと思ひ切つたぞや。ア、思ひ切つてもきられぬはいとしかはいのたゞひとり。地よし是とも夢のたはぶれ頓生菩提。南無阿彌陀佛といさぎよくは言ひけれども。地お夏がなげき妹のかはれる顔をしりめにつけ。おぼろすわつとなき出せば。お夏をはじめ二人の尼。けいこの上下縁もなき。きせんぐんじゆに至る迄みなく袖をぞしほりける。

○出口柳 かつら男道行

三下りうはべ計は戀しりがほでく合をこの心はもに住む蟲よ。それちんくくくちんちんくくく。ナチヌ地よひにかはせしかねごとを。あたにはせじとしたふ戀。あふ戀待戀忍ぶ戀うらみの戀は程過て。今はわかれの戀風に。うつろいにけり花うらは。かづまときれし二世の縁。つなぎとめんと玉ぼこを。はなれ。ばなれに跡や先。顔と顔とはしんきのたねよねから見まいとうつづけば。あゆむ足さへしどろになりて。すゝみ兼たる道芝の。姿かたちはへたゝりて。事とひかはす事もなく。言かけられぬいもとせの。ふたりがもとはあひばれの。かはらぬ中もめんはらし。と

し月かけてもろ其にはだを放さぬせいしの數々取かはすたびつき合せ。長ふちぎりしかづらぎの。かみはたつたのからくれなる秋のみちと成はていつぞ散なばちりしだい消なばきへね露の身の。置所なき白玉が見すてられたる悲しさと。ふしまろびてぞ泣るたる。花うら涙にくれながら。夫のひざを引よせてそりやマアどふしたおしやんしやふ。しんじつなればむごいぞへ言ふ程わしがぐちなれど。ふとあいかつた間の内。枕ならべてねた時は。わたしが顔にそであて、よい男めと言たれば。おまへもわしがせなたゝき。うそばつかしといはしやんした其一言がしみ付いて。はなれぬぞや。放さぬと勤の内もこなさんを。にくいくはかわいのうらよいやじやいやじやは猶其うらよ。泣ておどすはそれうらのうら客と思ふてあふたのが本つき合のふたりが中。けふは女房と言われるがあすはこなんを主様と。人めかまはずいふのかとたのしむ内に此さいなん。さらいで叶ぬ事ならばなせ其様子を。打明て。わたしが蟲にとつくりと。得心させて下さんせ。歌たとへみ山のおく迄もはなれぬ。わしがむねの内。こつちにしよざい

がない物を。みれんになふてなんとせふ夫にわたしがいちを立て。むりを言ふかといはしやんす。あんまり氣づよいとふよくと恨かこちて泣涙。妻の恨に氣もおくれ道理とも斷とも云ふに。いはでの神ならで。心をたれかしらまゆみ。ひかゆる袂ふりきる袖。むすびとめんひたち帯さなだ。山にぞ着にけり。

○唐崎夜の八けい 半兵衛 心中道行

「心もしづむちしごどき。あめしんくくとふる夜半や。地相合傘のしよんぼりと。つがひはなれぬしらさぎの。下地つばさをすぼめわしのねぐら。とさし足しとびのがれたる心地して。地半兵衛小いなはめうとづれ。ハル地いまはうきよにながらへて。ともにそはれぬ。うき身ぞとくる世たのみに下地むねをすゑかくごはすれどもものいろ。すこくもよるの八つのけい。かねさへつみもざんげには。きゆると聞ばたのもしや。地三井のふるでらあれかとよ。いましぬる身のいままでも。土地たゞおやかたにはりつよきやばせの。わしがきはんをも。地おもひまはせば罪業の。地はかりにかゝるかたいたの。われはちびきの。石山に。あきの月とはいみことば。地おんな心のはかなさは。地

おなじことをばくりかへす。じゆすのたまぼこうとうとと。江戸ッツキヤウ。うつゝなぎさにうつなみも。かた々に。おつるらくがなんも。おつるなみだをあらそあり。身はかわたけのながれとてきやくのかすくいつわりに。きつうのせたのせきしよぞと。セツキヤウ詞つみおそろしくさきの世を。おもひまはせばゆめにさへ。へんじあわづのせいらんと。身にしむ。風のわがおもひ。ひらのぼせつとふりつもり。ノル地つるぎのやまのゆきとけば。さんづの川におちこちの。雨をもよほす山おろしはらり。はらくはらく。合ノ手さらくさつとふき立られてかさをほに。ろくろをくやるあましづく。かゝるふたりが身の行。くものあしさへさだめなく。たましるもぬけからさき

○しのだづま道行

やそうち人のかずならぬ。地もとよりこの身はあさましき。とぎきづめをちからにて。いとゝあらそふくるしみの。おもきがうへのさよごろもつまのねざめもわびしくて。中地おもひのたねとなりやせん。いとこゝろはうばたまの地よるのふしどにをさな子

の。母をしたひて。さこそなげかんとしやと。めにもあまり袖の露。こぼるゝしづくこぼるゝゆんでもめてもさと遠く。地ころしも秋の最中にて。ちぐさにすたくむしのこゑ。かれゝゝになる。さゝめごとさゝにいでそよ。そよゝとかせのおつればをのづから。ひかぬなるこの音たかく粟の小とりの。ばつと立。かがしのゆみは動かねど。もしますらをにてあるやらんと胸とゞろきて足ふるひゆくさき更に見へわかず。たちわづらふぞあはれなる。詞こゝにかり人の懸け置く狐鼠様々にとゝのへかけ置たり。カン詞あらおそろしの人心や野干の性根をたぶらかし。きるにきられすぬけられず。煩惱のきづなをかけたちまち命をとらんと。たくみはこなたに知るものをいや。いやなふいやくゝゝゝゝいざさらば。わが住む方へと立はなれ。ゆきすぎんとはせしかども。さすがにおもひわけがたく。ゆきては歸りかへりては。身にしみわたる夜あらしに野寺のかねのさそひきて月のひかりやみがくらん。しのぶにつらしはづかしとすゝきかるかや分け入てしはらく。やすらひゐたりける。

○曾我駒の涙 付たり新形見送り

ハリマアシむざんなるかな二人のものぬしなきこまの口をとり。ゆかんとすれどさつきやみ。地なみだにくれてみち見へす。地おもひするがのふじのねの。ハル地けふりはそらによこをれて。へだてのくもとなりけり。地裾野の草はつゆふかく。また秋ならぬみちのべにはたるかすかにとびつれて。地身よりおもひのあまりてや。ハル地むしさへむねをこがすらん。いとゝなみだをせきとめてなにとかはすの。なきさけぶ。地出のやかたをわかるらん。ハル地駒も心のあればげに。北風にいはへ行。げに心なきちく類もなるればしたふならひあり。ましてやいはん我々は。ヒロヒか。た見。にかげのそふごとく。あくれば鬼王くるればまた團三郎とめされしに。こよひはなれてあすよりは。イロ地すけなりとも時むねともたれをかさして申べき。同じうき世に生るゝとも。曾我の祐成時致のそののばらにてなかりせばかほどにものをばおもふまひ。地われらばかりと思へども。ハル地むかしをしたひきくときは。長地悉達太子は十九にて王宮をいでたまひ。だんどくせんのはうれいあらゝ仙人を師とたの

み。御出家なさせ給ひし時。玉のかぶりに石の帯御衣。もろ共にぬぎすて金さつとかきそへ。こんでいこま諸共に。王宮にかへし給ひし時。しやのくも君のわかれをかなしみ。地駒も生ある物にこそ。きなる涙をながせしは。人間物をしらぬなり。地それはほとけさいどにて終には廻り逢ひ給ふ。ハル地かの祐成や時致にこよひはなれてあすよりは。またあふべき身ならねば今より後のうさつらさ。何と成なんかなしやとなく。なく曾我へぞ歸らるゝ。

○神田典吉道行吉原いかだ

三下り「鳥を驚といふたが無理か。合雪といふ字を墨でかくは合ふちは瀬となるナンヨエ地瀬はふちとなる世ぞつらや。鳥と鐘とは此神さへも捨まほしさの御言葉。合其戀草の種まきすて、今の世迄もそんつぎて。千種結びの女夫合ひふかい涙のたねならめ。此身になりて白波の弓手に走る二挺立。南は兩國橋の上ゆきかふ人の挑灯は二上り冬の螢か星にはあらで。涙の。合玉の。目ぼしかや。地堤づたひにうさつらさ。女心のくどくゝと。ないて見たり。笑ふて見たり。忘れかねたるつたかづらなど。ウレ地我々が身の

上は神佛。にも人間にも。中地見捨られたる淺ましや下地かねて互に取かはす守袋のせいしの鳥神の咎もいとぬは。ウレ地戀より疑ふ心のくもりそら恐ろしいとまたしては常にそなたの悔草。詞さればくまの、牛王一枚かく度に三つのお山の鳥三羽づゝしぬるとや。すぐに報ふて此様に身中三人きゆる身の是は互の念はらし。年月かけて諸共に。はだをはなさぬ誓紙の數々取かはす度次合せ。上地長ふ契りしかづらぎの神は龍田のから紅あけのもみちと成はてん。月のはれまにすかしてみて。詞わしがお前をうたがふは外の女と見かへまい。此世はおろか。こんどのこんどの。づゝとこんどの其。さきの世迄とくりかへす。おれはそなたに有品の恨の中に取分て。そこのよるべのいもせあり。セッキヤウよそに汲なば日の本の。神のありたけ後の世は佛の罰と書つくす。あら勿體なや此罪をゆるし給へと見送れば。何れ心のすみだ川。うしろにすたく蟲の聲上地馬おふ蟲かしの木やお前はわしを淺草と。常に疑ひ受身のわつて見せたや竹町のわたしが心の深川は。はるかに遠きかねのこゑ。八ッのこく町はれて時雨鳥のないて行。かほに

つばさの霜落る。はらふ涙の袖嵐。ばら／＼／＼／＼  
落かゝる月の光りも物すこく。梅のもみち冬さびて。  
しやらりととける繻子のおび。まはすもりん見見め  
ぐりにやう／＼。たどり／＼つきにける。

○難波津色羽夫重

三下り歌「忍びねの。いつか／＼と思ひしに。むすぶの  
神にかけしちかいかい有て。合今はしん身のめおと  
づれなど我々がその中のわかればてなかなしさに。  
地親のなげきもかへりみず。ましてうき世の取さ  
たの。あるもいとはずうかれ出。夜道にまよふぞは  
かなけれ。中地物思ふ身はわれのみか。長地よにすまば  
扱今ぞとき戀と情のねいり花。友なしぎつねさよが  
らす。無常の野へのうすけふりあすは我身も。何くの  
くも。いつくの浦に身をかくし。ながらへはてんと  
思へ共。あくゑんふかきふたりが中。中地しほめる花  
のいつしかに。ひらきやせんと思ひしにひらくまも  
なくおち行く身人ひとさかり花いつ時。風をまつま  
の合夕嵐。忍びあふ夜のきぬ／＼に別れをまたぬ朝  
がほの命くらぶるわが袖は。泪のみぞれふりつもり  
れんぼのこほりにとぢられて。あゆみもやらす立と

まり。おせん心の泣きにはひとり母の。老の世に。  
いつかおぬしが年明きてせめて一日かた時なりとも  
湯水をとられて往生せんと。是のみひとつの願ひな  
りしにその。かひもなくふりすて、迷ひ出しはせひ  
もなしとおしや。母さまの薬のめよやひとせよ合  
身養生してつとめよと。大事にかけて下されし。その  
からだをば此やうにきまゝに持ちし親のばあはあすは  
在所へ使立。此様子をばきかんしたらしに在るやう  
な泣きの顔。今みるやうで。聞やうで。思ひすごしの  
むねの内。五たいの泪しめよせて手にも袖にもせき  
あまり。みなざるたきに異ならず。八郎兵衛も涙にく  
れ。あんじかはせる互の思ひ。かゝみにうつつす如くな  
り。月はしらみてあか月のあれ明星もさしのぼる。夜  
明けといふて程もなし。ねざめがらすの立さはぎ。と  
がむる犬もけうときはたが身のうへぞわれ／＼が身  
にあやまりのあるなればひるは姿をやつさんと手に  
手をとりてもろ共によれつ合もつれつ行く道の。い  
しになるともいつしよにと。思ふ心をたのみにて。し  
るべのかたへといそぎゆく。

○酒吞童子

順光道行  
四天土道行

一セイ諸「あきかせのおとにたぐるて西かわや。雲もゆ  
くなり。大江山。そも／＼是は源の頼光とは我事な  
り。此たびたんばのくに大江やまのきじんの事。思ふ  
存のあればとて。兜にかわる兜巾をき。よろひにあ  
らぬすかけや。兵具をいれし笈ををひ。さもぎやう  
たいのすがたなれども。その主従は頼光保昌。貞光季  
武綱金時。また夜のうちにありあけの月のみやこを  
たち出で。／＼半太夫が、リ月にわかれて月に又。夕べ  
はやどをかりわらの。こしに表其屋アツ付たるほら  
かひ。中地かねよりさきにこゑたて、いづくの夢もお  
どろかす。百八ほんのふのくもつきて。あさ日や峯に  
かけ出の。行者と人はたうとくも。さながら。あくま  
がうぶくの御門出ぞたのもしき。王城鎮護のやま山  
も。歸るさいつと待顔に木すへ。セイセイ木すへを  
そめなして。地あきに大比叡高尾山。花愛宕とらみ  
しも。我れとがの尾や嵐山ヒロヒ。ほ。はた立て山ひ  
めの。手をりのにきたたれにきよ我にきよたき。とな  
せ川地たぎつ木のはのみなざれば。せに住あゆもう  
づもれて。ハル地もみちすな取りかつら川。ウ地ふもと  
の野へはきりこめて。イロ地よどはよふかき朝霧に。

玉のみづがきあきらけくそれとしらふのはとのみ  
ね。地我源の氏の神。ハル地ながれの末の弓矢取。イロ地  
我魂に神心うつりませとてふしおがみ三寶諸天納受  
と。鳥もとのふる佛法僧。松の尾山をよそに見て。心  
の駒にくつかかけの宿をいさみて引取。すぎゆけば。お  
のが身ながら頼もしく。イロ地たけきすがたやこんが  
う杖に。長地切てつくとてかたぎ原おいもならはぬを  
いの坂。こへてゐくの、道遠き。地み／＼にもふれずめ  
にも見ず。とがれる山は刀して。けづりなせるに異ら  
ず岩切通すふちのおと。ハル地のみもてうがちし如  
くにて。道なき道の名にもにす。大江山のふもとなる  
かのひめ。むろにぞ三重つきたまふ。  
○たなむらや伊入道行 睦月連理 懋  
ウタカ、リゆきとわたとは同じしろさでもその心の  
うらおもて。ゆめにゆめ見る。ゆめ人に。うつ／＼と人  
に。よそながらいとまごひしてふたりづれいろづく  
梅のつばみよりいひかはしたる一筋がこよひ誠とう  
たがひの。はれつ／＼いづるほし月夜。にしへ心の一  
つまつ。さよのねざめをひくらん。地いざゆかふぞ  
とたまほこの。みちのあかりのまばゆさは。かけあ

どうをわれくが死にゆく身のおくり火と。見かへるのきにあはゆきと。きゆるに。まなきあさましや。詞なふおさんそなたをねびきに斯ふつれて出るといふたらうれしかろ。あ、我ゆへに黄泉のたびはみぢづれ世はなさけ。はかなの人のすがたやとなくもなかれぬむねのうち。おさんもともになみだぐみはてこなさんもし故にさかりの花のむめが香をふきちらしたるあさあらし。せめて一日世帯してぬしよ女ぼといひはれ。たとへいかほどあさましきしづの世わたりするとも。いとほぬものを残りおやこれがよみぢのさはりぞととけぬおもひになみだぐむ。ながる、ほしのにしをのそら。こゝろはやみよくらがりの二上りみやにつまきしきたかい道なみ木の松のすゑながきじゆすはたまちるつゆよりもろきいのちのあすしらぬ。すがたをうつせうつせみの身はからごろもぬけがらの。うつなごさのたまよばひとりかはしたるせいしにも。ナナル地名もはやさきへ血にそみて。かふなる縁のはしぼしらかぞへくしほりかはも。あとに見なしてふるわたり。今とみはしにおくしもの。しろきしのめやまかづら。ふき

おろしたる身のかじけ。あすきゆる身をつゆしをも。いたはりよふてもろともになきみたる、ぞあはれなり。

○狩場櫻通翼

とことわに二つまくらはありながら。ひとつはいらぬうきつとめ。地かはすまこともいつはりも。すがたはおなじすがたにてこゝろのそのわけへだて。地おもはぬ人に大磯の。長地かよひ路といふ名をはやされしひとつまへ。ついそのまゝのかへおび。くわの内をうかれ出。合 菊之丞出端 平家ガリ「たづね行衛も白雲の。そらにたへなる羽衣を。たれがかくせし子の行衛。かへせやくかへらぬものは合さのふけふ。やつれみたる、黒かみの。アハッばつとほころぶさくらばな。地ふり。かたげたるとりなりは手に。しなだる、藤澤の。とまりとめてひくたもと。とんとふりきる道づれの。くさかる子供こぞりより。詞ナントまあ。あの女子はおかしいなりじやないかいのふ。さればいのふ。がてんのゆかぬ。サア。問いかけて。なぐさもふ。コレくこゝな女中は。なせにそのよふにくるわしやるぞいのふ。サア。どふぞいのふ。

はやういはしやれいのふ。ヲホ、ハ、ソレ。ソレソレくくアレ。アレくそれこな子ともしう。あとに何もなにかいの。お、かみきつね。あまがべにつけてと、やか、にいふよ。いふたら大事かそつてくりやう。ぼうず。ぼうず。小ぼうず。まめの粉にぬりぼうず。「わらへくハア、なさけなの子ともやナ。なにもみづからが。ものにくるふがおかしいとや。たのまれそだつ思ひ子にたづねあはずにおくべきかいづくにありとも見へわかぬ霞がせきのはるふかく。ふりかへりみるにじの帯。富士のもすそをけだしてあゆむヤ八もんじ。足たか山のなりふりも。草かりわらはのふえのねもひよりくとそらにふく。こゑにあはせてたち舞ふそでの。あふぎによそへおもひ出せば。むかしはん女も子をたづねこゝに。ながる引取三重「隅田川。ハル地あづまの鳥をみやこ鳥それもまよひの子ゆへのやみ。くらき心をふきはらす戸田のわたしの舟よばひ。しばらくやすむみちくさに合二上り「あれ見さいナア。浅間のやまの横ぐも合コノくよこぐも合横雲のナア、上こそわしが親里合コノナコノおやざと合親里がナア、夜の間にか

くなれかし合なれも何ゆへ合ささ合くるふ。はなにあらしのみねの雪ちんりちりくくくくばつと。「追ふは」おはる、友あそび合すそやたもとにとりつき引つきサツサさつとふりきるはなのあめ笠をくするまのくるり。くるく合くるり合く合くるひめぐりて行なやみ。地カ、リあとへさがるを小手まねき。しよていヲつくる川竹の。はれの道中小づまと合ナゲッしのお妻戸のナアそよ合風の合ソレくそこへぬしさんの長地かよひあみ笠大小さいて。しやんとされいにうつくしく身じまいけしやうはなの露。濡てあふせの別路を。おもひいだすもひとむかし。これを旅路のたはむれと。顔もあからむ入日は西に。遠山まゆの月のあみたがひのうさを打拂ふたもとをたたくつゑのふり。こだまは谷に。おとづれて。「よべば」よばる、「追かせ」嵐「さらくさつとこゑもはづるもからす川。舟の行衛も人の身も水にしたがふふかみどり。松井田すきてはるくの。さがしき道も苦にならずヨイ合つれてあゆみも輕井澤のぼり下りに手をそへて。かよはきこしのちりをふく。碓氷峠の木々の葉もちらりちらくちらめくとの合



つばさくらべん羽衣を尋ねて信濃なる淺間のふもとに着にけり。

○淀染三雁金

ッ地しだりをながくしよをおきわかれさそはれ  
いづるたび衣。ハル地つまと。つまとはありながら。ッ  
ッ地心へだつる女夫づれ。男ひとりふたりのそいね  
申地波のまくらをせきのぼる。ハル地よどや浮名も辰  
五郎。君にさゝぐるみだからを。合人目につゝむ笈の  
うち修行の僧と。やつせども中地くろがみそらぬはね  
元結。やなぎの姿もつれいとくるわをぬけて世を忍  
ぶ。あづまもともに笠ふかく戀の合しめをにつなが  
る。お町もおなじ合なりふりや忍びねをなく松蟲  
のちりりん／＼りんとくらぶる。かねのこゑ三下り  
「三がいむえんの人はみな。心の鬼が身をせむる。と  
もに救へや南無阿彌陀佛。南無阿彌陀南無阿彌陀な  
むあみだ／＼。これをちかひの。みちしるべ。中地  
手に手を取りて行雲のそらにたなびく山崎を。なご  
りおしくもみなれざほさす手引手に濡まさる舟もこ  
がる／＼袖も引るゝたもともあなたへもつれこな  
たへしたい地りんきねたみも粹と粹「よるのとの子

と互のあふせきつね川とはかこちぐさだまさんした  
はわしひとり「いやのふわたしもだまされて「涙もつ  
らい男山いつそなんにもいはしみづ「ふかくもくね  
るおみなへしひんとふりきるさよ嵐ふけば合ちらち  
らかほにもみぢのあかねさす入目を渡す。はし柱。す  
そにくりこむ水車。まはれや。／＼こしとこしとの  
かへ帯むすびなをしてきもしめて。道におくれじ  
まけまじととば／＼鳥羽の秋のやまにし合きを地木  
木にそめわけてたすきまへだれしづの女も里にてな  
る。はやりうた「聞に心もいそ／＼と合ッ地おまちは  
つまの手をとりて。アレ／＼見さんせあの野べ  
の。女夫仕事のからざほのいねをうつゝの中よさ。  
下地わたしもお前と約束は伏見の里のかり枕。ふかい  
思ひはこひのやみ。くらいざこねにむすびやい別れ  
しのちのうきくらうあいたい合見度い添い度いと心  
ばかりにあてもなくひとだちおゝき里ならばコレナ  
合もしやは。めぐりあおふかと。つらいつとめの中  
居迄身を遠近の行へなさ。きやくさんがたのきげん  
とりねむたきよはもいねもせず。思ひ過しのおりお  
りはかなしい涙も。おしかくしわざと笑ひにまざら

かし。無理をいはるゝそのときは。心のそこにわき  
かへるさけでながしておすつかへ今でもこれと手を取  
りて。引しめよするふところの内ぞ戀ぢのすみか  
なる。調あづまはむつとせきのぼしふたりが中へや  
ぶれがさ。胸ぐら取てコレ。おかんせ聞ともない。此  
あづまをそばに置き。エ、いやらしいしたゝるい。コ  
レ辰さんハヤメルよもやわすれはさんすまい。新造の  
はつ戀におまへにひよつとあいそめて。朝な夕なの  
思ひぐさほかのつとめもいやになり。ふつてかへせ  
ばおやかたのぶち。ちやうちやくのそのうへに。い  
ひわけあつきやき火箸おどされてもつかれても。い  
としいお前ゆへじやものなんのいたかろくるしかろ  
じつとこらへて。いたわいなまたそのうへにすかぬ  
客。あいもせぬのに身請せふイヤね引にといろ／＼  
のいやな談合聞たゆへ。くるわをぬけてこなさんに  
添いたい計に此うきめ。思ひやつてとすがり付き泣  
て袂をくいしめるはがたぞ戀のごく印なり詞イヤ  
コレハ「めいわく。そふ二人がいやつては大事の旅  
のじやまといひ。大切なみだからを相渡し勘當御め  
んの願がならぬがそれでも二人がせりやうか。た

しまたおれが死のふかさア「それはサア「なんとじ  
やお町はハアイヨ地心付き成程そふでござんする  
コリヤわたしがわるかつたあづまさんこらへてやイ  
ヤ／＼「ほんにわたしもひよつとつりしさがな事  
かんにんさんせと打ゑみて互に心ほどけあふ「合點  
がいたか二人共にでかしやつたそれでこそすいどふ  
し二上り「なんのそなた衆にあいたではなしあきもあ  
かれもせぬ中のふかきゑにしはいとしさの。合まし  
て思ひのあまりでもれてあまりてあまりて／＼もれ  
て合にくふなるのが誠の心ナナル戀と義理との二道  
に二人をつれて四つづかや草のしとねにかりねの床  
伏見の里もアレ／＼／＼合あれに小高きみねの  
寺。おとは嵐の月はてる／＼／＼てる其名には。ひゑい  
ざんしぐるゝそらのはら／＼ばつと露をむすべばな  
がれすむ賀茂の川波引取「うち渡り合關の戸さゝで逢  
坂のしげきゆきもかげよどむ。水の名高き法の庭  
三井のほとりにつきにけれ。  
○萬歳惠實土産  
狂言詞かよふに候者は。年ごとに人のおんがを。いは  
ることぶく萬さいにて候。又當年も相かはらすたの

ふだる方へ参り。壽をなさばやと急ぎ候。ハアいつ見てもくゞにぎくゞしい事。先案内をこふて見ませふモノモくゞドレイ珍しい鶴太夫龜太夫吉例かはらずはやかつたよ。ハ、アわが君にも御待かね。とうくゞ祝義を祝ひめされい。畏つて候。二より徳若に御萬ざいと君も榮えてまします。あら玉の年とる初のおしたには。ありしうかたまんのかぶりをかうべにめし。あやんがたちをばくやのゆづりはを口にくわへ五葉の松を手に持つて。かつかるめたき寶の君のおん殿作りのけつこうにはるりやさんごの引取。木調子「玉の橋渡りそめたる初霞匂ひもてくる梅の風。ウ地そよと軒ばに吹きくれば心うきたつもろしらが。いたやく迄に年をふる松と竹ひとよあけては君がため。御手洗川若水にむすぶ八千代のはじめなる。實ものどけきせいやうの。ひらく明日の御祭りに。神の代よりのためしとてあれ。あれ見給へやわが君へかずの御馬ぞ参りたり三下りめでたやく。春のはじめの春駒などは。夢に見てさへよいとや申すく。大牧御牧の諸國の名馬は藤白荒川櫻木早川れんせんあしげや鶴毛にひばり毛。御庭にづらりと引つれ参れ

ばはいしいどうくゞよりとや申す。くゞ。くつわの音がらんからくゞ合ひづめのひやうしがしつとんしと。とふからくゞからくゞと。うつやたいこのひやうしさへよろづよまでもさかい町やぐらくゞもいさぎよく。翁がひげもわかくゞと。かぶきに子供のしなさだめ。紫ぼうしこま下駄のすがたに。たれもうかれ来て。二階さじきのにぎはひはとるさかづきも手になよくとふらいさんは。三げんおり詰おさへられてはとその酒。のめばかんろも香にみちて遊びは爰も吉原や。二より「三筋の絲のおもしろくふたりはうたふ戀歌の。ひくばち音のしどけなく。うれしさは顔を見るのをたのしみに。たとへいはずとかたらずと思ひのたけはなとく物。戀じやせくまい。うき世は車めぐりあふ夜を頼みにてまつとはときはの深みどり。春は仕着の里の花重ねくゞし重ねづま本調子今宵くるわの初紋日乗初よしとのり出す。舟は何舟寶舟。ろかいの拍子さほの歌。聲を揃へてうたふたりや。あらくゞめでたいよの四海なみ風。しづかにて。長生殿のその中には。ふかくもとめり春秋を。不老門のまへには日月のかげぞかし。させい龍のひがしには。

江戸アシとみのながれをさへへたり松にひな鶴。「さへづればおきに千どりがまひあそぶハリマアシみぎはの龜は萬せいの時をあらはす三きよくや。なぎさの砂子さくくゞとして。神のうちてはゑんめいちやうしゆまんざい。くゞ。くゞ。ばんたい不易に。天下泰平國土安穩。君もゆたかにわれらもさかへて納むる手にはたからをふらし千秋樂にはじゆみやうをさづけて萬歲樂とぞまひおさむ。

○駒鳥戀關札

「おもへばてふのゆめのよにうつゝにかよふたまのを、むすびとめたるこゝろのいとものともをむるやこむらさきしうはこてふをしらつゆに、ハル地やどかる合つきのかごとなる。長地ゆふべくゞのくさまくから。むすびすてたるわかきさの。ねよげにみゆるおんなまご。ハル地やつすがたも戀ぐさの。こひのおもにのつゝらむま。馬にくらまのちござくら。合しやんとめさせてくちとりてしやわせよしのこひのしゆびなさけをうつすながしめに思ひの色を小むろぶし菊之丞では。小ムロアシせきのお地蔵は親よりましじや親も定めぬつまをもつ親もゆるさぬつまこひて。ハル

地身もよもあらぬうきわざにならわぬめいしよ舊跡をかたるも戀のつなでなは長地たづなをむちにしどけなりふりめにたつむすめ五十三次にかくれのなむすめ。むすめくゞとたくさんそうにアハアッたがよぶこどり遠近人のウツカ、リあだしことばのあさつゆにぬれたすがたのかほよどり。「みれば、みかはし「こへかはし。見わすれてかすがるてをふりはなしたるそでしがうらあれ三保がさきかせさそふ。ふじの煙とむねの火と。思ひくらべで。身をこがらしのもりてうき名も世のそしりを。シテつみもむくひも。ウキ未來のせめも。シテだんないくゞなに。なかなかにいとほじとおもひみだれしくろかみを。たがゆふなぎにもしほやく。田子の浦ぶね浮島が原。「うつ山のべのうつゝにも「ゆめにもわすれぬおもかげのこひしうてくゞはるくゞしたひきよ見がた。いそのいはねにうつなみのともにくゞだけてちりくゞとり「ないてあかしているはいなせめてひとよはあふる非。「あふせを松にふじ枝の花のゆかりやあかねさすさよの中山くれそむる七つのかねにこしかたのあはでわかれしかなしさを。思へばにくゞや世の中の。か

ねもくだけよしゆもくもおれよ。さりとははく戀をしらざるかねつきの。なまけくないぞやつらいぞとうらみもくすの。ぬのさらすかけ川こへて行水も。わが身の末もちるはなと観すれば世はあだなみの。濱名のはしのゆふしほにさしてのぼるやしほみ坂。あれく。あれもみねしろき花の梢のたかし山みちゆく人のたもとまで。さくらにほふ衣のさときつ、なれにしふり袖にぬふてふはなの八つはしや水も。くもではやきせのいるがごとくにながれゆくやはぎのしゆくにぞつきにける。

○祝言

詞さるほどに義経秀衡がたちいらせ給ひければ。入道よろこびひとへにうどんげのこゝちをなしまづ蓬萊のしまだいにのしこんぶをとりそへ四きをまなづるつくりばな。ちいろのたけのかげふかく。つばさならぶるともづるのとびめぐるそのしたにはるりのいさごあたゝかに。いのちながるのてうしをすへすでに「酒宴ぞはじまりける。詞時に辨慶がすと立ていつびやうをぞつらねける。それかめは四れい一つにて萬代をふるなればまづそのいろときはに

てかはらぬいるぞめでたけれあらめでたやとつらねければ。いづみの三郎がまかりたつていつびやうしをぞかさねけるわがやどの薬の酒はいづみにて。くめどつきせじのめどかはらぬおもしろやとまひをさめければ。大名小名同音に千秋萬歳のちはこの玉を奉る。

世にあざむく類板多く有といへども、其寫なるゆへに節章のあやまりはなはだし、依而太夫直傳の正本には同如し此之印形おし令開板者也、能々御吟味被成、御求め御らん被遊可被下候、

宮古路豊後掾直傳

江戸板元もと濱町いがや勘右衛門

宮古路月下の梅下卷終

新宮古路窓の梅上卷

直傳正本

目次

上卷

- 一 雙紋刀銘月 九一段
- 一 ひよく初たび 同
- 一 玉屋新兵衛みち行
- 一 三國小女郎
- 一 加賀お菊 中の卷 九一段
- 一 同 幸助おきく道行
- 一 睦月連理戀 九一段
- 一 下卷
- 一 同伊八おさん道行
- 一 出世はちの木 道行
- 一 山崎與次兵衛道行
- 一 傾城三度がさ 道行
- 一 大きやうじ 茂兵衛おさん道行
- 一 丹波與作 道行
- 一 笠物ぐるひ 道行
- 一 用明天皇 船路みち行

- 一 はちたゝき道行
- 一 わんきう道行
- 一 奈良八景 さくら道行
- 一 三勝半七 みち行
- 一 天智天皇美人揃
- 一 一助六心中みち行
- 一 かたみおくり
- 一 八百屋お七道行
- 一 小町大かゝみ 道行
- 一 少將しのび
- 一 一刀の名月 道行
- 一 鎌倉八景 道行
- 一 曾根崎追善 おはつ道行
- 一 けいせいさよの中やま

新宮古路窓の梅上巻

○雙紋刀銘月 中巻

宮古路豊後直傳

地名は堅く人は和ぐ石垣町。前には戀の底深き。淵に憂身をぼんと町都の四季の月花をこゝにとめて通路や。なじみくの色遊び。中にお花は忘れても忘れがたなや半七と中地深きなかこの妻戀に。なつく八ッ乳のつき三味線。心くらへの連弾きに。思ひの色を忍びごま忍ぶに餘る涙かな。詞うはき鳥とそやされて月夜もやみも此里へ。光満寺といふ坊主客お花になれし鶯の。法花經とも念佛とも知らぬが佛の戸帳ぞと。あづ、がのれん鐘木杖にてひらりと上り。太郎内にか四五日御目にぶらさがらぬ。エ、珍しいどつち風がふいたぞい。イヤ、どつち風でもない。今夜はしよさいの無常風。さたはないこと葬禮の戻りじや。ちよつとよりたし心はせく。どふせふかこふ焼香場をり、にやつてすて。引導も何いふたやらア、不便やけふの亡者もろくな所へいくまい。是もお花への心中と。雪の頬さき遠慮なく。髷口よせ

てほうずりは。山葵おろしに煮ぬきの玉子いたそな顔のいたくし。詞お花が浮ぬ顔付に花車も亭主も氣の毒がりコレお花どふぞいのお寺ならば大黒。ここではわつさりゑびす顔して見せましやサア笑やいのとせり立れば。ア、太郎おだまり。あれは我等へあまへるのじや。アノ腹を立る所が猶うまい。か衆二階へつれておじや。こよひはよね衆の總揚見事なことか。ヤふる手な肴取りおいてかば焼一種で吞明そ。鱧四五本さかせにやりや。なむあみだ佛とさはぎ立て皆々「二階へあがりける。地既にかたぶく宵月の。夜もはや四ッ半七は。銀の才覺ならず者と茶屋にはせかれ親方に見限られつ、つゝあづつ心の水もかへほして流れあるきにとぼ、と格子の陰に身をひそめ。お花がよすがを待居たる。詞こに誰とはしらがまじりきんかあたまたに無用の挑灯。かど口にてふつとけし。太郎左衛門殿お宿にか。花めがて、西陣の九兵衛でござると辰巳あがりと言ひければ。ていしゆふうふヤア親父きてか。ちへこちへと茶釜の前。太郎左衛門顔をしかめ。此頃段々いふ通りそなたが娘お花が事。抑小めろの時分から

手形の面九十年。おや方に損もかけず追付け年も明ぞやなれども勤のならひ小間物屋のたばこやの。紙屋で候の呉服屋で候の。酢のこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。其上親父も長者ではなしあの子にかゝる身でないか。がらり二十兩今年切りまし。居なりにゐれば借錢も先其ぶん賣買高い此時節二貫目ちがい甘雨。そなたが手取にあたまれば兩爲めと思ひ色々世話やけども。彼柄巻屋の半七といふ蟲がさいてなんのかのと入れ性根。お花が一さい吞込まぬ。是からは勝手次第。半七といふ職人の弟子こころあたりの拂さへ埒明す。東ふさがりに成つた者打ちみしやいでも粒三文ないは知つてゐる。あのやうなごくどうとくさり合たお花が行するらうは知た事。ちいさいからのなじみなればよい事聞くやうにはござらぬ。どふぞ異見でも召れぬか。かべに馬乗懸ては明べき埒も明ぬもの。前廣に手形せふ爲に呼にやつたと語りける。詞門口には半七聞けば悲しさ無念さの格子の柱かみひじき齒をくひしはり泣居たる。親父は横手丁と打つて。扱々にがくしい。親方様におせわをかけ不孝者と申そふか。ム、其刀

屋め知つてゐる。ならず者の大将こもかぶりの下地。ヤイ花めはどれにおる。こゝへこい用がある。引ずりにいてお客の前で恥か、さふかと昔作りのつこと聲。お花は人目の恥かしくあの盃藤さんさよさん預つて下んせと。言捨おりの箱はしご。ヤアとつさんか夜更て何しにござんしたと。側へよるをつきたをし。ヤイ不孝者親方様のお咄して一から十迄聞届た。半七めといふかたりめと夫婦にしては。年よつた此親がはなの下がひやがり。甘雨といふ金が。天からふるか。地から涌か。語りめが挨拶はらしやんと切つて仕舞ひ。年切まして奉公するか。いやといへば分別がある。サア、どふじやと腕まくりつかみ付くべき顔色なり。詞お花ははつと胸ふさがりしはらく涙にくれけるが。ナフとつさん傍輩衆は内證。客さん達の手前もありさもしい事をいはんする。勤する身の親達はどの口聞いてもかはいや親故くらうする。定の年も近付いた届いた男を見定め。末のかた付心がけ身を安樂にして見せたいはぬ親はござらぬに。節季々にせびらかしたらいで又年を切りまし。男迄にそはせまいとはあんまりむごござんす

る。ほんの親よりまゝてはなを大事と嗜て。随分  
孝行つくせども。こなさんわしにみちんもあはれみ  
はござんせぬ。殺しなりとどふなりと分別次第にさ  
あんせ。半七様と挨拶切り勤はせぬと計にて。人目  
も恥ず大聲あげ身を。もたへてぞ泣るたる。やよぬ  
かすなア。おのれを不便に思ふによつて此奉公をさ  
すわいやい。己を水師飯たき奉公さしては。夏は夜  
の短に朝は星をいたゞき冬は寒氣にとぢられて。手  
足にはやんげん程なひゝあかざれ。それが不便さに  
此奉公をさすわいやい。有難いと思ふて冥加をしれ。  
朝は晝迄ねる。結構な物は着る。甘い物はくふ。なん  
と。是でも此おやがむごいかあはれみがないか。お花  
はわつと泣出し。此勤を樂と思ふてゐさしやるか夜  
毎にかはる憂枕。客のきげんのよし悪にいせく  
の氣ぐらうは。舟にも車にもつまるゝだけはときげ  
ん取り。客をおとさぬしんぼうは火の車に乗る心。今  
迄もかゝさまの達者でいきてゐさんしたら。かふし  
た事は有るまいと恨かこてば。傍若無人のまゝてゝ  
ゑせ笑ひアレまだぬかす盗人の晝寐もあてがある。  
己が母になんの見込はなけれども。己を賣つてくは

ふ爲女夫になつた。今の詞は誰がおしへた。それも半  
七のすりめにならふたか。詞ソレ其むどく心なこな  
た故かふした勤をするわいの。あれまたぬかすか。皆  
さま聞いて下されませ。よその娘は親の爲とて奉公  
して請出されて親に樂をさする。己はそれとは違ふ  
て。たつた日に酒なら二升づゝおれに飲せてくれよ  
といへば。イヤ底抜じやの。イヤむごい人じやの。イ  
ヤおれをせふらしやるの。イヤまゝてゝじやの。イ  
ヤなんのかのといふて。おれには不自由な目をさし  
て。己は甘い物くらふて。一人の親の喉じめする。親  
がむごいか子が不孝なかヤイ。天道が正直じや其べ  
りくしやべるほうげたけはなして仕舞んと。むし  
やぶり付くをるづゝや夫婦。年のうちはこちのもの。  
疵付けさせぬともぎはなす。思ふ男にそはれぬから  
はいつそ殺しやく。ヨゝころしかねふかと。ぶち  
合ひ。ねち合ひ大げんくわ。破れかぶれと半七すそ  
引からげぬづゝ屋の庭へつかく。柄巻屋の半  
七と聲を懸け。九兵衛を取つてつきのけ真中にどつ  
かとすはり。これ親父。そなたはお花がまゝてゝす  
に付こに付にくいのもことはり。此半七をすりの語

りのがندوقのとはいつ語した盗した。半七が目  
はそなたを人賣と見たもがりと見た。よしそれは兎  
も角も。お花はおれが女房。すべい奉公仕舞ふては  
まゝてゝ様でござらふが。もがり様でござらふが。ぬ  
しの有る女房分別して物をいへと。せきくる顔の青  
疊たゝきちらして詰かくる。詞ムウ刀屋の半七と云  
ならず者はそなたか。どれ顔見よふはれよい男の。江  
戸もと結に繻子鬢。あたま付きは兩替町。内證は曾  
我様。見せかけりきみおいてくれ。此年迄梅毒散一服  
吞ぬ此親父。ゆすりはたべぬぞア。慮外ながら。く  
わんたいながら。親も許さぬ娘を女房とは粟田口へ  
いきたいか。此娘を女房に持てば小判が入るが合點  
か。小豆粒程なこま銀さへないさまで。なんじやお  
花を女房じやハハハ。ハハ、あいたく餘りの事で  
臍が宿がへするはいや。生語とは其事いつそ手を  
よふ巾着き家尻きれすりをかはけとわめきける。  
半七ぐつとせき上げムウよふいふたあづき粒は持ね  
ども。小判といふ物持つてゐる。來年の給分甘兩渡  
すからはお花は身が女房と。紙入より金廿兩取り出  
しサア金出した金でした小判といふ物近付に成つて

置けと。めつかうに投付るあいたく。ヤイ半七。  
アノ娘はまだ五十年が百年が千年でも顔にするけの  
有る中は奉公さしてくはねばならぬ。千兩道具の娘  
を廿兩のめくさりがねで女房に持ふや。べかこ。マア  
成るまいかいのどこで盗んでうせたやら。後のせん  
さくがやかましい。己にくれると投付るイヤ金もら  
はふよしみがない己にくれるとなげかへし投付打付  
つかみあふ。お花はわつと泣出す。太郎左衛門つゝ立  
ちコレ半七お花はこちの奉公人親父殿とのせりふな  
らどこぞ外でしたがよい。門には大勢人だかり。客の  
じやましてもらふまい。ソレ男共追出せ。心へ太兵  
衛長兵衛五助ばらくと立かゝり。無理無體に引出  
す。お花はわけも正體も涙ながらに取り付くを。ど  
こへくおし分る。親父を中の關守や雪駄かたしに  
奈良草履。足にはたゝぬ半七が。たぶさをつかんで  
引出し門口はたとさしけるは扱もせひなき次第な  
り。地あらむざんやな半七は。泣もなかれず居もや  
らす。涙ながらに。立忍ぶは目も當て「られぬ次第な  
り。サア親父も先歸つて諸事談合は明日の事。ハッ  
アそれもそふ。然らば明日参りませふ。申す迄は及

ばぬが花めをしきより外へ手ばなして下さるな。ヤ  
 イそこな不孝者。己あすきてなんとするか待つてお  
 れ。エ、いきせいはつて喉がかはくと。茶びしやく  
 おつ取りごぶくく。ごぶりくくとに忍花の。茶  
 びんあたまをふり立て河原を西へと歸りける。か  
 る哀の最中二階のはしごぐわたくく。藪から坊  
 主のおつちやうがほ。お花そこに何してゐる。さつ  
 きのおさへの盃はいつの世に戻る事じや。總たい今  
 夜はそなたが顔うきくせいで酒が呑ぬ。氣をかへ  
 て西石垣の關東屋でさほふ。太郎山衆かしてたも。  
 ハア残りの子供は西石垣が天竺へも御同道。お花ひ  
 とりは我等が内。手ばなしては内證に。氣遣有馬の。  
 いふなくく皆迄いふな。湯のだんごか。湯治す  
 るなら遣錢。見事な事かと金三兩。衣の下より投出  
 せば。是こそほんのかたじけ有馬の湯のだんご。三下  
 りやれ湯の談合湯のだんご。今は有馬の湯のだん  
 ごしよんが。本調子西石垣へと三重さはぎける。  
 ○玉屋新兵衛比翼初旅 宮古路豊後直傳  
 詞戀のみなとにうちよする。なみのもん日のにぎわ  
 ひは。みやこにまけぬ色所三國といへるわけさとは

北國一の遊女町。よねの情にかゝりふねいかりをろ  
 さぬ客もなく。中に玉屋の新兵衛。けふもつくく  
 ちかさなりし。銀のかはりに手ばまりの。すいがこ  
 うじてすいふろのおけぶせになる身ぞつらや。詞新  
 兵衛おろくなみだぐみ。エ、むねんやな。此みな  
 とで玉屋の新兵衛とて人にしられた身なれ共。色ゆ  
 へにしんだいはばうふりむし同然に。おけのなかに  
 まひくと日かげさへ見ぬ戀のやみ。あひたい見た  
 い太夫にも同じくるわに居はるながら。顔さへ見る  
 めかぐはなのやりてをはじめあるじふうふが見るま  
 へも。ゑんりよありまの人形ふで。地くびを出した  
 りひつこめたり。おけのあなからさしのぞき。けふ  
 は小女郎はみへぬか迄かほがみたいとこがれなくな  
 みだの雨にひるまなき。詞こゝに東後屋源六とてそ  
 の名あげやのてい主には。生れ付たる氣作もの。た  
 いこまさりの座持とてお客の御意に入りむこなが  
 ら。くわしやよりあるじとまねかるも。前の夫の  
 客がたへつとめをかれしおかげぞと。女房小いとほ  
 佛だんの花を立かへ香をもち。あすの佛のたいやと

てけそくふくやらいそがしや。詞所へ源六外より歸  
 りコリヤ女房共。けふはふくろの四郎様が御出のは  
 づおあひかたの三笠さまはいよく御越なさるゝ  
 が。ちがはぬやうに人でもやりや。すきさへあれば  
 佛なぶりにかゝりゐる。總じてあげやのくわしやの  
 後生ねがふと。出家のしやみせんひくは似やはぬ物  
 じや。おくの旦那へおすい物は出しやつたか。二階  
 のお客衆へ御あいさつにいきやらいで。佛の事程に  
 しやうばいにもちと氣をつきやとしかりける。詞ハ  
 テあすは常信殿のめい日故香花をしんせませす。いか  
 に法がちがふたとておまへ、まいればぎやうさんに  
 何事ぞたしなましやれ。ア、なむ妙法れんげきやう  
 がさめるとつぶやけば。詞ハア、やつたくく  
 やつた。常信とは古源六のかいみやう。たっせん源六  
 のめい日は思ひ出しく御とぶらひなさるゝの。を  
 さなゝじみは千ねん立てもわすれぬ物といふ程に。  
 わきひらかまはず腹一ッばいだいもくせめにせめ  
 付。あの世にておとがひではひおはるゝ程とぶらふ  
 てやらせられ。こちとらはしんだとて。おさなゝじ  
 みといふやうなみだい所は持ませず。めい日じやと

て思ひ出してひや酒一ッばい手向てくれる者もな  
 く。來世では念佛の借銭してとぶらひの身揚りをす  
 るより外は。乃至法界平等利益なむ。あみ。だ佛とす  
 ねければ。詞女房小いとをかしがり。ハテいなことに  
 りんきしてさまんゝのあて事。わしやそふした心で  
 ない。朝ばんのかんきんにも一れん託生と願ひます  
 れば。未來はこなたと一つはちすにすくひとられ。と  
 もにつれれば。付のけてても扱もうそかなゝな  
 んぼ一つはちすと願やつても。はや先立てせん源六  
 がれんげのうへによい場を取そちを待てゐるゝ所  
 へ後づれの源六でござります冷物でござります御め  
 んなされませと。そちふたりが乗てゐるれんげの上  
 へのつたらば。しつかい三方くわうじんにのつた様  
 であぶなかとぞひざりけり。詞おく座敷より此里  
 の名とりとさく川若むらさき。小女郎なんどいふ太  
 夫きうそくがてらに打つれ出。めをとがそばにゐな  
 がれてコリヤ又くせつでござんすの。源六さんがわ

るそふなとかく一所に置がわるい源六さんをつれて  
行おくてべつたり行つかしよ。是は何よりよい分別  
おまへふたりを頼みやす。跡は小女郎が受取つた。こ  
りや尤とむりやりにてい主をおくへをし入れる。地  
跡は小女郎が思ひ川。ふかい男の身の上を思ひくづ  
おれあふ人に。心はづかしめんぼくも涙まじりにし  
めんと。つゆをふくめる絲はぎの風にしなへるふ  
せいなり。調くわしやはすいなりとをり者小女郎が  
心をくんで取。お客様はまだお出もなし。その間は  
くつろいでお心まゝにおなぐさみ遊ばせと。勝手へ  
はづせばうれしさに。カン調せかいの戀知なさけしり  
と手を合してうしろ影。をがむかた手に見廻して。ふ  
せたるをけのそばにより。新さん小女郎じやコレわ  
しじや。客のこぬ間にあひにきた。くわくの法とて  
なさけなや。おけふせにして置ますと聞とつかへが  
ずつとのぼり。口おしいやら無念なやら。悲しいや  
らいとしいやら面目ないやらくるしいやら。わたし  
がむねの是こゝを思ひやつて下さんせ。名高い玉屋  
新兵衛と人のしつたおかたをば。わづかな銀のと  
こほりで人しげき此くるわで。かふしたうきめにあ

はんすはさぞむねんに口をしかる。京の島原大阪の  
新町とやらいふ所の。せんせいの太夫なら客さんが  
たへはちをすて。無心をいふてさいかくの仕やうも  
やうもあらふ物。おなじつとめをする身にて。人ぎ  
きよい太夫さまとはいはるれど。さすがはひなの女  
郎とてはばゑのないうへこなさん故。うき名の立つ  
たわしなれば地の客衆は皆のかんす。無心いふも  
相手は無しきをもんでもがひてもくめんせふにも  
衣裳はなし。わしひとりならしんでもしまはふ。こ  
なさんわるふいはするがわしや。くちをしかなし  
いわいのふ。色調かふしたつとめするものは親たちの  
心では。人の子むすこそゝのかし悪道へ引入れてわ  
かいものにはちかへせ。ういめを見せてだまつてい  
る。つめたいおなじや。さすがはいやしい者程有  
るとおふくろさまのさぞやさぞ。地さげしみうらみ  
づた／＼にきりさいなみもした程にくふ思ふてご  
ざんせふ。それがわけてエ、かなしいと。おけがわ  
に取付て。くどきなげ／＼ば。新兵衛がさし出すかほ  
はなみだにて。湯からあがつた如くにて目をしばつ  
いてこゑひくめ。コレも調まこと有るしんていを見ぬ

いてふかふなつた故かふした身にもなりはてた思へ  
ばホンニ。おけふせにあはふはしやらして。母じや  
人かふ色ぐるひもおけ／＼。みなわがわるいその  
身もちばなわにもかづらにもかゝらぬ。ひとりのこ  
ころでかわがそこねると泣わめかれたばちがあたつ  
て此めにあふ。やり手の杉めがおれを見ては。すし  
な／＼とぬかしたが。いひあておつておけのうへに  
をもしの石までおかれてすし同然の身になつた。こ  
れもそなたになれすぎた故と思へばうらみもない。  
なんにもいやんなげきやんな。おれはかくごはき  
はめている。はしり本に庖丁でもうす及でも。きれ  
ものあらば此あなからいれてたも。見事にしんであ  
げせんのかはりに命をやつてのけ。あげやの帳を芥  
子ほども此世にねんはのこらぬぞ。てらからむかひ  
にのり物を持てくるわの中からすぐに。野をくり  
あはふなら。それこそ女郎買の本望。川だちは川で  
はてるもとよりからだはしなぬさきから棺桶に入つ  
ていれば。もはや此世にぬ身なり是今生のわかれ  
ぞやすいふんとそくさいでくるわをはやふ出るよに  
して。身まゝになつて我跡を。とふてたもるが何よ

りのこゝろざしじやと。なきければ。調ア、つらい  
事いふて下さんす。かふしたうきめにあはせましく  
るわ一つばいひやうばんさせ。そもやそもわしが身  
でいきでいられふものならねど。しんではおために  
ならぬもの。身をきりうりにしてなりと此なんぎを  
すくわんと。しあんをきわめてきもいりたのみひが  
しはつがるそとのはま。ゑぞ松前のけいせい町。西  
はながさきまるやまの唐人にあふうきつとめ。みな  
みは紀の路がたあわちしま。こしより下はくちると  
も。かねだにおほく出るならば。きたは秋田路さど  
かな山つち君のつとめでもいとひはせじとをやかた  
と。だんがうしめさせ置たれば氣づかひさんすなら  
ちあけて。調こなさんの一ふんは立つやうにしてを  
きやんした。ばんにもだんがうきはまつてどこへ俄  
かにゆかふやら。しれぬ身なればちよつとなごりに  
こなさんの。かほが見たさにきやんしたと。すがり  
ついてなかつたも。だきしめふにもなさけなや。か  
らだはをけがわせんかたなく／＼かほとかほ。すり  
よせ／＼なきいたるよその見るめもあはれなり。調  
かゝるなげきのさい中に此季からいる料理人あんば

いの市助。おけのそばへ走りよれば小女郎ははつとおどろいて立ちのかんとしたりしをコレコレと  
コレおどろくまひ。新兵衛様にはお見しりある  
まいが。拙者が母はおまへに乳をあげお五つの年は  
てられた。うばがせがれおさな名は市松。はかり  
ながらおまへとは乳兄弟。母はてられしじぶん成人  
せば我にかはり御奉公申せとくれぐれ申置かれた  
り。今此時の御なんぎはそれがしがいのちにかへて  
すくひませうと。うへなる大石かるくとひつかへ  
へどうどをろし。おけ引とつてさあうち方へはやふ  
おかへり。あとはせつしやが引うけて。いのちかぎり  
にさばきますと。しんじつ顔にあらはれて世にたの  
もしいひければ。新兵衛も小女郎もゆめ見たやう  
な仕合とふたりは言葉のかすいはず。たゞ市助に手  
を合せ。むすぶの神様ありがた。料理の仕やうが  
至極じやと。口あひ言ふもうつゝにて。よろこびい  
さみ打つて。こけつまるびつにげ出る。ちごくの  
うへの一足とびあやうかりける三重ふせひなり。

○玉屋新兵衛  
三國小女郎  
道行ひよくのはつたび  
(宮古路月下の梅に出づ)

○加賀中之巻

お菊は母にめんぼくも。何とせんご正たいも。なき身  
とかくごしなごらも。親達に思ひをかけ不孝のことが  
また。不忠のことがゆるしてくだんせ。母さまと。か  
ほも得上げずなきゐたる。母もやうく涙をおさへ。  
詞コレお菊顔をあげや。ちつとの間でもあやまりの  
有ると思ふ氣ぐらうから。今朝見たからとは格別に。  
色わるふやせやつたの。物がたいとさまの手まへ  
思ふて恥かしうしんでものけたふ思やろが。人の親  
の心はの。他人の行儀のよい子より。悪き我子がか  
はいぞや。かふしたしそんじあればとて。何しにく  
らふ思はふぞ。あいたでない親の心では色ある花に  
は垣をゆひ。折取る事きんせいと札を立ても盗で手  
折は世のならひ。せかいの娘にうき名を立て。徒の  
性わるのと人の口にかけさせるはしかける男のとが  
ぞかし。ヤイ。コリヤそこな幸助の恩知らずよ。十  
二の年より飼をだてし。岩松の昔を忘れたな。三日  
にあげずわづらふて地カカリとも用には立つまい  
に。いなせくと人毎にいはいぬ者もなかりしに。地

ふびんさにおれひとりじやうをはり。在所へもどさ  
ばしぬるはぢやう。ほんのじひとは此事と。十八の  
春迄まじなひよ。薬よと。孫子にもせぬせわをやき  
旦那様にも物入れさせ漸々と人になし。酒とうじに  
追従いひ。酒を造りならはせば。あすが日宿をもた  
せても。酒つくる道をしれば一生かつるぬ身のげい  
と。おしへさせしも皆。おのれが末々迄の。爲を思  
ふてせわやきしに。恩があだとはおのれが事。ちゑ  
ない子にはちゑを付け。ひさうの娘をそゝなかし。ひ  
とり娘の命迄エ、あぶないやうにはよふしたなエ、  
物しらすのちく生めと。うらみ涙はせきあへず。く  
どきなげくぞ道理なる。幸助いきてゐるこゝちは涙  
に目もなきはらし。口にいはいぬ身のあやまり。お  
じひに御めんと一ごんもないてうつむくばかりな  
り。母は涙のひまよりも。カレハ調はお菊をなたにも  
だん合せす結納取つたは二親のあやまりとはいひな  
がら。ハアテモこふなつてはいとしようてもそちに道  
理は付けられぬ。くやしのたのみやなさけなのしる  
しやなアヤイ幸助よ。カレハ調いやしいたとへにどく  
をくはゝさらをねぶれといふ事あり。是迄の恩を知

らば娘をつれてはしつてくれなせといへ。結納を取  
つたがぢやうなればひつきやうが不義同然。さきは  
れつきとした武士なれば二人共に命がない。せなか  
に腹はかへられぬはやくと氣をせけば。こはおろ  
か成る御仰せ我々が命たすかり一所にそふては天の  
にくみおやのばち。不忠不孝をいたしたるつみほろ  
ぼしの。一生の。孝行の仕おさめに聖殿の手にかゝ  
り。親御達の御なんぎにならぬやうにと兩人は聲を  
しのびてなきゐたる。詞コレコレ其聲の手にかけさ  
せまいとて。ふたりづれでのけといふわいやい。ど  
こへのこふとおち付いた所から。うばがかた迄そく  
さいなたよりをそのまゝしらせてくれ。ゑようによ  
だつた身のならはわし。しつつけもせぬうきせたい。手  
いたいはたらきするならば持病のつかへがさしつめ  
て。どこでどんな目にあはふぞと思ひ過しがせらる  
るぞや。一時はなれぬ親子のわかれいひたい事はつ  
きしなき。涙の雨はしのをつくことわりせめてあは  
れなり。調幸助涙おしのごひ御じたい申す所でなし。  
いかにも御供仕り。お菊様の御身のうへすいぶんつ  
つがなきやうに。御かいほう仕るべしといふ所へ。お



くよりこしもとまきゑのすやりふたに。保命酒末廣酒と銘のあるすゞの徳利二つすへもち出で。旦那さまのおつしやります。お菊さまのお氣がもめふ。是をしんせられませと。母にわたせばうけ取て。是これを見やふたりの衆。さきのやうに腹立てこれでもエ、くもしわづらひが出よふかと子をおもふ親の心かたじけないうたきやと。徳利取りあげなんじや末廣。ヲ、是はめでたい。ふたりながら末ひろふなるやうにおれが結納の盃ぞと。幸助につきかくる。旦那さまおふたりの御恩の御酒をてうだとい。そばなる茶碗うけもてば。酒のいづみとつれ立てながれ出るは中戸のかぎ。はつとばかりに下に置き。手をあはせてなきむたる。母はうれしきなみだにくれまた此酒は保命酒。菊へ祝儀とつきかくる。酒にはあらぬかうじの色。花の一步のからくく茶わん一ぱいもありあぐる。かさねてふたりはおくの親。そば成る母をふしおがみく。か程にあつき御恩の程。何とおくらんありがたやと思ふに付けて身のつらさ。我あやまりをかへり見て。ないてわかちは。なかり。け。りことはり。せめて道理なり。母は其時

取あへず。是は慈童が八百さい。命をたもつ菊の酒。いへも菊屋。そなたもお菊。何にもかにもさく酒ぞしつかと吞わけて。ふたりかせいで立身し。世間をひろく。無明師のゑひをさまして。故郷へは。にしきをかざる菊がさね菊の。みばへのうつくしい孫をもふけて千年菊。たよりをお菊さらばやと。中戸に立ちより門出の銚を。明けてぞをとしける。

○道行旅の着綿

(宮古路月下の梅に出づ)

○今村屋おさん睦月連理戀 宮古路豊後直傳

そよ風のふくにつけてもあなめ。あなめ地おのとはいはじいとすき。ハル地心ぼそくも戀のやみ。ほしのひかりのさやけさはア、うるさやと袖おほふ。長地しころづきんや秋ならできりにへだゝるはるのてふはがひはしにもうちしほれ。心しどろにとほくくと。いそげばあしも地につかぬ。かつら町にぞつきにけり。調金村屋が總がうしむかひの軒にたゝすみて。内のやうすをうかへば。友女郎はあげと見へしづまりかへる内のてい。ゆかしの人や何とぞしてあふ

て一トことかたりたや。見たやいひたやこひしやと。かねてあひづのしらせにとあたりの石をふたつとり。かつちくく石の火の。きゆる我身のはかなさとしほれて涙計なり。カン詞おさんはそれと聞付けてやがておもてへ忍び出で。見ればいとしやしんぼりと風にこほりし雪のさぎ。あひたかつたにどふぞいのふ。わしやきづかひでといふ聲のあとは涙に。かきくもる。地男の袖もとも涙。詞一々咄せば長いこと。しりやる通りのおれが身の上。今改めていふではなけれど女護の島の美女をゑらみ。三千のふんたい天人のしんじつひとこに戀でまろめてもそなたひとりにかへはせぬ。なれ共一つのきのどくは。ちゑ力にもさいかくにも行きつまつたる内の首尾。なんぶやの會所で五百石賣て二リンあがつた。千石かふてならして見よといきあたる所が戸をたてる。三分さがつて是ではならぬと油市。それから段々つきを打ちせけんのとへにいふ通り。げほうのくだり坂の腰をおすやら。てつぼうの玉にはうかけるやら。段々のそん金五十三貫目餘。友達仲間はいふに及ばず。當る所が虚八百。色詞かたり同然一日ぐらし其上

出入りのやしきから。吉光の刀をおやちのかたへ質物に取置かれたを。ぬすみ出して人を頼み入じちに置き金とへの。こちの塚をわびてしまひはて。其上は行付次第と。工面した彼刀をき、や。八重桐しばるでけんくわのうへぬすまれたは運のつき。たとふにもふふにもはや鐘がつまつてきた。なごやのすまるもこよひかぎり。江戸にしろへの者あれば是を頼みに一トかせぎ。やつて見たいと思ひ付き。それに付きかれに付きひとりのそなたにわかれて行くが。おりや。かなしうて。いつその事に此ごろはどろ。とかくそなたが苦になつて調ねからばさつはのどを通さず。むしやうやたらめつた香酒も命は有る物か。なんぼのんでもゑひは出ず。いつそふぬけになつたそふなとおろく涙でかたるにぞ。おさんは涙しやくり上げ。うらめしのお言葉やな。そふいはんすりやおまへばかりが眞實で。道の者の悲しさはうそをうるのがしやうばいと前前の口には出やせねど心にふかいうたがひの有るからわしはなをつらい。うそか誠かいつはりかむねのかみふたとつ

て。うつしてお前に見せて死たい。かねてお前に咄す通り長地わたしが年は七つの年から十五年切り。此金村屋へうられきて。此正月で年が明と。おんの有る親方の氣にそむいても此さとの。くげんをのがれお前様とふうふになり。すゑはどふしてこふしてと。年のあき日をゆびをおり目をかぞへ夜をかぞへめくらの龜のうどんげにあふてどふしてこふしてと。たのしんださきおれがして。冬年手がたを見てびつくり。來年の正月とわたしが年のくりぞこない。はつと思ふてちからがおちそれからわしは床に付き。きやみになつたはたれ故ぞ。嘘に涙はこぼれぬと袖は露やら。涙やら。詞いひたい事もたんとある。聞きたい事もたんと有る。人の見るめもいぶかし。先こなたへと。路次の戸をあけて。手をとりにねどころの。うしろのふすま明てこへとおし入れの。跡引立とんとねて。枕へだて、小咄しは神も御存じなかりけり。詞かつ手に花車の聲として。よしやゆとりのまゝのかげんよふしてもとふを薄じやうゆでたいて出しや。又からふしておさんの氣に合ぬやうな事しやるなど。あひのふすまをおし明け。おさんこよひ

はねつもこぬかの。心持はどふじやぞ。なんなり共そなたの氣にあふたやうに内外の者にいひつきやいひつきや。遠慮しやるはそなたの損。氣まゝに持が養生ぞや。詞どふやらこよひは貌付がおもひやうな氣あひはどうぞきづかひなど。せなをさすりかん病のうちも涙にこゑふるひ詞ノフおさん今改ていふやうなれどいはぬとてもそなたの心に覺がある。餘の奉公人とはちがふて七つの年からこつちへとり。どふしたゑんのいき合やらこちとふうふは子はまたねど。産の子よりも大切に目があかねば出世がならぬとぬひ物わたつみよみかきは師匠のよいをざんみして。せけんならばの子供よりまけもおとりもせぬやうにと。ぬひ立仕立もやうごのみ。三伏のあつき日にすげがさかふてやりましょといふたれば。そなた忘れはしやるまい。おれよりぬしが氣をいらちごふく屋のくるを待かねて。げん銀みせへ走つていてもみのくけひもつくくくと。そなたが出やる後姿めうとが表のかうしへ出て見おくらぬ日はノフ一日もなかつた。それ故今ではせけんからアノ金村屋のおさんはきりやうはよし。きよう者じやと其取りざたかけか

ら聞く其うれしさ。こふいふてすゑはそなたを銀にしてと慾心はゆめくめうとが思はぬと。色詞氣あひにさはろかしらね共ふゆ年そなたが手がたを出し。年のくり目をせんさく仕やつた。こちの心は子じやと思ふてゐるめうと。百枚千枚手形をとればとてめうとが心は皆ほうぐ。やさいかさいはいふに及ばず在所の田地もそなたの物。こつちにかけごはみぢんもござらぬ。そなたの心にかけてごがあろかといとさ餘るこちのうらみ。とんと心をおとし付け早ふ達者になつてたもと。そゝる殘さぬしんじつ心。おさんはあまりもつたないわたりにはちがあたらいで。當る者は有るまいと。しやくり上げたる主のおんおつとの義理と二筋に。むすぶぬるうき思ひ心ぞおがせかき。みだし。詞所へてい主外より歸りかゝそこにか。なんとおさんは物でもくたかの道三様へよつてきてお樂もてうだいてきた。是はかげんのお樂じやげな。すぐに人參も調てきたおさん此やうにせわやくもそちを達者にして。こちとめうとは隠居さしてもらはねばならぬ。どふやらめつたにこんどの樂は廻りそふな。通り筋を通つたりや。こんど

の八重桐がかはりを見たが。かんじんかなめの人參がきいたく。狂言ができてしばる持なをした狂言がきいたくといふ辻うら。おさんよろこべ。追付けほんぶくの祝ひに八重桐のざしきは我等がもめるくくと。あすのもめるをいはするを夢にもしらぬぞせひもなし。詞さればいの今も今とていひやす。こなたとわしとがちよさいのないそゝるを咄してやつて下さんせ。おふてや。是おさん。早ふ達者に成てくれそなたが心に合た人直にこつちへむこにとり。此家もそなたに帳切して千秋樂をうたはふと。せいを付るも病人の心すかしぞあはれなる。おさんはらく涙ぐみおんのだなさん花車さんさきもさきとていひやす。ちいさい時から御せわになり御おんもおくらすこのまゝにもし死なふならどふならふや。あすが日しらぬわしが身の上。どふいふ義理があらふやら。たゞ一筋にわしが身を。御大切になさるゝ事。思へばむねがひきさけるほど。うれしうて。かなしうて。わしや。いひたい事も口へ出ぬと。わつとなければ。いしゆ女房其旦那さんは何事じや。なせにと、様か、様とはいはぬぞや。又々なかして

たもるか。夫婦の者はそこしらぬ鶯のすにそだてあげ。子は子ながらも子にならぬ。やみをうとふやほととぎす。なくねにつぐる鶏の聲夜もはやなかば過にける。詞サアかゝもはやいてやすも。おさんもやすめこたつの火はきつうはないかと。そこ〜に氣付けてこそ入にける。詞跡おし明けてそつと出るかほも涙になきはらし。ノフおさんつど〜いふもくり事ながら今のめうとの物がたりア、うつくしうもなるものか。そなたのみやうが、おそろしい。かまへてわるふ思やんな。いつ迄も同じ事すいぶん達者でつとめてるや。追付け江戸から便をせふ。老少不定の世の中なればこふいふ内もしれぬ身の上。達者が達者に立ぬものさらばといふてち出る。おさんはすそに取付て。コレおこいぞやどうよくな。わづらふてゐるわしが身をすて、いくとはさりとては。鬼よりこはき御心。わしややりはせぬはなしはせぬ。ころして置て行んせと聲も立てすのくどきなきことはりせめてあはれなり。中地伊八涙と諸共に詞いとしそなたを跡に残し行ふといふおれが身になりかはつてたもらぬは一つの恨のかすぞかし。かふ

いふもいとしさあまりにそなたの親かたの。そちを子よりも大切にふうふのしんせつ一つは又。かはいひそなたにしんくをばかけまいばかりかふはいふ。おれが心はそれそなたの。ふとんのしたにといふ聲もむせんで聲もきれ〜なる。地おさんそれはととり出し。見ればつど〜一つがき。ヨミ調かりの世に夢のうきはし世わたりのさま〜有るに我が身は。親産おとされてわらの上母をもしらぬみなし子を。親徳右衛門殿のかいほう故親となり子のみばへとなり。さま〜親のかうおんをおくらでかなはぬ我等の身の上。人の親とは十倍のおんをわすれてすて行く身。一つには又わすれてもわすられぬはいはず共かゝすとすいし申さるべく候。こよひかぎりの我身の上かくとはなし候は、いとしそなたをやひばにかけ。くるしみかけんかなしきにかくはつ〜み〜。すいぶん〜そくさいにてなき我あとをいべんの念佛頼み上り〜。餘の人の千部よりそまじのたつた一ことのたむけは未來のみちびきぞや。詞二つには又そこもとの親かた様の心ざし。そこののこさぬ義理ゆへにきのふはらひをするはづのけいや

新宮古路窓の梅下巻

○たみや伊八心中くらがりの森  
○金村やおさん  
(宮古路月下の梅に出づ)

くも御存じのわけゆへかねとゝのはず。身をすつるほどのしぎとなり候へばこよひもこは〜かうし迄しのでうろたへまいる候。其段よく〜御つたへとにかくになごりおしのふでのたてとや。さらば。さらば南無あみだぶつ。〜とよみも。おはらす。嬉し人のこゝろやなかばはるゝ身はかばふより。百ばいの誠ぞや。とても我身も此きしよく。とかくほんぶく見へぬわが身。いつしよにしぬるがほんもうぞや。一所にやいのとひし〜と。いだき付いたるむねとむねせかいのあはれをあらはすらん。詞そんなかくごきはめてか。わしにかくご極めたかとはまだこなさんはわしにうたがひがはれぬかいのふ。ハテなんのそふした事である。とかくりんじうしやうねんに。切つてすてゆくたまのお。ひとつにあはすたなごゝろ。みだの御くにはそなたかどふしおがむ手をすぐさまに。此世をさる戸路次の戸は〜ぞ。めいどのかどぞと。せなにおふせのとりならでめいどのとりや七つどりあけぬさきにともろともに出で。ゆくこそせひもなき。

新宮古路窓の梅上巻終

宮古路窓の梅下巻

謡「ゆくゑさだめぬみちなれば、〜。こしかたもいづくならまし。詞「是は一しよふちうのしやもんにて候。われ此ほどは信濃の國に候ひしが。あまりにゆきふかくなり候ほどに。まづ此たびはかまくらにのぼり。ざせんにこもり。はるになりしゆぎやうにいはばやとおもひ候。申音「ゆきははなより花をしき。木曾のみさかのたにかせは。ふけどもそでに。さむからで。地名もねたましき風こしの。上地みねのふきぞ身にはし。身はすみぞめの。すみごろもうきよの。たみにおほふかな。おほゑどもるゝ竹のかさ。地にあはぬ身にもひきしめて。しやんとめしたる御ありさま。ありがたしとまたのみある。地いくゑこしてもしなのちは人ざととをきはなれざか。コハッ地ちくまの川にわたしよぶ。上地こゑもあらしにうづも

れて。笠でまねけばかさのはに。地あられたばしる。つゝらから。かるひざは。地けふ山ひめのきぬくばり。ものたちよしといろく。地にきたつなるいたはなのしゆく。ふもとは。さかもとや。すはの水。うみ色歌とど打てはしやなとはこづましやなとはこづまをしやんとたつたちどり。せめてとへかし。よいそれさつさ。地ウツさつとたつたるをしかもめおのがとり。色しなを。地わけて見せたるゆきのそら。コハル地のこんの月はうかめ共うさぎはなづむあつこほりゑきろの馬ぞなみはしるさの。ハツミツシ渡りに着給ふ。

○ねびきの門松山さき興次兵衛道行

二上りあづまうけ出せ山さき興次兵衛。うけだせ。山さき興次兵衛。いつかおもひのしたひもとけて。むかし思へばうやつらや。しのぶむかしも。うやつらや。コトバなさけなやたれあらふ。山さき興次兵衛。まとは。人におくれぬみだれがみ。あづまがかほも見わすれて。うつなやとせいすれば。太夫。そなたは。ふちやのあづまか。ウツれしやな。あれあれをみや。むしさへも。つがひはなれぬあげはのてう。

われくとも。ふたりづれ。すいなどうしの中々に。はるにもそだつ花さそふ。なたねはてうのはなしらす。地てうはなたねのあぢしらす。地しらすしられぬ中ならば。うかれまひものさりとては。ハル地くるふまいものあじきなや。おやの御をんをふりすて。そなたのせはになりふりもむかしには似ぬ。おとこ山いまでは人も秋しはや。ハル地とやまの松に。こととはん。わが身のすへのはなれごまおのれとくるふ秋のはの。みだれごらか。ア、くるふまい。まつ身になるなやおやと子の。たよりをしのぐ山さきの。つまもさこそはみだれがみ。ゆふたことばが。ちからぞや。又四郎アツわしがなじみはみるのおび。ながひ夜すがらひきしめて。あづかるものは。はんぶんの。ハル地ぬしはわすれていさんすが。ハル地過し月見はるづやで。そこいくまなき夜とともに。のみあかしたる。おもしろさ。今のうきみにくらぶれば。いとをまへがいとしいと。ゑりにつくみししのびなき。太夫コトバ。おれもそなたをゆめにだに。ウツネアツわすれぬからに。おやつまの。いさめは。どつとなぎさ山。まつのくらるに。のぼりつめ。かむりはき

ねど。大じんと。ウキくわしやがとろくくせつのもん。太夫やりてがたくかぶるがねぶり。二人みなゆめのよの。けふがひと。や。ふればぐわちもなかりけり。かくはしれ共。やなぎのいと。おどろをみだす。引トリ山をろし。身にしみくと。いさめの言葉。おすれまひ。ぞやわすれじと。たがひにてをとりかわし。なみたぐもるやつゆのたま。せきかふ。くもにほどもなく。くれるくるくくくと。つきはゆけどもはてしなき。おもひはもくせんおやのばち。あたつて。くだくる。おとこぎの。おのがすがたを我をくる。はしれば。はしるあれくくあれとまればとまる。みだれごころもふたおもひのちのつれなきながれの身ながれわたりのよのなかに。しばしとまるしづがやの。のきを。たづねてなやみけり。

○三度笠相合籠道行

ウツヒすいちやうこうけいに。枕ならべしねやの内なれしふすまの夜すがらも。二上りウツ四ツ門の跡夢もなし。さるにても我妻の。秋よりさきにならずとあだし情のよを頼み。木調子地人を頼みの綱切れて。ハル地よはの中戸も引かへて。地人めの關にせかれゆく

きのふのまのびん付や。セツキウツ髪わけめのはつれたを。わけてしんじよとくしを取る。ハル地手さへ涙にこゝろ付ひへたる足をふともゝに相合ごたつ相ごしの。地かごのいきづゑいきて又。サイモンつやく命がふしぎぞとふたりが泪こぼれ口。明ぬ間は。しばしとて籠のすだれをあけてさへ。ひざ組かはす籠の内。せばきつとめの有しよの仰に似たはにたれ共。地すみのうづみびいつしかに。地あしたの霜とおきかへてよはの嵐によはれては。ことをるのべのかぶろ松すぎし其夜がをもはれていと。涙のたねならぬ。何くどくと思ふぞや。是ぞ一れんたくしやうと。なぐさみつ又なぐさみに。ハル地ひよくきせるのうすけぶり。ウツ朝出のしつや火をもちふ。のもりが見るめ恥かした。籠立させて隙をやる。あたへの露の命さへ。をしからぬ身は。引取。おしからず猶もをしまぬ。からはだしをしむはなごりばかりぞや。二上り終にきなれぬわたぼうし。太夫。わしがかほよりこなさんの。ウキ。はだに是をと風ふせぐ太夫。ひらりぼうしの。ウキ。むらさきや。二人色であいしははやむかし。太夫。けふはしん身のめをとあい。ウキ。たのまは願ひかの

へさる。二人ウタガ、リかうしんどうよとふしおがみ。跡ふりかへればしやうまんと。又取かはしなく涙袖の氷と。とちあへり。本調子愛はしる人おほければ。地こちへくと袖おほひ。里のうら道あせ道をすじりもちりて藤井寺。あれ。あれを見や。どこの田舎も戀のよや。よそのむつごとねたましく。上地それ覺へてかいつの事。かのはつ雪の朝込に。ねまきながらに送られし。地大門口のうす雪も今ふる雪もかはらねど替りはてたる。身の行衛。地すそにやつる。小笹原。霜にかれ野のすき原。ぼう。くさらくさつとなつたは。我を追手の尋ぬるよと。地おほひ重なりかけかくし。ウレヒア妻戀鳥のはをとにおぢ。る身と成は。いかなるつみのむくいぞと。くどきなげきて。行姿。なくか笑ふかとんだ林の群がらす。せめて一夜の心なく。とがむる聲の高間やま。あのかづらきの神ならで。ひるの通じつ。ましく身を忍ぶ道戀の道。我からせばさ浮世の道。竹の内とうげ袖ぬれて。岩やごへとて石道や。野こへ山こへ里こへて行は。戀路のならひかや。

○大きやうじ柱唇おさん道行

「つゐにゆく。道とはかねて。地聞しかど。けふの我身のさいご日は。地我のみきゆる心地してウ長地あまたの人の命ごひ。それをつゑともはしらとも。ハル地はしらごよみの中だんにハル地むことりよしとかきたるは。あだのはじめかやれごよみ。地かみのつぎめもはらくとないて。出し夜の。うき身にも。大阪サイモンいつか此世に金神と。ハルアッ思ひまはせばむねせかれ八十八夜及びなき。地年は十九と廿五のなごりの霜と見あぐればそらにしらぬ露なみだ。十方ぐれに道見へすなく。ひかれゆく涙よその見るめもあはれなり。人めぬすみてあらはれて。地ふぎとはなんのかのへさる。カン地しらでおふ夜の其むくひ世の口のはにうたわれて。地丸のおごけにうみためし。地まをのひねりぞ身の上は。色長地見へす水なわしはりなわ世にそしられん情なや。つくく物をあんするに。二上リタ、キわれはつるぎの金性のやいばにかかるやくそくか。ウキわしは土性はかの土。何とてはかにうづまれます。終にウキ木性の。二人木のそらにかばねをさらし名をさらし。ウキおんど小歌にうたはれて。ウキつよきうきめにあわた口。二人ウキウキウキあげ

の水に名をながすおさん茂兵衛が後の世をたすげ給へやなむあみだ。なまみだぶつなむあみだ佛なむあみだ。ウキみだの六字をほにあげて。ウキ友にぐせいの舟のりよし。ぐれんの井戸ほりせうねつの。地ごくのかまぬりよしなやといそがぬたびぢいつのまにしでのたをさの。田かりよしのもりが見るめはづかしや。地あれふき物とあやぶ日。地終に命をほろぶ日。地思へば天一天上の五すい八せんま日もなし只何事も夢の世と色地我身のさとりひらく日ひづしのあゆみ隙もなくはやさいごばもちかづけば。見物ぐんじゆとりぐに。ふたりがうはさよしあしを。筆につくしてすゑの世に。かたりつめて聞およぶ。

○たんば興作ゆめちのこま

「ウタ」よさくたんばの馬をいなれど。今は野すへの。はなれごま。じや。しやんとさせよさく。興さく。興作ウキ地興作とよばれつる。いなをほせどりもねをいれて。ハル地のへのかるかや。のきばのをぎ。馬のまぐさにかひのこす。長地草もわがみも此あかつきは。ともにかれのくつわむし。ハル地人をのせたかのせられて。ハル地かぎりのたびの。さかの下なふ。夜ぶか

み。まつしや／＼のみやめぐり。ちごくめぐりをおもひ出す。かゑらぬむかしをもふまひ。本調子なくなくなとなくからす。人のまつごをしらすとは。おとにきしが今ぞしる。浅くまがだけあさましや。ヒロイアシかのさいぐうのいみことば。いまわしやとて。みちもせに。さらすすがたをどうしやにも。きらいにくまれ。ひと／＼の。よもやゑかうも情なや。くわこもみらひもげんせでしる。おとこみるめはなくめもと。はやあけがたの。未刻のたいこのこゑは。高田のてら。とまり／＼はおほけれ共十まんおくと馬つきなしのには百みのはたごやに。くわんおんせいし。てを取て。はすのうてなにとまらんせ。ふうふの外はあいやども。なむあみだ佛みだ佛と。こうのあみだのかけたのむ。其せい願の言葉のゑん。せんぐわん松にぞつきにける。

○おなつかさ物ぐるひ道行

上歌よき戀と。いふ字をきんしやで。ぬわせ。すそに清十郎とねた所すそに。清十郎とねた所。色地くわんすれば夢の世や。ねてあた／＼めしふところ子いつのまにかはうかれいで。三がいゑたゝ家として袖がさ雨

のやどりにも心とゞめぬかり枕。上地ながれにあらぬ川竹の。さゝの小ざ／＼のびんざ／＼ら。花の手おほひ。お手をひかれた是もくまのしゆ行かや。色詞あね様これのふ。くわんじんびしやくの。ゑがほよしとてやなぎがまねく柳のかみを何ゆへに。うきようらみてあまがさき尼が崎とは海ぢかく。なせにそなたはしほがない。ふしはあはれに身はだてに歌はねぶつの歌びくに。二上りむかひ通るは清十郎じやないかいの。笠がよくにたすげのおがさが。さりとほよくいふたゑいやらゑ。中地かさをしるべの物ぐるひ。地物にくるふも我計かは。かねにまつよは鳥にはわかれ。戀する人のよなく／＼を。氣ちがいとてな笑ひたまひそ。ウタヒつたへ開孔子はりぎよにわかれおもひの火をむねにたき。はつきよいは我が子をさきたて、枕にのこる薬をうらむ。カン地それは子ゆへのわかれの涙。おやより子より我身より。いとしの御のいとしほや。それよりびんぎおとづれの。聲もきかねば顔も見す。我は秋しか妻をこふ。かいろとなくとしらせたや。ウキ詞のふ／＼あれ成御僧我とのごかへしてたべいづくへつれて行事ぞ太夫いや御僧とはそらめ

かや我もこがるゝまるた舟。うきよを渡る一ふしを。うたへやうたへやうたかたの。小歌小舟つくりておなつをのせて。花の清十郎にろをおさせふゑ。マヒアシくわんのんさつたのちかいは。かれたる木にもはながさ。中地笠にさいたはなぎのは。こしにさいたもなぎのは。太夫一ゑだ。ウキ一ゑだ。二人三日に三まい七日に七まい起請せいしのごわうのうらなく。はいにやきつゝたがひにのんだる。地水ももらさぬなかなかにひきも合せぬ神心。くまの、神のおるすかや。あしがらはこね玉つ島。きぶねやみわの明神も神とも覺へぬ神ならば。尋ぬる夫に合せて見や。それ。それ／＼。それ合あはせずあはれぬは皆。偽りの御神と。そしつてもいのつても。神のちからもかなはぬかと。かさもかもじもかなぐりすてくるひ。なげくぞあはれなり。

○用明天皇 舟路の道行

(宮古路月下の梅に出づ)

○大和歌五く色紙 小町少将道行

江戸アッ戀せずば玉のさかづき。そことなく。物のあはれはよもしらじ。中地いたはしや少将殿。小町御前

をおひ参らせ。いづくとさしてしら玉か。何ぞと人のとはんには。露と江戸本アッこたへてきへなまし。地哀ふたりが中々に。いつ下紐を打とけて。とくさ色なるかりぎぬにむらさきにはふ藤ばかま。しほるゝすそをかいて取てかひ／＼しげに見ゆれどもむばらからたちそぎ竹や。道の小石に足いたみ。すそのむらさき引かへて。ひのはかまかとうたがはる。ウタヒいとゝおぼろよにふるはむらさめか。おつるは涙かと。袖打はらひたり／＼て迷はるゝ戀路のならひぞあはれなる。ウキ詞姫君涙とも共いげにかすならぬ我ゆへにかく迄御身をくるしむるもつたいなやとの給へば。ウキ少将顔をふり上て君ゆへならば此命。何かおしまんおし鳥の羽がひならべんあふせには。此とし月のむねのやみこよひはれ行あまの川。わたりくらべてたなばたのとしに。一よの思ひをしらは今のふたりが行すへを。まもるちかひの神がきや。あれは御とりのひかりぞと。尋ねめぐればさもあらぬきつね火の跡に成つゝ先にきへちらり。ちらりとちらめくは。我を追手に來るか。かくれたよらんか。しにも。身をおのゝきてかくれがさかくれがとてもあらしふ

く。心も足もひへわたり。しんきもつかればはてければしんく〜と物すごく。なきたまをくるあだしのの。松のこかげに立よつてしばらく〜つかれをほらさるゝ。

○わん久道行

二上り歌たどりゆく。今は心もみだれ候。すゑの松山思ひのたねよ。いつのころよりあひなれそめてかよふこゝろを。かは。ひとおもへ。さりとほ〜しのほかのハテどふもせい。これ〜うけたとな。あのやわん久はこれさ。〜。つゞみのかはかのほんゑ。しんぞ此身はこれさ〜うちこんだ。とか、戀ぢのぬれごろも。地ナチスほさぬみだのつゆしほり。くちなば袖よいまの身は。せいしがのべの思ひぐさ。むぐらのやどにた〜ひとり。とこはなれゆくあかつきの。地そのきぬ〜のおもかげをとへど。こたへすしよんぼりと。きのふはけふのむかしにて。誰ほうしほうしは木のはしと。おもふはやばかわけしらぬ。こころの花のかほりをば。しらせたいぞや。詞ア、はちはち。色詞此十とくもすぎしころ。ゆかりほうしが一ふしに。ちゑもきりやうもしんだいも。みなあはゆきときへうせて。かはせし事のかはるともはなれまい

ぞのきみこはく。我はちりかや身につもる。地こゝろのあくたむねにみち。それがこふじた物ぐるひ。歌ガカリとてもぬれたる。やんやあゝ。身なれ共一むらさめをいとほじと。地たちよるのきのこのすの戸に。きむくひむくのそらだきの。もれて見へしは白人か。いろでまろめしよるのつま。太夫。ほりゑのふみのたよりさへッキはしがなければわたられぬ。太夫こひのねがひもあみだばし。ッキうきなが太夫ほりも。二人わざくれと。ぬれてかよふかいたちほり。ッキとをつそらなるさつまほり。太夫こひしゆかしきわがつまの。ッキゆくゑを太夫とへど二人あはざばり。さこばあぢ川ふくしまを。地まよひゆけどもまつ山に。にた人なきうき世ぞと。ないつわらふつきやうらんの。身のはてなにとあさましやと。しばをしとねにふしけるは。ナキアめもあてられぬふせいなり。

○ゆうし櫻づくし 名所記

郎くわんじや爲ともはかさぎを落てそれよりも。みかさのしやうじを頼つゝ。都をうつし奉りしばらくなんとに忍ばるゝ。頃はやよひの花見月宮をいざなひ参らせて。かまた兵衛諸共に笠ふかく〜と忍び出。花のさかりを見かさ山さして來にけり春日野やときめくきやの花がのこやゑ櫻よりさきそめて花みる袖にかほりくるにほひ櫻のゆかしきも花の。はだへのうきとをる一重櫻のうす櫻いとしき君がかよひぢをたれに語らんうば櫻大宮人のゑぼしご櫻なりよて見よてしやんとときそめしかりぎぬのあさぎ櫻にかば櫻そらにしらぬ鹽がまの。けぶりうづまく緋櫻や。色もにほひもおのづから。つやびんなりとちこ櫻。かすみにうづむ山櫻。やうきひ櫻名を残す色は十八初櫻。今せんせいの花姿うつし姫子の手にふれて。廻れや廻れきり〜めぐれや廻れ手まり櫻やいと櫻むすぶ契りの色ふかくちもとの櫻さきみだれ遠山鳥のしだりをなが〜しきけふの日もながめにあかぬけしきぞと。なら八まんのはうせんにしばらく〜やすらひ給ひける。かのねぎ宮の御姿をつく〜みて。扱よいふうな若衆の。ひろいならでつゝに見ず。せ

めて。詞にあづからんと。うちわ二三本手にもち。しさいらしげにおそばに立より。ヲ、おの〜は此ながらの里はじめと見へたり。名所こせきもおほければ。ゆる〜けんぶつなさるべし。扱又聞もおよばれん是は當所の名物正じんの。ならうちわ召れてお國のつとなどには。すんどてうはうなみやげ物。もやうはお望次第にて。したて吉野の花すゝき。無地に青地のぬり團扇。白地にすみゑかいたるは。此里の八けいなり。是御らんせよさる澤の。池に月かげ残るにぞ。みかさの雪や春日野のしかあいらしくさほ川にほたるとぶ火の有様をかきし模様はしほらしや。なんゑん堂のふぢにはほふすみうすぐもりさつ〜とさつとくま取筆せいは雲の板のよるの雨ぬれてしほれてひたされてすも袂もしどけなくしどろもどろにとゝろきの橋ゆく人はぼんのふの。ねぶりをさますのりの庭東大寺のかねの聲。はや入相とつげわたる扱其外は蟲づくし草づくし。こもんしもふりはんじ物。かゞみ團扇しぶ團扇。うちわめせ〜めされよと宮にしつぼりぬれにけり。

○半七三かつ心中道行

二上り終にゆく道とはかねて聞しかど。きのふけふともこよひと。思はざりつるしでのたび。下地げにやくわんらくきはまりてあいじやう多き世の中や。地人ひとさかり花ひとくき命をらんずれば江のほとりにつながざる船。身をくわんずればきしのひたひの。ねなし草。あはれしきみの水そへて。もらひ涙にくばかり。ときはの松と。契りしに地あだなかねゆへ身をかきいれの。かねの替りに女房になれとせがみ立られ返事もならずいとし男もふたりが中も親にもれつゝふしゆびと成りて。かねのさいかくなりなくければ。思はざりしに身のちじよく。しよせんうき身はすて草の露ときへなば思ひはせじと。夫婦たがひにねんじゆをくりて。南無あみだ。くくく。上オンドねぶつを道の敷取に。ゆけば程なく千日寺の。かねのひゃきに夜は何時ぞ。はやじんしやうの。ゑかうのかねの。有がたや。地いざやさいごをいそごといふて。ひやの東のさいたらばたけ。露か。しぐれか身をしる雨か。オンドブシかさや三かつふくさをたして。つまとくつとをしつかとくゝる。シテ男涙をはらりとながし。アヲ太夫ヲ扱はそなたをころしておいて

にげもはしりもせうかと思ふて。つまをくつておきやると見へた。おれが心はそふではないにと。ッレヒッラうらみかこちてなげくにぞ。ッキ地三かつ涙にくれながら。上地なんのそふした心でしませうぞいの。下地たとへ此世は。得添はずとも。みらいは。いふにおよばずこんどの。上地色づつとこんどのさきの世迄もめうとと成て。はなれぬやうに思ふ心でくつておいた。はやうころして跡からござれと手を合すれば。ヲ、よういやつた念佛もふしや。ッキ南無あみだぶつ。シテ南無あみだ佛とさしとをすれば。ッキあつと計のたゞ一聲に。シテちしほはッキながれて。シテ小袖の。ッキもよふ。二人花の姿もたちまちかはり。顔も心もいとほそくと。物すごければ。顔をかくしてなむあみだ佛。すぐに我が身もふろかき切つて。過ぎ亥の年霜月七日。霜ときへゆく夜あけのからす。かはひ。かはひくとなく聲に。よひのくせつもみなあだし野の。夢のうき世やまぼろしのむかし。語りぞはかなけれ。

○美人ぞろへ

先一番にとよはらの。百枝がむすめ二位の君りさん

の春のほひ水。はだへのつやのあたゝかに。夜半のはつごこ引しめてねてもらひたきおもかげやめもと位だかきまゆぐもり。わろふがごとく。見へにけり。次にかけしはよしみねの。千古がいもと。春かせといふ女いかなるゑのぐなに筆に。うつせばうつすかほばせは今さき出しはつぎくら。にゐおはぐるのうば玉も人のこゝろをやみになせとやまよへとやアア。しづめとや。たれか氣まゝにかきなせし筆のすさみもねたましと。しばらくながめたまひけり。さて又次は中なごんせきおがむすめあかしの君近江の兵衛がうのはな山ぶき。はらからの美女紀のやすむねがおとの姫やゑといへるはいとけなきふりわけがみのみだれても心ちらさでひとすじにいづこのとのがしたひもをむすぶの神のかみごゝろかねて聞かましとはまほし。第七番にかけたるは近江の長者が養子しきぶのまへ雨をおびたるとこなつの。風にめざますわらひがほみどりのふきびん嬋娟として八字のほそまゆゑんてんたりげに三千の戀ぐさも。色香うしなふためしにて唐のぐし君わうしやうくんきひりふじんのうつすとも此うへはよもあらじとつや／＼

見とれたまひければ。君をはじめ奉りしこうのよくわんかんだちめ。まつせの美人これなりとのゝめき。さゝめき給ひけり。

○助六道行

せひなければとけもとは。ぼんぶにて。かのやしゆだら女のいもせの中。ぬるよのさまもりんきのしなも。いまのしゆじやうにかはらめや。かれを見是をきく時は戀とほだいを引わけて。レイセイア道はふたすじ。なきものをいかなればわれくはたま／＼人と生れ出で。ためしすくなき川竹の。ながれにしづむ身のざいごう。つまはわれゆへふた親の。氣にそむきにしゆへにこそたれにか。まけもおとるべき。ちゑもきりやうもしんだいも。みなあわゆきときへうせてかはせし事のかはるをば。かはらぬやうにさきの世でさきであふやらあはぬやら。どうやらこうやらしらねども。いとしかはいのあまりには。かなはぬときの神だゝきそまあわしがうち神はどうしたぐわちな神さまぞ京のよし田の神帳に。いつた神やらいらぬのか。わけもなきけもわきまへず。やぼてんじんか。正五九月や月々にサイモンアシラぶすなどのゝゑ



ん日と。みきたてまつりとしごとに神事といへばた  
いせつにざいしよにいやんすは、さまも。いはるき  
よめてねんごろに。わしもくるわのうちながら。心  
ばかりのたむけをばどふうけさんした事じややらげ  
しんのわるい神さまやかくなるやうの御まもり。さ  
りとはつらやどうよくや。とても此世はこのとをり  
せめてみらいをちがいなく。夫婦一しよにごくらく  
へそれかなはぬものならば。たとへならくのそこ  
までも。ふたり手に手をとりにくみてはなれぬやうに  
とかけまくも。かたじけなしやひのちとにむまれ出  
にしるしには。いかなるこしやうさんしうも。一  
ねんみだの御せいぐわん。なにげくらんたのたの  
めなにはこのことよしあしをつまぐるじゆすのかず  
とりに。とりくさぞやうはさせん。あれごらんせよ  
ゆくさきにはやよこもものたちわたりあけがたちか  
したまほこのはやむるあしはよはくと。つゝみづ  
たひのしのぶぐさ。あけばうき身のすみどころさら  
しなわてにつきにけり。

○かたみおくり

地さるほどに。祐成おしせけるやうは。虎少將女な

ればふかくかくして。いざや時致。ふるさとの。かき  
おき。又はかたみの品々をも。鬼主團三に渡すべし。  
げに尤と兄弟は。れうしすりのうみにする。すみ  
の。泪ぞおちてこきうすき。筆のたてとぞ。哀なる。コ  
ト十郎はともすれば。とらが情をかゑしがき。五郎  
がふでの。すさみには。箱根の別當の御事。扱その外  
は。いづれも同じぶんせうなり。カンイロコト。取わき  
五郎が悦びは。母の不興をゆるされ申し。ふぼけふや  
うの弓矢の道。カンコト。れうもんげんせうの。つちに  
かばねは。うづむ共。なをばうづまじ南むあみた佛。  
五ツ三ツのときよりも。十八年のはる秋を。地思ひは  
ふたりでとやめたり。ハル地延久四年さつきやみ。天  
はくらし。と申せども。思ひぞはる。こよいの空。ミッ  
地すけなり判。ときむね判とかきとやめ。ウレヒアッふ  
でをすて。ぞなきいたり。地なをしかたみぞあはれ  
なる。ハル地はだのまもりは。は、ごせん。ゆみと。う  
つぼはそがどのへ。むちとゆがけは。にのみやどの。  
イロコト。くらとあぶみは。わどのばら。をんない主の  
かたみぞと。おもひ出さんおくり。は。ねんぶつ申し  
回向せよヤレわざとふみにはかゝぬぞや。地びんの

○やをやお七みち行  
(宮古路月下の梅に出づ)

○深草少將みち行

(同上)

○少將忍びの段 小町大鏡

かみはとらせうハハル地よるのさやめの。だきしめ  
し。とめ木のかほりうすくとも。けぶりはすゑに。な  
びきあふ。二世のかたみと見せてたべ。どんすさん  
ぼん。もみ五ひき。わたのたいまで。相添ゑて。ハル地  
わだどのよりたまはりしを。地やりてにやりてわれ  
われが。ハル地きやくのじやまして。にくまれし。あだ  
をおんにて。ほうじんの。ねん佛せよとのかたみな  
り。ごばん八形ゆび人形。ふたりのかぶろが。ほしが  
りし。おもひいだせしをり。ハハル地この人形のそで  
しほる。つゆのそこにや。きやうだいの。下地なきがら  
のおはすらん。あのふぢさはになくかりも。ヤヨヤ  
あはれを。しるならば。地めいとへかよふひとこと  
を。ハル地つたへて。くれのかねうちならし。コハハル地ね  
んぶつゑかうをたのむぞや。まさゑのかうば。つぎ  
じやみせん。ウツ地ひきふねこがれゆくすへの。かた  
みとなづけ。なげづきん。地はながみぶくろたばこ  
入。おろせでぐちの。たれく。ハハル地たばこはなみ  
だに。しめるとも。おもひのけぶりに。むせぶまでか  
た見にみよとばかりにて。ウレイしばしなげきて。お  
はしける。

夫夫地小町御前はしよく上げて芭蕉にひやく松の風。  
もろくもおつる白露の。しらでこよひはいつよりも  
こよなふさむさいやまして。さぞやさぞ。少將の。  
待ちわび給はんいとをしの御事や。おやのゆるさぬ  
した紐はとくもとかれぬ我心。百夜の敷のみつなら  
ばわざくれとんと身を任せ。エ、つもる恨が聞たい  
と。あすの夜を待つ朝顔のはかなき。契りとせひも  
なき詞少將そともをさしのぞき又こそ参りて待ふぞ  
や。今一夜かけたりとてさのみ罪にも成るまじきに。  
こ、明てたべ姫君と。地カ、立よる軒のかげもなき  
御ありさまこそ。いたはしき。ウキ小町も心とび立つ  
計りはしりおりんとおぼせしが。神にちかひの親の  
ばち今一夜さへと押しづめ。百夜の敷を待ちかねて  
一トはな氣なるお詞や空にしられぬ雪ならばあだに  
ちり行く花の雪。まことすくなき御心にたうかう

かと思はれて。はだへの雪の程もなふ。地とくれば  
もとの水くさき男はいやゝといらへける。太夫中地う  
らめしのお詞や。風はいとはす雨の夜は。みの、雪に  
袖ぬれて。雪ふみ分けて行跡は。足につるぎの雪ばし  
ら。雪には笠にかたをかき濡しほたれて通ふ身の。こ  
よひの月のはれぐと人目しのぶのすり衣。よはに  
やきみが待らんと。地かちはだしにて通ふ身を。又こ  
の思ひや有べきかつれなき人のいひごとや。ウキ「さ  
ればとよむかし用明天皇はたまよの姫を戀こがれ。  
さんろが草かり笛とかや。さのみ思にもきぬ事なが  
らあすはよひより侍侍ふ。必々其ときと地いひすて。  
内にぞ入給ふ。太夫詞「少將はもくねんとさりと色  
やおもかげや。玉をのべたる姿とはかゝる事をや申  
すらん。げにや一角仙人が美女せんたらがはだへを  
見て。せんかの術をうしなひしも。ア、げににくか  
らぬことばもや。カン地ひるは病の床にふしよな  
毎にまよひくる。やまぬが戀よさりとては。思ひ切せ  
ばふちとなる。是はいかなる因果ぞと。車のしちにす  
がり付てぞ。なきるたる雪はしだい／＼にふりつも  
り。かんぶうさつ／＼とはげしくて。きこつにやい

ばをあつるがごとし。いたはしや少將は。ふゝきに息  
を打ちけされ。エ、つれないぞや小町様。こゝろし  
ねとのたはぶれを誠と思ひうか／＼と。あたら月日  
をかぞへつゝ。いとしかはいが今一時に。むくへと  
我は思はねど。むくはん君がかなしやと。むざんやな  
少將は二十五歳を一期とし。雪にうづもれ死し給ふ  
はあはれ三重なりける歌「はかなやな。我が妻はなつ  
くさの地かげにこがる、螢火の。もゑいでそめし思  
ひのたね。魂は冥土に赴けど。魄は此世にとままり  
て。此世から八かんのちごくへおつるくるしみを。何  
にたとへんから衣きつゝ。なれにし此車今はめいど  
の火の車。かしくの焰身をこがす。思ひしらせん  
思ひしれ。うらめしの心やあらうらめしの心や人の  
恨の深くしてうきねになかせ給ふとも。いきて此世  
にましまさば。ア、いか程榮えさかふるとも。よし實  
一家にうきめを見せなどあんおんに置べきぞや。あ  
さましや情なや。さらばぼんなんの犬となつて。な  
なへのくさはりは切る、其。未來永々世々迄も。つきま  
とひ行く玉かづら。こすゑをしのごがらしに木の  
葉のちるが三重如くなり。ウキ「小町はいか、少將の

さぞ自を恨わび。歸らせ給はんいたはしやと。しやう  
じ押明け出給ふ。小春の末の月もまだくづれておつ  
る雪の玉。松に音なき曉の鳥もよしなやよしやた。水  
の鏡にかげうつすしうねき顔の恐ろしやと。走り  
いらんとし給へば地ぞつと身の毛も忽に。はつと計  
りにたまざりてむねくるしやと悲しみて。狂氣の如  
く成るかとするれば。二人「夢はさめ行くせき寺のかね  
にこだまぞ」のこりけり。

○半七お花道行 雙紋刀の銘月

(宮古路月下の梅に出づ)

○かまくら八景

立かへるまだ夜をこめて有明の。月のかげもるいた  
びさし。そらもひとつとながめこし。あはれむかしの  
春ならで。過こし代々や世につれてやつす姿のちこ  
櫻。どう三郎御供にていでさせ給ふ御すがた。かい  
がい敷もいたはし。おもふにそはで思はぬに。上地  
そはうき世のにこり江に。上地すむかひもなき水の  
月。上地せめてひと夜は玉だれの地ひぼもむすびしそ  
のまゝに。かく立出る我が妻の心のうちこそうらめ  
しや。地うらみながらも立出て。ふりあげ見れば。ほ

の／＼と。きりにへだたるあはかづさ。出入舟のか  
す／＼は。地えんぼのきはん是ならん。みぎはの鳥も  
とり／＼の上地つがひ／＼が羽をやすめ。上地よせあ  
つまりてふはと立つ。むれるてあそぶ。がんかもめへ  
いさのらくがんおもしろや。地あれに見へしは有が  
たや。地千代や八千代の鶴がをか。くもらぬ御代の神  
かぐら。ウキ「あらしこがらしさつとふけ。かさかやか  
さに木の葉がはら／＼と。地こうてんのぼせつまの  
あたりはるかに高き御山は。いつもかのこの富士山。  
ふもとに田子の入海や。地おきにたゞよふあま小船。  
とまるもしづくもろ共に。涙であかす舟の内下地是や  
誠にせう／＼の夜の雨とも謂つべし。ウキ「雨のはれま  
はあみを引くひくになびかぬつれなさよ。ウキ「君を思  
へばかくしのべどもかひぞなき。つれなき松にふる  
しぐれ。情にへだてはなき物を忘れまじつきせまじ。  
思ひはつん／＼つりの絲。釣つた所がぎよそんの夕  
照是ならん。げにもものどけき海のをも。一首をかうぞ  
詠じける東路や野島の。磯の春風に我がひもいひし  
いもが顔のみとゑいじすてつゝ行程に。さんしのせ  
いらん面白や日もはや西に入相の極樂寺のかねの

聲。是ぞゑんじのばんしやうと。地聞しにまさる八景と。ゆいがみぎはによするなみ。どうくくくくくくと。うと打てはさつとひく。うつ山べにあらね共。夢にもあはぬ我がつまに。めぐりあはせ給はれと。神にねがひをかけまくも。夜をかさね日をそへて。山また山やしづがいほ。のきもるやどにつき給ふ。

○徳兵衛おはつ心中道行

(宮古路月下の梅に出づ)

○傾城佐世の中山 (同上)

世に正本といひて普く清章すれども、いづれも又寫しの故に節に誤り有、章にわづかづゝの違ひ多し、縦ば萩と萩の字の如し、其外上風下露の相違たるべし、仍てあらたに逢吟味を一新板せしむる者也。

宮古路豊後掾直傳

板元 新大坂町 三川屋源七

宮古路窓の梅下巻終

常磐種

目次

- 老松
  - 蟻旅宿睦言 (延享二年六月)
  - 道行月見酒 (延享三年九月)
  - 嬌柳花街曉 (延享四年正月)
  - 夢結時野蝶(おふさ徳兵衛) (延享四年二月)
  - 道戀路の友鳥 (寛延元年七月)
  - 三重製桹船 (寛延二年十一月)
  - 芥川紅葉柵 (寶曆三年二月)
  - 我衣手蓮曙(高野心中) (寶曆四年四月)
  - おなつ家名所妹脊笠紐 (寶曆五年春)
  - 清十郎家名所妹脊笠紐 (寶曆五年春)
  - 床盃响水仙 (寶曆六年十一月)
  - 妹脊塚松櫻(二人浅間) (寶曆七年三月)
  - 松似候男姿(松風) (寶曆七年十一月)
  - 男江口花吹雪富士菅笠(富士太郎) (寶曆八年春)
  - 女西行花吹雪富士菅笠(富士太郎) (寶曆八年春)
  - 垣衣草千鳥紋日 (寶曆十二年春)
  - 留袖浅間嶽 (明和元年四月)

- 蜘蛛絲梓弦(仙臺淨瑠璃) (明和二年十一月)
- 杜鵑花空解(甲斐なくおちよ) (明和七年七月)
- 雪嵐卯花籬(古忠信) (安永六年四月)
- 色映紅葉章(布袋) (安永九年十一月)
- 媚千種錦繪(道成寺道行) (天明三年八月)
- 積戀雪關扉(關の戸) (天明四年十一月)
- 四天王大江山入(古山姥) (天明五年十一月)
- 兩顔月姿繪(葱賣) (天明八年春)
- 戻顔色相肩(戻鴛) (天明八年十一月)
- 百千鳥子日初戀(小松引) (寛政三年正月)
- 信田妻容影中富(葛の葉) (寛政五年十一月)
- 帶文桂川水(お半長右衛門) (寛政八年正月)
- 初櫻浅間嶽(遠山) (寛政九年三月)
- 夜の鶴雪壺(子わかれ) (寛政十年十一月)
- 禿紋日雛形 (文化四年五月)
- 倭假名色七文字(源太) (文化五年十一月)
- 千種花色世盛(大和團子) (文化七年八月)
- 其常磐津仇兼言(三勝半七) (文化九年正月)
- 富が岡屏風八景(小いな半兵衛) (文化十一年九月)
- 壽鞠猿 (文化十二年七月)

浮名たつ身(小絲佐七) (文化十四年正月)  
 松色操高砂(太神樂) (文化十四年正月)  
 深山櫻及兼樹振(玉藻前) (文政元年三月)  
 再夕暮雨の鉢木(雨の鉢木) (文政二年六月)  
 大和文字戀の歌(薄雪) (文政二年七月)  
 一樹陰雪蝨(山鳥) (文政三年十一月)  
 玉匣二葉栴 (文政四年三月)  
 花三升楓盛 (文政五年九月)  
 思ひ指扇盃 (文政五年十一月)  
 寄畏娼釣髭(釣狐) (文政八年正月)  
 汐見湯松常磐津 (文政八年四月)  
 和事色世話(新高尾) (文政八年六月)  
 鴛鴦容姿の正夢(をし鳥) (文政十一年正月)  
 拙筆方七以呂波 (文政十一年三月)  
 恩愛贖關守(宗清) (文政十一年十一月)  
 道成寺思戀曲者 (文政十二年十一月)  
 片大和路轎關扉(宗盛) (天保元年十一月)  
 願絲縁苧環 おみわ (天保四年七月)  
 忍寄戀曲者(將門) (天保七年三月)  
 (後改、忍寄孝事寄)

花舞臺霞猿曳(新うつば) (天保五年九月)  
 邯鄲 (弘化三年七月)  
 笑門俄七福(とてつる拳) (弘化四年正月)  
 薪負雪間の市川(新山姥) (嘉永元年十一月)  
 乗合船惠方萬歳(乗合船)

常磐種

○老松

「抑松のめでたき事。萬木にすぐれ十八公のよそほひ。千年のみどりをなし。古今の色をみす。秦の始皇の御狩の時。天俄にかきくもり大雨しきりにふりしかば。帝雨を凌がんと小松の蔭に寄り給ふ。此松。たちまち。大木となり。枝をたれ葉を重ね木の間すき間をふさぎて。其雨をもらさざりしかば。帝太夫といふ爵をおくり下し給ひてより。松を太夫と申すとかや。かやうに目出度き松が枝に巢をくふ田鶴の雛をば。君にさへげて御子孫は「龜の。萬ごうふる川の。流れたへせぬ金銀珠玉どう。どう。どう。と御藏のうちおさまる家こそめでたけれ。

○蟻旅宿睦言

江戸ガ、リ。ほととぎす。なきつるかたを。ながむれば。中地たへぬ思ひは有明の。つきのみやこの。くものうへ。長地あつもののおもひ人そのふのまへの。身の行る。水のながれを。せきとむるぬまづの。宿に日をお

くり。あたにくれゆくゆふざれの。そらに。ねをなく鳥のこへ。エ、うらやましの。つばさやな。めいどの鳥ときくからにさきだちたもふ。わがつまに。あいたい見たい。なつかしと。なみだのあめのさつきやみ。よいは。ほしのあゆみもちらりとひとの音なひさびしくて。物うきなかに。かねのこゑ。二上り行念アッ夜中よねぶつそりやたがためにナ合しらでわかれしちのためなまいだ。合くくなまいだ。ハ、キげにさんがいのみほとけも。合生死のくもの。はれやらず。ねはんいらせたもふ。なり。合ましてや。ほんぶの身なりとも。ねがはななどか。たのもしきたれかちかいのあみにもれなん。詞おくより女立出てこれくしゆぎやう者おもしろい哀なところをしよもふくとのぞまれてかねうらならしひやうしとり。さるほどに。平家の一門さいかい四かいのなみのうへ。おきにたよふともち鳥。いたわしやあつもあり。公。いちもんのふねにのりおくれ。くまがへが手にかかり。ついにはかなくなりたもふ御身の。うへぞあはれなる。ウレイカンきくにつけてもおいとしや。あつもあり様のかほばせに。見まがふまでのあのしゆぎやう

じや。イロ詞うつらふものは世の中の人のこゝろのは  
 なにぞありけれ。はなならばなどかあだにはちりも  
 せで。すがたのはなのやなぎがみ。かせあらば。なび  
 かんいろのみへけるぞ。ざんげにつみもきゑぬべし  
 かたりたまへとありければ。詞しゆぎやうじやにつ  
 ことうちわらひ。われはいやしき木のはしの。見へた  
 通りのしゆぎやうのみち。おいとまもふすと立のけ  
 ば。そでひきとめてこれまたんせ。しゆつけににや  
 はぬ。くろかみのそのうつくしいかほよばなうらお  
 もてある人ごゝろそれでもしゆぎやうの道かいナ詞  
 「ヲ、夫こそはゆい。一心すがたが世をばいとおふか  
 こゝろのうちこそ佛なり。詞その佛あればこそしゆ  
 じやう有といはぬかへ。ほんのふすなはちぼだいの  
 はじめ。ぼだいのとうゑ木にあらず。さとれば佛ま  
 よへばゆめ。むみやうのやみの晴渡る。廣きちかいぞ  
 有がたき。

○京土産 道行月見酒 常磐津文字太夫直傳

二上り歌「つゝゝ井筒の水は。にこらねどあたらし  
 よひの雨ぐもり。中地のちの月見の名をおしむ。長地カ  
 カりはれまをいざやゑひざましうかれあるきに二つ

齒の。下駄の合はなをのろ手綱。合くもゐにかけれ  
 ときのまも。重三がこしのきんちやくに。三味の勘  
 九がたばこ盆さげてぶら／＼とまわり。ごくらの。月  
 のかほ。カ、リ地そこへそれ／＼こきんさん。おそい過  
 怠の約束は。西の風俗八文字見たい／＼となげかけ  
 る。聲もかわらのさよ風に。ナゲアはぎやす／＼きの。  
 つゆもみぢ。エイカン牡鹿めしかのありさまは。もや  
 うさながら秋の夜の。かげに出あふたやまと橋。びん  
 とすねたる。ふせうがほ癡話もくせつも門中は。なわ  
 てもてんと口あひに。なりぬのくせとこれがよい。こ  
 れはとつたとなめす／＼き。すひ物はこぶふり袖が。合  
 しやうじにうつるさはぎ歌。本調子歌。きやくがほんの  
 公平ならば女郎にあふてふらるゝはづはなつけんけ  
 れども。女郎にあふてふらるゝからは。女郎がほん  
 のきんびら。したりや／＼ゑいさつさ。公平。詞「ハア  
 アうたふは／＼こりやたまらぬ。サア勘九弾かけい。  
 「まかせておけろちやんとんてん。歌女郎にあふてふ  
 らるゝはづはなつけんけれども。女郎にあふてふら  
 るゝからは。女郎がほんの公平。したりや／＼ゑい  
 さつさきんびら。ハヤカ、リ地かほのあかいはまへだ

○嬌柳花街曉

れの。うつりにてらすはたる茶屋。めやみの地さうよ  
 そみして丸やの行燈人形見せ。四條どをりのやぐら  
 まくや。が。て。難波のあやつりを。こゝにうつして  
 大伴の。真鳥ときけば竹本が一トふし残すかとりひ  
 め。ハリマサハリ「ちざりを二世と兼道のふた子のうは  
 さ三笠村。よめのおさくがうすひき歌。詞是此芝居で  
 おじやらしめるナンヨへ。ウスキ歌京の中は花  
 ざくろ。見かけにはなりそふで。ならぬきのどく。ナ  
 ンヨへ。カ、リ地だきつかふにもさすろにもよごれた  
 足のうらめしき。木履のヘエどろやと打わらふ。お  
 どけじやら／＼露しぐれ。こゝに風が名を上しまづ  
 ま興次兵衛が道行はヲ、／＼／＼嬉しやナあれ  
 あれをみやむしさへもつがひはなれぬあげはの蝶わ  
 れ／＼とてもふたりづれ。こちは四人ゑふたどし横  
 にあるいてかにつち。假はしこへて見あぐれば。ひ  
 ゑのお山へだんだ走の雲のあし。降てくるはと袖笠  
 合ひちがさみかさもまさるあひる川。むら／＼ばつ  
 とむら雨しよていくづるゝぬれすがたかしこの。や  
 どりに「はしりつく。

「忍ぶれど中地いろにうつろふ花の雨。空にしられぬ  
 雪ならで。となりもまねく笠の音。ふりみふらすみ  
 時ならぬ。紅葉にてりてあかねさす晝と。よるとの。  
 江戸カ、リ通ひちもいくたび。匂ふ花川戸。水の行衛の  
 瀬にかはり。淵にも替る濡すがた戀の並木の右左。人  
 めまばゆき助六が。我身の姿。其まゝに。かたて人形  
 のかけろふの。とんぼうむすびにはち巻は。あけを  
 もうばふ紫に。染てゑがいてふりもよきうらつけ帯  
 を。引しめて。長地妻とさだめしあけ巻をこがれてか  
 よふおもひねの。こひとあたとはふたりがなかに。長  
 地かはすきしやうはたがひのむねにひとつ印籠ひと  
 つまへ。ほころぶ袖に手をこめてつかふ人形しほら  
 しき詞「ヤア、是はみな様お揃被成御せんせいとみ  
 へ。お顔の色もおめでたや。ア、どこやらの人さま  
 はおひよりが續きましておめでたや。どこもかしこ  
 もおめでたやと。しりめにきつとふくませて恨のい  
 ろを上巻は「ム、あちな事はんすのコリヤちつと  
 聞所。コレ人形そなたもあのやうな事き、やつては  
 だまつてはいやるまい。又すねさんすか。そりやお  
 まへあんまりなみ、こすり。これにはたんとい、わ

けありサアござんせと取つく袂を「ふりはなしア、コレ／＼ひけばやぶる／＼つかめば跡にしはす浪人。むかしはやりがむかいに出る。今はやう／＼なきなたの。藤屋の伊左が夕霧もおなじやうな此すがた。一申ちへもきりやうもしんだいも皆淡雪ときへうせて。かはせし事の替るのも。詞腕久と松山のむかしがたりも今身の上。誠にひよつとい／＼かわし。一日あはねば百日に「かつたかやもほろぶとや」ア、もふおいて下んせへそれはふるい口舌事みんなわたしが聞ている。我身のつらさをくみわけず深い恨のはねつるべ。びんとさんしたそのふりはわたしに死ねとの事かいなお前とわしが深い中くるわでしらぬものもない。親のゆるしてそへといふ男をきろふて此里の勤するのもたれ故ぞ皆。こなさんがいとしさの。あまりにくいひぞりやうそのやうにむごい程。なんぼうにもわしや思ひ切られぬ因果さは見れば見る程人のすく。その風俗をてばなしてしばしもあはねば氣にかゝり。顔みぬ内の氣ぐるふさもし又外にじやうくらのあだつき事はできまいかと是。ほんに／＼それはいくせの物あんど。おもひやつて下さんせと泪

ながらによりそへば。「つきたをし。詞ア、コレ／＼そのいひわけもふるい／＼。ア、そのてのなみだにたらされて是までだいぶんおなぐさみ。被成。たは。此所聞。ひら様とやらべら様とやらが。のばりつめ。天の岩戸のかみごもりくいがりがおすきじやげなハチタキ。こちのおもひはくにもたず。あちへ根びきのだんごうし行たい顔がちら／＼と。みへすくみへすくほんに見へすくびんかみ。わけのほつれをつい結び。く／＼枕もけなりかろ。のでも山でもうそつくやつにはされたがよい。ナ、一言もござんすまい「わしやさう思ふているわいなさふだんべい／＼。詞「イヤモほんにあきれて物がいはれぬわいな。エ、面白さふになんじやいな。人の心もしらすしてあんまりないぢりやう。夜ごとに替るうき枕。ほれた顔してすかぬ客すかぬ顔してすいた客。あるが勤のこの海。サイモ。水くさい氣を見せまいと。客のかちとるあまを舟さほな車とせはしなくヒロヒめ。ぐ。紋目をあげづめの。しこなしぶりにせびらかし。のまれぬ酒にむねいたみ泪の雨もふりだして。浮をたすくる袖のむめ。長地カ、リすいな客衆をあやな

せば。指をきれ。かみをきれ。つめをはなしてくれよとて。それは／＼は色々のむりとぎりとにぬけにく。ちへのわ出して。まにあはず是程つらい身の上。深ふおまへののぼりつめ戀のなかなる戀をして。お顔を見るをたのしみにまつていたかひもなく。むごやつらやどうよくやともちたる人形なげつけて。ひちにくいつきしがみつき恨なげくぞ道理なる。詞「助六ぐんにやりと。手足もなへてちからなく。五段歸りの人形の水かねぬけしごとくにて。詞ヲ、尤々それ程誠の心なら何しにうたがひ有べきぞ。恨はないとゆふ露の。打てかへたる顔色にほどけてむすぶあげ巻は。猶もおもひはますほの薄。しなだれかゝる袖袂。「またのえにしとふりきりて「行をやらじと」追風「野風」さら／＼さつと。せうじふすまをあげまつ夜半の友がらすかはい／＼とこひのやみ「はる／＼あふ瀬のたまくらに「かねもなれ」とりもなけ」のかぬ妹脊のやまかづらながくもつる／＼やくそくはいく夜の春をやちぎるらん。

待遠くかぞふるゆびをむすびしは。君におくりしつめほども誠の戀があるならば。見すつる人はよもあらじ。あだとうそとを勤わけ。アミドシ人の氣を泣むるづ／＼やに。水のつやよき川竹のしんくの糸とほめられし。ツナゲ地おふさはつまの徳兵衛に見捨られじと手にすが。長地思ひをきりし帯のはし残る恨とすてもせで。こがれて出る蝶一つ。花に寄べの水くさき。諸男のこ／＼ら浪の。池のこほりも打とけた。中をさき行く。江戸ガ、リ風の音柳の髪をすき通す。櫛にはあらで香に匂ふ。詞小袖にはあとカレヒ地心づき見れば見るほどつまの紋。我身の袖とひきくらべ。詞「ヤア此小袖は主とわしとがおもひ染。おもはくの裏模様。疑もなき徳兵衛さん扱は此池へ。はア、かなしやのふと打ふしてしばし涙にせきのぼる。合 諸心亂れしてしどけなく。詞小袖をとつてハ、／＼ほんにぬしさんはこ／＼にじやもの。コレ徳さんかよふこそ爰へござんした。わしがいふ事聞んせや三下り「こ／＼はもとより九重の。マヒ地みやこのまらにきてみればいたるけしたるものこそあれ。合はりこの顔やんぬりちごしゆくしやむすびに笹結び。やましな結びに風車。

○かされるづい夢結時の蝶  
むつごとに。心のたけをいひのこし。中地又の逢瀬の

ヤアひやうたんにやどる山がらくるみにふける友鳥。合虎まだらの糸のころおきやがりこぼしふり鼓手まりやおどらんはりこゆみ筒まもり。守る妹脊の神さんも見捨て愛の池水の。底いもしらでしなんしたいとしいゆかしいなつかしと。とへど答へも口なしのいひがひもなきべにがのこ「小袖なげすて身をもだへ石を袂にひろい入れ。身をしづめんとかけよるを「徳兵衛走り出でコリヤはやまるなと抱とむる「エ、トおどろく顔と貌。ヤア、徳さんか嬉しやと。其ま、袖に取付いてそゝろ涙にむせびるる「徳兵衛もなみだぐみ。其しんていを見とけてそなたをころすがいとしさに。したわれし帯をきり水くさいていを見せ我ばかり此いけへ身を沈めたと思はせば。そなたの心にあいそがつき今迄の戀もさめ思ひ切つてたもらふとわざとかうした作り事。我は元より主の爲死ねばならぬうき命。そなたはながらへわがなき跡をとふても詞さらばと袂を振きつて行をやらじと引とめカンッレハア、それはおまへどふよくな。是ほどこがれてきたものをほんにいふのがうそかいな。長地つとめはなれた眞實はお前の心に

覺へがあらふ。どこへなりともにげさんせ。たとへならくの底までも。合いき代り。合しにかはり。おまへのゆかんすさきへ。どこまでなりともついで行く。それがいやなら其やうにうまれつかぬがよいわいな。とても此身はどのやうなくなるしいつらい情ない。淺ましい身となるともおまへと一緒にそひ通し。ふたりならんで世帯して桃と柳の雛あそび。かはいらしいやうんでだいて。今ね、してさゝめごと。たのしみふかうと思ひしにおまへに色々くろふさせ。此池に身をしづめ死なしやんしたと思ひつめ。死なふと覺悟きはめしをまた。うたがふてのあてこすりむこい男とすがりつき。たゝいつ泣つくどきたて落る涙は戀の淵深き恨ぞ誠なる「ヲ、道理々々あやまつた。その心のしんじつがあだにならふか此上は。さいごをきよふと手をとりにて二上り「びんのほつれをなでつけるゆつのつまぐしかみかけて「のかじ「はなれじ「かはらじと合「袖と袖とのうき名ごり「わしもおまへの顔つきを「わすれぬやうにいづまでも「おれもそなたの姿をも「こんどの／＼すつとこんどのまたそのさきの。さきの世にも。合はなればせ

じとナナルすがりより地カ、リイザもろともと打とけてわきざしするりとぬきはなし。さやをさいわいさかづきとなく／＼池の水をくみみらいもながくふうふのかため。呑むすびあふ鯉口や戀とぬれとのいもせどりおしやうき世を引トリ「すて、行くかふよと見へしが夢をくだくや山おろしこすへ木の葉もばらばらばつと黒かみのちりてみだる、元結もく／＼りまくらとひとつ夜着さめてはれゆく庭の面。

○戀路の友鳥

三下り「かけてよいのは小さをに小袖。掛けてわるいは薄情。濃いと薄いはそめて知る。秋の錦の草の花。たどる心はから衣きつ、馴にし里を出で。中地妹脊の中うすなかりの星合も。世のうき。合雲にさへられて。曇る月夜の二つ鴈。ひよくと。合人もうらやみし。長地情さかりの諸つばさしどけなりふりつまもる。萩や桔梗の色好み。名もおふてふとうたはれてはやす鼓の調べより。長地しめつゆるめつおふせをかこつ。ゆふべ計か今川が。勤はなれて眞實に男思ひのちはだし。此世の契りあさじうの。中地小野の篠原忍ぶとも。心定めし二人づれレイセイカ、リ手に手を。とりて行迷ふ戀の

よるべぞ哀なる。詞「是長さま。わたしはみらいの程が思ひやられて悲しうござんすわいの。「エ、又ぐちな事ばかり。したが女房とはしらいで色に迷ふて心中したと。世間の口に言はりやうかとそれ計りが思へば／＼口惜ナア「今川わつと。聲をあげ。其お詞を聞に付け。猶悲しさが増わいなと。夫のひざにいだき付き聲もおしまぬむせび泣き。中地袂もしめるきり時雨。カ、リ地中塚村の夜あらしを。あとに追手とうたがひの。二人が命すて小舟足を早めて道芝の。露よりもろき浮身ぞと。無常をつぐるこやの聲。「鐘のかすさへ折りかぬる指に。こぼる、袖の雨。合古事迄も思ひ出しこそぞの花見をかこづけで「くるわ遊びの夕げしき「二階さしきの賑はしき「よそのさわざを笑ひしも長地思ひいだせば早や昔ほんに。二人が馴れめは「おまへのもやうのお小袖を借たが縁のいに枕。わたしがきやらの一たきをかはいらしいとコレ。ソレ譽さんした其きぬくの。嬉しさは。又のあふせを松蟲といはしやんしたが身にしてみて。のわきの末になきあかすうづら。うつらと思ひ寐は。蟬のもぬけのうつかりと二階の椽に立盡し。そなたの空が主さんのど

ふ思ふていさんしよと。合あんにてばかり。いたわいな。今は身にそふ中なれど死なねばならぬ此命。未來の縁を樂みと女心のくりごとにしやくりあげてぞ泣きいたる。詞「ア、歸らぬ事をくどく」と今死る身にさりとは。たしなみやいと叱られて「今川涙おさへ兼ねエ、しんきな事を何んじやいな。縁がなれば恨もない。ぐちがほれたかほれたがぐちか。合ひくてあまたにはり強き勤の弓の川竹の。長地つらい中でもこなさんにあいたかつたとしがみ付き。落る涙はあらひ髪藻をシヤオトシしぼるが如くなり。地カ、リ夜も更け過る松風の。音を人かと氣もそ。見付けられじと袖を引き木蔭に忍ぶかり枕。二上リセツキヤ」夢の夢。ゆめの浮世にうき事を。我身にかこつうたかたの水の行衛の置所。お菊も同じ思ひ妻。そはれぬ中とあきらめて。死る覺悟ははつせ川。わ。た。る。つらさは白なみの。あわと思へばいと猶心合細道歩み兼ね涙にくらく行なやむ。道其屋跡にさがりて與茂三郎。愚心のべらくと。しどろもどろの詞つきふしやうらしくも。とがり口。詞エ、此菊とした事が。めつたに先へいておれはまへ子にならふとした。

「是そんな事はすとも南無阿彌陀佛となへたがよいわいな。」ヤもふなむあみだ佛か。まあ死るといふ事がいつの世から始まつた事じややらさりとはいわい物好きじやぞ。どふぞ死なずにそはれぬかといふ事いふぞ哀れなるお菊は夫に打向ひ。ソレ其やうにあどない事はしやんすのが猶いと。愚なお前を世の人に笑はすまいと明暮に。長地思はぬうそもゆふ月の陰や。合ひなたへたち廻り。おまへのそふした心にてわしを女房とかはゆがり。わきひら。合見すの眞實は。世界の。合男にや有まいと。わたしが心でじまんして樂しむかひもない。悪縁ぞや。お前も覺ていさしやんしよ。外の女子に物いわんしよが。ふつたりりんきせまいぞとたしなんでいても情なやア外見さんすりや。腹が立つ。此まあ女子には何なる。なせ。殿御には。生れ替つてこなんだと。ぐちな女子の心より。あどなふなるもおまへゆへ。死ねばならぬ義理になり。必ず死んで下んせと諫めすかせばせんかたなく。たどりし後より。是も戀路の死神のついて來りし身の因果「こなたも夫婦「あなたも女夫「中をへたつる絲薄」をのとはいはじとふろうの。

愚に向ふ車の輪。めぐりくして我しらす。四人目と目を見合せて。ふつと吹消すてうちんのもとに隠るる「月のくもくらさみやみじを幸ひに。互の姿忍ぶ草。そろりく歩めども。足音響く木の葉の蔭。拂へばそよぎ「したへばのき」そちよ「こちよと」迷ふ間に「はや横雲の山かづらねぐらを。出づるとも鳥かわいかわいの戀の道わりなき。なかとぞ成りに見。

○三重襲艳船

二上リ「たどり行く合今は心も亂れ候末の松山思ひの種よ。いつの頃より逢ひ馴染て。千種の色に通ひ路の。中地露も梢にのぼりつめ。うき名身にしむ秋風に萩もすゝきも吹きさそふ長地鐘さへ月に音をふくみ無常をつぐる十徳の。姿にかへし腕久は合なれし文七難波の足どりも。しどけ。なり。ふり。くるひいで中地をちこち人の言の葉に。乗せてうかれて淀舟の。棹の雫とまき散らす花も揚屋の夢枕。中地いまは現のかねの罰。人めのまがき空どけの朝なくのみだれ草おのれとうかれ出る日に。しほむ姿のとりなりや。ねすに妻こふさを鹿の聲もしほる、計りなり。松山跡にしたひくるすがたかよはさねざめ鳥合泣て明せし

手枕は親に不孝と思へども。好た男と添通す心の誠引しめて帯もゆるまぬうきつとめ。廻る紋日もぬしひとりまかせまいらせ候べくの。文の数々錦木の。あづまへ下るふたりづれ。もつれてとまる秋の蝶。「コレ申し腕久さん氣を取り直して下さんせ。爰は大阪ではないぞへいんまも今道行く人にとふたれば爰はもふあづまじやといなどふぞ氣を付けて下さんせいナア「何んじや氣を付けい。とふから付けてゐるわいの。しかも茨木屋の幸八といふ揚屋迄が付いてゐるアレくたいこ末社も打つれてコレハくくくくくくくく。然も麻上下で何んじやおみだう参りハテお夥しい。佛様事より女郎様事がよかる。何じや女きやいの。佛様事より女郎様事がよかる。何じや女郎買ひじや。麻上下で女郎かひヤコリヤ又氣が替つておも白かろヤ何。女郎買じやない茶の湯じや。幸ひおれも十徳はきてゐるとふもいへまいくホ、ヲお手前見事いやア御亭主流儀は何でえすエ。何。ハテわるいていしゆぶりかな。おればつかりに口をきかしてドリヤ一つぶく下されうか。お茶の口切りたざらす日元ハ、いかいたわけ「コレ譯もない何いはんす道行く人も笑ふぞへ笑ふても諷つても恥かしうは



ないかいなエ、うらめしい心ない主の姿のみだれしがそれ程におかしいかあのしどけなふならんした心の亂れは誰ゆへぞ皆わし故じや松山じやコレ顔見せて下んせと目に浮く涙すりよする襦のもみちのこき薄きこのもかもの露しぐれ歎く袂をふり切つて誰「また狂亂の心付きけしき替つて聲高はち／＼。ノウ物給へのふハア、浮世じやナアハ、コリヤコリヤ／＼五百貫目入れて揚屋で習ふた投節をたつた一文で唄ふて聞かすがナア一文もない事かやい。サテモきつい物じやぞ一文さへくれかぬる。一門一家に見かざられたよりなき身のこの姿を。わらふは／＼わらは笑へちつともそつとも大事もない。藪から棒さほのさき鈴。石はらくわん。かべに耳。さるの繪馬。月夜に釜。鯉ひようたん。挑れにつり鐘背に腹。ゑように餅のかわとんぶが鷹。からすが鶴のまね合ノ手ハ、ハア又それ／＼そのやうにしどけない事いはんすがわしや悲しい。其お姿を見るに付け迎もうきめを見ようより。いつその事に死にたいと川邊へ寄るを「どつこい／＼ハア、粹じやなく粹じやによつて水へはまるかすいと申すも水

の事。水と申すもすいの事。粹と水とはよみ一つ。傳へ聞く李太白は江に望み。水の月を撈んとて淵へはまつてうき草の。身を投ふしとナゲテも命は詞有るものか此うき命も何んのその。役に立つかいの。立つかたぬか蘆べの波の。笠歌あなたへざらりこなたへざらり／＼／＼ざら／＼ざつと泣いてしまふた。ア、正體なや情なやどふぞこゝろを取直し氣をしづめて下さんせ。やいの。やいの。もつれ寄る。「イヤ袖をばづして後へ廻り。泣け／＼きなけ狂ひ泣けわけなきことを夕がらす翼かはせし仇人の身の果何と淺ましやと。芝をしとねにふしけるはよその見るもあはれなり。「松山傍に立寄つてそれ／＼其やうに狂はんしたら一倍お氣がのぼらふぞへ。どふぞちつとの内でも氣を鎮めて下さんせ。此川を向ふへ渡れば人里もありそふなどふぞむかふへ渡りヲ、幸ひ幸ひのそこに船がある。ホライ／＼名にてらし中地高ききこへはいにしへの。五湖に棹さすものゝふを。移して爰に世をのがれうき世を渡る柴船の。中地灶ぬさきより身をこがす。暮の蚊やりの隅田川とまおし明けて「たれじや／＼あすでなければ舟は出さ

れませぬぞ「イ、エイナアわたしとたつた二人どふぞむかふへ渡して下さんせ。「ハア女中の聲で二人連れとはへエ、聞えた。コリヤ江戸へ奉公に出て旦那の内で夫をこしらへ。故郷の小松川へ歸る杯といふ様な人か誰さやうならば逆井の船へお乗り候へ。ちちくつたむくひにて候ほどに。此舟にはかなひ候まじ「イ、エイナアそんな者じやないわいなア。わたしや大阪もの。つれそふ夫は氣が違ふて何をいふてもたわいなし。それでわたしや氣が顛轉してゐるはいな。「ム、何といはつしやる。つれあひは氣が違ふたとサテ／＼それはいとしい事。それなら乗せてやりませふ船賃も取るまいは。氣違ならば船賃のかはりに誰面白う狂ふて御見せ候へ。さもなくば此舟には乗せ申すまじ候「エ、おかんせきけば爰は五百羅漢の渡しではないかいナア「いかに「人を助くるが菩薩の業。如渡得船とお説なされた。五百羅漢の渡しならこつちから望ますともらん舞でもして見せさんしそな物を。望まぬからはとう／＼船に御乗せ候へ。「ハテどふいへばかふいふと掛口がうしやなる女中かな。ドリヤ／＼顔を見よふハア、實に

實にこれは理なり。見れば喜代三と驅藏によく似た人を渡し守。「乗せて下さんすか「乗せいで何としませふぞいの「ヲ、それはマア忝うござんす「サアサア氣違殿はわしが手を引ませふこなたも靜にのらつしやれ「ハア、嬉しうござんす「ア、コレ／＼女中下にゆるりと居さつしやれサア船を出しますぞ胸りせまいぞやそりや出たは「ヲ、こはやのふ「ア、じつとしてゐさつしやい／＼どふでござんすぞ「ハツアまたよい景色では有るぞイヤ申しお船頭へアレ向ふなアリヤ何じやいなア「ハアドレ／＼ム、あの流れるのかへ「あいナア「ハア、ありや古い下駄の誰ながれるにて候「イ、エイナアそんな物ではないはいナア白いやうな嘴と足の赤いやうな物はアリヤ何じやいなア「ム、白いやうな赤いやうなエ、あれを知らずかへありや誰西瓜の皮の流れるにて候「ヲ、しんきアノ鳥の事じやわいなア「ム、鳥の事かへ。ありや沖のかもめでおんすわいなア「女「ナニヲ千鳥とも云ひ鶴ともいひ所に住む人ならば都鳥ともいはんしそふな物じやにナア「實に／＼是は誤つたり。名所にすめど心なく。詞都鳥とはいはずして女「沖の鶴とい

はんすは昔にかへる業平の男、塚は芝原船の形女、行  
 さき遠きアノ寺は、男、エ、あの寺かあれは五の橋宇  
 左衛門寺「われきまたいざこととはん都鳥。有りや  
 なしやの妻戀は故郷に残す物思ひ。それに引かへて  
 我々は思ひ合つたる女夫間。ひよく重ねしつまと袖  
 俱に纏て吾妻路の、此うき波に船競、堀江の川とよみ  
 置しそれも昔の艶男、いまの此身は難波津の、堀江に  
 近き新町に「松の位の八文字その道中の名につれて  
 「思へば、かぎりなく遠くもきぬるいもせ鳥さき  
 迎はノウウ腕久さん正氣に成つて下んせと絶り歎くぞ  
 いぢらしき「サア、船が着きますぞム、ソレ  
 ソレ、當るぞ、静かにあがらつしやれ、ハ  
 ア、かたじけなふござんす御禮の申しやうもござん  
 せぬ。いかいお世話に成りました。なんの禮に及びま  
 せふぞヤコレ、女中尋ねたい事があるわいの「エ  
 何でござんすいなア「まさいせんから聞けば大坂の  
 ものじやといはつしやる。その上あの氣違殿を腕久  
 さん、と介抱さつしやるが。近頃卒爾な事ながら  
 こなさんは若し大坂新町の女郎松山殿とはいひませ  
 ぬか「ヲ、あなたわいなよ御存じじやがわたしを

松山といはんすおまへは、ム、扱は松やま殿か「アイ  
 ナア「そんなら何を隠さふなごや山三基春がなれる  
 果じやわいのウ「エ、そんならお前は姉さんの「いか  
 にも小野のおづうがおもわくじや、ム、そんなら申  
 し姉さまお通さんは「ナントした「しなしやんしたわ  
 いのふ「ヤア何お通は死んだ「アイナア「それはド  
 ド、どふして「殺されて「其物語はいつの頃  
 「去年八月中のころ「殺したやつは「伴左衛門「殺した  
 所は「ところもやつぱりひがし山「そなたの父は、小  
 野の道隆「それから後は文もこす「便りのない筈い  
 ナア「かへり討にあふたかハ、ハ、ハット計りにど  
 うと伏し前後不覺に泣きしむ。ヲ、ハ、始てお聞  
 きなされておなげきなさるゝも道理さりながら。腕  
 久さんもおもはしやんした其時よりあのやう  
 にお氣が違ひました。おまへもハット思ふて氣を違  
 へて下さんすなへ。ヲ、よふいふてたもつたしかし  
 おれはめつたに氣を違へる事ではない。エ道理こそ  
 はじめからおづうが顔によふ似たと思ふたがドレド  
 レモ一度顔見せてたもハア、まぢや、あんまり  
 お通によふ似たがもしそなたがおづうが幽霊ではな

いかや「ヲ、コハあのさんはわつけもない。わしや  
 やつぱり松山じやわいなア「何んじや松山じやどつ  
 こい、油断はいたさぬアかふも有ふかい。日頃お  
 れがお通が事を戀しゆかしいと思ふ其心慮にのつ  
 て。コリヤ横田入の夫婦狐がおれをたぶらかしにき  
 おつたナア。ヘエ、めつたに化さるゝ事じやない。幸  
 爰に青松葉是をくすべて狐の正體顯はるふ。もし又  
 おづうが幽霊ならば時に取つての反魂香。これぞ女  
 房淺間が嶽。もしや心のかはりやせんとかはす起請  
 に誠を見せてすへの約束かための誓詞なせに煙とな  
 し給ふあらうらめしや「腕久むつくと起上り二人が  
 中へすつくと立つ。松山おかしく申し、山三さま  
 わしやおまへに無心が有る「むしんとは何んじや何  
 んじや「おまへわたし客になつて下さんせ「エ、此  
 人はつがもない。客になれとは又どふした譯じや「さ  
 ればいなわたしが廓に勤めた時田舎から來た武士の  
 客がござんしてその客を腕久さんがそれはたんとせ  
 つかしやんしてな。またしては口舌の種今又お前と  
 わたしが傍へ寄つて咄したをどふやら物の有るやう  
 に二人が中を分けさんしたはなんば氣が違ふても悟

氣の心でござんせう「ヲ、やきもち、サアそれで  
 おまへを客にしてしつぱりとあふやうにして見せた  
 らば主の心にエ、サアモ惜いやつじやと思はんした  
 らひよつと本性にならしやんすまいものでもないコ  
 レおがみますどふぞ客に成つて下さんせ「ハアム、  
 きこへた、二人の爲に成る事なら客に成つてやり  
 ませふ「ア、忝うござんすと腕久が十徳を假のはを  
 りと打着せてヲ、どふもいへぬ羽織きさんしたら中  
 中立派な人がらじや「どふじや、よいか、ヲ、  
 よいはいがかんじんの大小がないはいな。「ヤアほ  
 んに大小まちや、有るぞ、みやげにせうと思ふ  
 たがコリヤ此たうもろこし。しかも長いと短いが二  
 本迄有るは「ヲ、コレヲ大小とはホヲ、出來た、  
 「何んと、思ひ付きの大小と一つに取つて腰にさ  
 し。松山が客じやぞそのけ、身は武士じやぞ。し  
 かも侍じやぞ。武士じや。侍だとほ、うやまつて申  
 す。誰抑是は桓武天皇むたいの後胤。舞アシうんつく  
 太子のまうし子にて稚き時はあんだら丸。そつちは  
 粹の骨長狐。こつちはふられる合點で例の大小摺ざ  
 し合ノル詞みかく鎌髭物がたく。女郎に逢つてはした

たるく床急ぎする酒きげん。其取形のいやらしさ。むりに抱付く顔とかほ。詞どこまでも身があひとげて見せう「そこをわたしがふるわいナア合ふかい浅いのへだてなくつとめは同じ事なれど。すかぬ客にははり強くむりとは知つて義理を捨て。涙のうきめふるなでもいひぬけられぬ床の闇。ねむる禿に呷て「おた。ば。この有るをないにして。呼んでだまして文か。せ。間夫へしらせのいそがしき廊下の音のせぬやうに。手くたを隠すうさつらさ合雨戸明けても夜はあけず。合月をうらみて目を招く罰も。報ひも。みらいの罪も。只うか／＼としらぬひの作り病のうきつとめ皆男の爲ばかりコレ聞かせと椀久が。袖引よすれば「ふりかへり」ム、ハ、夫れがかうじた物狂ひととも濡たる身なれども。一村雨をいとほじと立寄る軒の釣簾とはすしらす尋ず世をいとふ。法師は木の端と。思ふはやはよ、キ渡守「川にたゆたふ船さへも「あゆみがあれば渡らる、戀の願ひもあみだ笠「うき名流る、おなじ澤吾妻の森のこなた迄狂人狂へば不狂人ともにつれ立つ惚れ歌三下り「じたい某は、大阪のもので合ちつとしそこなふ

て／＼こんな形に返らなれた／＼合あんまけんびき／＼さりととはひき／＼捨ろぞへ合ざつとの坊／＼東をさしてつん下らば形見に琵琶宮ひつちよつて。戀しき時にはべれつく／＼ひつびいてはかん慰むべい合座頭の坊昔をしのぶむらさきの頭巾いたく竹の杖。此十徳も過し頃ゆかりの人の其形見戀しいわいのと投捨る。「松山涙とめかね一申スエルいとしやお前も戀ゆへにちゑも器量もしんたいも。皆あはざからはる／＼と。連れてやつれて戀ごろもきつ／＼なれにし初嵐。夜寒を凌ぐ此頭巾此船長が頂戴々々「正體もなき椀久はアレ／＼／＼くるは／＼。合沖の帆陰のしら波に羽た、き狂ふ友千鳥。ともにくるひてあなたへかけむかふへめぐれば「風に散る尾花にさつと吹きむすぶ。松の木の葉のばら／＼ばつと。おもひみだる、草の花露をはらふてふしまるぶ。てんねんりんじゆのしやらくにて。花わけごろもひやうたんの羅かほる十とくもいまはむかしになり平の塚のこなたにやすらひぬ。

○芥川紅葉欄 作者塚越二三治  
二より「夢にさへ花にざれたる蝶一つ。風に狂ひし蝶

一つ。合女夫そろへば蝶々なれど三つの街でわかれて。つれて。合つれて別れて涙の露を。こぼしそへたるうき名草。思ひの種の名所かや。合地鳥亂れて聲すごく玉のうてなも。空に風すさまじき夕やみも百夜通ひしこわたの里。長地契りもいと、深草の少將が身のなだたるや。合うきをかこちて打託て。戀の重荷に肩をか。しつかと背に大内を。夜半に紛れて忍び。出そこはかとなくだとりつ。めあての星のきらきらと月は此身を捨舟のなみ／＼ならぬ惟仁の其御行衛を尋ねわび。とへどうき世の偽に雲がくれぞと夕しぐれ我も煙となら柴の。もゆる思ひを押へつ、みはなれぬ中の二人づれ。ほやの薄の穂に出ていでそよ。合そよぐ小松原。本調子小石交りの砂川やぬらさじもの。手を引ば早瀬にすだく蹴さへ合我身をなくとふりかへり見返りかへるつま袂袖はひろせと思へども。戀の久世戸のあらみさき神のとがめもおそろしとわれと我身にみをつくしこも便と立留り「コレ申し少將さんもつたいないおまへのおせなかにおはれたり又は此やうに手をひかれたりして二人ながらうき苦勞するも何故じやどふぞ惟仁さまにお

目にかゝりたいと折角此芥川迄来れども其甲斐もなふ惟仁さまは崩御じやといのふ「されば／＼せひもない世の有様惟仁君先達で崩御なれば生きてゐてかひなき命いままいふ通りいつそ死んでしまはふかいのふ「もとより此身は覺悟のまへおまへさまさへ合點ならわたしやしぬ心なれどよしない自ら誤りゆへおまへ迄殺すといふは「ハテ又愚癡をいやる合點の上で死ぬからは何んのいとひがあらふもふ夜明けに間もあるまい人目にかゝりやわらいマアかふじやと手を引て「タリ「薄のこかげに忍びゐる吉次出陣「風渡る空に比翼の女夫星。身過は同じ荷ひ賣。かよひなれにし昌道そよ。そよ送るそばの花。浪立寺のほまちとて出花の花香賣りそへて。二人が中のはなだ帯解初めにし謎の橋。渡りかねたる世の中に。わしら女夫はいそがしく。夜すがら終日荷ひ茶や雨にも合雪にも肩せい／＼まつかせまかせ八幡山。ゆみや八まん男は氣で持どつこい／＼。ひらにひらかた山崎千間賣寺橋本腰元がてんか／＼がてんじや／＼かたせい／＼めしませ／＼。ふうみよし、花まさり。「サア／＼大和茶を上りませい言葉のはながもしや

んとしたほまれは花の若ざかり廿の人の木と書て茶といふ文字になるといなかほりは深き都の異流れ流れしその流れ宇治の名物初昔唐土にては建溪を茶の名物と稱するなり。「ヤイ／＼こりや女房夫を差置き茶のつらねかいかに夫がそば切賣じやといふてエ、聞へたコリヤ我におれがそば切の伸くさつてゐると思ふてみそをあげるのか抑蕎麥の因縁は「なんとじやへ」「サアおんゑんは「どふじやへ」「ほ／＼うやまつて申す」「こりやおかしい何の事じやへ」「又こいつが夫を尻に敷きをかそれ本草綱目にはくそばは氣を下しわたをゆるくしひやくたいたいかせつりに用ゆこんなちんぶんかんしんの早い賞翫ぶつかけがたつた八文々々をこで坂東彦三です」「何をいはんすやとらじやら／＼した事を「いよ／＼そふいふ所のぼつとりとした風は瀬川の／＼」「コレこちの人坂東彦三といふ者はそんなうはきなものじやないぞへ」「サアそふ堅いは親父の時代さ今は和らかですはのふ」「イヤもうあんまり氣の軽いもの女房の身にしてはア世話のやける物じやてい」「氣がるければヤイ女房我が世話になるか」「ヲ、世話になる此頃のそふりはわ

しが胸にはすきと合ぬでござんすそふ思ふて下さんせエ／＼／＼／＼／＼エ、あの顔はいの「イヤこいつが／＼いはせて置けばてい主をばかにしてをるモ一言いふて見よゆるさぬぞ／＼」「イヤいはふかいの「エ、めんどうな爰はなせ」「イヤ／＼放さぬ／＼」「放せといふに「コレ待つた「ふり切る袂を「しつかと取り、これ爰な人口舌どころか色どころかいとしかはい、眞實を今更いふもぐちなれど。つゐした女夫と思ふてか。それにおまへはにくらしい。ちよつとじやれに。つめらしやんすもコレ此やうにしぬるもかまはぬどうよはいつそしねとの事かいなおまへゆへならいとねど。ひよつとわたしがしんたらば。色ます花をいけ。かへてひとり眺めてるよふでのそりや。成りませぬならぬぞへならぬ／＼こんりんざい。假初の口辯に。もはやいやじやのあいたのどどれ。ど／＼／＼／＼／＼どの口で此口でか。よふいはんしたでかさんした。合そりや。あんまりじや／＼どうよくなとびんとすねたるとりなりは。一輪咲し水仙の梅とならびし如くなり。「イヤこいつが／＼なましたゝるいゐるけんきゝたふないぞ」「聞たふなふても

いはにやならぬ外の女子とじやらつかせる事はならぬアイぬの字じやわいなぬも／＼縫箔屋の大きなぬの字じやわいなア「イヤ夫を仕置だて置てくれよいはせておけばと拐おつ取りふり上る「ヲ、た／＼かんとせたくんせサアた、かんせとむしやふり付を「小町少將押しへだて「コレ二人ながら短氣せまいさいせんから薄の蔭で聞てゐたコリヤ思ふ中の小さいさかひの隣の亭主どふです／＼コレ／＼小町仲直りをさせてやりやいのふ「おまへもむりいはす道の端に酒はなししやうもやうないわいな「ハアいかさまハヤそばや茶ではどふもなるまいし。でも此分ではすまされまい一トさしやつてすてふか「エ、お前もたしなまんとせつた今死ぬる身を持つてゐながら「サ、そこちやによつて形見におれが舞ふのじやわいのなんと是で御夫婦きげんをして下さるまいかへ「イヤ是はよからふ女房共機嫌直して「こちらむきや「おまへさへきげんがなをりやこちにいひぶんはないわいの「そんなら女房共「こちの人「さらば見物いたさうか「さらば一トさしやりかけふか「こより秋萩の枝折にをじか／＼啼ば。あすはかならず時雨する。雨さ

へしんきな事はいのふア、どふなりと。なるぞいな。「逢ふは別れとかねてはきけど。ゑ／＼さたらぬは人ごころた／＼さへしんきな月の顔ア、どふなりと。なるぞいな。こいで／＼と待夜にこいでまたぬ夜にきてにてよねはかるよね計るあづまの踊はおもしろやおもしろや合松のはごしの月みればしほしくもりてまたさゆる又さゆる都のおどりは面白や／＼いとすとのが見ゆるやらいぬがなきそろ四辻に四ツつじにきやらのかほりときたんとはかほりと／＼きだんとはいく夜とめても留あかぬとめあかぬなにはの踊は面白や／＼いもせかはらぬめうと中「こりや女房共ちよつと御意得よふ「あらたまつた何じやいな「最前から見るとふたりが形かたち合點のゆかぬ物じや儘にきやつは此芥川のこん／＼ではなにかいの「エ「さて／＼しよふが有るヤイばけ物め化のかはを顯はせよといふに「少將心付なる程そちの推量の通りいかにもきつじや／＼調ヲ、それ／＼／＼／＼

いかにもわれらは狐の見いれ。イロしゆしやかの野邊のひとかまへに隠れも嵐の音に聞おとはといへる契情の。古狐の骨長に。戀の毘にかけられて。むすぼほれたる身なれども。いまはいたちの道きれて。きちきつちくろく。なをりをねずみ。納戸のかきがねはづすが大事。おやのかね箱あくるが大事。過し彌生のみゑくとや君が道中小づまをしやんと。すあしの音やふりかくる。かぎりしられぬ我思ひ「エ、おかんせとむなぐら取つてひきすへてどこやらあぢないひがかり。詞のはりの水くさき心の内をと忍び泣き」二人はふたりをきよろくみてコリヤきつい物。めうとも女夫すんとのしよてから始めから。色じやの色じやのしかもくせつの花ざかり。その咄が聞たい聞たい。誰「これは一大事のことを御尋候ものかな。詞始終をかたれば長い事ちよつとつまんで咄さふか。所望じやくそヲれ。花の種は地に埋もつて。千林の梢にのぼり。月の影は天にかゝつて萬水の。底にしづむ。浮も沈も二人がまよひ。互に登る戀の山合わるういふのがしよての色。見て。みぬふりが初ての戀。いつかみそのに咲匂ふ花のゑがほを手折そめ。解ても

つれて又結ぶえにしは「つゐの事ならず合たとへ此身は此川のせにうき名は流すとも。花に命は塵あつた川三つ瀬へちかきこの野べや身のはかなさと有りければ。そふ思ふてなら今さら。くいの八千度百夜まで。通ふたわらはがうるさいのか。長地いなせのないはふつゝかな身に。なぞらへてむりならずとかごとばかりにさそふ水いなんすけしきもあらばこそ詞サアそこが大事のしあん所。萬葉集の悪名を糺して死なねば後の世まで合まよひの種の花の色朽ち行くをのちじよくぞや。これより館へ立歸り。おぼろげならぬ垂乳男の心をやすめ給はれとさましくいさめ給ひける。小町は涙もろ共に。ほんに思へばゆめかよ。つぎくしきの色みへて人の心のはすはさをそれぞとして有明の月夜に行はくからすまよひのやみのうすぐもり思ひつもりし雪のよはこごへし袂をうちらはらひく身をしる雨のよはの酒。しやくにさはればなにくれと。恨て泣てあかつきは鳥もよしなげかねもなれ。又ひとり寐のみだれがみ誰とりあげてゆふだすき。岨のかけはしとけしなさ合あゆめばもどる小車の榻のはしがきはしたなくの

せられたまされたらされたがわしや腹が立つ悔しいと。いとゝなみだのせき守はとめかねてぞ見へにける「そふ思ひつめた事なら今さらとめやう道理もない小町覺悟はよいか「一刻もはやう惟仁さまに追つき御供申すが此上の願ひ「すでに。かうよと見へしとき。中をへだつる「しづの男「賤の女けしきかはつてゐぎ正しく「合點の行ぬ兩人小町と少將が死をとむるはやうすが有てか何とじや「よきかなよきかな兩人の者これひと親王の御命を助けまいらせんとこのころ盡したの冥慮に叶ひたりされども一たん横難をのがれ給ふこうぶくあり。小町は陰陽の和歌を詠じ天道にかなふ詠吟たらばたちまち雨はふるべきぞよ「少將が未來記「小町が未來記「兩人まよひをはらさせんところは參州善通寺曼荼羅に安置なせし「佛法守護の四天と名づけし「持國天「增長天これ迄あらはれ出たるなり二天の聲と聞へしは岨ふきおくる松の音二人ははつとおどろきてしたへばきゆる水の泡くさ。ばうらうたるばかりなり。よくよく物を案するに夢にゆめ見る世の驗眞如實相第一ざくう生死の去來大虚の如し清淨けんごのみやう體

をた。ちんらうの境界におかさせまじきおしゑぞと。悟ればむねのあくた川花ちる花のはな野の花さきくるひたるものがたり。のりのもしの花篋後のちかひに残すらん。  
○我衣手蓮曙(高野心中) 作者塚越二三治  
■前彈「我が胸に花あればこそわが胸の。中地てふのかよひち風さそふ。長地さへて吹れて顯はれて得失由來夢裡の世を。げにこゝろみにとをつ國。かんたんの里ならずして。こゝは所も高野山三國。不雙の名山たり  
●詞「爰に四の黨の旗頭熊谷の次郎直實は敦盛公を討しよりうき世のすがたあぢきなく。戰場より出家して蓮生法師と改名し。地カ、此高野山にいまそかる「その一睡の髣髴と。今みる如き一の谷昔に返る波の音合しゆらのちまたと聞へしは常きく法の松の風。一朝の夢と破れしかば。ふと目さましあたりを見ればうせんとしてゐたりしが。詞「はれふしぎな事やなわれ弓矢を捨てはや昔過つる一の谷の戦に無官の太夫敦盛公をうつたるを世にいたましく思ひそれより出家して蓮生法師と名を改め晝夜をわかつた念佛一ッさんまいにゑかうをなす所に今とろく」と睡る

内はれかはつた夢を見たなア縦夢にもせようつゝに  
 もせよ凡俗のむかし思ひ出すもけがらはしやア、少  
 しも早うわが草庵へ歸りませふ。平家、跣足座して  
 昔を思ひ迷の雲もはづかしと。露しほ／＼と立あが  
 り。地さあらに我が家へ歸らんと。通ひおぼへし道  
 のべも心に辿り立歸り。跡の名所もくりそゆる。其  
 先々の玉ぼこや。杖取直ししぼしとも。我身は是も  
 旅よそほひの。たれたづぬるにあらねども心に思ふ  
 御山を。明暮おがむ有難さそも／＼此み山の形とい  
 つば八葉にひらけ。八ッの峯寺は都卒の内院を表し  
 四十九院はいらかを並べげにも佛法不退轉そのれい  
 場の。掲焉くあゆみをはこぶも理ぞや。げにとことは  
 の衣下も。又こん事もたま玉川に外記おもかげうつす  
 水鏡有縁の。我等なればこそけふしもこへ來りし  
 と地カ、いやりすてし丸げの。しめてほどけて  
 薄や萱の。三谷あま野の土手づたひ雨ふらばふれ西  
 の空龍臥の洞のおり／＼は昔ゆく露のあさむすび。  
 つまづくあしもと／＼とみねより。をとす。た  
 きの白絲さらりさら／＼とつとすがたながる。引取  
 「川流やしかももとの水ならで清き流を汲みて知る

合とく／＼の水わらんすの紐は裳にとけかゝり。ま  
 へでむすんでうしろにむすぶ藤の花夕むらさきの色  
 色は彌陀の御國のしるしぞと感涙にしむ紫竹の杖。  
 花坂の茶屋こへ行けば入日まばゆき合群鴉そのかた  
 さまのうはさにや。まつにかひなき三鈴の松。合くれ  
 がた。さむきたびのきぬわれにもひとへかしいた村  
 はや。ぬか星をふきいだす木の芽時の夕あらし。はら  
 はらはつとふき落てまことをはこぶ道芝を踏み見ん  
 身とは思へども心の迷はれがたき。己身の彌陀や唯  
 心の淨土をたづね諸共に一つ蓮に法の師と尋るみち  
 をしるべにて。われも思ひのおき所しはは是もや  
 どりぞと「傍にこそは休らひぬ。三下り」高野かみそり  
 一挺かふてたもれのさふたり輪廻の黒かみそりて。  
 この世からしてれんげにのりて。彌陀の御國でお  
 とごとへ合ふきそゆる風にうき名も高の山長地若葉  
 あを葉の。道茂り合ひ。隠れ忍ぶによけれど。ア  
 ア顔が見にくの臆かげ。春の名媛の花のゑんつぼみ  
 の花をちらしゆくウツカ、リ姿愛らししどけなく。レイ  
 セイまよひ出たる黄昏に合はの／＼かほる白無垢に  
 つるぬぎかゝて衆之助。おむめも共にほうかぶり。中

地たれにならひし合妹春事。うき世の文セアチちざり。  
 かなはねばながき未來をねがはんと腰にしきみをさ  
 いたづまわかくさよりも草むすび。つまぐるじゆす  
 の玉の緒もたへなば合たへよとしのびあひ。けふは  
 しんみの女夫づれ今見はじめの見おさめと。おもふ  
 につけて父母のさぞ未來にてわれ／＼を。にくいや  
 つともおぼされん。そのお叱をうけんとて冥土へい  
 そぐ二人連。▲詞「これお梅どのふしぎな縁から今の  
 うき身。とに付けかくにつけ此衆之助は死なねばな  
 らぬこの身をなは女子の事じやによつて人も見ゆ  
 るしそふなもの何んと思ひ直して死なすにしまふて  
 下されまいかや。詞「何を水くさい事はんすやら長  
 い未來で女夫にならふと二人言合せての死出のみち  
 お前一人死なんしてわたしに跡にのこれとはそりや  
 あんまりどうよくじやそんなむごい事いふて下んす  
 ないなア。三下り」わしはお前の。前髪を長き未來も  
 わしがこの合なをさぬひたいそのまゝに見たり見せ  
 たり六道の辻の街は多くとも。はぐれまいぞとゆふ  
 べのそらにとぎれ／＼の戀の橋。渡りおほせし氣苦  
 勞は舟にも舟にも合つまる、だけはと御幕の石を。

一重。つんでは親のため合二重つんでは身にかへて  
 おつとのためとより添ば。「エ、ぐちらしいなんぞい  
 の。▲何かは思ふ。▲何かは歎く。長地、たゞ世の中は  
 こぎゆく舟あとしら波のうき名川。▲ゆききの人の  
 同向にも是こそお梅や衆之助。▲なきしるしぞと口  
 口に高野へのぼる折りからの譏を殘すをせめても  
 の。▲かたみと思ふて死んでたもふとした縁が。惡  
 縁の互にやいばを身にうけて。いく重の罪を三ッ瀬  
 川えにしも淺き身の上と。くやみなげきて伏沈む。  
 「お梅は涙目にもちて。わしをぐちじやと言はしやん  
 すお前がみんなぐちじやぞへ。死ぬるはもとよりよ  
 ろこびといひかはしたはうそかいなア。▲ぬる夜の  
 首尾に。おほぞらを通ふまぼろしあひもせぬ。合長地カ  
 カリうき身のつらさかなしさは合相圖の袂ひく時に  
 びんとさんしたにくらしさにくいも合元はかはゆさ  
 の。あまへてお前にくひ付いた合紫匂ふふかい中あ  
 ふた契は片岡のもりの下紐とくるより。長くもがな  
 と願ひしも夢や現に見ならして。▲同じ姿で▲同じ  
 日に。死ぬる計りが▲まことぞと。人目なければ  
 抱きつきくどき歎くぞ道理なる。詞「ぐちといふそな

たもぐち詞しからんすお前もぐち。二上り「愚癡あれ  
ばこそ誠があると世々の教へのかね事や、キ七墓  
めぐる修業者の。夜な／＼わくる草の露合はらへど  
つみを置そふる。世を助け人世捨人。詞、蓮生立出給  
へば、それと見るより二人も便りこれ申し御出家  
さま詞、なんぞさす詞、心ざしの手の内と、さんやか  
かさんのため詞、ホヤ、どれ／＼ヤレ／＼しほらしい  
ても扱もやさしい心ざしじやのふユ、忍かうしてや  
りませふなむあみだ／＼／＼詞、どふぞふたりが  
詞、エなんと詞、サアあのふたりが親たちの回向をし  
て下さりませい、詞、ム、ハテかはつた事をいふ衆じ  
やわいのた、今もと、さんやか、さまの回向といは  
つしやるゆへ回向をしてしんせるにまたどふぞふた  
りがヤアトいふたりやどふぞふたりがおやたちハテ  
いかい事親たちがあるの、サア、合點ゆかぬわいの  
詞、なせにへ詞、ハアテかふ見た所がふたりながら賤  
しうもない衆じやがそれにまあ供をもつれすたつた  
二人が此高野の山奥へハア、きこへたわいの、「さて  
はふたりの子どもしゆは。戀のいろはか角もじか。り  
んきか癡語かいきはりか。ふたりつれたちそろ／＼

と高野の山をこれもにかまへてさいてくりよ。さい  
てくりよ合さいてくりよと思ふて詞、エ、いやらしい  
なんじやいな契情ではあるまいし、合、それは野女郎  
やすき女郎の事なるべし三界をはしりめぐる此坊主  
はあなたのかたではしつちよ／＼しちよ／＼。こな  
たのかたではでん。でん。でづるでんづでんとうちめ  
ぐりて炭のおれか詞、木のはしかといふやうなこの法  
師。回向をなしてまいらせんと。しさいらしげに合  
掌しそれ揚屋の體をながむれば合太夫ひきふね弘誓  
の舟合さながら聖じゆ來迎の落日のまへ巾着、總花  
のふる大じんを取りとめんとて大一座。「となりへハ  
ハ、やらじと臺の物。すせん蓮花の上に坐し八功  
徳池の水遊び。たがいに「くひあひ」をしり合ひいき  
ぢやはりや「佛もみだも」元より衆生さいどの爲さ  
あらばおいとま申さんと。今を最期ときも付かず。我  
が心ざす敦盛の「御墓の方へぞ行過る 詞、ヤアお梅ど  
の目にか、ればわるい覺悟はよいか詞、がつてん  
でござんす南無阿彌陀佛々々々々々々、かひなき命。  
ながらへて何かおしまんいざもる共と。最期をいそ  
ぐ折しもあれ合かねる紙屋の礎のひ、き山に明け行

く鐘の音見付けられてはよしなしと。袖と袖とをし  
ほり合ふ涙につれて雨はる、名残の露やおきそふ  
る。しづ枝敷そふ残んの櫻。ちり／＼ちり行く命の  
きづな。心中。諸願しつ地成就のおしへは爰ぞと脇  
ざしを。數珠にもちそへぬきはなし。互に怨名を唱ふ  
れば折からさめく峯頭は月。吟々とてりわたり樵  
歌半斷愁情を催す夜半の松の風よその哀を吹そへて  
四方に其名を残しけり。

○おな、家名所妹春笠紐

三下り長崎アミ「戀といふ字を。金糸で縫せ。すそに清十  
郎と寐た所。／＼。中地覺ても元の夢の世や。我名はま  
だき絲櫻。ハ、地夜半には。合おしやひるならで。人は  
それともしらすげの。いた／＼笠は。輕けれど。地お  
もきは父のかたみぞと。長地笠に浮名のもる、香は。  
花のさかりのもろ姿。袖にふくめる戀風は。中地滿の  
はじめの梅の雨。露も外へはもらさじと隠す狩屋を  
教ゆるも。戀故くらす迷ひのやみも。てらす手しよ  
くを案内にてざしき傳ひに。合忍路や合、戀の白波深  
かけれど。長地カ、りいたきもつる、柳がみ。濡てもね  
んとかね言の。いひかはしたる妻ならで。おもきが

うへのさよ更て。聲も。合つ、むと。するがなる。中地  
狩場の狩屋此軒も。立ならびたるはじめぞや詞、是申  
し時致さま。おまへも清十郎と名をかへ。世をお忍  
びなさるゝも大望のある故。もふ爰が狩場の入口で  
ござんす程に。随分きをつけて見さしさんせ合點か  
へ「扱も／＼そなたは深切な志じや。今迄は狩場の案  
内知らん爲。わざと假のたはむれ事。今更面目もござ  
らぬ去ながら。五月下旬には敵祐經を討ならば。どふ  
で此身は死ぬ覺悟。生ひ先長きそなたの事一つには  
又。親への孝行。もふ是からはおれが事をふつつりと  
思ひきつて下され。や。是。おなつどの。へんじをさつ  
しやれい。是。是。どふじやぞいのふ「おなつはそば  
によりそひてどれ。顔見せて下さんせ。人にはつか  
り思はせて憎いしようじやないかひな。長地わたしや  
お前に身を捨てうき名。いとほ心根を。ほんにかは  
いと思ひもせいで。外に逢ふ瀬のさそふ水。いなんと  
思ふうき草の。むごい仕方じや胴慾ないやがらんす  
を知りながら。常にお前のその笠をきて出さんすが。  
目について。花見遊山のさき／＼もゆききの人の其  
中にも。合よふ似たお前じやないか。すげ笠がよふ似

たふうと。こがれくし明暮も。思ひ亂るゝわしじやもの。つれない心じやどうよくなと。袖にすがりてくどき泣く聲も立ねばいと猶「思ひくらべて清十郎。ハア、うれし人の心やな。長地兼てそなたの知る通り。ハリマサハリ深き願の有るなれば。末のかためも成り難し。本意を遂げた其上は。情の思は忘れまじ。ちぎりは深きえにしぞと。手を取。じつとしめる手を「ヒロヒ」し。め。か。へ。したるふところの「ひよんな心とつめられて色づく肌の紫も。ゆかり尋る。奥座敷。忍びくひそめ行引道合。二上り「人め。なけれは。いとぬ戀に。姿いとへば音隠す。てうづの水を汲ながし。明る。ふ。す。まも濡て行。ひへたる足をついわりなくも。二人が中の。宵やみは。月も思ひの有りてかど。恨にかへて程もなく雲。はれ出るうしろ山。下紐とけぬ恨貌。それにはてしも長廊下引道合。庭の千草も濡てぬる。中地夜露をいとふ袖の笠キ。そなたの露に濡がみの「亂れ果じと取すがり「かうなるからは二世三世「うさも「つらさも「語り合ひ「替るまいぞや替らじと。互につまと。陸奥の。忍ぶにもる。風のとが。袂ももすもはらくと。卯の花まが

ふ雪のあし。又おしへ行く小柴垣。夜半に紛れし道草や。引道具木の間く品のさだめ合今見るやうに思はれて。過にし頃の花の宴。長地カ、リその夕暮に。ヒロヒ結。び。そ。め。ぬる夜の床に引しめし。その色絲のねもさへて三下り歌「宵は待わび夜中は恨み合ほんに夢にとうた、ね枕。鐘にせかるゝ憂き思ひ。合おきさんせ。きたわいなさいなおまへも思へば無理ばかり。どふなりとへ合。あはぬはづなら。夜毎の夢も。ほんになま中見ぬがよいに。うつゝうか／＼ひち枕。合おきさんせ。きたわいなおまへも思へば無理ばかり。どふなりとへ合。淵は瀬となる。男の心。合ほんに指折り數へりや夢よ。あはぬ昔がましじや物。薄きちぎりと。白絲の。むすばれとけし寐巻帯。あたになり行くあぢきなや「今の手引は。あしたの露の合。死出の旅路の道引と。手を取かはし行さきの。合あしも進まぬ飛石傳ひ。妻とあゆめばかたからぬ中を。引取吹ちる引道具花ふゞき風がもてくる鐘の音も。しのゝめしらす横霞。白一文字。たな引し。合小もんむらがる群鳥あけぬさきにとおしゆれど。合まくの定紋おはりなき。なごやの笠に濡るとも。討と定めしその狩屋

爰にありく有明の。月に星こそ忍ぶ夜の。戀のあだかや身の仇と。尋ねたづぬるちぎりかもう世の春をやかぞふらん。

○床蓋响水仙

作者塚越二三治

前彈轉寐の枕にたてる「まぼろしや。それにうつゝの。合。レイセイ「かげろへば。中地寐て見ぬ。夢の身にしみて。ハッ地胸おどろかす。夜風も。我にもものよ。こだまかと。ちやに心を。ヒロヒお。き。まどふ。霜のやいはにきへて行く。はだへの雪の。死顔も。長地えんにひかるゝ。黒髪の。みだれて物や。思ふらん。く。合雲にさへざる三井寺の鐘。がうく。と。告げ渡る。詞。矢橋は。ふつと目を覺し。かしこを見れば我子の死骸。思ひ寄ねば。びつくりと。氣も狂亂の。身をあせり。立寄んとは思へ共。我身に誓ひし戒を破られもせず捨られず。心で心にわたかまる。りりやうの玉のたまの緒も。きゆる計に。ふし沈み合。ふびんの者の有様やな。まゝ敷中と死までも「我を恨みて此世をさり。嘸。かなしかる。口惜かる。母が心の悲しさを。推量してたも推してたも。いとしの子やとかきくどき聲も。惜ます歎きしが。やうく顔を上げ詞「これ里松。必ず

必ず邪慳な母じやと思ふてくれるなよ。そなたの爲には眞實の母じや。イヤかふ計りいふては合點が行くまい。何をかくさふ自らは。する海底の龍宮城に宮仕せし女なるが。或夜の月のあきらかなるに龍の都をうかれ出で。詞爰よかしことさまよふ内。なんせんぶしう大日本山城の國おたぎの郡。詞みぞろが池の辻堂へ立寄ともなくうつゝ共なく。一人の殿御に逢馴て。もふけしや、はそなたじやわいのふ。えんも月夜の月の光は鞍馬の山へ入るさのやみ。戀の間路にうか／＼と龍宮城へ歸りしに。生をへだてし人間とついでしたかりのまさな事。詞龍王へ聞へ罪せられ位を奪はれうき苦勞。ある時龍王勅を下し。其方元の官を望まば。粟散邊土近江の國。瀬田のあたりに住居する秀郷が妻となり。彼が所持なす夜光の珠を奪取つて立歸らば。其功勞にめんじつゝ。位を返し與へんといと畏き勅を受け。二度此地へ浮み出で。傳につてして此家へ入込み。あら嬉しやと思ふ内。思ひがけなくそなたに爰でめぐり合ひ。飛立つやうに思へ共。大願には代へまじとわざと見知らぬ他人むき。ッレヒ詞かはいそふにしほらしい事いやつても。叱つた



りつめつたり。幼心に此母を。むごいものじやと思ふて死んだ心の内。思へばくあぢきなや。堪忍してたもこらへてたも。おしやいとしや可愛やと。痛とつかへに氣ものほり。たうつとりと。詞いとし我子を肩にのせ。てうちくあわ。かぶりくくや。ありやどこ参り「石山参り。あづまからげや。おしよぼからげの。あいよはお上手。ころぶはお下手」おさな遊びの大道廻りこめぐり「お月様いくつ。十三七つ」また年や若いな。姿見せずにくるりとめぐくるり。合くるりくるくくかざ車。めぐる因果の。車の輪。聲もかれ野に。合引捨し。薄が招く。合菊がうなづくの中に。恨みの葛のありく。と。氣も狂亂のくどくと。思ひはやまと。撫子の。花さへ實さへ猶更に合同じ種とて人間の。から紅に咲物を。薄くも濃くもはな衣。情なふも秀郷が手に掛けられてこのていと「うらみつかこち。身をあせり。とやせん角やと思へ共。さすが恩愛淺ましく心に込めし言の葉を」はつたと忘れ詞「アア思ひ出して氣を取直し。ハア、そふじやな二上り」とても我子に。今一度。逢見ん事もかなはねば「未來を照らす夜光の珠。菩提の爲や身の

望叶へてたべと「觀念し。血汐のけがれに近づく手足もわなくく。ふるひ。わななき。したひよる。念力かたき石山の。観音さつたの力を合せてたび給へとて。我と逆立つ鱗の利劍。所は湖水の上が瀬や。星か螢かばらくく。みづ。に。流る。せきりうの。合村雨過る花ふき。こかいをかけるかう龍の。勢すどくくはげしく。合波をけたつる和田の原。はたひろ餘りの大蛇の姿。合障子に寫り怒りの顔色。我子をかいたみ立寄しはおそろし。かりける。三重有様なり。一セイ語。しら波に。嵐の音のはげしきは。名にし粟津の松原を。ともに誘て寄せぬらん。抑是は。田原藤太藤原の秀郷とは我事なり。われ勅せんにもらわれて外記。出立其日の装束には。世々忠臣の立烏帽子。合花鈍子のこきくれなる。鏡を取つてざつくと着なし。合紫いとや練貫の合。二重。小袖や太刀むかばき合「長絹の袖さはやかに。弓と矢。携へ。あたりをばらひ威風。りんく。だうくたり。詞。山頭には夜孤輪の月をいたゞき。洞口にはあした一べんの雲をはく。物さはがしき我家の體。太刀わきばさみ。物の具堅め。立出見れば女房の矢橋よな。けしきばふたる其有

様。様子を言へ何んとく「エ、恨めしいナア」ム、夫に向ひ何が恨めしい。「サアその恨。といはんとせしが胸おし静め。脇へ取なす目に涙。合おそふ來ながら。憎らしい。思はせぶりな。何んじやい。な。合地すいた男とめきして。合いもせ結ぶの。神さんのお世話たのます馴初めの。女夫の中じやないかいな。何疑ふて何聞いて。常にかはりしお姿はわけがあらふ言はしやんせ。サア。言はしやんせ」と言ひくろめたる取りなりは。雪に柳のたよくと。さはらば消ん風情なり。詞「秀郷。里松を引つ抱へ立上り。コリヤ矢橋。わが恨めしいといふは是かと。死骸を見すれば。矢橋は詰寄。恨めしうなふて何とせう」何が「來よふが「ヤア、サアお前の來よふが遅かつたによつて」ム、夫で恨だのか「アイ。何じややらモウ人になつかり氣をもませて」ム、待兼てか。合、かねに待夜も。八聲に別れ。さくらに見初め螢火に。こがれく。て。心にかゝる秋の月。冬の闇の戸ひきしめて。合はね打かはす小夜千鳥。ねぎめく。に愜氣して。分けの有たけ。眞實の。お内儀さんの。有るけれど。合こちの心は。わきめもふらず。女子同士の。あいそうに吸

付け多葉粉の付けざしも。心で詫して呑わいな。是。きかんせとよれつ。もつれつはひまつはる。葛かつら寄れば「突のけ引はなし。詞。秀郷。詞をあらためて。汝よく合點せよ。假りの親子の慈悲をたち。某が手にかけては。誠の親の將門が。朝敵のとがめのがさんと。そちへ對して寸志の誠。「あらく。語り聞すべし。詞イデ。其頃は天慶二年冬の空。朝敵退治の官符を給はり。下總の國。さる島郡に押よする。三下り。敵の城には兵具をつらね。くれないの旗錦のはた。紅葉かやく。時雨の雲。らんぐいさかもぎ備へを立て。待掛けたり。詞。其時秀郷。駿馬に鞭うち。手綱かいぐりゆらりと乗り。士卒を下知して味方をいさめ。江戸サハ「たとへば將門魚鱗にかゝり。後に猛勢屯をなさば。鶴翼自在に。かけ。ちらすべし。純友大手をつよく防がば。味方の勢をまきほぐして。手痛く攻打ち。うち寄せく。ヲ、くくくく。おさきはぐんじゆつきせいのじゆつ。爰にあらわれかしこに隠れし幼子の。死の縁すなはち法の道。詞。煩惱有れば菩薩の縁。身の願ひとは乳の下の夜光の珠を取得たらば龍宮へ立歸れ。知らずや汝八歳の龍女も。南方むくの

成道を得たりとや。是。經論のふかしきなり。望のたぬ其上に。何に心の引かるゝぞや。何故とは曲もなや。雪折柳のみどり子は。秋より後に散り行萩の。詠「もとあらざりし身なれども。かりの色かの夫に別れ。我子に別るゝしんるのほむら。みやう火の羽風仇なる人につきまとひ。恨をなさで置くべきかと。念力するどき心の刃。心の劔をふり立て合。ふり立てたち向へば「あなたへくゞり」こなたへはづせど「猶執着の立さらで合」かげろふ「稻妻合」水の月かや姿の花か。ちらりちらり引取ひとみをめぐるせうめいの詠「見上れば雲の波。煙の波。せん／＼として。かいまん／＼。みなみの海の八千里や。北のなぎさのいを淵も。かりの我子へ追善に。教へはじんだつざいふくさう。へんせうを十方みめうじやうほつしんぐさう。合御法も深きみづうみや代々に。たへせぬ秀郷が。田原の系圖「龍女のはまれ」誓ひは。永き瀬田の橋今の。世までも言傳ふ。

○妹脊塚松櫻(八つはし又は二人淺間)

作者塚越二三治

歌ガ、春の湊は。何々送る。合花をからけて。いかだ

へのせて。合うはきな波の追風まちて。戀の重荷を地つみならべ。あだといふ字の帆をかけそめて。情の磯の船まちは。沖にこがるゝ。姿かや。色調けいゑん燈くらふして。心いよ／＼せきれうたる。曾我の十郎祐成が義理もなさけも。一重帯。めぐるゑにしにの仇心こがるゝ胸の埋火や。ひさげの水のわく火鉢げに春ながら雨ひへの。そのせうかうの露はまた。そはん竹を染なして「戀したふ身は渡り川。是ぞぎやくしやうそくぼうを悟りもやらすうか／＼と。迷ひ初たるうかれ妻。八つはしが立姿合「二人ならびし。かげろふの。命掛けたる眞實に煙ゆかしき多葉こ盆。胸のほむらのしるしぞと。小褙衣紋の。しなやかに。花ふり。レイセイかゝる。八文字。地風にまた／＼ともし火の。きへぬ内にと。したひ来る。松にこがるゝ執着の。中地櫻に引るゝ魂魄も。戀と恨の。かまへ。男なりけり又女子とも。見れば見かはす顔と顔。それかあらぬか。雪。と花。つもる思ひと散る思ひ。げだつの衣の。袖袂。うらみの山の道づれに。是まで参りさぶらふぞや。二上「恨めしや」うらむ二人は娑婆の人。「われはめいどの」ふたりづれ。實と嘘とは紙一

重。合隣屋敷のくせつさへやぼな浮世と笑ひしに。今是我身に立おをふ死出の山風はつと江ガ、吹いては。吹きちらす。是も心のみだれ髪。とけてほどけてぬし様の。胸の内をと。立よれば詞祐成は氣もつかず。ム、八つ橋か。いかふ來よふが遅かつたが。もふ此祐成に倦が來て。なんぞ外に面白い事が。出來たもしれますまい「のふせめしいのお言葉や。地外にもしやとうたがひの男心の。憎らしや。抱て寐た夜は我ならで。地よそのうは氣は。せまいといふて。だまされたのが腹が立つ。合ア、いやらしい。なんぞいな。お前は悪性したらいで。實な。わたしが心根を。お前はうそと思はんするサア。言しやんせせれきかふ。イヤ。いわしやんせと立つ居つ。顔も姿も其まゝに。いづれ菖蒲と杜若。色を。あらそふ風情なり。詞祐成はぎよつとして。コリヤどふじや。こちら八つ橋そちらも八つ橋。顔形なら衣裳なら寸分替らぬ二人の八つ橋。はてめいよふな。どれがどふ共いひかけよふ詞がない。「ござんすまい。尤しよてはわたしがあやまり。虎さんといふ眞實の深い中をさいたわたしがとがなれど。そこが迷ひせふ事がないわいな「こ

ざんすまい。尤初手はわたしがあやまり。虎さんといふ眞實の深い中をさいたわたしがとがなれど。そこが迷ひせふ事がないわいな「ヤア。深い中をさいたはわしが科なれど。そこが迷ひせう事がないわいな。まてが同じ事じや。コレ八つはし。「爰にゐるわいな「ヤはんの八つ橋「何じやへ「イヤサ誠の八つ橋「ヤ、こわ。こわ。いやそつちよりおれがまあきみがわるい。ム、聞へた／＼。コリヤどちらぞは偽物で。おれに意趣でもある物でがなあらふ。ハテめいよふな「コレこそな偽者「コレこそなにせもの「大事の祐成さんに。用が有つて咄にきた物を。そなたは何の意趣が有つて咄のじやまをしやる。「大事の祐成さんに。用が有つて咄にきたものを。そなたは何んの意趣が有つて咄のじやまをしやる。「それそふいやるの。がじやまじやといふ事いふ「エ、ほんに「エ、ほんに「なんのこつちやい「ア、二人共におだまり／＼。ほんの八つ橋にはたしかな證據がある。曲輪ではやる早言を教へて置たが。おれが口に付て。つい言た者はほんの八つはし。言はれぬ者は偽者。サアそれがいはれるか「サアそりや何とへ「天王

寺のとうこのめうこの法印坊とおいやる「そんなら我等もかきくけこにまみむめも。たちつてとにさしすせそ棚なお敷に箸百せん。津の國のく鼓が流をきて見れば。うへにはたたゝん太鼓のよつつくつくには置たかおかぬか。ちんなべちざりき。下戸も上戸も。うんのめさわいでな。たはむれ遊べる。たはむれ遊べよいやさ。踊はありや。はつあよいやさ「イヤ是でもしれぬ。ハテ口惜い。一ト思案せずばなるまい。ム、ハア、有る。有ぞ。ほんの八つ橋なら覺が有ふ。おれが作つたうたに振を付けて教へて置た。サアそれが踊られふか「サア夫は「なんと三下り歌「櫻ぞめきの朝がへり。合見初めて今は。合淵となる。そりやほんかいな。合ほんに浮世に川がな二つ。思ひ切瀬ときらぬ瀬と。合逢なれし夜は。五月雨の水も洩さぬ。なかくは。そりやほんかいな。合ほんにわたしが。心は二つ。逢ぬつらさと戀しさ。合思ひ積りし文月の星の契りは聞くもうしそりやほんかいな。ほんに勤めと誠と二つ日本堤と名に立て。身は朝顔の。露ときへ野邊に。妻こふ蟲の聲。そりやほんかいな。霜夜ぞすだきりくす。鳴音や

袖に。こふるらん。詞是でもしれぬ。幸ひく。奥に櫻姫様がござる。どちらがどふか見分けてもらわふ。櫻姫さま。く。といふを聞くより一人の八つ橋。すつくと立ち。我はこれ清玄が亡魂なり。櫻姫は奥にとや。どれ。迷ひの雲に引れくし幽魂の。櫻にまふ風のおや。付まとひ行く執着の姫をめぐけて三重「祐成跡を見送つて。コレ八つはし。く。祐さん八つ橋は爰に在るわいな。なせにお前は。其やうによそくしいぞいな。今更いふも。ぐちなれど。虎さんといふ眞實の。ふたり深いを合點して。逢たはみんな。わたしが邪のはて。悪いと知つてまさな事。合地心もすまやすみやらす。明していふもはづかし。松のりちぎは氣に入らずさくらの浮氣は散りやすく。うつろひやすき人心。みらいかけてをほごにして起請をやいて恪氣させ。面白そふな其顔が。腹が。た。いで。なんとせふ。但は無理と思はんすかと。理に理を押し戀のわな結びめ。かたき恪氣なり。祐成とかふのいらへなく。恨は道理去ながら。ふつと逢馴れ。なれ染の女夫の縁を水にして。二世の契りを思ふてたも。願ひ有る身を察してとびんとむけば「すがりつ

く「はらへば「したふ村雨の。「去つて歸らぬ合、水の音峯の嵐のさらくく。ろくしゆ俄に鳴動し。合梅も櫻も散りくばつと。髪にもつる、柳の絲の。きれてはかなき祐成はかつばと。たをれ伏まらふ。八つ橋側へとあせれ共此世あの世とへだつる山「まうしうの雲立覆ひ。しゆらの太鼓と諸共に。それと知らる、かしやくの責。煩惱業苦の娑婆の現象今爰に。目前見するぞ。淺ましき。合けんすい地獄のくるしみは。さうちうにて身を切る事。千斷して血はらうせきの。ばん死ばん生果しなく。劔じゆ地獄の苦しみは手に。刃を取り。指を切り。髪を切つたる空誓文合。せきくわつ地獄の有様は合。紋日物日の客のかず。えんと。誠に。かけ引の。切れ文血文ふりかゝり合嘘の涙や床の内。口舌はたちまち煽と成り。見せの火鉢はせうねつ地獄。えんくともへ上れば。合堪兼ねもたへ木蔭へよれば。合梢は合。劔の。雨霞とふりかゝれば合。あけに染りて立迷へば。くろがねの牙ある犬我をめぐけて責くる聲。のがれがたさにせん方なく。打てども合。打てども煩惱の。江戸サハリ我とわが影じやあんの罪。左右に立たる酒の波。人を焼たるほむらは又みや

う火と成つて。打かけく。逆捲けば。合仇に誓ひしせいしの鳥合。ろ。が。ね。のはしをならし兩眼めがけて立まふ姿。爰にまぬがれかしこにあらはれ。コル地無間ようちんあび大ぐれんの氷にとぢられ。ふるひわななき苦しむ受るも身の罪と。天に叫び地につくいき。つち風。山風。さあく。さつ。さ。さつと吹くるはやち風。吹立られてくるくく。合。あら堪難やといふ聲ばかり。残るはこたま松の風姿は。消えて失にけり。地カ。夫とはしらで祐成は。戀と情の迷ひの雲晴ぬ。思ひのいやましに。床しなつかし戀しやと。跡をしたひて三重。夫れ娑婆電光のさかひには。恨むべき人もなく。悲しむべき。道もなし。地。有し昔の身にしさへ。名も墨染の顔かたち合。不思議や。合一ト間の陰よりも。合。道具屋。邪淫に沈みし式部卿。清玄が怨念の。よろほひ出しおもかげは。あはれにもまた。おそろしく。合。姫の顔ばせ打ながめ。地水火風は。かへれ共和。かへらぬものは妄執の。えんぶの塵に。さそはれて。たへす流るゝ血のなみだ。手ふりく泣居たる「夢ともわかず櫻姫。むつくと起てあやしげに。胸おどろきて聲をかけ。詞のふおそろ

しや。そこに居るは誰じやいのふ。誰じやや。誰じ。永  
 閑誰とは。つらやどうよくや。君ゆる沈む戒の罪。  
 うかみもやらぬ「清玄が。魂魄此土に止りて。「来たわ  
 いな。くは是「来たわいな去とは恨は君よ情なや  
 「あたまの丸はおきらいか二上リ」丸に山嵐と詠  
 めば。まるに嵐を付させたがりやりますわいの。付さ  
 せたがりやりますわいの。丸に嵐を。つけさせたが  
 りやりますしよんがへ。付させたがりやりますわいの。  
 「コレ。コレ。コレ。抱てね、して下されと又さ  
 めく」と泣居たる詞「エ、情ない清玄様。輪廻をはな  
 れて浮んで下さんせ。南無阿彌陀佛。々々々々々々詞  
 「エ、聞たふもない。念佛とは穢らはしい。コレ。姉  
 さん。いや。おしやつたりな。どふして思ひ切られふ  
 ぞ。コレ君。きみと寐る夜はまくらも入らぬ。二上リ」た  
 がひちんく違ひの。おて打違ひの。お手枕。じつ。ど  
 ふじやへ。ヤトトンくヤ。ハ。ヤア、月はさえて  
 も心はやみやナナルくらき迷ひを照すは君よ。晴ぬ思  
 ひはほすかたも。よるべ定めもなきがらの。「あなた  
 へはよろく。こなたへはよろく。よろく。よろく。よろ  
 よろ「よろめきながら執着の糸をたぐりて玉の緒の。

姫が方へと立寄れば「姫は心も。きえく」にのふ悲し  
 やと振はなす詞「清玄。大きに腹を立て。ハテ。あて事  
 もない。何がそれ程こはいぞへ。こはいものなら。コ  
 レく。二上リ」狸どの。狸どの。お家の。鼓はどふ  
 ぞいの。たつば。はり上て打たんせの。それで  
 は合。おなかもたまるまい。尤じや。く。狸舞を見さ  
 いな。く「エ、恨めしいな」とても叶はぬ戀のやみ。  
 共に奈落へ連行んと。つかく」と立寄ば。「櫻姫は心  
 付き。友切丸を投付れば「清玄おそれてよろほひのき  
 「放れてすがる戀のかせ。「あだにせかれし涙か雨か  
 「命は則ち水の泡「風にしたがひ廻るが如し「魂は是  
 籠中の鳥「開くを「待つて去る事はやし「思ひは家路  
 に立歸る。輪廻も今はいうかみそふ。池の蓮の絲長さ法  
 の。誓ひぞ頼もしき。  
 ○松似候男姿(松風) 作者塚越二三治  
 鼓歌「残る世のしるし見せたる。浦の名や長地カ、リ「須  
 磨も都のわけ里に。中地かはらぬ色の松一木。ゆかり  
 の。合意は帯になり。綾と錦に染あげて。互にとけぬ  
 別れ路の。あふ夜を。夢といつ迄か。カハサレイセイ海人  
 の鹽木にこりもせで。かゝる思ひに袖ぬらす。野分。

沙風。むら時雨。凌げば凌ぐとりなりも。昔忘れぬ  
 地風俗は。いでや都へ行平の。かたみの烏帽子。狩  
 衣も仇にさへられ。とめられ。中地忘れ兼たる面影  
 を。夫と見せたる鹽ぐもり。悄然と。立寄れば「松風姿  
 を見るよりも。詞ヤア行平さんじやないかいな。お前  
 は都へ歸らしやんしたと思ふたりや。ド、どふして  
 爰へござんした。わしやすつきり合點が行かぬわい  
 な「何んじや。おれが爰へ来たが合點がゆかぬ。ホッ  
 コリヤき、所。どふやら物の有る一言。色位詞越鳥南  
 枝に巢をついばみ胡馬北風にいなくかすや「エ、嘘  
 らしい問ふにや落ちいで語るとやら。ソリヤ故郷を  
 慕ふからうたで。何んの爰の事である。わしや聞た  
 ふないわいな「ム、スリヤ。おれがいふ事聞度うない  
 やうになつたか。ほれるも早いがあるも早い。ア  
 アそふいふ事とは露知らず三下リ「衰れいにしへを。  
 思ひ出ればなつかしや。ナナル 地カ、リ互に見そめあ  
 こがれて。傳と便りと行逢ふて「夫から未が縁とな  
 り。おかしい事やつらい事詞「ハア言んすなそりや。  
 毛皆んな此方から言ふこつちやわいな「重い軽いも  
 厭はずに汐汲む業の。合其ひまも戀の奴に肩をかし。

合「雪と花とはよふにた貌で合「雪に迷へば消えもせ  
 め「花にはれてはうつろひやすく合「雪がましか合「花  
 がましか合「どうせふかと「互の心打とけて。あかし  
 あふたる女夫中。文七みとせは爰に須磨の浦。合都へ  
 登り給ひしに。此程の形見とて。合「御立烏帽子狩衣  
 の其お姿を見るにつけ猶いや増の思ひ草葉末に結ぶ  
 露の間も忘るゝひまも。ないわいな。あぢきなや。話  
 形見こそ今はあだなれ是なくば「忘るゝ隙も。あらふ  
 とは。夫こそ戀のうはの空。どふ忘れられぬ  
 と。かつばとまるび。恨泣き思ひはいと「沙煙り。ほ  
 むら。あらそふ風情なり。「行平卿はしらしく。詞  
 そりやこつちも合點じや。過つる春の事かとよ「彼常  
 磐津氏が金毘羅参り。渡海の舟で語つた淨瑠璃その  
 文句を其儘に行平をかけるのか。中地「いつもの口舌  
 にたらされて男の方から誤つては嘘にはまりし濱づ  
 たひ歌「はんま千鳥の。友よぶ聲は。ちりやちりく  
 ちり。ちりく「やちりく「とちりとんだ。合きしやう  
 の灰のちりやすき。うは氣同士の戀の淵心。そゝろ  
 に。雲はしる。合夕べく「の仇枕。都と。ひなと二筋  
 の。帯とく夜半は夢にして。別れの鐘のやばらしや。

エ、面倒なと振切る中へ「ひよつくりひよつと庄屋三左。時に取つての奴の松内合、君は歸るかおいらも行くべし合、八聲の鶏がそりやこそな。こつかこう目が覺た江戸サハリ、夫は老木よ。是は又。うつす若木のやつこのく。此ひぎのふし。松のふし」是ぞ。千年の下枝と。すつと出せし片足は。慮外千萬貫松詞「やつこのくくく小奴が。またから富士山見え申す。三國一とびんとする。詞、ム、變つた事を言はんすの。慮外と咎めさんせすと。お前はお公家わしや賤の女。心言葉も及びない。もしは泣むなる。蟹の身の縁なればこそ肌ふれて。だいつしめつのわりない事。鹽焼衣やきかけて格氣であかし合泣あかし。とまる瀬もなき浦千鳥。くよ。合くよ思ひ夜を盡と。かぞへ餘りて戀草の露も思ひも。亂れ咲き。我ならなくに笑ふのに。人のそしりもあざけりもちつともそつとも大事ないわいなあ「ハ、ハ、コレく松風。ア、正體ない。コリヤどふでも氣が違ふたの。ム、コリヤ氣違じやな。ハア。さちがひよくく「ハア氣違よく「嵐に波の謠物狂ひ。それくく「風に櫻の。物狂ひ。ちんりちりくくちりくくばつと。うはきを

鹽の。波枕。けたて、そして。合歸るのか。何を聞てもしら波と「須磨のあまりの行すぎは腹が立いで何とせふ。合つれない。合つらい。合情ない。心になつて下んしたと。かなたの松に。取付けば。詞、庄屋の三左は氣の毒がり。コレおむす。あれは松にてこそ候へ。行平殿は謠取楫の方にて候詞、何いはんす。あの松こそは行平さん。たとへ暫しは別るゝとも歌、待たば來んとの言ひかはし「ヨロ、二世とつれそふ主さんの。歌顔を忘れて詞よい物か江戸サハリ、實なふ忘れて侍ふぞや「ハア心待てゑすか詞、そふじやわいな。何んと無理かへ。此松は行平さん。松も昔の女夫仲。松より外に音信もなし。ハア、ハ、松が主か主か松か、松が主か主か松かくく「コリヤいつ造いふても同じ事じや「サア松程ゆかしい物はない。行平さんはどこへ行んした。申し行平さん。ハア行平さんじやと思ふたりや萬歳じや。ハアそんなら此松は飾松か。ヤア正月じやく。てもはや萬歳が來た事かな「エ何。萬歳。ヤコリヤ中々見立のよい氣違じや。此磯馴松を飾にして。主が烏帽子装束を其儘の萬歳とはよい思付。そんならさし詰行平先生は萬歳。松風は才

若。此庄屋は亭主役。ハア、目出たいく。サアく二人共に相替らず目出度祝ふて貰ひませふぞ合、二上「徳若に御萬歳と。年立歸るあしたには。りせう公が玉の冠をかうべにめし。ゆづり葉を口にくはへ五葉の松。ゆかしい松を手に持て寶の君の行平様の。お迎を合、まつとし聞ば松が根の。かたきちぎりのせいもんは。誠に目出度待ひける。合濱松風のそよとの風も。迎ひのこしが。さかんざ。才若などは常住不斷。まつちやうこやく、合松の名所はさまく有れど。曾根や尾上や。かねかけ松や。舞子の濱やたけくまや。三保の松には一つ松歌「待つはつらいと皆おしやんすけれどもな。忍び待夜はたのしみに。しめて。ね松と。二はの松の。中に小松と思ひしに。ソレくソレく「そふじやいな合戀しくと皆。おしやんすけれ共な。男心を待宵に。こぬ夜積りて。便りもなけりや。いとしくもにくふなる。ソレくくく「そふじやいな詞、ハア出來たく。松盡しの萬歳どふもいへた物ではない「サイナまつくといふ甲斐有つて。なつかしいと思ふ所へ。コリヤ松都さんよふござんしたの。「何んじや。松都じや。コリヤおれを座

頭にしたな。是は迷惑、何んの迷惑な事がある。座頭に松は附物で。伊勢海道に名も高き。錢かけ松のいはれを知つてか「エ何。錢かけ松の由來とは。はや物語の座頭の座頭の事か。「アイナ、吞込んだく。幸ひ爰に。頭巾もあり。コリヤかふかぶつた所は何んと座頭か「ハア座頭じやく。ざつとの坊く、合「歌夕べ座頭の坊が。くびわばこせたら負ふてあげや町をそつた。つれも三味とばち二挺さいたよふさいた。三下り「ツンくく「つんのけさ。ソレソレそれくく。犬が吠へ付く。わんつくうんつく。つくくには曲手毬、十日とをるとよくの。廿日とをる長野。ながのよすがら。く。あんまけんびき。くひねつた所がひねり文。合ひらいて見たらおかしかる。ひらけぬ胸の。我が。思ひ。ナナル。カハル地、引る、戀のたまよばひ。又の逢ふ瀬とふり切て。立歸りたる浦波や。跡へくとうしろ髪。もつれほつる、あげ巻の。松に吹くる。風も狂じて。くるりく。立まふ袖の。合須磨の高浪夜半の音。夫も人めの關の戸や。ほのく吹れほの見えそめ。松によこへし身の袖の。ゆかりをばらひ。思ひを捨て。とむる袂をふり

切て姿は。見えすなりにけり。「松風あるにあらればこそそのふなつかしの行平様。是のふ暫し我夫と。あなたへ尋ねこなたへめぐり。目も血ばしりていきまきし。戀しいと思ふ行平さん。たとへいづくへ行かんしよが。夫こそ女の一念力。鯨よるうら虎伏す野邊。立波。合あら波。合磯打波の。合悪魚の餌食にほうむられとられ身はわたつみの水屑となる共。合身體髪膚は波の花。うづまく海のみをつくし朽て。碎けて流れて寄せて。陸に屍をさらさばさらせ。合夫を慕ふ。執着執心。我魂は。都の空。はなれじ去らじと心を堅め。「東はいたみ尼ヶ崎。西は家島まじまが崎。南は貝塚さしのわた。北は長岡佐野岩瀧。人間の通はぬ所。千里の瀬戸。萬里の灘。合いで追付かんと松風が。淺瀬つたふる船引よせ。ゆらりとかしこへ飛移り。合漕出さんと身をもめど。船權も折から嵐吹く波にみぎはへゆられつ。エ、口惜やと帆道具の。綱を血筋のちから草。蟹のたく繩綱手繩。たぐり寄せて引纏ひ。ともづなとかんとする所へ。合。福兵衛。此兵衛ゆるぎ出で。松風やらぬ。エ、面倒な。そこはなさんせ。どつこい。思ひは。重きぼうふ石。ひれふる山の昔を爰

に。「ぬけつくやうりつ。ふり切はらひ。押出さんと氣をもめど。二人はがまんの方つよ。舟のとも綱しつかと取り。はなさじやらじと取止むる。松風得たりとかしこの綱。懐劍抜持ちふつつかれば。風を持たる真帆片帆。うんをひらきの乗心三ッ羽の。そやか空とぶ鳥。ほんせんかりやうの追風や飛が。如にしたひ行く。

○男江口花吹雪富士菅笠 (富士太郎)

作者塚越二三治

三下り。富士の姿を。ねて見る夢は。實日の本の譽かや。支那唐土にうらやむはさりととは。無理ならず。うら山しさの中々は。色でまろめし戀の山。巖は峨々とそびゆれど。角のない木のまるた舟。花の筏とかはし行。姿ちらりと三ヶ月の影ほの暗くうつ。なく合富士にしらぬ雪ならで櫻ほの。吹落る。合ふ。きは花の一つまへきり。としめし雲の帯。思ひ重ねししら雲の。西へ行衛のしなやかに合なびく柳の立姿。氣も浮島に休らひぬ。富士那世。見上れば鹿子まだらに雪消えて。長地松の緑もうら若き合富士をはたちと。合名に高きたとへに引もことわりや。三保の松原

清見湯田子の浦邊や浮島の合四季の詠めはめかれせぬ。げに春風の肌寒くうは着の塵を打拂ひ心の垢を清めんと。旅の姿の笠の内しばし見とれて居たりしが。平家蘭省花の時うら。かに錦の幌昔にて爰は廬山の雨の夜や軒の合宇もとく。と長地つたふ寛の昔清水掬び捨たる柴の戸の奥床しくぞ見えにける。ゆきとのみ降るだに有るを櫻花いかにちれとて風の吹らんハア面白い景色じやな。富士の姿は言ふも更なり。いづれの工が削りなしたる四方の山々海の風情ア、どふもいへた物ではない。見るに見あかぬと思ふ内にホ、コリヤ日がくれてきたハアなんとしたもので有ふなヤアむかふを見れば風雅な庵の候。これに便つて一夜を明かそふと思ひ候。とき知らぬ雪は積りて名に高き詞。裾野の原の草の庵富士太郎國次は。世をすて人の假住居。富士。いかに此家の内へ御案内申ませふ。誰じや。風枯木を吹く三保の松平月砂を照す浮島が。はらはぬ草の露を分て尋ねべき人もなき此庵思ひも寄ぬ案内とは富士。成程御不審は御尤でござんすがわたしや一處不住の身の上富士の景色の面白き思はず知らず日をくらし籠

へ行かれぬ旅の疲れこよひ一夜お留めなされて下されませい。何といはつしやる旅の修行者が富士の景色に心も見とれ里へおる方角を忘れ今宵は爰へ留てくれいとのお頼か富士。アイ。アイ。アイ。其アイといふ。物ごしの涼しさ。顔はとくと見へねども。只人ならぬしやれ者と聞いたがおれが思案違ひか違はぬかマアそれへ登つてお近付きに成りませふか。ひなのカ、地姿かしらね其顔もしよていもしのばしと。燭を掲へ切戸口そろ。しと。しと。しと。かに内よりてらす明りにて互に見合す顔と顔。思はず。しらす。びつくりし。か。る。山家にひな男。修行者にやさ女。あきれて。とかふの挨拶なくしはし詞もなかりしが。ハア、いや。某凡俗の身なれ共大切な願ひの有る身妨げんと。天魔の業かム、ヤコリヤつれなふいふて返すがよいわいのイヤ修業者富士。アイ。なんでござんす。行暮たによつて此家へ一夜泊りたいとの事聞届は致したが一人旅をとめるは所のきつい法度殊に若い女中のあもとふもとも知らいで。そのあもとふもとの下の町によいとまりが有る程に籠へ十町計りおりさつし

やれい留る事はなりませぬぞ富十「スリヤなんとおつしやります世を捨てたわたくしでもおとめなざるゝ事はならぬとかへ龜藏「フ・サ夜の更ぬ内にはやう里へおりさつしやれい富十「テモお顔に似合ぬつれない事を言はしやんすなア世の中をいとう迄こそかたからめ假の宿りをおしむ君かな龜藏「シタリはて面白い早速の秀歌世の中をいとふ迄こそかたからめかりの舎りを惜む君かなと世を恨ての秀逸ならぶべきにはあらね共かふもあらふか富十「なんとへ龜藏「世をいとふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ富十「世を厭ふ人とし聞けばかりのやどに心留むなと思ふばかりぞアいやといはれぬ御返歌にふたゝびいはふ言の葉もない是非に及ばぬさらば麓へ参りませふおさらばでござんすぞへ龜藏「ハア、よく／＼物を案するに一夜を借ぬ其恨とも思はず歌を詠じて立歸る其心さしの殊勝さとへ身に願ひが有ればとて無下に麓へもやられまいこれ／＼修業者富十「アイ龜藏「やどを借しませふこちへはいらつしやれい富十「ヤレ／＼それはまあ忝ふござんすても扱もきれいなお住居かないかさま心有げな風情此やうに浮世を離れ

てお出なさるゝからは大ていの粹さんではないわいなまあお前のお名は何と申まする龜藏「お尋に預つて名乗らぬも如何拙者事は兼てお聞及びもござらふ富士太郎國次と申す者親富士左京之進を淺間次郎といふ者に討れ其行衛を尋んと所々を經廻り親の敵に廻りあはんと世を忍ぶ浪人者暫く此富士の根方に草庵を構へ敵のありかを尋ねます其許さまは諸國をひろう御修業の御身の上もし御心當りもござらふならばお知らせなされて下されい富十「ハア、お話を承ればおいとしい事でございまするな親御様への御孝行其難敵を討たいと思召すは御尤去りながら此やうな片田舎では旅人さへも足を留めぬ所爰にうか／＼おいでなさるのもどふやらもどかしいやうな物是よりはるかの東の方に江戸といふ都には此よしはらを寫したるそれは／＼にぎはしいくるわがござんすそれこそ大勢の入込む所夫れへなんとお越なされて敵のよすがをお聞きなされたら早速知れさうな物じやござんせぬかへ龜藏「成る程思召し忝ないがそのよし原といふ里はまあどの様な所でございまするな富十「そりやもふ上方でいはいふなら六條三筋町にらつ共違はずま

だそれよりは賑はしい里じやわいな龜藏「いかさま夫も耳よりじやがされども里のならわせや女郎のいきはり不案内ではきついやぼじやと見立てられるも残念サア爰がお頼じや其吉原の遊びやうあらまし様子が承りたいなんとおきかせなされて下されまいか富十「こよひお宿の嬉しさにあらぬ事を言出して出家に似合ぬうは氣咄どふやら語るもはづかし、龜藏「サアそこが狂言綺語も三佛乗の縁ではないか富十「サア夫は詞法師々々木の木と。サアその木の端も若葉して穂に出るむ戀咄。しかたでお目にかけてんとてこなたの妻戸に身を隠し此所鼓アリ「上着をぬげば裏模様金山吹つゝじいつのまに亂れて常の柳がみしよては繕ふ襦袂娜きあへる風情なり。二上り「いざさらば地身は墨染の其昔。在し廓の物語。恥かしながら。語るべし。扱是よりも東に武州入間の郡金龍山より乾に當り北を受けたる一廓あり唐土の阿房に勝り三千人の遊女を集め。酒を以て池となし前には八町の繩手をかまへ。日本堤と世に廣き流水の漲りは酒水を捨る流れ地せはしき川竹の。實と仇との色くらべはりといきちを一つまへ。詞コレ此襦をかふ取

つて。外八文字のくり出し歩み。かふゆりかけて詞イヨ／＼コレハたまらぬが。何んと其。道中とやら。旅立とやらに。日傘をさし掛る物じやないかいの「ヲ、ほんにそふじやわいな、そふであろ／＼待給へ待給へ幸ひ爰にコリヤ此傘をかふ持て。かふさし掛て。合ナゲアッ戀をさせたや鐘つく人に合ハヤメル地盤の別を思ひやる「サア／＼是からお前が客にならん／＼忙い事かなイヤモ盆も正月も一つじや。そんならかふと置頭巾。させる取る手も大やうに。カッ、地煙くゆらす春霞初會の客にしこなしは禿が先へたばこ盆。しやんと直して置く露の萩の追風かほりくる梅の姿を合すんとしてさばらぬ體の床柱顔を背けて見ぬふりに好た男と睨の。「手くだにはまる情川ふかう成る程やばになり「別の鶏を「恨みて見たり長地、こぬ夜積れば大門に付けて見出して連て来て。羽織隠して知らぬふり「イヤモ客のしこなしどふもいへた物でないしたがこれからかんじんの口舌の段ム、その口舌とはして／＼どふじや「コレ富士さんお前覺えてゐさんしよ。初手にあふ夜のきぬ／＼に外のうは

氣はせまいぞと。起請せいしは胸に書き。粹と。粹との實ぐらべ情ぐらべの其中をわしに隠して仇心憎やと袖にヒロヒ手。をい。れ。て。ふつりつめられ。ア  
 イタ／＼。ヲ、いたやの扱吉原といふ所はムウ  
 痛い所では有るぞイヤモかふつめられては。モ、ど  
 つこもかしこもヲ、痛やのたまる物ではない。そふ  
 してまあべつちやくちやくと扱もよふ口を利ぞコ  
 レそこなうそつき。イヤ嘘つきさま殿めハアいつや  
 らで有つたかはヲ、それ／＼忘れもせぬ友達共  
 に誘はれて花見ぞめきの歸りがけ。あんまりおれも  
 顔が見たさに。離立ちよつと寄つたれば。其時そな  
 たはなんといふたエイヤ其時そなたは何んといふた  
 ヨハテ忘れは／＼せまいはサ彌生の節句は取分  
 て。雛の遊びの。いもせ事。かはい、男を呼ぶ物じ  
 や必ず忘れて下んすなへとコレ／＼の口でいふたの  
 を。ヤコリヤ有難いなどいかにたわけな其詞を誠  
 と思ふて。親父や母の目顔を忍んで駕で飛せて來て  
 見ればヘエ、中の町にも居る事かイ禿共も見えなん  
 だ其日はヘエ、どこにおしげりヘエ、なされてご  
 ざなされましエ、／＼腹の立つ。誠に女郎買の先生

達の御託宣に。女郎の誠と卵の角が有れば。晦日に月  
 が出るわいのヲ。イヤノヲ／＼ナ。聞へたかア、ア  
 御全盛の太夫さまと咄して居ては間が合はぬドリヤ  
 ドリヤ龜藏歸りましよ／＼おさらば／＼富士袖口取  
 つて引すへてまあ待つて下さんせお前はあちな事い  
 はんすのソリヤまあ何の事じやいな長地つらい勤の  
 其中に惚たが。それ程惜いかへほんに結ぶの。神さ  
 んかけてエ、何んの如才が。あろぞいな。どふした縁  
 でわしや。嬉しいお前は。どふやらいやそふな。おも  
 ひ合つたる中々は枕の外に知る人も泣て明せし床の  
 海一夜逢ねばなつかしく寐るもねられぬ氣儘酒はん  
 に浮世のやるせなや。孤雲明月迷ひをさまし。悟の胸  
 も開初。「花よ紅葉よ」月よ雪よと合。紋日々々の遊び  
 の數々「いきちも所譯も」あら、よしなや合思へば假  
 の宿。思へば假の宿に合心とむなと人をだに諫し我  
 なり是迄なりやさらばぞと「行んとするを富士太郎  
 袂を控へ今しばし龜仔細有りげな悟りのお言葉姿  
 をかへ詞を改め某を悟らしめ給ふそもマア御身は何  
 人成るぞ當何様不審に思ふは理り我こそ其方守護の  
 者我が姿は白雲に打乗りて隠る、其其方が難義をば

陰身にそふて救ふべし世を忍ぶ身はかくれがさ此笠  
 の縁に引かれ富士太郎といふ本名をおしつゝむむね  
 のくもりも清らかに清十郎と名を改め武州江戸に下  
 りなば心願成就疑ひなし「真如の月もあきらけく  
 もりもはれし法の聲合衆生を照らす御姿は霞に紛れ  
 し隴影」羅綾のたもと「手にもとられず」こゝよ「爰よ  
 と御跡を慕ふ行衛もしら雲の後の奇瑞を顯はせり。

○傀儡師京人形垣衣草千鳥紋日 作者金井三笑

妻こひて花の野末になく雉子長地鴛鴦ひとりいねず  
 とや眞菰がくれの仇し夜に夢もむすばぬ思ひ羽のぬ  
 れてかもねん友鳥や合會我十郎祐成は虎が身の上あ  
 んじわび江戸もしもや長き別れともなりもやせんと。  
 忍びかねよしやたれにか淡路島かよふ衛を關守の合  
 寐覺もやらぬ忍びぢはふうじのかみや守るらん榻の  
 はしがきかきつめて残りし雪をさそふ風うらみがち  
 なる狭夜衣合おしよば。からげに頬かぶり。合觀すれ  
 ば實に誠。紋日物日の夜すがらは逢せと首尾を合待  
 合の辻吹風とくらべこし。かはらぬ中のふかみどり  
 したふて爰にきさらぎや朧月夜に影厭ふ中地館も里  
 の名にしおふまがきにしばしイテ詞内のやうすをう

かへど使もとめん傳もなし。音せば人の怪しまん。  
 如何はせんとあんじわび立迷ふてぞゐたりける。折  
 ふし向ふの人かげに見付けられじとこなたなる小  
 陰に合身を寄せ忍びる。三升出うき世を渡る諺の數  
 數多き其中に。國々修行の傀儡師またさえかへる春  
 雨に樂屋をかふる風呂敷もふかき思ひを。こめて打  
 なる箱鼓夜半の合軒端に立寄りて合小倉の野邊の合  
 一もとすゝきいつか穂に出て尾花とならば露がねた  
 まん戀草や合おらが女房を讃るじやないが。物もよ  
 くぬふ機も織り候綾や錦や金襴どんす折々毎のむつ  
 ごとに三下り餅の生る樹と酒湧く。井戸と金の生る  
 樹がわしやほしいヨイヨカヨイハ、ハ、ハ、カ、リお  
 とづれがちのあやもなきナトシヤシ垣根にたゝすみう  
 かへば。ウタガ、リ、うきが中にもつま戸もる。月の  
 朧に浮れうた。虎はあやしみをろ／＼と。枝折戸近  
 くさし寄れば。ふつと見あはす顔とかほ「ヤアすけ成  
 さん」とらそここにか「よふきて下さんしたなつかしか  
 つたはいなア「アコリヤ／＼聲が高い人がきくはい  
 のあれ／＼あれは誰じやと氣を付れば「虎はあたり  
 を見廻してヤアお前は京の次郎さん「ア、イヤ何さ



私はけふの御遊にめされました傀儡師めつたな事おつしやりますると「いふに祐成聞きとがめハテ合點のゆかぬ正しくなたは八幡之助殿日外箱根に於て近江の小藤太を手にかけられし折から曾我に所縁の有る人と見受しが扱は兄じや人でござりまするかア、イヤコレ／＼なんにも存じませぬぞいかにも曾我量負をして工藤の館をたゞき出された山猫廻しでくろく六兵衛といふ者でござります廓へは折々参りたらさまとはおなじみやナなんとお慰に人形廻しと出かけませうかい「なる程／＼廓なじみの六兵衛殿そんなら人形廻しを見やんせふかいな「心得ましたとうざい／＼二上りすいてうゑいちやア／＼すいやい／＼すいやいみんちやおてぎやんそうはらぎやんそハア花が見度くば芳野へござれ今はよし野の花ざかり花見てもどろ／＼合おちやめのとが肩に打のせ都の名所。まはれ／＼風車はりこ鞆鼓や振鼓手にもてあそべさ「ふたり折もよい首尾とつもの思ひを引きしめて互のうさをわすれ草「六兵衛ちらと見るよりもエ、いやらしいしたゝるいせつかく人形廻させてそれをば見ずに何んじややらあた鈍くさいこ

う腹なとむしやうに傍を踏ちらす「虎は道に氣の毒さア、コリヤわしらが悪かつた機嫌直してとてもの事に鳥刺つかふて見せさんせア「何とおつしやりと早ふつかふて見せさんせいなア「何とおつしやります鳥刺をつかへかへエ、ごう腹な心得ました口「とりをさいた見さいな／＼〇「一つ鯛〇二つ鼻〇「三つ木兎エ、腹の立つモウ人形も入らぬ。これから自身にやつてくりよ「四つよ程のお好と見へてあちらの隅ではこそ／＼爰のすみではこそ／＼とさ、やきばなしをちよつと這ておつとつた。じやまをさいた見さいな／＼。じやまがられるは何鳥ぞ。やこゑの鶏に明鳥じやまがらこがら四十雀調の中に。鶯はホ、合ホ、。ヨイほけきよヤアホ、ほつとも囀つた。じやまをさいた見さいな／＼「エ、うまいなうまいなそつちのうまさ此くわいらいしをほんの人形に遣ふのかないかにおらづれたとてアそふはせぬものでおんすはいの十郎「是はめいわくさつきにから人形をよふ見て居ましたがア、おもしろかつたのふとら「アイナ面白いやら嬉しいやら思ひもよらぬよい首尾でと又寄りそへば「ア、ソレ／＼／＼又いや

らしいそんな悪い事をする者は山猫に噛そ「ヲ、怖やとにげさまに祐成に抱つく「アアヤ／＼／＼又さりとては／＼とはいふ物の我等も獣の内なれば畜生仲間と見て取つた人形まはしの値には酒さへ賜るものならば何の邪魔猫廻しましよにやんと虎さんふるまふ氣はないかへどうでござんすどうじやいと口も心も通りもの猫撫聲とぞ知られる「虎は心得銚子持添へてサア／＼コレ／＼さつきにからの骨折に是でひとつ飲ましやんせ「ホ、コレハ／＼有難いシヤア命長柄のお銚子は傀儡師には過ぎ物じやがへ、お辭儀なしにとひつかへ呑たびごとと舌鼓ひとり娛み居たりけり「虎は人目も辨へず祐成にすがりつきよふ顔見せて下さんしたがお前はマアどうしてこゝへござんしたぞいなア「ヤなんといはつしやるどうしてござんしたどうしてござんしたとは虎聞へぬぞやそなたが此御所へとははれたと聞いた故あるにもあらぬ折角忍んで来て見れば範頼公の御寢所がお氣に入つたかしてエよい御機嫌でゑんすの「コレ祐さんあじな事を言はしやんすお前故にかけ落してあら嬉しやと思ひしに又囚れと成りし身を知

つて居ながら憎らしいわたしが心を知らぬかなんぞのやうにそりやあんまり胴慾じやあんまり／＼あんまり／＼「ア、コレ／＼／＼コレハ／＼コレハあつたら涙をへエ、澤山にこぼしたものでござんすのア、どう見ても女郎衆といふものは嘘と涙を澤山につかひ捨るものコレ涙の恩は送られませぬぞへ此やうに澤山にこぼさつしやるからはエ、お前のうちには涙の掘抜でもござりますかエいかさま井戸もあらふし人をだましてうそはやま山もあらふし井戸もあらふしアよい下屋敷を持たしやりましたはいさあ／＼／＼早う奥へおいでなされかんじんの範頼様の御機嫌がそこねてはつままりますまいがのもうもう／＼／＼こゝに居るももつたないイヤおいとま申すで行んとするを「引留めコレ祐成さん、虎は涙のひまよりもコレ。また。無理いふてなかつたのかつとめと。こひのふた道はたんとわけある事じやいな長地ましてやつらい此御所の翠簾のひまも朝日より合。馴し曲輪の居つゞけに廊下へ移る雪明り。つもる思ひのかす／＼を口舌しかけてすねあふて見たりわりなき中もいつしかに。ひきわけられしかた羽が

ひほお。し。からざりし命のうち。お顔が見たさ戀しさに。今迄待ちし甲斐もなく。なまけないなぞやつらいぞと。袖にすがりてなく。なみだちさとのほかに流るらん。六兵衛見兼ね傍へよりコリヤどうも見ぬ顔しても居られまいコレそちらの色男さまコリヤわしが悪かつたとお定りをやらしやりませ。じやといふて今更どうも「ム、いはれぬといふ事があることであらう」と悪いと知つてもてきめにあやまらせるが手柄のやうで面白い物お前方の時分は其最中無理とは思はぬといふてハヤ睨めくらもさせにくいコレ幸ひこゝに櫛も在り屏風もあり人の來ぬ間にちやつと「人目を忍ぶ屏風山いく。えの。戀やこへぬらん。

下の巻

雷轟出心通へば姿も通ふ草の葉すへに置く露の陽炎もゆるつらき身を合<sup>長地</sup>しのぶの亂れかぎりなくおぼろ／＼とそのゆかしさの女心をたれしらすの消えし跡こそみちとなる戀のせきの關の戸やもしその人のおはせんかと。魚飼親ひ見れば屏風のごとも詞怪しの男うらとはんと歌しのふいらんせんかいにやアか

はんせんかいにやア「わしが在所は京の田舎のかたほとり。八洲や大原の芹生の里。世を忍ぶゆゑ合姫ごせの身の袂からげしのふいらんせんかにやアかはんせんかいな世を忍ぶ「しのお草とはほんにさりとはかあいらし戀に忍ぶは人目の關合しのぶの里に我忍びづま床しさに垣衣いらんせんかいにやアかはんせんかいにやア〇「にやアにやアといふたはハアハア、聞へた。今のにやアは汝じやなサア正體を顯せ正體を顯はシヤアシタリさつても見事してそさまは何人にて渡らせ給ふぞ△「ヲ、京都しのお賣でござんすはいにやア〇「ム、どうでもにやアじやないやイヤなんぼうつつい女でも。商人は晝來るものまして女の夜あるきは△「サアそれじやによつてしのお賣じやはいにやア〇「アレ／＼まだにやアじやへ、なんぼ其やうにいやつても。卑しい商人御所へ通す事。弓矢。八幡ならぬぞ／＼△「ム、そふいはんすお前はどこなたさんじやへ〇「エドナタサンジヤヤどなたさんじやへ。事もおろかやわい／＼天王にむたいの後胤。諸猫またの中將みけなりが嫡にやん。山猫廻しのでくろく六兵衛と誰いふものにて候△「ヲ、それ

見さんせお前も修業者わたしもあきびと。内裏へも簀着て入りぬあやめ賣といふ。發句もあるじやないかいにやア。御所を拜みに都よりはる／＼下つた葱うり。何が憎うて其やうに隔ての扉打明けて嘶せふではないかいなアと馴々しさに〇「顔打ながめ。ヤア今の發句で此男を。一番見しらししたな。ヤこつちも負けぬ傀儡師。葱賣と一口にいはいはる、物かサア。傀儡師の始りをそさまは知つてゐるさるか△「ヲ、周の穆王の時に工匠梨假師是を始む。シタリややつム只物ではないはいの。然らば問ひたき事の候。いかに女性天の高さは△「七萬八千五百七十里〇「扱又大地の深さはいかに。△「五萬九千四十九里〇「聖人は△「孔子なり〇「佛法は△「大聖世尊〇「夫婦いもせの口々は△「陰神陽神の二柱。夫交婦昆有りしより〇「ヤア大極はナント△「天地萬物の源なり合〇「すゞりは△「りゆう〇「すみは△「ヲヲヲ、ソレせつしよく〇「ウンふでは△「もうてん〇「歌は△「八重垣〇「踊は△「ありや／＼「それで松坂こへたへ合、ヤアたはむれあそべへい／＼／＼これはいな。も一つも戯れてあそべへおどる拍子に行富る屏風ひらけて顔と顔「ヤ

ア祐さんか「白菊殿かどうして爰へとおどろく祐成「虎は恠りお前はどなたじや「アイわしや白菊といふ者でござんすがお前は虎さんじやの「ム、わたしを知つて居さんすお前ハテ合點の行かぬコレ祐成さんこつちへござんせこなさまは／＼／＼アノ女中さんとどうした譯で近付きじやそふしてマアあらふ事か有るまい事か二人寐てゐる屏風を明けほんに／＼あんまりなとはやせき上す女氣の亂れ初るぞ道理なる「傀儡師も腕まくろそふだ／＼つづばれ／＼「十郎もせんかたなくサア／＼／＼そなたのそふ思やるは尤じやが是には段々様子があると「半分いひさす白菊はコレ祐成さんこつちへござんせイヤお前は／＼／＼わたしを此やうに苦勞させよふも／＼屏風の中で虎さんとしつぼりと寐てゐさんしたなふイヤ寐さんしたの「六兵衛又もさして口こなさんのを聞けば又尤じやはいのならべろ／＼／＼「イヤこれ白菊さんとやら人の男を何じやいなコレ祐成さんこつちへござんせこなさんは／＼何んの言譯さんすのじやサア／＼夫れ聞ふ其譯いはんせ言しやんせ「ホホホ、イヤこりやおかしはいいなコレ虎さんお

前ばかりが女子かへサア十郎さんこつちへござんせ  
 「イヤこつちへ」そふはさせせじと引戻し「互に引合ひ  
 諍ふ色香梅と櫻のみだれ咲中にもつれし青柳の風に  
 もまるゝ風情なり」六兵衛中にわつて入りア、是れ  
 是れくく此騒ぎはコリヤマア何の真似でおんす  
 「イヤサ此こゝ此さはきはアノ何さヲ、それくくい  
 まの人形廻しの踊の振を習はうと思ふてといひま  
 ざらせば「白菊はイヤくそふじやござんせぬアノ  
 祐成さんと私とはと言はんとするを」十郎抑へてア  
 アコリヤくくくそれをいふてたまる物か是じ  
 やくくと手を合す「傀儡師も氣の毒さよふごんすご  
 んす諸事おれが吞込だ踊の振がコレ所望かく踊の  
 振とはへ「それくくそれとはへ」ハテサテ「それくく  
 それそつこでせ三下り」戀にさはりが品々ござる。忍  
 ぶその夜の月ひとつ別れ遅しと鳴く鳥の聲逢はで立  
 つ名と。あふてのうき名。いづれ思ひの種ぞかし「ゆ  
 かしくが三ゆかしござる。山路わけ行く人ゆかし  
 あはぬ其夜は一しほゆかしま<sup>カ</sup>れに逢夜の明行くつ  
 らさ夕べくが猶ゆかし思ひナラス餘りて穂に出る  
 「ヲ、はづかしわたしたした事がおまへがたにそや

されてわつけない「イヤくくくなんじやか  
 しらぬが扱々きような衆かな此六兵衛は今の踊で息  
 がきたたさば御酒にいたそふかサア虎さんも一つ  
 あがれ「何じやいな置かしやんせ酒どころじやござ  
 んせぬ申し女中さんも御用もござりませすば御歸  
 りさなれて下さりませお歸りなされて下さりませい  
 なア「コレサア」虎さまそんな氣のもめる時は酒が  
 薬じや立つ腹も横になるひらにあがれとすめられ  
 「そんなら飲みやんせふつがしやんせわたしが又飲  
 んでからアノ女中さんとのわけ糺さいで置ふかと腹  
 立紛れめつたのみさいつおさへつ盃の数もかさなり  
 とろくくと平家無明の酒の酔ひ心道具屋睡るもしばし  
 夢のゆめ覺ての後の有さまを見るもはかなき浮世な  
 れ地カ、「祐成二人を介抱し傍の屏風廻し中を隔  
 つる人目の關ひらかぬ胸をおししづめコレ白菊殿最  
 前から咄し度いは山々なれどアノ傀儡師殿は互に名  
 乗はせぬけれど此祐成とは縁有る人殊にそなたの事  
 は虎には深く隠せし故何をいふにも此場の首尾をふ  
 してマアこなたの此姿はエ、聞へたく此御所の人  
 目を忍ぶの草商人尤じやくおれ故にいかい苦勞ゆ

るして下され白菊殿と背撫さすりいたはれば「白菊  
 もうれしげに申し祐成さん御約束の矢の根返しまし  
 てござんすと手渡すれば「祐成はおし戴きくへエ  
 エ忝いく敵の手に渡しては浮沈と成るべき此矢の  
 根再び我手に入る事もいまだ武運に盡ざる所かハア  
 ハア有難や嬉しやと天に捧げ地を拜し悦ぶ事ぞ限り  
 なし「白菊つくく打守りソレ其悦ばしやんすお顔  
 を見やう計に艱難苦勞したはいな矢の根のうせし  
 も私ゆゑ命にかけて取戻したる甲斐あつて今日とい  
 ふ今日お前に渡せば私が本望エうらやましいはアノ  
 虎さんアよい中じやなアとうらめしげなる目のうち  
 に涙をうかめうつとりと顔を見とれて居たりしが△  
 「コレ申し祐成さんさりと愚癡な女子じやと。叱ら  
 んせうかは知らねども言ひ度い事のあればこそ。さ  
 まん心つくくし筆のたよりもかなはねばこがれ  
 慕ふて。来たわいな私が心もしら露のアノ美しい虎  
 さんとふたりぬる夜のためくらに。わりなき中をう  
 らやみて長地わがひとりねのそでの海ちぎりも波の  
 すてをぶね水に。かすかくうき思ひ。推量してとか  
 こちなき。みだれのしのぶの草の露すへの涙と知ら

れける「ヲ、尤もじやくさりながらアノ虎とは子  
 までなしたる中なれば「アイ存じて居りますその  
 お子のある虎さんの中を知りつゝほれたも因果とし  
 月お前を戀ひ慕ひいつかはお目にかゝらんと待にひ  
 さしく過しころ箱根のみやの神かけておなさけのお  
 言葉がわたしや身に染みくと忘るゝ隙はないはい  
 な此世は僅か假りの宿二人中よふ添はしやんしてせ  
 めて未來は祐成さん私と添ふて下さんせ未來は私  
 を女房じやとたつた一言いふて聞せて下さんせいふ  
 て下さんせいなア「サアくくく尤は尤じやが  
 何をいふにも爰は範頼公の御節じや人目にかゝれば  
 悪い程にサアマ歸つて下されサアくくくマ  
 ア歸らつしやれいのふ「ヲ、行はいなせわしない假  
 令居よとおつしやつてもこれがどふして居られうぞ  
 もはや此世の別れかとヒロヒ目。に。う。く涙はらは  
 らと。袖に玉ちる白菊はしほれて出る後影見しは現  
 かその人のかたちは消えて一つの心火しんくと立  
 のぼり屏風の中へ落ると見へしがふしぎや臥たる傀  
 儡師すつくと立つたるその形相怪しくもまた覺束な  
 「虎は驚き」祐成が左右の袖にとりついてあら心得ぬ

祐としさま此有様は申しお心を付けられませい祐俊  
 様鼓歌「およそ輪廻はをぐるまの合飛花落葉の世の習  
 ひ合きのふの花はけふの夢合驚かぬこそ」浮世なれ。  
 「申しく／＼申し祐成さん。わしや白菊で。ござん  
 すはいなア。□「及ばぬわたしが戀路ゆへセツキヤウ詞  
 ○「御身の難と成り果てたる験の矢の根を取返さん  
 と。思ふにかひなく口惜しや詞祐兼が手にかゝり。鼓  
 タ、キアジ 箱根の山の露霜とこの世をはかなく。成し  
 身タ、キアジの合カン詞靈魂中有に浮みもやらず。しるしの矢の  
 根を取戻しおまへにわたさん其ために。假りに姿を  
 顯はして詞おめにかゝるもわたしがねんりき。祐俊  
 さまの容に含り。はかなき最期を明しまするはいな  
 ア祐成さま。ム、扱は此祐成が難儀と成つたる験の  
 矢の根取返さん爲伊豆の次郎が手にかゝりそなたは  
 空しう成たるとやハテ是非もない有さまじやなア  
 「虎も涙に手を合せ其靈魂しるしの矢の根をあたへ  
 んとまみへ給ふもしらぬ身のおうらみ申せし勿體な  
 や未來成佛なされませいや「すけ俊殿の五體を去り  
 成佛めされよ白菊どのソレ。そのうつくしい殿御  
 をば残してなんのうかもぞへ。□ハヤメ「いつし見そ  
 タ、キ

めて染て色なく其仇人に。見かへられたる野分のあ  
 らし○「亂れ髪□長地 誰取り上げて岩橋の夜の寐覺  
 に文七その俣の「通ひあみ笠夜も日も分ぬ」さまにあ  
 ふせの○△「いたづららしいにだまされた○松はこふ  
 じとねたといふ□「こふじは松と寐ぬといふ○「アレ。  
 あのうそはいな□「ねたりやこそ合○「わしをみやま  
 に起臥の。ハヤメル長地花に仇なはくれのかね戀に仇  
 には明の鐘。鳥にうらみの數まさり。ほんに／＼鐘  
 にへだても恨もあるかあゝらよしなや。はづかしや  
 □「コハ煩惱業苦に身をこがす劍樹地獄もアレ／＼  
 アレ／＼／＼まのあたりあゝらくるしや。あら苦し  
 早や明け方の修羅の責鼓合名残はつきじいざさらば  
 さらば／＼も夜あらしの。音もはげしくさら／＼さ  
 ら庭のい。さ。ご。の。ばら／＼／＼はらふ合こゝろの  
 やなぎがみ。つゆのしらたまちりつばきありし姿も  
 いつしかにはるかせばかりやのこるらん。  
 ○河津衛名香 留袖淺間嶽 作者並木良輔  
 「茂りあふ草も梢も合心なき中地情をしるき人倫も。  
 いづれあはれはのがるべき。かくは思ひ知りながら  
 長地ある時は色にそみ貪着の思ひ淺からずまたある

時は聲を聞き愛執の心いとふかき心に思ひ口にいふ  
 實に世の中のうさつらさ色詞「宇佐美くすみを傾した  
 る川津の三郎祐安は。遺恨の矢の根鋭くも赤澤山の  
 霧ときえてだに中地消ぬ輪廻に引かされて在りし姿  
 の悄然たり平家いく春か諺みやこに年をかさね着の  
 蝶と千鳥のひよく紋ふたりが中のかねごとをかはず  
 まいもの新枕長地じつと仇とをしらべあひくせつに  
 こがすむねの火をいまも提たる煙草盆けぶりくらべ  
 んわが思ひ富士と淺間の山風に吹きときかねて八  
 重霞まよひの雲にへだつれど耳には近き戀慕の銜修  
 羅の太鼓のうつゝにも逢たい。合見たい合戀しいとヒ  
 コヒな。み。だ。の玉の魂よばひ。きらや初音にしたひ  
 來る風折が立姿△詞名残をもおしまでいそぐ心こそ  
 別に勝るつらさなりけり。詞「ハツア今の歌は。ひと  
 とせ風折に別れし時。又逢ふ迄と送りしがハテ合點  
 の行ぬヤア風折か。そなたは爰へとふして來やつた  
 ぞいのふ▲「戀しさに二上り「さりし御げんの夜の雨  
 殿御まつ間の疊ざんあふ夜あはぬ夜うらみては。ほ  
 かに悪性はせいもんと仇し男のあだごゝろ。ナナス二  
 世のかための蝶千鳥これをめいどのみち。草や力草

なる其種をなせにけむりとなし給ふうらめしやうら  
 むそなたは娑婆を去りわれも冥途の二人連。ヒロヒ  
 ふ。た。りつれたも名ばかりに。憎や劍の山鳥の尾上  
 へだて、寐る中を思はず爰へ面影の。ゆかしなつか  
 しうれしやと飛立つ心を押静め。詞「コレ風折。ア思  
 ひ出せば馴染も。中ハヤメル地きのふよ京都すぎゆき  
 し詞そのつれ／＼の戀ごろも。吾妻そだちの角とれ  
 ぬ。はつにそなたにあひしとき。御身はいかなる女  
 性ぞと堅く出かけてとふたれば。▲「わたしも衣紋繕  
 ふて。諺コレハ都のかたはらに住む。風折と申す平詞  
 白拍子でござんすと云たれば。詞「ムン何じや風折  
 といふ白拍子。ヤコリヤ面白い。幸ひの風折烏帽子。  
 コレ。是をきて。面白う舞をかなで候へや▲詞「あらう  
 れしや涯分まひをまはんとて。烏帽子狩衣かりにき  
 て。すでに拍子を江戸すゝめけり。はなのほかに松  
 ばかり／＼松は千年と壽けど殿御まつ身はつらふて  
 ながふて文かきさして筆の鞘焚て待つ夜の。蚊やり  
 ぐさ。粹な男の癖として思はせぶりが合憎らしい悪  
 性さんすを長地附けて見出してふつつりと。つめりし  
 あとがこれ爰にむらさき匂ふ深い中。詞「ア、コレコ

レコレまちやく。そのやうな舞が有るものか。ソ  
 リヤマア。何といふ舞じやぞいのふ。▲コレカ。エ  
 コレハ女の曲舞とて。性の悪い男に意見の舞でござ  
 んすはいなア。ヘエそりやお珍らしい舞でござ  
 の。▲オ、何んじやいなまた人をきよくらんす。もし  
 てマア堅くろしい。帯はお解きなされずとも。詞袴は  
 かふと江戸とけかゝる春の氷の氷面鏡中地羽織に防ぐ  
 戀風や詞頭巾はかふと立烏帽子上舞アシ大臣烏帽子を  
 しやんと着て烏帽子なをしの舞の袖ぞでから袖へ手  
 を入れてじつと。しめたる肌と肌や、ともすれば口  
 癖にかけゑぼしぞと疑ひはお前の無理と思へども合  
 こちの心に偽りはなし打烏帽子小結して譯もない事  
 いひ募り氣を揉み多ほし恨みわび。▲泣て居る。●の  
 を覗いて見たり唄ふて見たり弾く撥のあたれとこそ  
 は思はねど夜毎に立てし誓文は。千も二千も三千世  
 界を尋ねてもこんな男が有ふかとのたのしむ中の手枕  
 も。かひなく立し山かづら惜ふて。ならぬ。鶏の聲。  
 なんの鳥が意地わるで。啼くじやなければどきぬ。  
 の往せともない心から。よしなき鳥を恨みしも。夢  
 と消行くはかなさよ。▲申し殿さん。なんぞ。▲酒

をばふつつりやめさんせ。ソリヤなせに。▲色遊び  
 もおかしやんせ。ム、また異見かそんならおれは  
 往ぬるぞや。ソリヤどこへ。吾妻へ。▲其あづまと  
 はどふ書へ。わがつまとかく文のつて。とるまこ  
 がる。お心は皆奥さんの心中かへわしや腹が立つ  
 憎いぞへ。とめねばならぬとつと寄り袖に縋れば  
 「かいく。り。又取付けば。ふり放すはづみの拍子に  
 合ふはとこけ。▲風折ひらりとおきなをりヲ、コリヤ  
 むごらしい河津がけにさんしたの。ヤなんとといふ  
 河津掛けの事どふしてそちは知つてゐる。▲ハ、お  
 前都にござんす時太夫天神端かこい。白人舞子中居  
 迄。お前は戀の手取とていろにはまつて懸られしを。  
 詞河津掛けといふはいなア。東へおかへりなさんし  
 ても奥野の狩の歸るさはどふした遊びか知らね共  
 侯野さんといふお方をはづがけに遊したと都に隠  
 れないはいなふ。へ、さすがは女。それは角力  
 の物語。侯野の五郎景久は伊豆相摸の若殿原を拾ひ  
 に投し其中へ。▲河津の三郎祐安は手綱二筋たぐつ  
 て締めしんづくと立出る。侯野は角力の上手な  
 り。▲お前の戀は。手だれ者土俵の数は十六七娘とし

まの嫌ひなく。色と角力の物語これをきて見よ花の  
 へ。いきぢを。みがく女には。ふすて。負投。腕ぞりア  
 リヤリヤ。くく。よいやさ。張の強いはこちからも  
 やぐら四つがい膝櫓アリヤリヤ。くく。よいやさ  
 「人目を忍ぶ初戀は捻り爪取り大ごしや。ひよくの契  
 りかはすには鳴の入首こし車鳴の羽返し向ふ附けか  
 くれば拂ひ合入れば餘さず仇はれや桃花の節會鶏合  
 せ四十八手はなを足らで。百手を盡すはれ勝負河津  
 いつまでござべきと。片手を放つて場中へ二ばん。▲  
 「どうと打つたるお手柄を。聞いた時のうれしさは  
 ▲サア其悦びに。ひきかへて直に相撲の歸るさを。ま  
 ちまふけたる詞赤澤山。近江八幡が矢さきにかゝり。  
 無念の最期を遂しぞと。かたるも。▲さくも亡人のッ  
 かわたしやお前をこがれ死ハル地みつ瀬の川もいまこ  
 こに長地花の鏡の。顔と顔。カ、リ地あはせて見てもあ  
 はされぬはやまうしうの雲きりにたちへだ。りしな  
 か。もはなれがたなき煩惱のねむりをさます明の  
 鐘かう。かう。とつげ渡る空もあけゆくさとのみの  
 ち。うてなの花やさきにはふ歌舞のぼさつのまひの  
 そでらりやうのたもとひらく。松松ふく風も法

の聲隨縁真如の波のつみのどうく。さらさ  
 らく。音楽のこゑ諸共に。二人のすがた忽ちに。文  
 殊普賢の二菩薩と引取あらはれ給ふぞ。ありがたき。  
 御法の聲のたうとくも。獅子白象にうち乗りて西の  
 方へ入り給ふ西の方へぞ入り給ふ。  
 ●蜘蛛絲梓弦(仙臺淨瑠璃)作者金井三笑  
 ●鼓歌。人知れぬ心は重き小夜ぎぬの。うらみん方  
 もなき袖を。詞。片敷き詫るお夜詰の碁打扁突十柱香  
 の。夕べの色香引かへて今宵は此の直宿者。嚴物作  
 りの兩雄士君を守護なす有様は實にたゞならぬ多田  
 の御所。武將源の頼光公御心地例ならず。醫膳白計  
 たゆみなく。とりく。さま。御枕に御簾もる風  
 の音信もいと物凄き折こそあれ。▲コレ貞光。コレ。  
 コレ。貞みつ。▲ムン。ハテ扱々々。大切な  
 直宿をしながら。扱もよふねるぞ。▲ヤコレ。金時。  
 人の一寸は見ゆれど我身の一尺とやら。あんまりそ  
 なたが。こくりく。寐るからおれも移つてやつた物  
 よ。▲ヤ口賢い事をいふしたが。今宵にかぎつて此や  
 うにねむいといふはノヲ貞光。▲ヲ。サこんな時に  
 はべとくするやうな茶を一貼呑みたい物だノヲ。▲

「サレバサ咽のひり／＼ひりつくやうな濃茶。おれも呑たいドリヤ。目覺しに一ふくと煙管の火ざら燻々とたばこの煙。ウタヒ、ふけ渡る夜も烏羽玉のきり禿都そだちか京人形。ちよこ／＼合歩むうしろ紐合お茶の通ひのこ／＼／＼とがつてん／＼鹽の目。かぶりふる／＼ふらぬ間につんで置くとは。樹の尾山の。春の若草茶の木のことよ合ちや茶に浮してやつこの此々この目をさましてやろ。この此このお茶まいれとさし出す。なんだ茶だヤコリヤよい所へ持つて来たドレと取らんとせしがムンついに見なれぬ小僧だが。ワリヤどこから来たへ。アイわたしは。お茶の間に居りますものでござりまする。それを知らぬとおつしやるは。きついうそや。公時ムハ、あざわらひなんだお茶の間に居る。お茶の間に居るものを我々が知らぬといふ事はないが。茶道頭の名は何といふ。ワリヤ知つて居るか。アイゆうこく齋と申ます。ムンナンダ幽谷だ。そしてゆうこくさいといふ字は何と書く。幽の谷と書きます。彼の商山の四皓を取つて付けられたと見へます。▲ムンはて形に似てこしやくな事をいふな。そして

ソリヤたが子だ。アイわたしは。▲何物の忤だよ。サアそれは。▲どふだと。とひかけられてすつくと立ち江戸月のすむ軒端にかくる合蜘蛛の絲有かなきかの身はいかにせん有かなきかの合小童をいたくもとはせ給ふなにとつことゑみたる有様を。心付かねば兩人は。扱も奇體の童やと顔をながめて居たりしが。睡た覺しと貞光が。扱一つふしんまいらふか。我神國の神の心は。すなほに寫る鏡のかけ▲イデ公時が問ひかけん。兒童が胸にも明鏡有りや。有ればこそ合真如の。月も空にあり。▲其月の數覺へてか。さればいなアお月様いくつ十三七つ。▲雲がかゝらば。風をもつて是を拂ふ。▲大千世界は扱いかに。お、それこそは風きよくすめるにだまされて延せばのびる絲筋のたなき昇つて天と成る。▲切れて落つれば。とつと神代のその昔天の岩戸に隠れんぼ今に傳へて神國の子供遊びと成りにけり。▲雛の祭は。嫁入りの手習ひ。▲幟甲や菖蒲打。しやうぶ刀はイカニ。それは武藝の始なり駒の手綱をコレ。コレ。コレ。コレ。かぶ取つて。やよややんちやや真紅手綱のこぶさ小綱

をこがらまいた。赤貝馬のしやん／＼／＼しやんと乗つては手綱かいくりしつしいどう／＼ど／＼とドコイッ。伊勢の鈴鹿で朝の出がけにやこむろぶしでがけにやあさの朝の出がけに合小室節合くつわと鈴がりん／＼がら／＼りんがら／＼。りん／＼がら／＼。合あつぱれお馬の上手と上手が乗つたか乗つたぞしと／＼しと。それ。それ／＼。それ／＼と化生は其儘頼光の寢所を目懸け入らんとす。▲コハ心得すと公時貞光支へ止むる袖袂。かいく／＼／＼に現はれかしこに失せ。業通自在の其舉動。▲ヤア正しく變化ござんなれと。一度に刀抜きかざし。はらへば。うしろに有明の。つき。とめんにも居もためすねらひもためす。切無の形は消えて失せにけり。▲兩人目と目見合せ今の小僧は。サア今の小僧ハテ殘念や。▲打もしたか口惜やと腕を摩つて居たりしが。▲コレ。公時心をつきやれ。▲ヲ、サ眼をくばれ貞光。餘りねむい／＼と思ふ其心の虚に乗つて。何か目にさへぎると見へる。なんと目を覺す仕様は有るまいか。▲貞光傍を見廻しホヲ有るぞ。究竟の

此碁盤。夜の明けるまでうち明かそ。▲ヤアコリヤよからふサアいと黑白二つの石を分け互にあらそふ先手後手りたるばばくれん／＼たるかんかうしてうにかゝる盤上の切つておさへて刎ねかけてわき目もふらぬ折こそあれ。夢ともわかす現とも影の如くに忽然と座頭一人現れ出で。ヲ、。じたい某は奥州者で三味も弾きます諸藝も上手よい。アリヤリヤコリヤリヤは何んでもせい。ヲ、。杖をちからに都の町をめぐり。てうかれ座頭の坊。チツ、ハ、ハ、コレサア申しコ、サ社頭ではおんじやり申すか。内陣へつ、ばいつても苦しくなればサア。ちくとんばい拜ませてもくりやり申さないか。何だ社頭だこ、はそんな所じやないは。忝けなくも天下の武將の御座なさる、御所だは。ヲヤそふぎやアればみん共サアも先年は爰な通り申した。お待ちなさろ。ハア、すねかけ五年だア申し。▲ハア、奥州座頭か。幸ひのねむた覺し國ぶしの淨瑠璃面白い所。サア／＼聞たい。▲コリヤ／＼お坊／＼頼むは。ハアなんとぎやアる。ぞうるりを語れ。ソリヤハゑ物だアが。古くもおもしろるべ

いからハよしになさろ〜「イヤ古くても大事な  
い。聞及んだ仙臺淨瑠璃一段所望だ〜」「ハテ是さ  
お坊勿禮付けずと早く語つて聞かせろ。サア〜ど  
ふだ〜「イヤハア。そふせちにきやあらば歸りが  
けの駄賃だハ心得たりと背なに負たる三味線の撥も  
しどろに彈鳴らし詞是は扱置きこゝに漢の高祖の  
臣。樊噲といふ兵一人おはしますと。おぼしめせ  
主君の歸還を迎のため。鐵兜に。身をかため鬼面の  
盾。大とうれん。小とうれん。二振の劔。金だかな銀だ  
かな。あたり八間タアダハびかり〜と光り渡るを  
十文字に指すまゝに。風吹には風負すべいとヲヤヲ  
ヤ〜〜あぶない事だアもさ扱鐵門につきし  
かば。ふんばたがつてとさ聲上げ。詞主君の迎に樊噲  
が出ばつたアてば。門の開けもんのひらけと呼はつ  
たり。内には官人大きにたまげヲヤホ、〜〜ホ  
ホでかばちないあばれ者。それ通すなど。扉へさへ  
てひかゆればなじかほもつてたアまるべき棟。梁く  
わんぬきゆき〜〜どろ〜〜めき〜〜と  
押破れば水もたまらず官人共壓に打たれて目玉サ飛  
出首は胸へへし込んで。臍のあたりでくわら〜〜

わらアとぞ唱へける。かの樊噲が力の程ゆゝしかり  
とも中々。申すばかりはなかりけり。▲「ハ、ハ、コ  
リヤ面白かつた〜はへ〜コレ〜お坊是ばかり  
の藝じや有るまい。何ぞ珍しい踊でもないか迎もの  
事にサア〜所望だ〜。」「ヲヤ扱々それさま達ア  
あこぎだアエア、迎もぬれた袖だ。おらア國さおん  
どり歌を。さらばぶんまけ申すべし。歌おらが在所  
にやチア合めん〜めいしよがござる戀にやだてな  
る碑かきやれたより松島錦木立ていかなる雪にも雨  
にも忍文字摺色じやへいろにまよふてチア合安達が  
原の鬼になるまで見捨られたる胸はほんに〜むね  
はもやつくむや〜の關ほんに萩の折はし杖がなふ  
てはならぬぞへ〜二人も聞入り餘念なく前後忘れ  
し折柄に「怪しや今迄座頭と見へしは忽ちに兩眼  
見開き頼光のひとまを目懸けて窺ひ寄る▲「公時貞  
光シヤ扱はこいつも變化よな手取にせんと大手をひ  
ろげ。爰の隅々かしこの詰りかげろふ稻妻石の火か  
消えて姿はなかりけり▲二人はあきれ顔見合せ最  
前の小僧といひ「今又稀有なる座頭の有さま狐狸の  
所爲なるか何にもせよ油断する所でなし御寢所こそ

氣遣はし公時おいきやれ實に尤もと貞光諸共打連れ  
だち奥の間へかけりゆく。

下の巻

「浮きたる雲の行衛をば風のこゝろに任すなるその  
言の葉も白らぎぬや。ハリマサハリ千早振袖そでふる鈴  
の鳴かならぬかなりそないろ音ならぬみさほのいと  
すゝにそのゆみはりのあづき巫女築地はるかにあゆ  
み来る。合跡に身なりはほら〜の具繕はぬしよん  
ぼからげの。御ほうらいはらひきよめタン。タン。タ  
ン〜〜たてまつる神は梵天てんの〜お天の一  
尺錫杖ふりたて巫女のあとから月待ち日まち合前か  
らお顔をちよつと巳待の辨財天かやうつくしやアあ  
ら美しや合大日代僧代まいり。難行苦行のすた〜  
坊主すた〜言てぞ休らひぬ「ア、コレ〜申し申  
し最前から跡に成り先になりかふつれ立つも他生の  
縁コレあねさんお前はどこからの御出じや「ヲ、見  
ればお前も御修行の御身をふながわたしも見さんす  
通りの梓巫女此度頼光様の御病氣につきお召によ  
つて此所へ来たはいナア「ハ、アコレハ〜幸ひ幸  
ひ我等も御召しによつて御祈禱に参りがけそんなら

一緒にこれかふと手を引しむれば「ヲ、此山伏さん  
とした事がコリヤマア何をさんすぞいなアエ、いや  
らしいとふりはなす「ハア堅いな〜「堅い段かい  
なアお前のやうな鮮はんだばさらんだじやないはい  
な「ハアなまぐさばんだばさらハア口合しや鮮坊主  
といふ事かハア、ちつとも大事ごんせぬ忝なくもゑ  
んのうばそくの流れを汲み女房は愚かなまぐさも  
はおゆるしでござんすはいのこなんも又天のうすめ  
命より傳はつて八百萬の神いさめドリヤ先づ天の岩  
戸を開かんといだき付くを「ヲ、きやうとお前もよ  
つぽどいたづら者じやはいなあわたしや大切な御祈  
禱の内なれば心まで清淨に持たねばならぬヲ、うる  
さそつちへのかんせ〜お前にか〜つて大事の役目  
を忘れてのけたさばす〜しめにか〜らふか〇「さ  
らば見物いたさふかカン「やんもしろや荒神のお前を  
見れば松植てこがねの井戸に合水も湧出で松諸共に  
内ぞ御繁昌。する繁昌の千代の御神樂〇詞ム、ハ、  
夫そのやうなへエなまぬるいす〜しめでは悪鬼悪魔  
のしやうげは扱置き。揚鏡花代茶屋舟宿。催促生靈は  
なれねばそこをわれらが口車コリヤ此錫杖文を合ふ

り立て抑勘定しあげたてまつる合はらひはさつぱり  
 福徳圓明やくそく縁日七夜待ち廿六夜のあいきや  
 うをヒロ守りほぞんは一代男昇詰たるこけの行△調  
 「ア、もつたないッレ山さん今の祭文聞くに付け。  
 お前もお山にふししげき。お山伏と見ゆるぞへ。」ハ  
 ハ、コリヤ。コリヤ。コリヤ。コリヤ。コリヤ。宣ふな。そも  
 じも。元は川竹の合浮きふししげき梓の弓の引手數  
 多にはり強き流れの果と口によせとふに違ひはござ  
 んすまい「扱つても見通しやまぶさん。やんもしろや  
 身の上ばなし「わらひ清め戀しいつしか色に蘇民  
 角太△われもむかしは戀知りの戀の世界に住みなれ  
 て朱雀の野邊の花すゝき穂に穂合みだれてうつゝな  
 く合長地こちも浮氣に檜柴のいぶり言葉も親方の合  
 つらい憂目を忍び馴にし夜半の風○一申身にしむあ  
 ふ瀬末かけて長地かはらじ中とちかひてし戀の榮耀  
 にかせ掛けて合△々、きくせつ仕かけてはりあふて別  
 れし翌の氣懸りに下長地文はかけどもほれ意地の筆  
 の運びもびんとする○すねたところを。こちらから  
 そんなら今宵は行まいと合長地おもひ詰めてもうつ  
 り香の下ウタうは氣の。風にさそはれてつい中なをる

床のうち△にくひ男とむなづくし合鷄のなくまでう  
 らみつ泣いつ果はわりなき中々を思ひ出づれば昔に  
 ていまはふたりが身の上も巫女山伏のなり形。過し  
 るにしのこし方と互に笑ひを催せり「ホ、ホ、ホ、最前  
 からのしかた嘶しイヤモたいの粹さんじやない  
 はいなそしてお前のお名は何といふぞいな「わつち  
 が名はどうらく山どう樂院どうらく修行の本寺でこ  
 んすはいの「だうりこそ尊い寺は門からとやら其お  
 心懸けでは御祈禱も利やんしよサア／＼その尊い祈  
 りが見たいはいいなア三下り「おつと心得たんせいぬき  
 んで 諸祈るに驗なからんやと數珠さら／＼とおしも  
 んで 合當分爰へござんせ女房なんぼうぐんにやり花  
 車風流合さいはう色事ようぼう天女ほつぼうつと  
 りやさ女房合中央大日大事のふうぞくさんげ／＼ぞ  
 つこんあいきやうなむ振りふり袖女房ふりそで女房  
 鮮臭ばんだ。はさらだ合左のお寮間に三日三夜右の  
 お床に三日三夜。合せて六日に文七一足して。合七  
 日の御祈ねん御祈禱成就はどくどくになんのこつ  
 ちや／＼／＼エ合あの子よい子じやほれて／＼ほれ  
 ぬいたアレ／＼文をやるにも讀んだり書いたり面倒

なソレ／＼いつそいもりの黒焼お薬なんぞをふりか  
 けたヤこれもわたしと思ひつきサアサよい子じやよ  
 い子じやエがてんか／＼うんたらたかんま。ちやう  
 か拙僧ひとりで氣をもみちがしんじや即時になびき  
 やれ眞言祕密でせめかけ／＼額に大汗玉のじゆす。  
 すり立て／＼立舞ふ體に人の心を盪す化生詞、梓の  
 女は一心不亂目たゝさもせずためらへば○「化生は  
 一間へ立掛る「得たりと女は梓弓本駒もつてうて  
 うてうと打つてか、れば○「不思議やな驗者と見へ  
 しは忽に。八臂異形の姿をあらはしはつたと睨んで  
 立つたるは恐ろしくも亦凄じし女は弓と矢小脇にか  
 ひ込みつつ立上りや自らを誰とか思ふらん楚王に仕  
 へし楊由基が娘枳花女なるはヤイ今唐土に父が弓矢  
 をうけつぐべき良將なし汝日の本に走せ行き武將頼  
 光に謁して此雷上動の弓水破兵破二筋の鎬矢譲り參  
 らせよと父楊由基が教にまかせわざ／＼此土に來る  
 折から館の騷動頼光の不例變化の所爲と見受し故。  
 熊と親しくもてなせしぞ。かゝる奇瑞の梓弓引きは  
 返さじ惡蟲の障碍をかたれ何んと／＼と詰めかく  
 る○「我がせこが來べき。宵なりさゝがにのくものふ

るまひかねてやは知る。我はコレ。葛城山に年を経  
 る土蜘蛛の精魂なり大日本を傾領し。魔界になさん  
 と思ふより。鬼同丸が亡念かひし合體なし。頼光を  
 惱せしに。みやう罰目前梓弓。殊更枕に立て置きし。  
 源氏重寶。膝丸の威徳に恐れ。立寄る事も叶はぬかエ  
 エ口惜しやナア汝障げなさは立所に引裂き捨てんと  
 おめてか、れば△ひるまぬ女が弓取のべ。すそを  
 はらへば合ひらりと飛び△妻手を打てば○「弓手へ  
 開き△うしろ。を。薙げば○「まへに立ち合△「公時△  
 「貞光南方より切つてか、れば○「化生はおぼろ雲間  
 の月のしん／＼と虹の棧長廊下花壇合つき山植込  
 の。山は鐵城。水は清瀧たはむ枝々絲繰り掛け惡風吹  
 かけ炎の煙の。影に隠れて失せにけり合かゝる稀代  
 の惡蟲もついに劍の威徳によつて。退治します  
 源氏の威光感せぬ。者こそなかりけれ。  
 ○杜鵑花空解(甲斐なくおちよ)  
 作者中村重助  
 「櫛柄にやどる翡翠の薄物肩にかけ香も合戀のおも  
 荷におもやせて影をすゝきの一筋に中地大内山をう  
 かれ出でうつゝのちりの芥川在りし姿を寫繪の萩の





「あさましの身の果やと肩にかけたる毛氈の色に出  
でたるいはつゝ言はで思ふぞ思ひなり」「コレお千  
代今のは夢であつたか」「さればいなア夢の中の二人  
が姿お前は秋の野の狩衣めして「ヲ、ソレをなたも  
めなれぬいつゝ衣」「半兵衛さん」「ハテ」「變つた夢で  
あつたのふアレ」「杜鵑の聲聞けば不如歸となく唐  
土人故郷をおしみ靈魂鳥と化して不如歸となくそ  
んなら親御の御心ざしおれもそなたも可愛と思召し  
生きながらへよとの御知らせかいのふ「エなんのい  
なア未來へ導く鳥の聲あの初音を聞くにつけ早う未  
來へ行き度いわいなア」「いかさまなふ冥土の鳥の聲  
につれて。死出の旅路へ急がふが。そなたの親御平右  
衛門殿は。目かいの見えぬお人といひ。殊にかよはき  
老の身の。二人が跡を泣きしたひ尋ね給はんおいと  
しや。去りながら。とても此身は義理といひ死なねば  
ならぬうき命。そなたはこれより立歸り。合親御の介  
抱二つにはその。胎内の嬰兒にせめて日のめを見せ  
てたも「頼むとばかりいひさして袖にふりくる卵の  
花の雪にはあらぬ雨もよひ合」「お千代は涙目に持ち  
て合詞それは誠か。眞實か合二人死なふと覺悟して此

處まで合來たもうそかいなア▲「すぎしぐれの神無  
月出雲で結ぶ縁の帯。とけた其夜は言葉にもいふに  
いはれぬ床のうち。長地、寐入らしやんすをゆり起し  
じつと▲上々、キ「だきしめしめよせて▲かはす枕が  
物言ふならば▲ハシル「それこそほんにはづかしのも  
りてよそにや立つ名をも。いとほぬ。わたしが心の  
誠お前に届いた其しるし。かたいおもひのかたまり  
はコレこのかほによう似た子を産んでながめて阿波  
わしひとりそもやそもくいられうかむごいつれ  
ない男氣とうらみ涙はさみだれに「池のまこもの水  
こへていづれあやなき風情なり。詞ヲ、道理々々今  
の様にいふたのは親御のなげきも思ひやり又胎内の  
嬰兒も不憫さの餘りぞや。其心根を聞く上は此世も。  
未來も夫婦ぞと▲手に手を取りて行くさきに。詞半  
兵衛ヤイおちよヤイ▲「ヤアあの聲はとゝさんじや  
わいなア「こゝであふては最期の邪魔▲「いかにもい  
かにもサアおじや。おちよヤイ半兵衛ヤイハッマ「よ  
べどこたへも夏木立しよんぼり雨のめなしどり。心  
ほそみちよるのみち。セッキヤッ木々のしをりをしる  
べにてたどるも杖をちからぐさ詞「ア、この様に

ちよヤイ半兵衛ヤいとよんだとてアイこゝに居ま  
すとどうしてこゝへ出るものじやア、モウくくく  
ふつつりと諦めてドリヤゆかか詞「平右衛門は老  
足の覺束なくもとぼくく野末の雨のぬかり道鼻緒  
は切れてよこさまにはたけへがはとこけ込んだり▲  
「夫婦はあはて、走りいで思はず知らず抱き起し介  
抱すれば▲平右衛門ア、どなたやら有難いお蔭で怪  
我も致さぬサアおやさしい何人じやイヤサ何人で  
ござるぞハア、そんなら今の人ハモウいなれたかハ  
アハア、見ず知らずの人でさへ年寄と見ていたは  
るにコノ千代めや半兵衛は。この親を振捨てよふも  
よふも二人連。心中して死なうとはめ。かいの見へ  
ぬ此親に歎きをかけるが孝行カソリヤあんまりじ  
や。情ないと思しむ老の繰言を「そばに聞く身のたへ  
かねてワットなく聲「半兵衛はすかさずかけより口  
に袖▲平右衛門はびつくりしヤアくく今のは誰  
じやたれじやくく尋る隙「二人はそつと立退て。胸  
にせきくる涙をばこたへくし忍泣きシツメル詞誰  
じやといふても答へぬはハア、そんなら今のはハア  
ア鳥じや。アそうじやくくモウ明がた。ねぐらを離

る、鳥の聲「ヤハ、ハ、ア、いまわらいめいどの鳥い  
つも初音の心地ぞとまち暮したは苦の無いむかし。  
ア、其昔を思ひ出せば。アノちよめは幼少にて母に  
別れ。辛苦の中で養育した。コリヤこの爺が恩を忘れ  
たか。聲殿も聲殿じやッレこころくしたわけで死ね  
ばならぬとあるならば年寄たけた此からだ。二人が  
替りに身を捨て。今の難儀は救ふもの。わけもい  
はずに死ぬるとはソリヤ。短氣じやくくくは  
いやい詞ア、我ながら愚癡未練。うき世の人が聞く  
ならば世迷言やと笑はれん。詞へんじも早く二人が  
行衛ドリヤハア、南無三鼻緒がア、切れたもどう  
やら氣懸りなと▲踏出す足に半兵衛が合せて直す  
一足の▲ヤコリヤ下駄がム、はてなハア、まだ其上  
に此下駄の暖かなはハア、ム、聞へた最前こけた時  
介抱してくれた人も一聲鳴いた鳥の音もそんなら慥  
に聲娘そらに居るにきはまつたドリヤ尋ねてと盲  
人のとぼくくよはくくさぐり足めんない千鳥百千鳥  
▲泣音を忍ぶ友千鳥▲「そこよ。こゝよと立廻り。  
「尋ねあぐみて平右衛門ハアをふじやなア。一旦死ふ  
と思ひつめ。家出した聲娘。たとへそばに居たととも

物言はぬ筈。逢ぬ筈ヲ、もう尋ねまい／＼と泣いては合あゆみ合歩みては。涙にいと／＼ゆきなやみ。子故に暗きみち野邊をやう／＼したひて迷ひ行く後姿を伏拜み／＼見おくるなごり涙の雨傘もふたりが後の世の舞はちすのうてなと相合にさして行衛は鳥羽玉の。夜の間はしろき菜の花の。はたに遠寺のかねおちて。東雲つぐる道芝に真如の露とぞ伏にける。

○雪嵐卯花籬(古忠信)

三下り「戀と忠義は何れが重い合かけておもひははかりなや忠とコハ中地誠のもの／＼ふに合君が情を。と。も。ないて靜に忍ぶ都をば跡に合見捨て、旅立の長地つくらぬなりも義經の合<sup>カハリマキ</sup>御行衛は難波津の浪にゆられてたゞよひて今は吉野と人づてに噂を道の枝折にて山道さして江戸ゆく野路も二上りなれぬしげみのまがひみち。弓手も馬手も合若草をわけつつ行けばあさる雉子のばつと立つては合ほろ／＼けんけんほろ／＼打つウタ<sup>ナナル</sup>なれば子故に身をこがすわれは戀路に迷ふ身の長地カ、リわきて篋の。鼓のかはい／＼／＼の睦言を。人にはつゝむふくさものをそれをたよりにつく杖もこゝろほその／＼みご草履。う

きになれざるかへ帯半四郎いたづらに送る月日は多けれど花見てくらす春ならで落人の身のあだざくらいつか都に歸り咲き心の春に逢ふならばいまのうきねは昔語り我君さまのお跡を慕うて忠信殿を力に遙々ひろう此旅路アそれはそうと此忠信殿はなせに遅い事じやぞいのふ<sup>幸四郎</sup>おくればせなる旅立姿背中に背なに風呂敷せたらおふてせおふて合野道あせ道すべり合／＼／＼すべてまつのかくいであいたしこ合軽いとりなりいそ。いと谷峯。しどろに越え行けば合青葉若葉の葉がくれに合見えつかくれつきたりけり幸四郎ヤレ／＼はやいおみあしかなやうやうと追つきました半ヲ、今かいの忠信殿みちすがらの心遣ひさぞつかれさんしたのであらふして我君さまのましますは吉野の奥と聞いたばかりたしかにそれと御隠家おちこち人に問ふて下さんせいなア幸いかに／＼我君の御忍びあるはお二人の盡ぬえにしの妹春川さして行衛ははるたつといふばかりにや美吉野の半、山もかすみて今朝は見ゆらん見渡せば青葉のそらへこがれゆくいはでつゝこの盛りもよしや春山合いも山合あいたての中を流る／＼よし野川水

は心に従ふけれど其戀しさとあひたさに。下タ、キ水も氷ればうらおもてとけぬ思ひは青柳の中ヲトツ枝をつらぬる契りなり幸、ア、道々も申しまする通り麓の里へ御供いたし御對面致させませふこれこそは又逢ふまでの御篋とあつてつかはされました此初音の鼓我君と思召され旅のうさをお晴らし遊ばしませい半「ナニ我君義經さまサ此よふにいつかお目にかかりつもの恨がいひたいはいのふ幸、御對面なさるるまでは此つゝみを我君と思召されませい半、又逢ふまでのお篋と給はりし初音の鼓サ此鼓を見るにつけ「たゞ忘れぬは忍ぶ夜にまくらも。なんのいらばこそ。こちの此手を殿御の枕だきしめ合ひきしめ胸と胸顔と顔とのほづかしく合心に思ふ。ありたけを口に言はぬがはんじ物。結ぶの神のとき初めてまゝに逢ふ夜のまゝならずほんにせいしのとさへもかはい／＼となく物を。こひしゆかしの我夫や。あんなつかしの我夫とスメルフシかこち給ふぞ道理なる幸「ヲ、御尤じや／＼其やうにきな／＼と思召さぬがよふござりまする忠信附添ひ居るからはお氣遣ひなされまするな蘆原峠も越しましたれば麓の里へはも

う僅かアレ／＼御らうじませ梢々の春の色都の花の八重一重イヤ又こうした景色を御覽なさる／＼も御氣晴らしで御座りませふがな半、花は都に變らねど變り果てたる浮世の中賤が軒端に假寐して夜毎々々の襖さへ定めぬ旅のうさつらさ幸、あるが中にも賤の女がこれのざい所でつくよねの半、杵の拍子もとり／＼に三下り「人もわらやの合をだちには。合春は羽子つく手鞠つく過しむつみの殿御づきぬしと。こなんと二人連合かまくら風の詞しやんとしたウ中地みやこに稀な殿御ぶり。しかも夜見世の格子先見かはす／＼かほと顔誠に嬉しうさぶらひける半、これ忠信殿幸、エ半、なんとさんしたぞいのふ幸、サこれは半「サそれは誠に目出度うさぶらひけるほうろく頭巾をかうべに召し合夜毎にお通ひなさる／＼ならば君も榮えまします「サアその愛嬌ありけるなれそめはゆづりはを口にくはへ吸付煙草の。合煙る中にも合其面影を忘る／＼ひまはないはいな「サア／＼／＼／＼そのうそなみだにヤほだされて中地かよふ編笠袖扇。ヤそれさまのうちかけなんどのこづまもつちやしやなら。しやなら。／＼／＼／＼とひらりめいたところな

んどは中々に出すぎだ／＼／＼／＼ハ、ハ、ハ、これも旅路のうさはらし「イヤモウ／＼見かけに似合ぬ氣の軽い忠信殿今のこなさんのたはむれ事で旅のうさをはらしましたはいのふ幸、是は／＼有難う御座りまする我君の御隠家もモウ僅か必ず／＼きな／＼思召さずとへんじも早うお急ぎなされませい地カ、リ、いざさせ給へとす、むればいつかうしろに以前の軍藏大勢引き具しおつとりまき「ヤア見付た／＼義經の思ひ者静御前今一人は佐藤忠信静が所持せし初音の鼓又義經の御させながこつちへ渡せ「渡せ／＼とののしつたり合、へ、へム、ハ、ハ、ハ、愚か／＼合君より賜はる此二品、やはかうぬらに渡そふか。ならば手柄に取つて見る合、ヤ口がふせふなる毛二才めと左右方一度に打てか、れば「ヤ心得たりと忠信は静をかこふて花のもと合君が爲には仇櫻顔に緋櫻虎の尾を含み。だ。さぬ内に犬櫻合雲井櫻の名に高き合あさぎ櫻の七重八重／＼に初音の初櫻合。さそふ嵐にひら／＼／＼合ひらき扇子の三つ四つ五つ舞六つ田を越へて遠からぬ野路の春風吹拂ふ雲と見まがふみよし野のキチヒ三重籠をさしてぞかけり行く。

○色映紅葉章(布袋) 作者 河竹新七  
上「錦着て。中地わけつ、行けばもみち葉の。詠めも合よしや。世の中の人の。心は。天地と。ともにひらけし戀の道。たれかにくしと。合夕がほのほの／＼白き花の顔色に染なす御姿はむかし男と知られけり出ハシレ、其風俗も。江戸ガ、リ名に高き在五中將業平の。初冠を。今こ、にうつすも合さぞなすきびたい長地ほんにいとしい殿さんを合大事に思ふ合此胸は。筆にも愚か。車にも。長地光源氏の。浮舟にもつまれふ物か。さりとはアレまだそんな空事とはらふ袂の。風のつて「あつたら夢の。花ちりてむつくと起きたる赤ッつら合から唐土の樊噲が。若衆盛りもかくばかり。さりとはやさがた久方の。ごげんのはしか。調焼餅か。此あかふんどはきらい物。おらが流儀は四方の漣すいたどふしの中わんで。のんだるだるまは夜も合ひるも合あかい／＼と夕紅葉合、アレ見しやしやんせあよふに雲の上なる。御方も。色のしよわけはありそ海。深い深のありたけがモ、ハ、ハ、はらが立たいで何としやう「ハチいな事を。夕つげの。鳥じやなければる／＼と。へだつ。あづまの。合文づかい合よそのも

ちつき。よそにみるわれらは女なしの一本木。根引の。心はないかいな▲「そふいはしやんすまさんが。眞實しんからほん／＼の誠の心があるならば合外には中村調秀鶴さん「エ、なんのこつちにいづはりのなき世なりけりしぐれ月。春は春でもどこやらが合日あしせわしき。小春の空。たゞ何事も。調久しぶりめでたふ岩井に杜若さんしめましょか。しやん／＼。も一つせ。しやん／＼。祝ふて三度「しやんと出で立つとりなりは池田に生る箒木の。文もていそぐ二人づれ手に手を取りて柴の戸の外もにこそは来りけり詞「宗盛公は悠然と。車の御簾を掲げ給ひ。見渡せば。柳櫻をこきませて都ぞ春の。錦とよみしは花の春。今はそれには引かへて。頃は小春の紅葉の賀。此程某思はずも。彼のいにしへ業平の。初冠の昔に習ひ。天上にての元服は父清盛御ひかり。此身のほまれ其上名に負ふ熊野御前を心の儘に召仕ふといふは。嬉しいといはふか。此様な悦ばしい事は無いはいのふ。「アノまあ我君さまの御意遊ばす事はいの。わたし等風情のいやしい女子に。とやかふと今の様におつしやつては。却つて罰が當りまするわいなア「上

總の介は手をつかへモウ是が北嵯峨の御別殿イザ御よりとく／＼と心きいたる景清が調す、めに任せ御大將。やがて車を下り立給ひ。サア／＼熊野御前紅葉見ながら酒にしやうではあるまいか。「ヤ夫れはよろしう御座りませうとはいふもの、かんじんの酒を忘れて参りました。「是はしたり酒が無うてすむ物か。早ふ酒をとつて来い早う／＼「ハア畏つたと景清がそともへ出るを「衛士の鶴平ア、イヤ／＼申し申しと押しめエ酒の御用なら此方に貯がござりまする「ム、見れば賤しい仕丁だが。わりやいつの間にか来て何をして居た「ヘエ私は鶴平と申す者今日は我君宗盛公。初冠のもみちの賀せめて御庭なりとも清めませうと存じ。此處に控へ居りまして御座りまする「ム、夫れは近頃奇特な者。そして今いふた酒はあるか「エイ酒もさけ上諸白。紅葉の枝を切くべてか人もはつたり加減よし。苦しうなくば上げませうか。「ヤ夫れは幸ひ早く持つて来い／＼「サア／＼女中女中。其銚子盃これへ持つてござい／＼「景清見咎めム、われ一人かと思つたりやアノ女アリヤなんだ「イヤちつとも氣遣な者では御座りませぬ。宗盛様へ